序

愛知県日進市は、名古屋市の北東部に位置します。周知のように、現在では名古屋市のベッドタウンとして多大な発展を続けていますが、市内には天然記念物イタセンパラの生息地もあり、自然環境にも恵まれた場所としても知られております。歴史的には、市域北部が小牧長久手の古戦場の一角となっており、岩崎城を巡る壮絶な戦闘をはじめとして様々な伝承地が各地に点在しております。また、市域は古代の窯業地として日本最大級を誇る猿投山西南麓古窯跡群の岩崎・折戸地区にあたるなど、古くから繁栄した場所でもあります。

このたび、㈶愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センターでは、県道日進・瀬戸線建設に伴う金萩遺跡の発掘調査を、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託され、これを実施しました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの新知見を得ることができました。

今回これらをまとめ、報告書として刊行するにいたりました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者から、多大なご指導とご協力をいただいております。深く感謝を申し上げる次第であります。

平成 16 年 8 月

財団法人　愛知県教育サービスセンター
理事長　**古池　庸男**

例　　言

1.　本書は愛知県日進市北新町に所在する金萩遺跡（遺跡番号 1466）の発掘調査報告書である。

2.　発掘調査は県道日進・瀬戸線建設に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた、㈶愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3.　調査期間は平成 12 年 6 ～ 9 月である。

4.　発掘調査は、北村和宏（課長補佐、現文化財保護室）・池本正明（主任、現主査）・鈴木達也（調査研究員、現日進西高校教諭）・宇佐見　守（調査研究員、現春日井西高校教諭）が担当した。

5.　調査参加者は、以下の通りである。（敬称略）

瀬戸かな子（発掘補助員）

元木保美・加藤和枝・岡田靖子・杉原千速・塚本　博・平田多助・宮本勢津子・宮石千津子・深田美智子・山下洋子・大江裕美・中根千恵子・後藤久美子・長江典子・森　優子・太田重明・浅見久江・野牧　励・斉場きみ子・丹羽美佐江・塚本芳子・跡部広子・塩見早智代・村瀬美恵子・村瀬さゆり・遠藤春美・村瀬　保・黒宮美智子（発掘作業員）

加古繁乃・井上貴弘・高木理光・田中麻衣子・千村　崇・夏目朋毅・林　誠・桝井祐介・間瀬智広（学生アルバイト）

6.　調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。

愛知県教育委員会文化財課（現生涯学習課文化財保護室）・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県東部丘陵工事事務所・会津若松市教育委員会・青森県埋蔵文化財調査センター・福島県文化振興事業団・岩崎城歴史記念館・五所川原市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター・日進市教育委員会

7.　整理期間は、平成 14・15 年度をあてた。

8.　遺物の整理・製図などについては、次の方々の協力を得た。（敬称略）

一次整理

跡部広子・稲葉芳美・黒宮美智子・斎場きみ子・坂本ゆみ子・滝沢恵子・太刀川美和子・津田恵子・長江伊都子・西川佳代子・深田美智子・宮石千津子・村瀬さゆり・元木保美・森川敏子・山本栄子・山本里美（整理作業員）

二次整理

神谷巳佳（調査研究補助員）

平成 14 年度　園部朋子・武石友子・長谷川ゆかり・濵島奈保美（整理補助員）

平成 15 年度　今田清美・佐藤洋子・鈴木早百合・堀田春美（整理補助員）

9.　本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。

天野暢保・石田明夫・内田智久・川﨑みどり・木村　高・齊藤基生・志水　易・白石浩之・城ヶ谷和広・菅原祥夫・高柳俊之・中嶋友文・楢崎彰一・野村信生・藤澤良祐・藤原宏明・宮田安志・渡辺博人（敬称略）

10. 本書で使用する色調名は 2001 年度版『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編に依拠した。

11. 調査区の座標は、国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系（旧基準）に準拠した。海抜標高は T.P.（東京湾平均海面標高）による。

12. 本書の編集は池本正明が担当した。執筆は池本のほかに、第Ⅰ章 2・3、第Ⅲ章 6・7 を神谷が、第Ⅲ章 8 を蔭山誠一（本センター調査研究員）が、Ⅵ章は外部委託の報告書を池本・神谷が要約・加筆した。遺物写真は金子知久（写真工房 遊）の手による。

13. 調査に関する実測図・写真などの資料はすべて本センターが、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目　　次

■図版目次

■表目次

■図版目次

第Ⅰ章　はじめに

1　調査の経緯と経過

愛知県建設部道路建設課東部丘陵工事事務所では、県道日進・瀬戸線建設工事を計画したが、予定用地には周知の遺跡である岩崎６号窯跡が所在していた。このため、その取り扱いを巡って愛知県建設部と愛知県教育委員会とが協議した。なお、調査に先立って愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査も実施されている。こうした手順を経て、遺跡を発掘調査して記録保存する方針が決定し、愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが遺跡の調査を実施した。

岩崎６号窯跡

調査は2500m^{2}を対象とし、平成12年６～９月の日程で実施した。調査方法は地表面から表土のみをバック・ホゥにより除去し、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系（旧基準）に準拠した5mグリッドを基準として、手掘りで包含層を掘削して遺構を検出する方法をとった。遺構測量はヘリコプターによる航空写真測量で調査区全体の基本平面図（1：50）を作成し、さらに重要部分には手測りによる補助測量図をこれに加える方法をとった。

調査手順

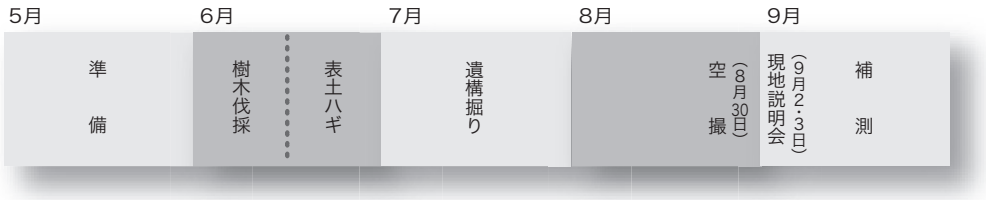
調査は当初窯跡を想定して開始されたが、結果的にはこれを確認することができず、代わって竪穴住居・掘立柱建物・土坑などで構成される集落遺跡を検出した。遺跡の内容と名称との不一致が存在するが、調査年度中は混乱を避けるため、「岩崎６号窯遺跡」の名称で事業を継続し、翌年度以降は地名をとって「金萩遺跡」の名称を使用することになった。なお、調査途中の９月２・３日には２日間の日程で現地説明会を開催し、のべ550人の参加を得た。

集落遺跡検出

金萩遺跡

（池本正明）

表１　調査工程表




国土地理院20万分の1
地勢図「豊橋・名古屋」
金萩遺跡
名古屋市
小牧市
春日井市
瀬戸市
尾張旭市
長久手町
愛知郡
日進町
東郷町
西加茂郡
豊明市
好町
東海市
大府市
知立市
刈谷市
安城市
知多郡
知多市
高浜市
東浦町
阿久比町
西春日井郡
西枇杷島町
師勝町
豊山町
清洲町
名古屋港

図１　金萩遺跡の位置

2　位置と地形

遺跡の位置

金萩遺跡は、現在の行政区画では日進市北新町字金萩となり、愛知郡長久手町との境に近い日進市北部に位置している。具体的には、主要地方道力石・長久手線が、長久手町役場から南へのびる主要地方道 57 号線と交わる古戦場南交差点から南に 0.9km 地点に位置し、南西を東名高速道路が通っている。緯度経度では、北緯 35°　9′　39″、東経 137°　3′　25″ で、近隣の公共機関は西に道路を挟んで愛知県口論議運動公園が、さらに 0.8km の所に学校法人愛知学院大学、南 3.8km に日進市役所などがある。遺跡周辺の景観は、名古屋市東部一帯に連なる低丘陵地帯の一角となり、丘陵地帯の周辺に水田と住宅が展開する風景を眺めることができる。しかし一方では、丘陵を削り水田を埋め立てた大規模な造成による新興住宅地も存在しており、名古屋市のベッド・タウンとしての性格も併せ持っている。

周辺の地形

本遺跡は、香流川と天白川がそれぞれに形成する沖積平野に挟まれた、東山丘陵の標高 60 ～ 80m の所に位置している。すぐ南には福井川という小河川が流れ、北新田川・岩崎川の順でやがて天白川へと合流している。そして、前面にはこれらの小河川の開析により形成された小規模な平野が点在しており、その南側は天白川周辺のやや広い平野に接している。地形的には天白川流域に含まれるエリアといえる。

周辺の地質

東山丘陵を含む名古屋東部の丘陵地帯は尾張丘陵と呼ばれ、その地質は主に、約 500 万年前から 170 万年前の第三紀鮮新世に形成された東海層群の矢田川累層と、第四紀中期頃までに堆積した唐山層・八事層で構成される。東海層群は温暖な第三紀鮮新世に出現した東海湖とその周辺に砂・シルト・粘土などが堆積した地層群で、さらに瀬戸陶土層と矢田川累層に分けられる。瀬戸陶土層は瀬戸市から豊田市にかけて分布、矢田川累層は、特に尾張丘陵地域のものをいい、その特徴としては砂・礫・シルトが互層し、亜炭を含んでいる。その粘土鉱物から、耐火度の高い比較的良質な白色粘土をもつ。さらに矢田川累層は上位から、猪高部層、高針部層、水野部層の 3 層に分けられ、本遺跡周辺は特に、高針部層にある。この高針部層は、かなり細粒の地層からなり、主に粘土層・砂礫層で構成されている。

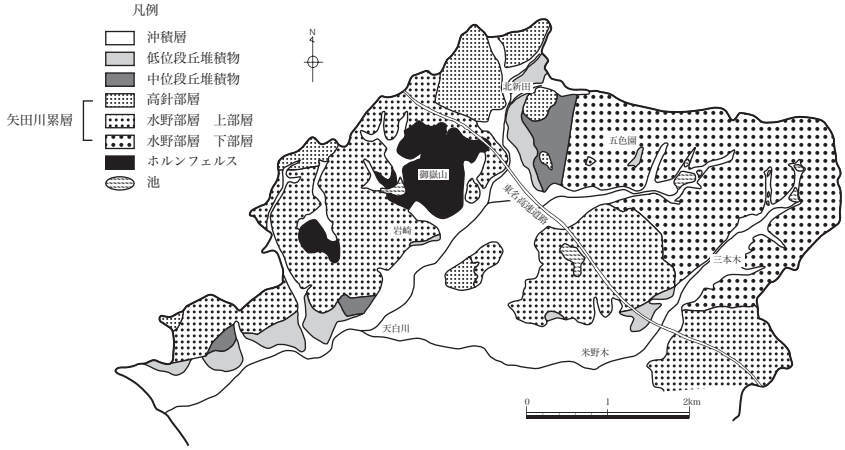


図２　周辺の地質図（「日進町の地質図」『日進町誌』を一部改変）

3　歴史的環境

弥生時代以前

ここでは本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。この地域は、古墳時代後期まではっきりとした遺跡が確認されていない。最古の遺跡として、香流川左岸の長久手町大字岩作の内万場遺物散布地をあげることができ、剥片石器や弥生土器などが採集されているが、内容は不明なところが多い。

古墳時代後期

古墳時代後期になって、香流川流域と天白川流域にそれぞれ古墳が築造されている。香流川中流域から上流域の丘陵付近では群集墳が分布し、壊滅したものも含めて16基を、一方の天白川流域では白山第1号墳を確認することができる。このうち発掘調査などによって内容が判明している古墳も幾つか知られている。白山第1号墳は明治30年に偶然石室が発見され、6世紀中葉のものとみられる装飾須恵器の蓋や金環などが見つかっている。昭和55年に改めて発掘調査が実施され、横穴式石室をもつ径14m程の円墳で、天白川の形成する沖積平野を経済基盤として成長した有力者のものと報告されている。この他に、開発により現在ではその様相を知ることはできないが、元ヰゲ古墳は、複室構造の横穴式石室の略図が残され、出土した須恵器4点から、6世紀末から7世紀前半頃のものとされている。なお、これらの後期古墳の担い手となる集落遺跡は今のところ確認されていない。

猿　投　窯

ところで本遺跡の周辺は、猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）に含められ、窯跡が多数分布する地域として知られている。猿投窯は5世紀から14世紀前葉にかけて存在し、古代における日本有数の窯業地として著名である。その分布範囲は、東西が豊田市西部から名古屋市東部、南北が瀬戸市南部から刈谷市北部までを占めている。猿投窯は面積が広大なため、通常さらに区分して理解されている。すなわち、岩崎地区・鳴海地区・東山地区（東山窯）・折戸地区・黒笹地区・井ヶ谷地区・瀬戸地区である。このうち最古の窯跡は東山地区に限定され、時期が下るに従ってこれが次第に東へ拡大していく傾向にある。

岩　崎　地　区

本遺跡の位置する岩崎地区は、西側に植田川を境界として東山地区と接しており、北側は香流川を境界として瀬戸地区が、南側は天白川を境界として東部に折戸地区、西部に鳴海地区などが位置している。東山地区の東に接していることもあって、古墳時代終末期には、早くも窯業地としての性格を帯びてくる。猿投窯の編年上の指標となっている窯跡も数基存在し、日進市岩崎の岩崎17号窯は7世紀後半、これに次いで同岩崎の岩崎41号窯は7世紀末から8世紀初頭、同野田の岩崎25号窯は8世紀前葉に位置づけられている。

灰釉陶器生産

猿投窯はこれ以降9世紀から10世紀前半までには築窯数を急激に増やし、最盛期を迎えるのであるが、次第に技術改良がなされ生産量は拡大する反面、逆に窯数は減少すると言われている。そうした全体の流れとは対照的に、窯数が増加の傾向を見せているのが岩崎地区の東側に位置する黒笹地区である。黒笹地区には豊富な器種生産と優美な陰刻文で著名な黒笹14・90・89号窯などが所在しており、猿投窯の質的なピークとも言えよう。

11世紀末には灰釉系陶器生産が開始し、陶器生産も更なる量産化がはかられるようになる。岩崎地区においても猿投窯の終焉する13世紀末～14世紀前葉まで生産活動が継続している。

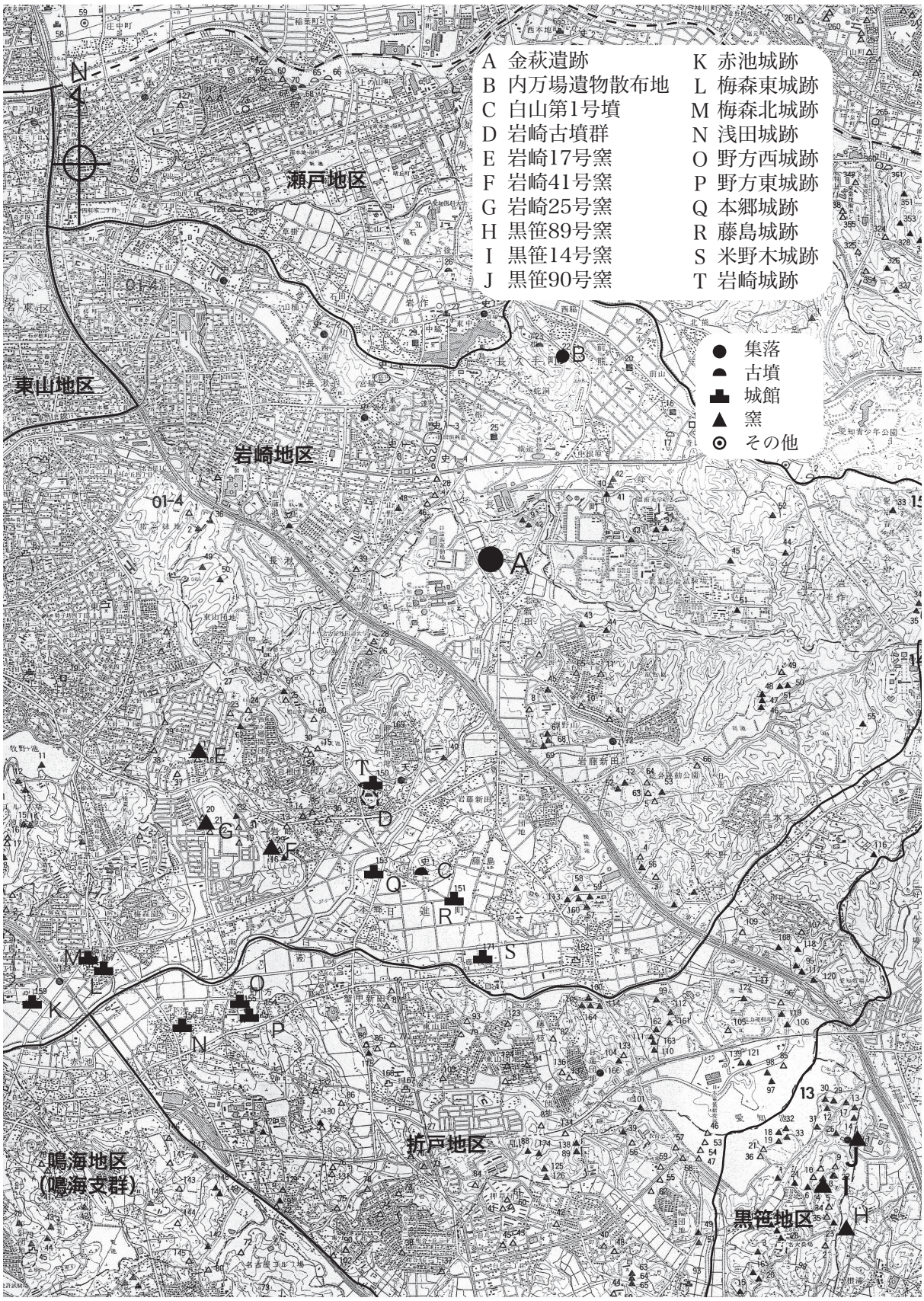

A 金萩遺跡
B 内万場遺物散布地
C 白山第1号墳
D 岩崎古墳群
E 岩崎17号窯
F 岩崎41号窯
G 岩崎25号窯
H 黒笹89号窯
I 黒笹14号窯
J 黒笹90号窯
K 赤池城跡
L 梅森東城跡
M 梅森北城跡
N 浅田城跡
O 野方西城跡
P 野方東城跡
Q 本郷城跡
R 藤島城跡
S 米野木城跡
T 岩崎城跡
集落
古墳
城館
窯
その他
瀬戸地区
東山地区
岩崎地区
折戸地区
鳴海地区
(鳴海支群)
黒笹地区

図3　周辺の遺跡

猿投窯の廃絶後、しばらくはこの周辺に遺跡は知られない。

戦国時代

やがて戦国時代になると、幾つかの中世城館が築造されるようになる。これが顕著なのは天白川の流域で、図3に示す範囲だけで、赤池・梅森・浅田・野方・本郷・藤島・米野木などの城館が知られる。いずれも小・中規模の在地領主が担い手となっているものと考えられるが、15世紀後半頃から勢力を広げてきた丹羽氏の勢力下に統合されていく。本遺跡の南南西に位置する岩崎城は昭和60年から62年にわたって3次の発掘調査が実施されているが、この岩崎城は丹羽氏の拠点ともなった城館である。天正12（1584）年の小牧・長久手の戦いにおいて、家康についた丹羽氏は豊臣秀吉側の池田恒興軍の三河進入を阻もうとし、落城した。その後丹羽氏は、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いの戦功により、三河伊保藩（豊田市）に転封されるまで岩崎城に居城した。

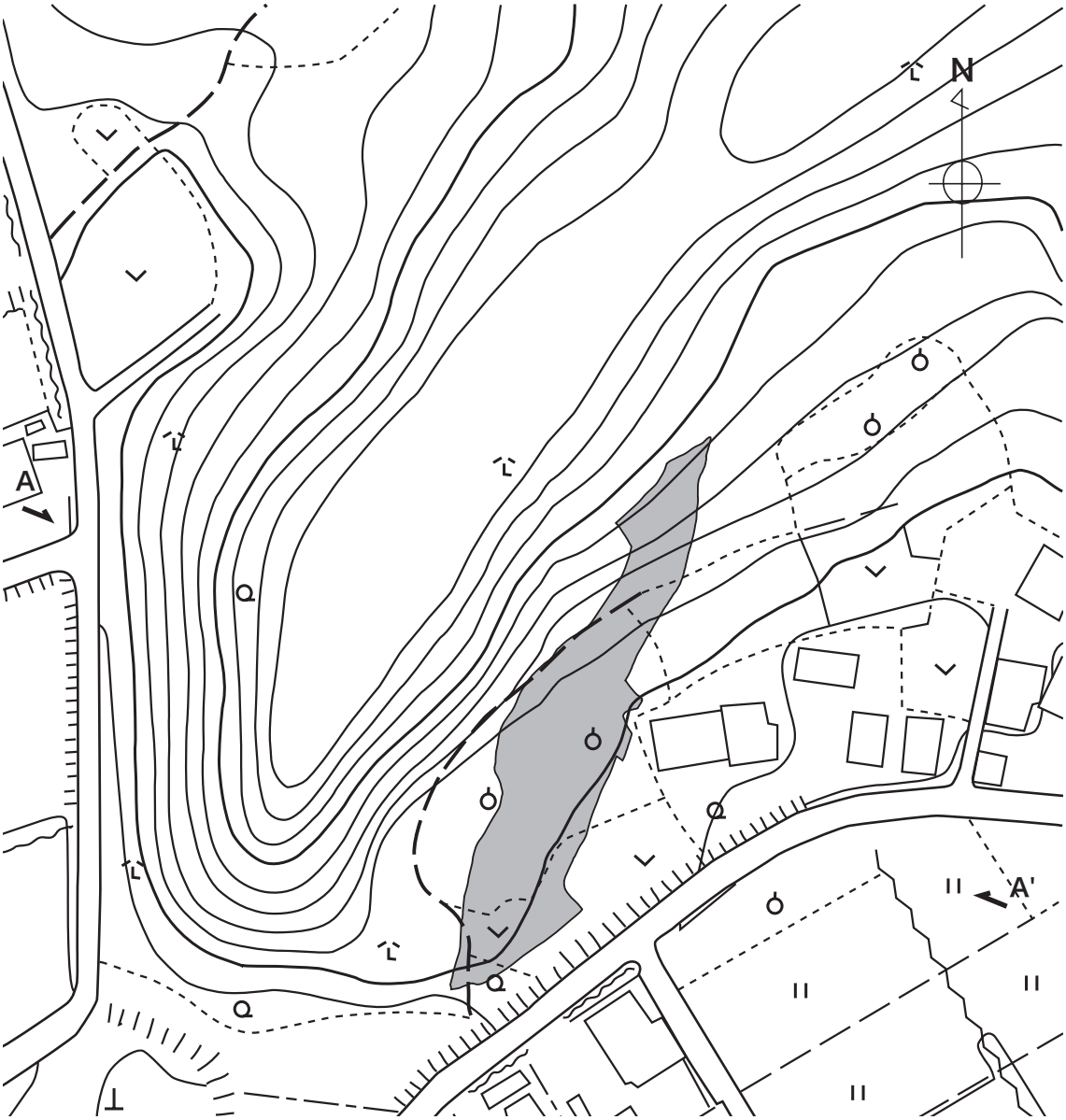
近世以降

近世に入ると、日進市域のほとんどは尾張徳川家の家臣である渡辺氏の給地となり、その支配を受けたことが、『尾張徇行記』などからわかっている。新田開発が進み、近辺における江戸時代以降の新田村は岩藤新田・北新田・三本木新田・蟹甲新田で、いずれも渡辺氏の采地であり、氏による開発と考えられる。北新町は、かつて北新田の字名で、岩崎村に属していた。『北新田見取田畑検地帳』の見返しにある寛政9（1797）年の追記部分によると、慶長元（1648）年に開墾が実施された記録が残っている。また、開拓の記念に16本の松を植えたとされるが、これは昭和55年までに枯死している。

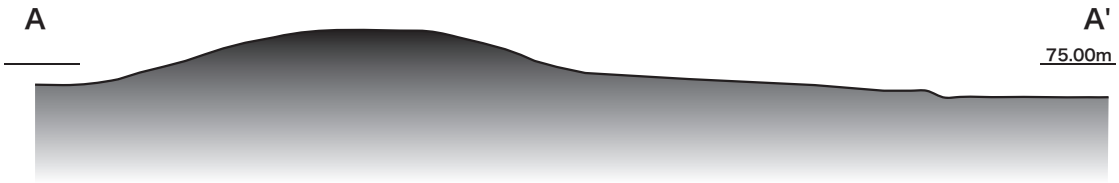
溜池の築造

天白川やその支流流域は古くから田畑として開墾され、その水量を補うために、遅くとも江戸時代初期には丘陵地には多くの溜池が築造されてきた。『寛文村々覚書』によると、岩崎村では9つの溜池を数えることができるが、昭和36年の愛知用水の完成と耕地減少により、溜池は近年その数を減らしつつある。主として集落も、天白川とその支流流域、それに沿った丘陵地にあったが、近年の宅地開発により、丘陵部は住宅地化されてきている。

（神谷巳佳）



トーンは調査区を表現



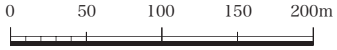


図４　調査区位置図

第Ⅱ章　層序と遺構

1　基本層序

調査区の調査着手直前の様相は、竹林と畑地となっていた。地表面は南側に向けた緩斜面で、地表面の標高は北側の 75m が最も高く、南側の 68m が最も低い。

調査区の遺構埋土を除く基本層序は、以下の通りである。

1 層　表土層

厚さは 10 ～ 30cm 程度をはかり、軟質である。調査区の全面を覆っている。古代～近世の土器片に混ざって、現代のプラスチック片などを含む。

遺物包含層

2 層　黒褐色土層

いわゆる遺物包含層である。丘陵側にあたる調査区西部では確認できないが、東側に進むにつれて徐々に厚みを増し、調査区の東側での厚さは 60cm 前後となる。古代～中世の土器片などに混ざって、炭化物・焼土・3 層のブロックなどを含む。

基盤層

3 層　明褐色土層

ほぼ均質で硬く締まっている。洪積層で、その上面を今回の遺構検出面とした。一部が緻密な白色粘土となる。

2　遺　　構

（1）概観・時期区分

今回の調査で確認できた遺構は、遺跡が緩斜面に立地している関係上、丘陵側のみ残存し低地側が流失しているものも多い。時期的には大きく二時期に区分できる。奈良時代～平安時代、中世以降である。前者をⅠ期、後者をⅡ期と呼称する。以下、検出できた主要な遺構を報告するが、調査区内の大まかな位置を北部（図版 1 ～ 4）・中央部（図版 5・6）・南部（図版 7 ～ 10）と三区分して説明する。なお、時期や性格などが確認できない一部の遺構については、紙面の関係から本書添付の CD-ROM に収納されている遺構計測一覧を参照とする。

時期の区分

（2）Ⅰ期の遺構

Ⅰ期の遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・土坑などで構成される居住域となる。

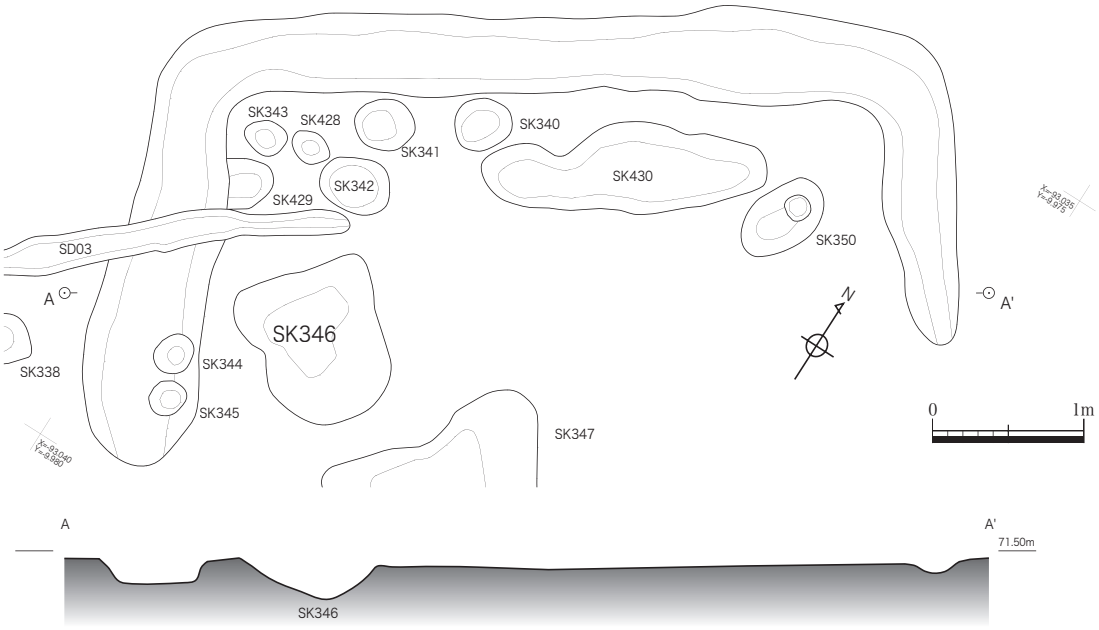


図5　SB01（1：50）

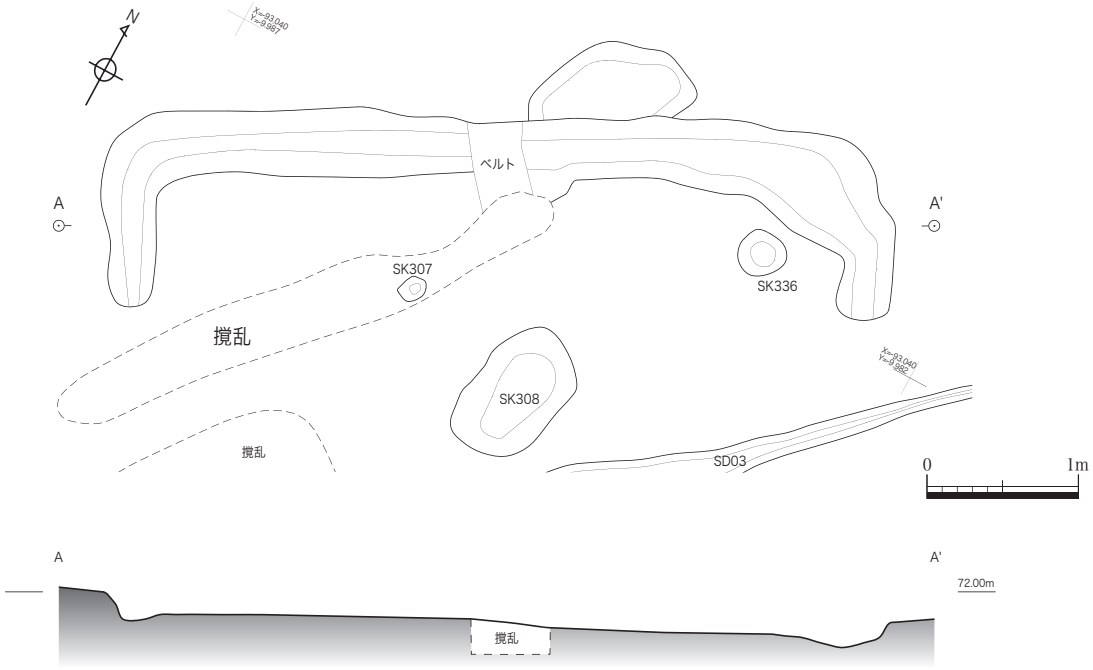


図6　SB02（1：50）

①　竪穴住居

竪穴住居は10棟確認している。すでにⅡ章1で述べたように、調査区が丘陵地帯に位置していることから、低地側の大半が流失し、丘陵側の周溝のみが確認できたものも含まれている。主軸は地形に制約された形で一辺を等高線に平行させたものが大半である。

SB01　調査区の北部で周溝のみを検出した。東側の半分程度は流失している。確認できた西壁は5.7m、東・西壁は2.8mを残存させる。検出面からの深さは、0.4mをはかる。
平面はやや歪む形状で、カマドや柱穴は確認できなかった。このため、竪穴住居でない可能性も考えられるが、平面形状から一応これに含めた。図示した資料には須恵器と灰釉陶器（1～6）がある。

SB02　調査区の北部で周溝のみを検出した。東側のほとんどが流失している。確認できた西壁は5.2m、東・西壁は1.3mを残存させる。検出面からの深さは、0.4mをはかる。カマドや柱穴は確認できなかった。このため、竪穴住居でない可能性も考えられるが、平面形状から一応これに含めた。図示した資料には須恵器（7～9）がある。

SB03　調査区の中央部で検出された。SB11・SK260と切り合い、これらを切る。長辺4.4m、短辺3.2m、検出面からの深さは、0.3mをはかる。平面形はやや歪み、二軒の切り合いである可能性も考えられる。カマドや柱穴などは確認できなかった。床面にはSK378Bが掘削されている。図示した資料には須恵器と灰釉陶器・土師器（10～61）がある。

SB04　調査区の中央部で検出された。SK455・SD19と切り合い、これらを切る。長辺3.9m以上、短辺3.2m、検出面からの深さは、0.4mをはかる。東側は大きく歪むが、東壁の中央にカマドと考えられる焼土面が確認できることから竪穴住居と判断した。西壁の一部では断続的だが周溝が検出できた。なお、丘陵側には平行してSD18が掘削されている。図示した資料には須恵器と土師器（62～71）がある。

SB05　調査区の中央部で検出された。SB06と切り合い、これに切られる。確認できた西壁は5.5mで、検出面からの深さは、0.3mをはかる。北・西壁は1.1mを残存させるにすぎない。なお、丘陵側には平行してSD16・17が掘削されている。図示した資料には灰釉陶器蓋(72)があるが、混入であろう。

SB06　調査区の中央部で検出された。SB05と切り合い、これを切る。確認できた西壁は6.7m、検出面からの深さは、0.3mをはかる。西壁の中央は幅1.3mにわたって周溝が掘削されていない。中央よりやや北側には焼土面が確認できる。カマドと考えられるが、位置が周溝と重なる。なお、丘陵側には平行してSD16・17が掘削されている。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（73～88）がある。

SB07　調査区の南部で周溝のみ検出した。SD12と切り合い、壁面は完全に削平されているため、規模など確認できない。一応、竪穴住居の一部が残存したものと理解しておく。西壁は4.9m以上、東壁は1.4mまで確認できた。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（89・90）がある。主柱穴も確認できないが、北西隅にロクロピット(SK133)が検出されている。丘陵側には平行してSD04・05が掘削されている。

SB08　調査区の中央部で周溝の北西隅部分のみを検出した。一応、竪穴住居の一部が残存したものと理解しておく。西壁は3.8m以上、北壁は0.7m確認できた。カマドや柱穴・周溝は確認できなかった。SB12と重なり、SU07に上面を覆われる。出土遺物は得られなかっ

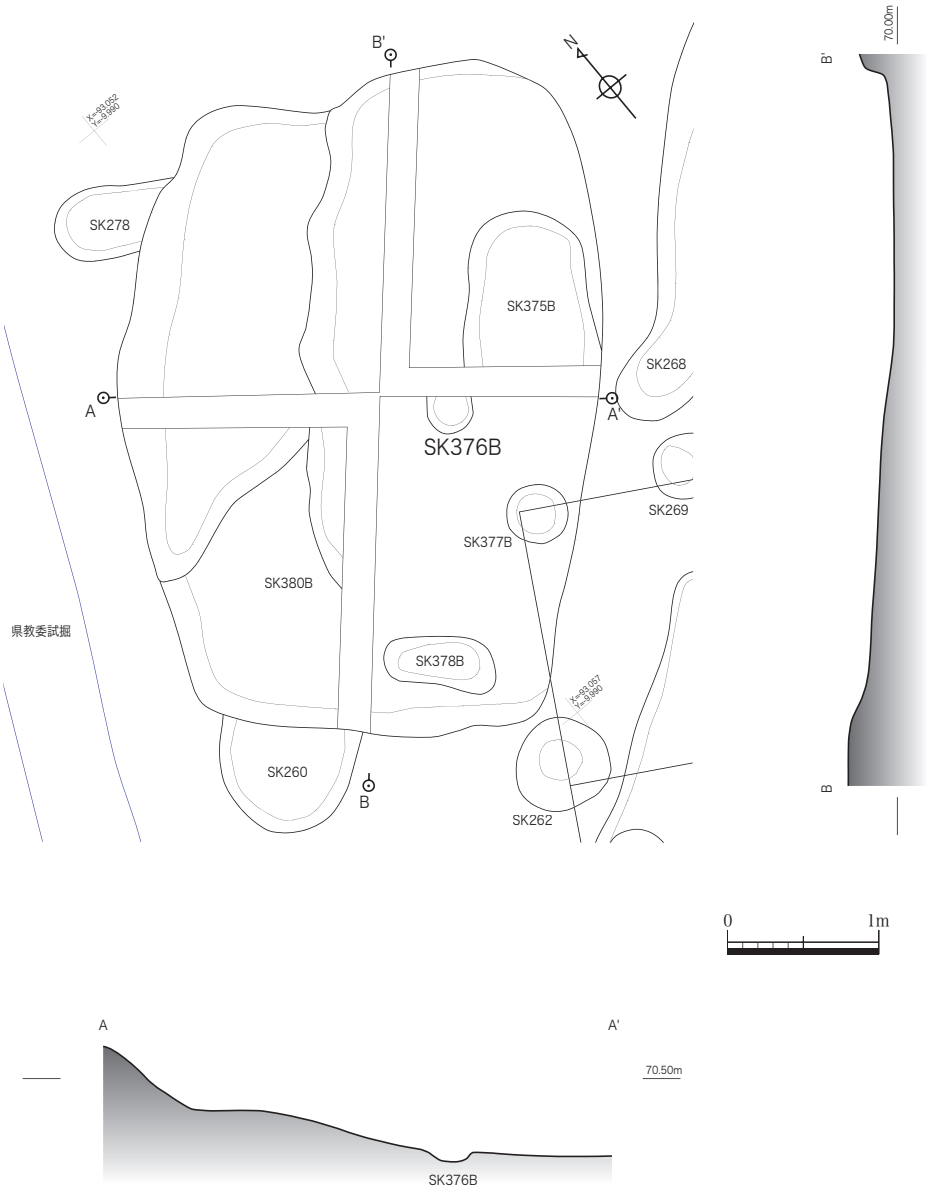

B'
N
X=-93.052
Y=-9.960
SK278
SK375B
SK268
A
A'
SK376B
SK269
SK377B
SK380B
県教委試掘
SK378B
X=-93.057
Y=-9.960
SK260
B
SK262
70.00m
B'
B
0
1m
A
A'
70.50m
SK376B

図7　SB03（1：50）

た。

SB09　調査区の南部で検出した。SK97・23 と切り合い、これらに切られる。また、上面の一部は SU02 に覆われる。残存する西壁は 3.6m で、この部分の検出面からの深さは、0.3m となる。南壁は 1.5m が残存する。カマドや柱穴・周溝は確認できなかった。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（91 ～ 115）がある。

SB10　調査区の南部で周溝のみ検出した。丘陵側には平行して SA01 が構築されている。SA01 と平行する SD08 の起点とは SB10 の南西隅で 1.0m と近接する。西壁は 3.1m で、この部分の検出面からの深さは、0.2m となる。カマドは確認できなかったが、SK27・28 が主柱穴である可能性をもつ。図示した資料には須恵器（116）がある。

②　掘立柱建物（SB）

2 棟確認できた。ただし、調査区中には規模などから掘立柱の柱穴と推定できる土坑が多数存在しており、未確認の掘立柱建物も存在していた可能性がある。

SB11　調査区の中央部で検出された。南西隅より、SK264、SK262、SK377B、SK269、SK274、SK275、SK249、SK266、SK267 で構成される。規模は 2 × 2（3.7m × 3.7m）で、平面形はやや歪むが総柱となる。主軸は N － 29°－ E。北西隅の SK377B が SB03 と切り合い、これに切られる。出土遺物には柱穴出土の須恵器（SK264 から 117・118、SK274 から 119）がある。

SB12　調査区の中央部で検出された。北西隅より、SK237、SK239、SK240、SK385、SK226、SK222、SK381A で構成される。規模は 2 × 2（3.3m × 2.9m）で、主軸は N － 21°－ E である。SB08 と重なり、SU07 に上面を覆われる。出土遺物は図化できる資料に恵まれなかったが SK240 に須恵器の小片がある。

③　柵（SA）

1 条検出できたにとどまる。調査区中には規模などから掘立柱の柱穴と推定できる土坑が多数存在しており、未確認の柵が存在していた可能性もある。

SA01　調査区の南部で全長 7.8m を確認した。SD08 とほぼ平行し、南側は調査区外にのびるのか。北側から SK69、SK40、SK42、SK43、SK46、SK55、SK56、SK57、SK34、SK35、SK36 で構成される。確認された全長は 8.6m で、主軸は N － 7°－ E である。出土遺物は得られなかった。

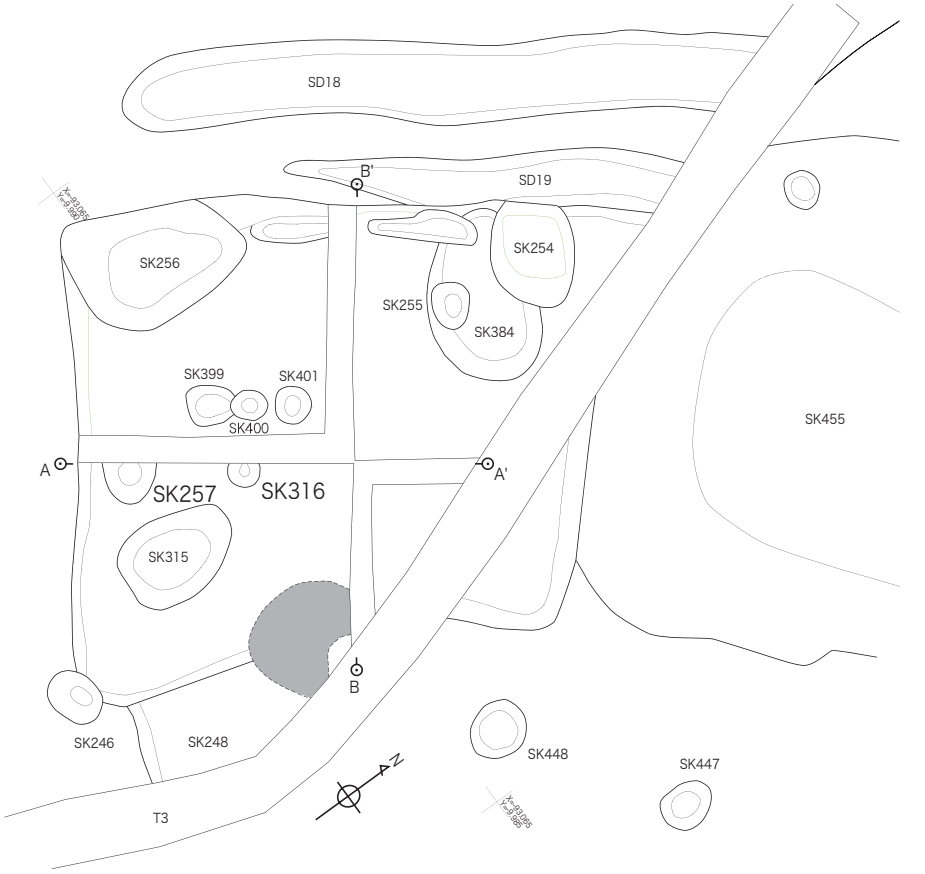
④　土坑（SK）

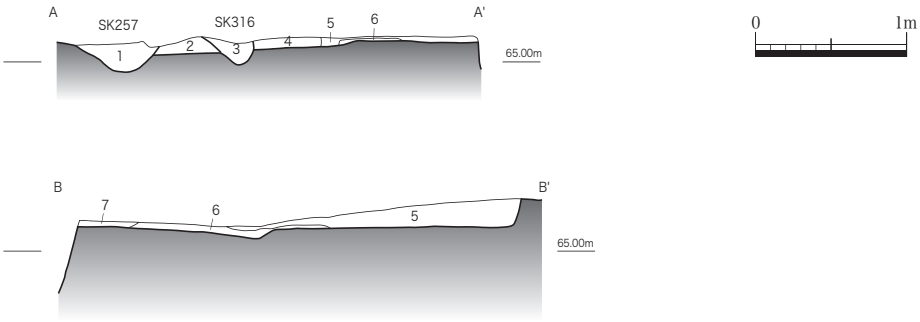
性格を特定できるものはほとんどない。以下には、形状などが特徴的であったり図化に耐える資料が出土している土坑のみを報告する。

SK01　調査区の南部で検出された。一辺は 1.1m だが、もう一辺は調査区外に及ぶため確認できてはいない。検出面からの深さは、0.1m である。平面形は不明だが、ややゆがむ楕円形を呈するのか。中央部にほぼ完形の灰釉陶器など（120 ～ 164）が集中して出土している。

SK16　調査区の南部で検出された。北西が調査区外に至り全体は不明だが、平面形が円形で、長径は 0.7m と考えられる。検出面からの深さは、0.2m をはかる。底面に厚さ約 1cm 程度白色粘土が堆積していることが特色となる。出土遺物は得られなかったが、埋土の特色からこの時期に含めた。なお、白色粘土の分析結果は第Ⅳ章 1 に掲載している。

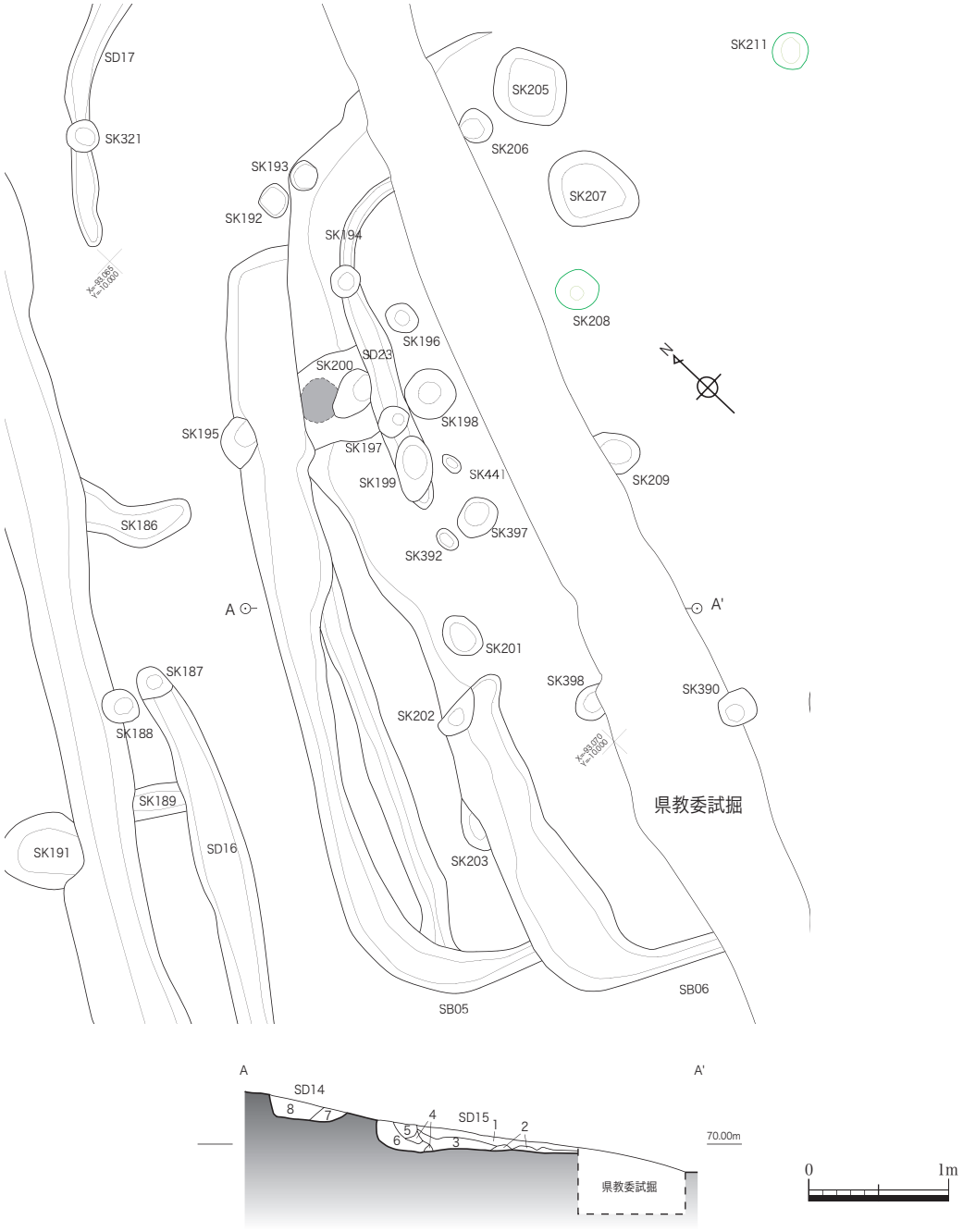
SK23　調査区の南部で検出された。SB09 と SK97 と切り合い、SB09 を切り SK97 に切られ、





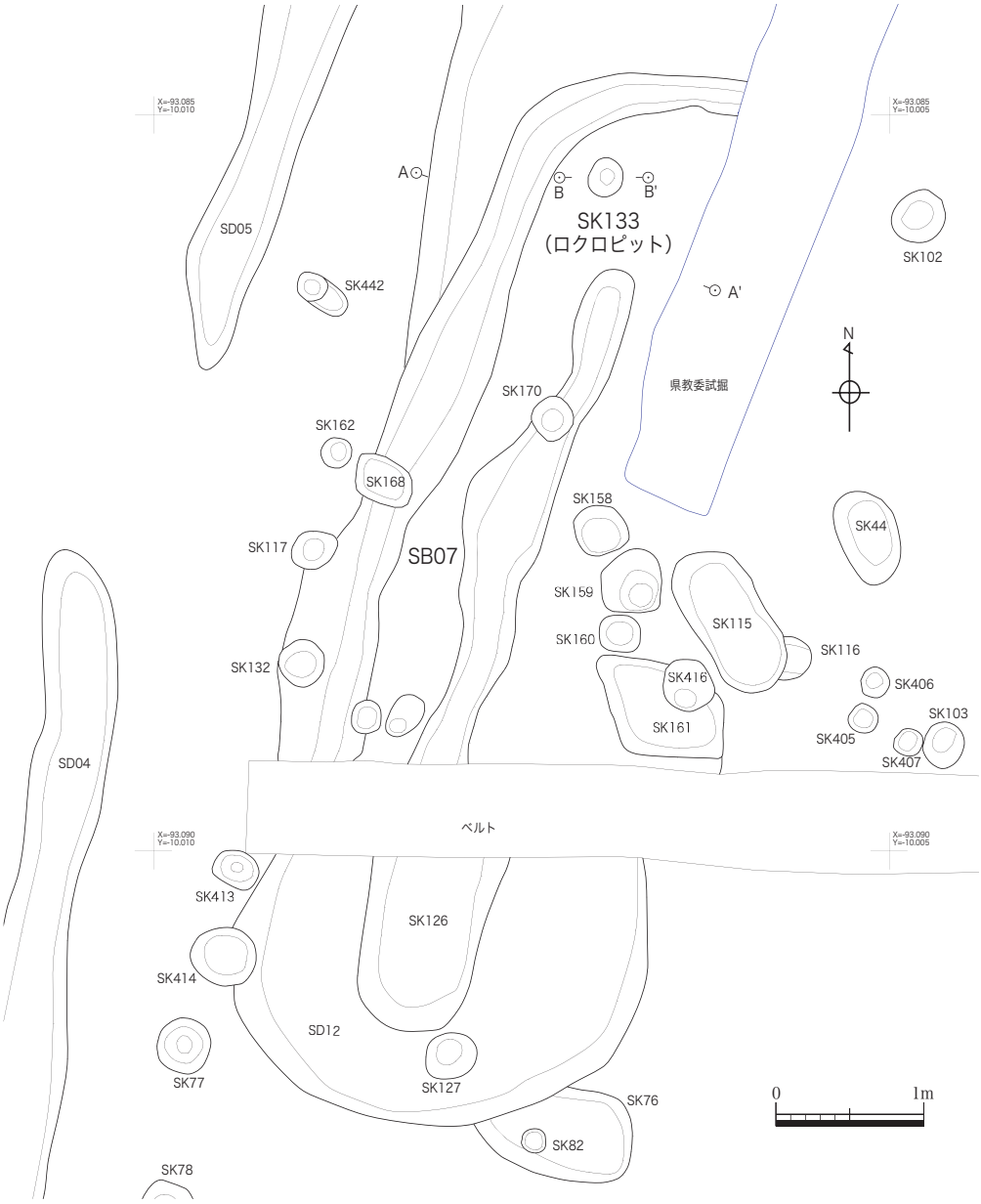
1層　10YR4/4　　褐色　焼土・炭化物・明褐色（5YR5/6）ブロック混じる
2層　5YR5/6　　明赤褐色
3層　10YR4/4　　褐色　0.5～1cm大の小礫をまばらに含む
4層　5YR5/6　　明赤褐色
5層　10YR4/4　　褐色　焼土・炭化物を含む
6層　5YR5/6　　明赤褐色
7層　7.5YR4/4　　褐色　粗粒砂・焼土・炭化物を含む

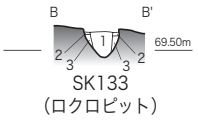
図８　SB04（1：50）

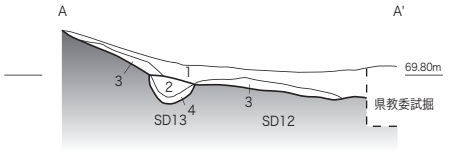


1層　7.5YR5/3　にぶい褐色　砂質シルト
2層　5Y4/6　赤褐色　砂質シルト
3層　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト
炭化物ブロック混じる
4層　10YR6/3　にぶい黄橙色　粘質土
5層　7.5YR5/3　にぶい褐色 中粒砂
6層　3層に4層のシルトブロックがやや混じる
7層　10YR5/3　にぶい黄褐色　砂質シルト
8層　10YR5/2　灰黄褐色　砂質シルト

図9　SB05・06（1：50）







1層　10YR4/3　　にぶい黄褐色　粒子細かく粘性強い、1cm大炭化物若干
2層　10YR4/6　　褐色　粒子細かい、白色粘土20%混入
3層　10YR4/4　　褐色　粒子やや粗い

1層　7.5YR4/2　　灰褐色
2層　10YR3/2　　黒褐色　ベースの土がブロック状に混じる
3層　7.5YR5/6　　明褐色　1層が混じる
4層　7.5YR4/3　　褐色　砂質シルト

図10　SB07（1：50）

上面はSU02に覆われる。長径2.2mで短径は不明。検出面からの深さは、0.4mをはかる。平面形は細長い楕円形となる。図示した資料には須恵器（165・166）がある。

SK27　調査区の南部で検出された。長径0.3m、短径0.3m、検出面からの深さは、0.1mをはかる。平面形はややゆがむ円形である。SB10の北西主柱穴である可能性をもつ。出土遺物は得られなかった。

SK28　調査区の南部で検出された。長径0.5m、短径0.4m、検出面からの深さは、0.1mをはかる。平面形はややゆがむ円形である。やや大型だが、SB10の南西主柱穴である可能性をもつ。出土遺物は得られなかった。

SK37　調査区の南部で検出された。SK128･SD09と切り合い、SK128を切りSD09に切られる。南東部が調査区外におよび形状は不明となる。測定できる短辺は2.8mをはかる。検出面からの深さは、0.2mである。平面形は竪穴住居に類似するが、壁面の立ち上がりが緩いことを理由に土坑として扱う。図示した資料には須恵器･灰釉陶器（167～175）がある。

SK86　調査区の南部で検出された。長径0.4m、短径0.3m、検出面からの深さは、0.1mをはかる。平面形はややゆがむ円形となる。図示した資料には須恵器鉢（176）がある。

SK87　調査区の南部で検出された。長径2.8m、短径1.5m、検出面からの深さは、0.2mをはかる。平面形はややゆがむ楕円形となる。図示した資料には須恵器（177～185）がある。

SK88　調査区の南部で検出された。一部は調査区外となるが、確認できた一辺は1.3mで、検出面からの深さは、0.1mをはかる。平面形は楕円形か。図示した資料には須恵器・土師器（186・187）がある。

SK90　調査区の南部で検出された。SD10と切り合い、これに切られる。長径･短径とも不明。検出面からの深さは、0.2mをはかる。平面形は残存部から推定すると楕円形を呈するのか。図示した資料には須恵器（188）がある。

SK93　調査区の南部で検出された。長径0.7m、短径0.6m、検出面からの深さは、0.4mをはかる。平面形は円形となる。図示した資料には須恵器（189～197）がある。

SK97　調査区の南部で検出された。SB09・SK23と切り合い、これらを切る。また上面はSU02に覆われる。長径2.4m、短径1.1m、検出面からの深さは、0.7mをはかる。平面形は楕円形となる。壁面には白色粘土が露出し粘土採掘坑とすべきかもしれない。白色粘土は埋土中から塊状の資料が得られており、第Ⅳ章1で分析結果を報告している。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（198～248）がある。

SK98　調査区の南部で検出された。長径3.1m、短径1.8m、検出面からの深さは、0.6mをはかる。SD09と南側の浅い部分と切り合い、これを切る。遺物の前後関係は逆だが、SD09の浅い部分のみ早い段階に埋まったと考えておく。平面形は楕円形を呈する。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（249～260）がある。

SK121　調査区の南部で検出された。長径0.5m、短径0.4m、検出面からの深さは、0.3mをはかる。平面形は楕円形である。図示した資料には須恵器（261）がある。

SK128　調査区の南部で検出された。SK37と切り合い、これに切られる。長径2.0m、短径1.3m、検出面からの深さは、0.4mをはかる。平面形は楕円形。埋土中から白色粘土塊が得られ、第Ⅳ章1で分析結果を報告している。図示した資料には須恵器（262・263）がある。

SK133　調査区のSB07とSD12とが重なる部分で検出された。第Ⅴ章に記述するようにSB07

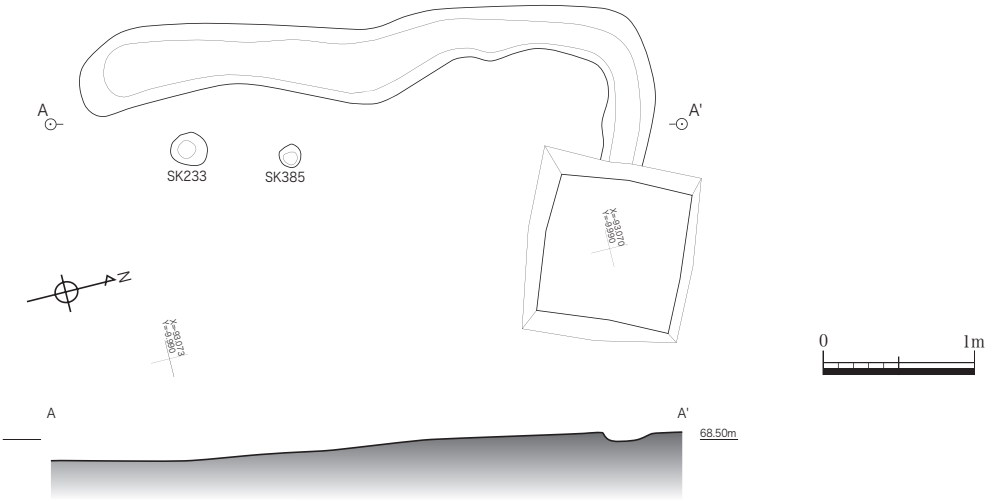
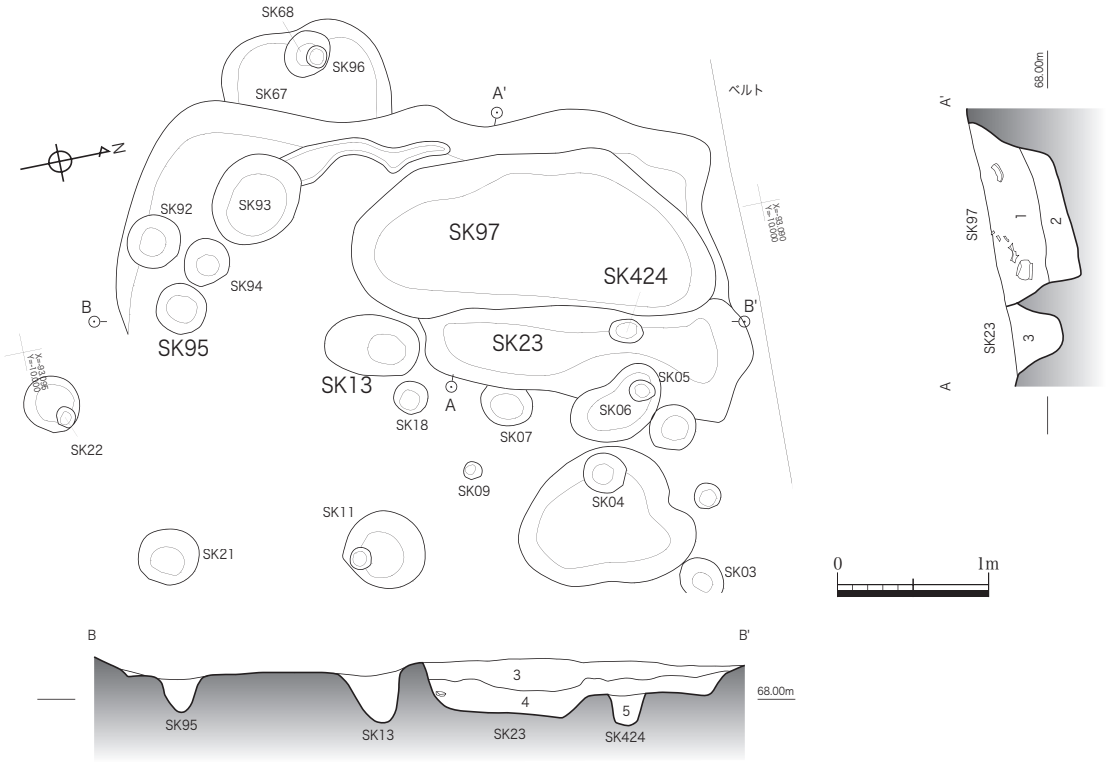


図11　SB08（1：50）



1層　10YR4/2　灰黄褐色
2層　10YR3/3　暗褐色　炭化物混じる
3層　10YR5/2　灰黄褐色
4層　10YR4/3　にぶい黄褐色とにぶい黄橙色（10YR6/3）粘質土ブロックと赤褐色（5YR4/8）シルトブロックが斑状に混じる
5層　10YR3/2　黒褐色

図12　SB09（1：50）

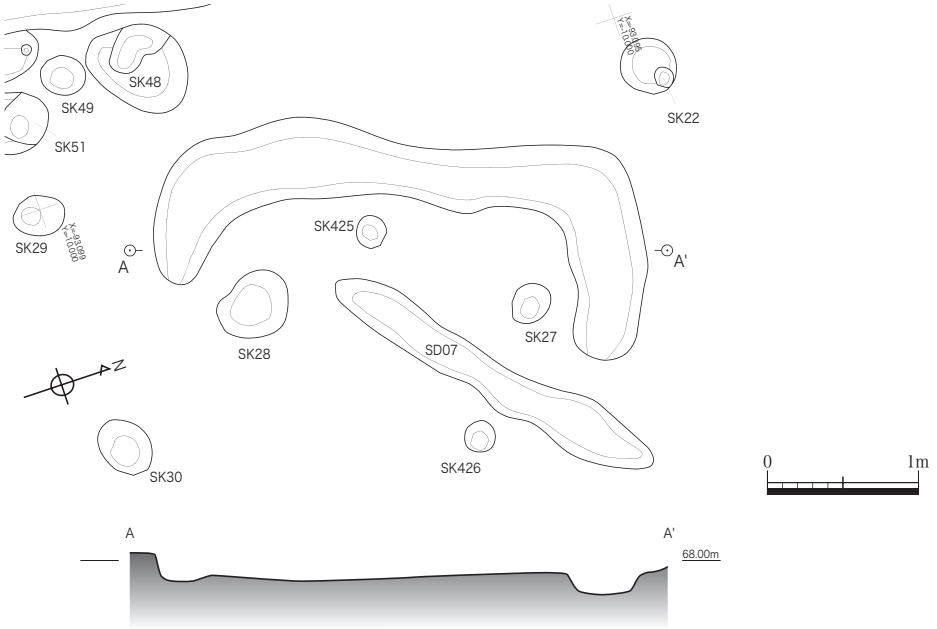


図 13　SB10（1：50）

に付属する可能性が高い。規模は長径 0.3m、短径 0.3m、検出面からの深さは、0.2m をはかる。上面は厚さ 2cm 程度が白色粘土で埋められ、中央にはロクロ軸痕が確認できる。平面形は円形である。出土遺物は得られなかった。なお、ロクロピットの判定については、検出直後と断面観察時に楢崎彰一氏に御意見をいただいている。なお、SK133 は調査の最終段階で切り取り保存を実施している。

SK150　調査区の南部で検出された。上面を SU06 に覆われる。長径 0.2m、短径 0.2m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。平面形は円形。図示した資料には須恵器（264）がある。

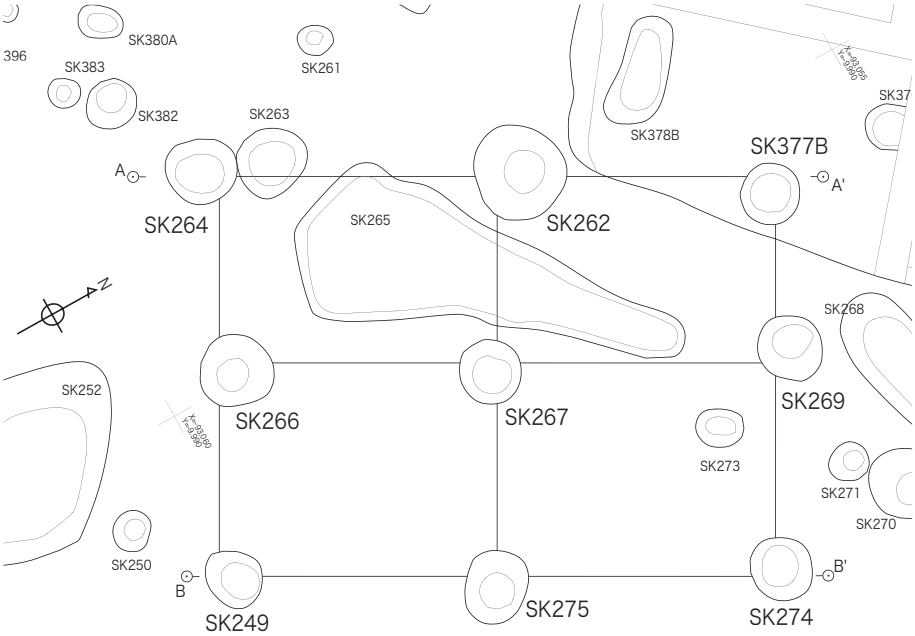
SK157　調査区の南部で検出された。撹乱によって上面が削られたやや大型の土坑で、検出面からの深さは、0.7m をはかる。一部が調査区外に及び平面形は不明。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（265 ～ 272）がある。

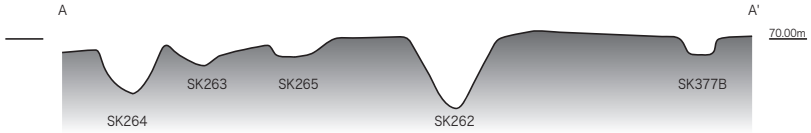
SK259　調査区の中央部で検出された。SK388・412B と切り合い、これらを切る。長径 6.9m、短径 1.9m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。平面形は明らかではないがややゆがむ長方形を呈するのか。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（273 ～ 288）がある。

SK260　調査区の中央部で検出された。SB03 と切り合い、これに切られる。全形は不明だが平面形が楕円形を呈する。残存する一辺は 0.9m となる。検出面からの深さは、0.2m である。図示した資料には須恵器（289 ～ 299）がある。

SK281　調査区の北部で検出された。長径 1.9m、短径 1.1m、検出面からの深さは、0.3m をはかる。平面形はややゆがむ楕円形となる。図示した資料には須恵器（300 ～ 305）がある。

SK292　調査区の北部で検出された。SK309 と切り合い、これに切られる。南東側が調査区外に及び、平面形は不明だが、残存する一辺は 2.7m をはかる。検出面からの深さは、0.2m


SK380A
396
SK383
SK382
SK261
SK263
SK378B
SK377B
SK37
A
A'
SK264
SK265
SK262
N
SK268
SK252
SK266
SK267
SK269
SK273
SK271
SK270
SK250
B
B'
SK249
SK275
SK274
0
1m


A
A'
70.00m
SK263
SK265
SK377B
SK264
SK262

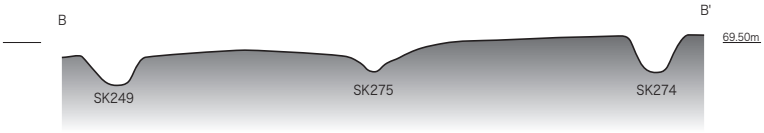

B
B'
69.50m
SK249
SK275
SK274

図14　SB11（1：50）

となる。竪穴住居に類似するが、壁面の立ち上がりが緩いことを理由に土坑として扱う。出土遺物に須恵器（306 ～ 310）がある。

SK309　調査区の北部で検出された。SK292 と切り合い、これを切る。南東側が調査区外に及び平面形は不明だが、確認できる一辺は、2.4m をはかる。検出面からの深さは、0.3m となる。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（311 ～ 317）がある。

SK317　調査区の中央部で検出された。長径 1.1m、短径 0.7m、検出面からの深さは、0.2m をはかる。平面形はややゆがむ楕円形。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（318 ～ 322）がある。

SK319　調査区の中央部で検出された。SK318 と切り合い、これに切られて長径は不明となる。短径は 0.7m で、検出面からの深さは、0.1m をはかる。平面形は楕円形であろう。図示した資料には土師器（323）がある。

SK324　調査区の中央部で検出された。短径は 1.0m だが、長径は不明。検出面からの深さは、0.2m をはかる。平面形は明らかではないが楕円形を呈するのか。図示した資料には須恵器（324 ～ 327）がある。

SK378B　調査区の中央部で検出された。SB03 の床面上にあり、長径 0.8m、短径 0.4m、検出面からの深さは、0.2m をはかる。平面形は隅丸長方形。図示した資料には須恵器（328・329）がある。

SK388　調査区の中央部で検出された。上面を SK259 に切られる。全形は明らかではないが、長径 1.3m をはかる楕円形を呈するのか。検出面からの深さは、0.1m である。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（330 ～ 344）がある。

SK404　調査区の南部で検出された。長径 0.4m、短径 0.4m、検出面からの深さは、0.4m をはかる。平面形は円形。図示した資料には須恵器（345・346）がある。

SK410　調査区の南部で検出された。上面が撹乱により削られるが、長径 1.7m、短径 1.2m、検出面からの深さは、0.3m をはかる。平面形は菱形。図示した資料には須恵器（347・348）がある。

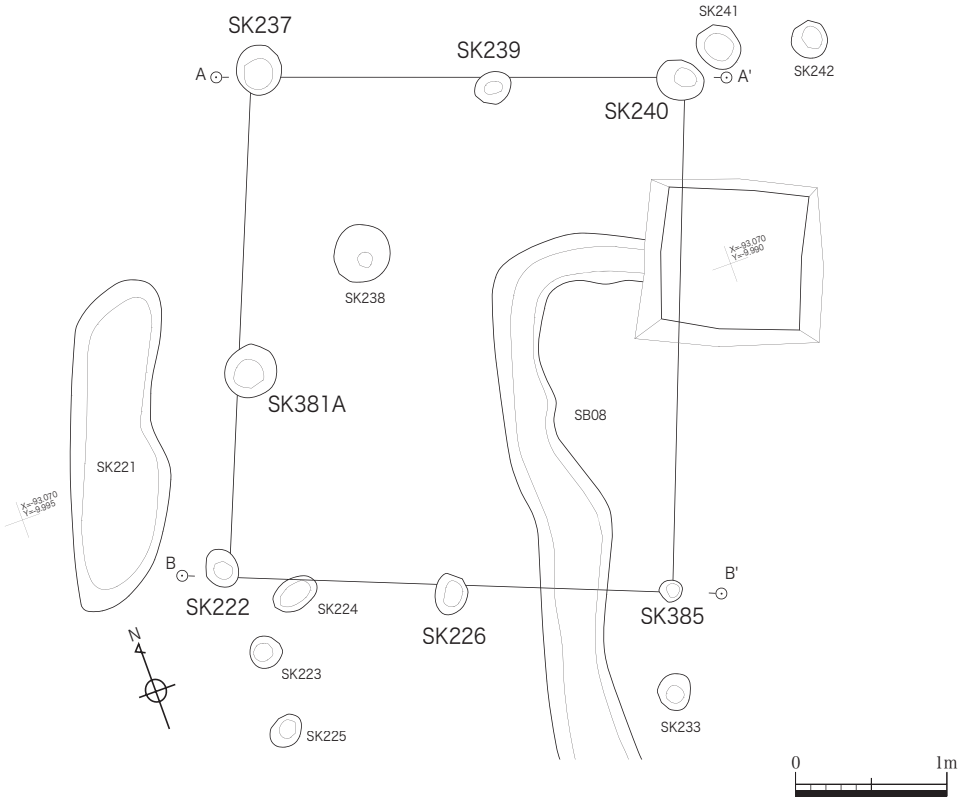
SK412A　調査区の南部で検出された。上面が撹乱により削られる他、東側が調査区外となるため規模は不明。検出面からの深さは、0.1m をはかる。人頭大～拳大の粘土塊が 10 か所で確認できたが、出土地点は基底部に接してはいない。図示した資料には須恵器（349 ～ 372）がある。

SK412B　調査区の中央部で検出された。SK259 と切り合い、これに切られる。長径 1.2m、短径 0.7m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。平面形は楕円形である。埋土中からは白色粘土塊が出土し、第Ⅳ章 1 で分析を実施している。図示した資料には須恵器（373・374）がある。

SK455　調査区の拡張区で検出された。SB04 と切り合い、これに切られる。東側が調査区外となるが、短辺は調査区内で確認でき、3.6m をはかる。検出面からの深さは 0.6m。図示した資料には須恵器（376 ～ 378）がある。

⑤　溝（SD）

SD02　調査区の北部で全長 5.1m が検出された。SD01 と切り合い、これに切られる。幅は 1.0m、検出面からの深さは、0.2m をはかる。出土遺物は図示してはいないが須恵器の小片があ


SK237
SK239
SK241
SK242
A
A'
SK240
SK238
SK381A
SB08
SK221
B
B'
SK222
SK224
SK226
SK385
SK223
SK225
SK233
N
0
1m

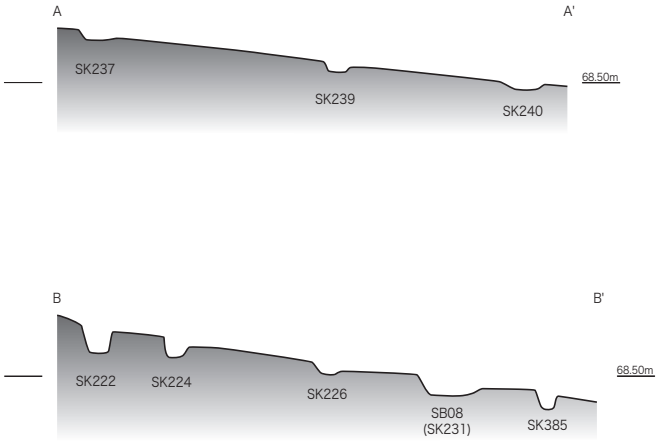

A
A'
SK237
SK239
SK240
68.50m
B
B'
SK222
SK224
SK226
SB08
(SK231)
SK385
68.50m

図15　SB12（1：50）

る。

SD04　調査区の南部で全長 6.0m が検出された。SD05 とともに SB07 の丘陵側に位置する。幅は 0.6m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。出土遺物は得られなかった。

SD05　調査区の南部で全長 6.0m が検出された。SD04 とともに SB07 の丘陵側に位置する。幅は 0.6m、検出面からの深さは、0.4m をはかる。出土遺物は図示してはいないが須恵器の小片がある。

SD08　調査区の南部で 4.5m が検出された。南側は調査区外となり全長は不明となる。SA01 と平行する。幅は 0.5m、検出面からの深さは、0.2m をはかる。出土遺物は図示してはいないが須恵器の小片がある。

SD09・10　調査区の南部で東側の SD09 が全長 6.7m、西側の SD10 が全長 11.2m 検出された。SK37・90・98・420 と切り合い、SK37・90・420 を切り SK98 に切られる。SK98 とは遺物の前後関係が逆だが、これとは南側の極端に浅い部分で切り合っており、この部分のみ早く埋まっていたことが考えられる。いずれも不整形な溝で、中央で接している。時間差は確認できない。深さはそれぞれの端部は 0.1m 程度と浅いが、SD10 の北東部では最深地点 68.7m をはかる。深い部分では壁面に白色粘土が露出し、粘土採掘坑と考えるべきかもしれない。上面には SU01 が形成されている。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（SD09 が 379 ～ 398、SD10 が 399 ～ 493）がある。

SD11　調査区の南部で全長 5.0m が検出された。非常に不整形で、細長い土坑に含めるべきかもしれない。南側で鋭角気味に屈曲する。幅は 0.3m、検出面からの深さは、0.4m をはかる。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（494 ～ 535）がある。

SD12　調査区の南部で全長 10.0m が検出された。SB07 と切り合い、これを切る。幅が広く浅い溝で、北東側が流失する。幅が 2.8m で、検出面からの深さは、0.4m をはかる。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（536 ～ 567）がある。

SD16　調査区の中央部で全長 6.7m が検出された。SD17 とともに SB05・06 の丘陵側に位置し、幅は 0.3 ～ 0.7m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。出土遺物は得られなかった。

SD17　調査区の中央部で残長 3.4m が検出された。SD16 とともに SB05・06 の丘陵側に位置し、これらの北西隅に沿って弧状を呈する。幅は 0.3m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。図示した資料には灰釉陶器（568）がある。

SD18　調査区の中央部で全長 4.1m が検出された。SB04 の丘陵側に位置し、幅は 0.5m、検出面からの深さは、0.2m をはかる。出土遺物は得られなかった。

SD19　調査区の中央部で検出された。SB04 と切り合い、これに切られる。残長 2.6m で幅は 0.4m、検出面からの深さは、0.1m をはかる。出土遺物は得られなかった。

⑥　土器集積遺構

2 層中で確認されたもので土器の集中する部分を呼称している。7 基確認したが、ほぼ直列した、標高 68.5m ～ 69m の範囲に分布している。いずれも土坑などの掘り込みは確認できないが、集積遺構の下面に竪穴住居などの遺構が確認できる事例もあり、この場合には遺構が完全に埋没しない段階に、残存する窪みを利用した土器の集積（廃棄）とも考えられる。完形品もしくはほぼ完形品の頻度が高く、焼き割れや焼き歪みの著しい資料も含まれていることから、須恵器・灰釉陶器の二次選別に関わる資料と推定した。

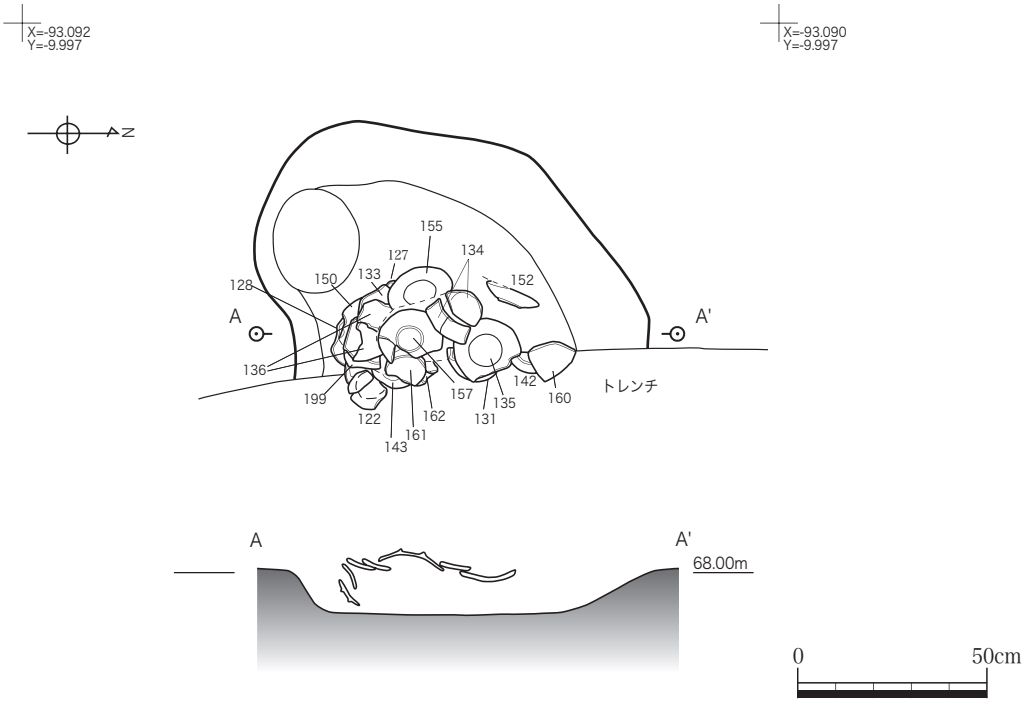
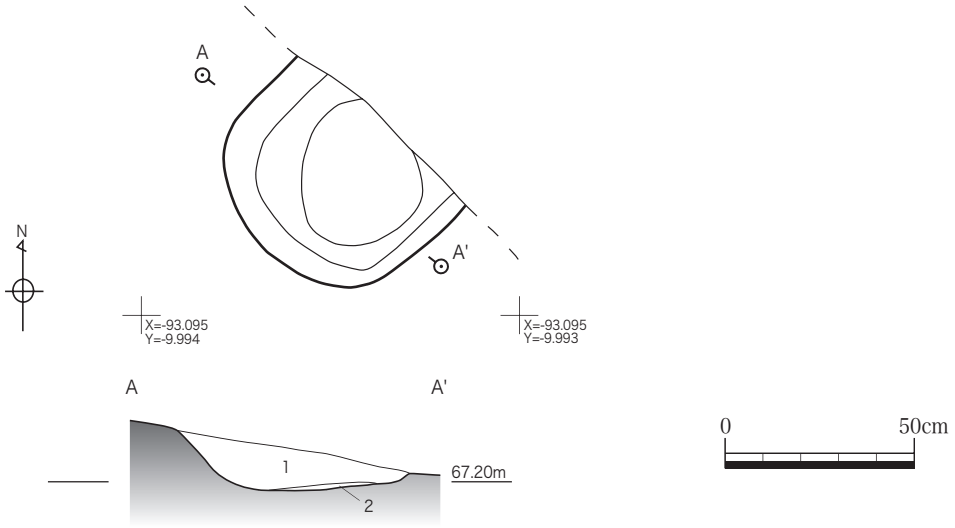


図16　SK01（1：20）



1　7.5YR3/3　暗褐色
2　白色粘土

図17　SK16（1：20）

SU01　調査区の南部で面積 11.0m^2 にわたって検出された。下面には SD09･10 が存在するが、土器群はその北側部分で弧状に分布している。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（569 ～ 700）がある。

SU02　調査区の南部で面積 5.0m^2 にわたって検出された。下面には SB09 が存在するが、土器群はその北側でやや歪む正方形に分布している。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（701 ～ 781）がある。

SU03　調査区の南部で面積 0.8m^2 にわたって検出された。規模は小さい。土器群は円形に分布している。下面には大型の遺構が確認できない。図示した資料には須恵器･灰釉陶器（782 ～ 792）がある。

SU04　調査区の南部で面積 3.7m^2 にわたって検出された。下面には SD11 が存在するが、土器群は不整形な長楕円形に分布している。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（793 ～ 826）がある。

SU05　調査区の南部で面積 13.4m^2 にわたって検出された。下面には遺構がほとんど確認できない。土器群はやや不整形な長楕円形に分布している。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（827 ～ 925）がある。

SU06　調査区の南部で面積 8.8m^2 にわたって検出された。土器群は長楕円形に分布している。下面には、遺構がほとんど確認できない。東側には白色粘土も確認でき、分析した。図示した資料には須恵器・灰釉陶器（926 ～ 1063）がある。

SU07　調査区の中央部で面積 18.7m^2 にわたって検出された。下面には SB08 が存在するが、土器群はその約 2m 上方から楕円形に分布している。また、重量 3.6g 程度のオニイタが 1 点採集されたが、その分析結果を第Ⅳ章 1 に掲載している。図示した資料には須恵器・灰釉陶器・土師器（1064 ～ 1278）がある。

⑦　焼土面（SX）

ここでは包含層中から単独で検出された焼土面を報告する。性格は不明だが、検出できなかった竪穴住居に付属していたカマドであった可能性も否定できない。

SX01　調査区南部で確認された。長径 0.9m、短径 0.8m の円形に拡がる。図示した資料には（1279）がある。

SX02　調査区南部で確認された。やや不整形の楕円形で、長径 0.9m、短径 0.5m をはかる。中央から土師器甕の底部片（1280）が出土している。

(3) Ⅱ期の遺構

Ⅱ期は、江戸時代の遺構をまとめる。検出された遺構の数は乏しく、ほとんどの性格が判明しない。第Ⅰ章 3 に記述する岩崎村における江戸時代の再開発に関連したものと推定できる。

SK427　調査区南部で検出された。規模は不明で、検出面からの深さが、2.3m をはかる。土坑というより、丘陵地形を段状に造成した丘陵側の法面が埋没したものと理解すべきかもしれないが、調査区内では判断できない。ここでは大型の土坑として報告しておく。図示した資料には施釉陶器（1412 ～ 1415）がある。

SK447　調査区の中央部で検出された。長径 0.4m、短径 0.3m、検出面からの深さは、0.2m を

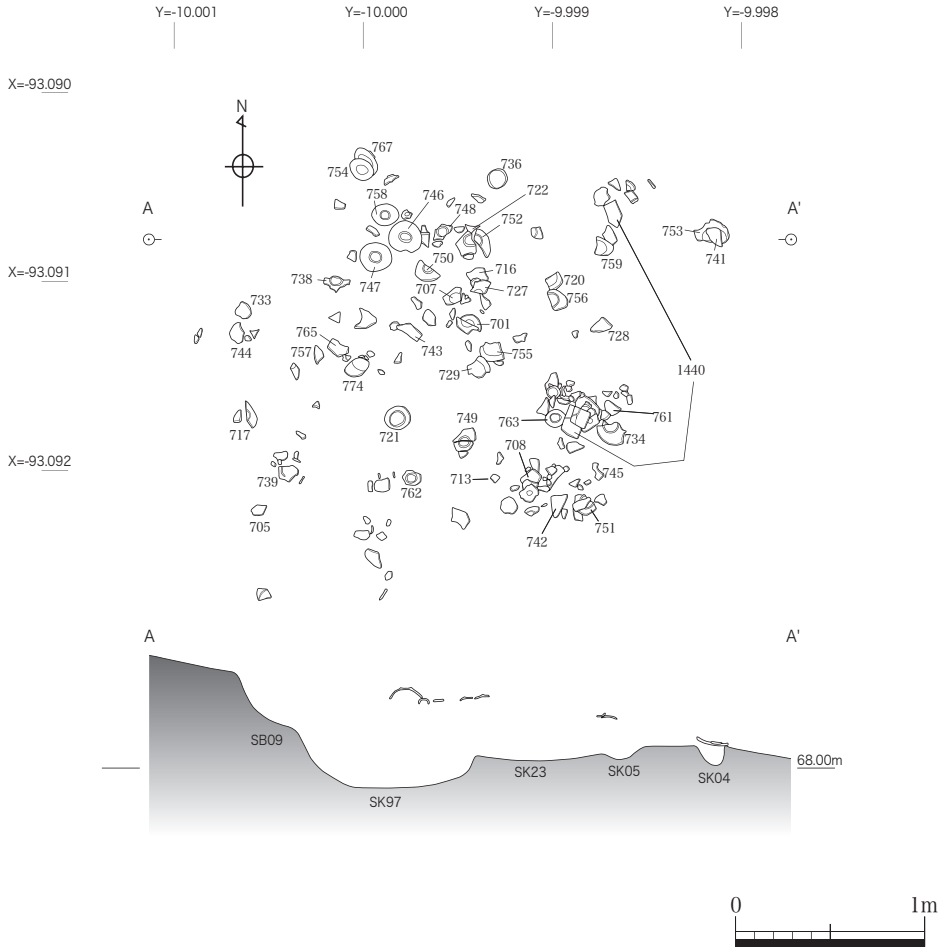


図 18　SU02（1：40）

はかる。平面形は円形。図示した資料には施釉陶器（1416）がある。

SD01

調査区の中央部で全長約 34m が検出された。北東〜南西方向に 71m の等高線に沿って約 30m 伸びた後、直角に屈曲して北西〜南東方向に約 4m まで存在し、端部は流失している。主軸は N − 39° − E とこれにほぼ直交する E − 39° − S である。残存状態の良好な北東〜南西方向では、幅 1.0m、検出面からの深さが、0.7 〜 1.0m をはかる。図示した資料には施釉陶器（1417・1418）がある。

SD03

調査区の北部で検出された。SD01 の延長線上に北東〜南西方向に 71.5m の等高線に沿って約 15m 伸び、北東の端部は流失している。主軸は N − 45° − E。SD01 との前後関係は不明となる。残存状態の良好な部分の幅は 0.9m、検出面からの深さは、0.4m をはかる。出土遺物は得られなかったが、形状や主軸が SD01 と類似しており、同一の溝である可能性すら考えられる。

(4) そのほかの遺構

SK51

調査区の南部で検出された。長径 0.4m、短径 0.3m、検出面からの深さは、0.3m をはかる。平面形は円形である。図示した資料には比較的残存状況が良好な灰釉系陶器椀（1425）があり、中世前期の遺構であることが考えられるが、同時期に属する他の遺構は調査区内では確認されてはいない。（池本正明）

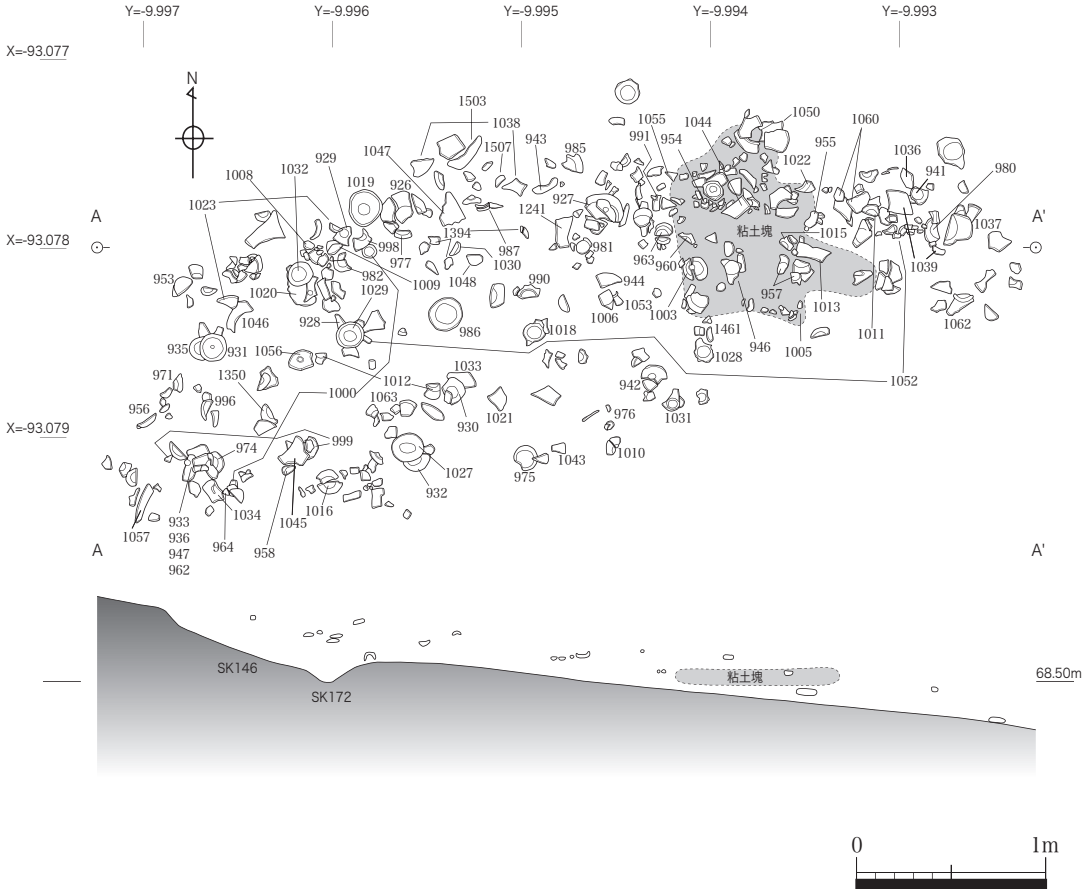


図 19　SU06（1:40）

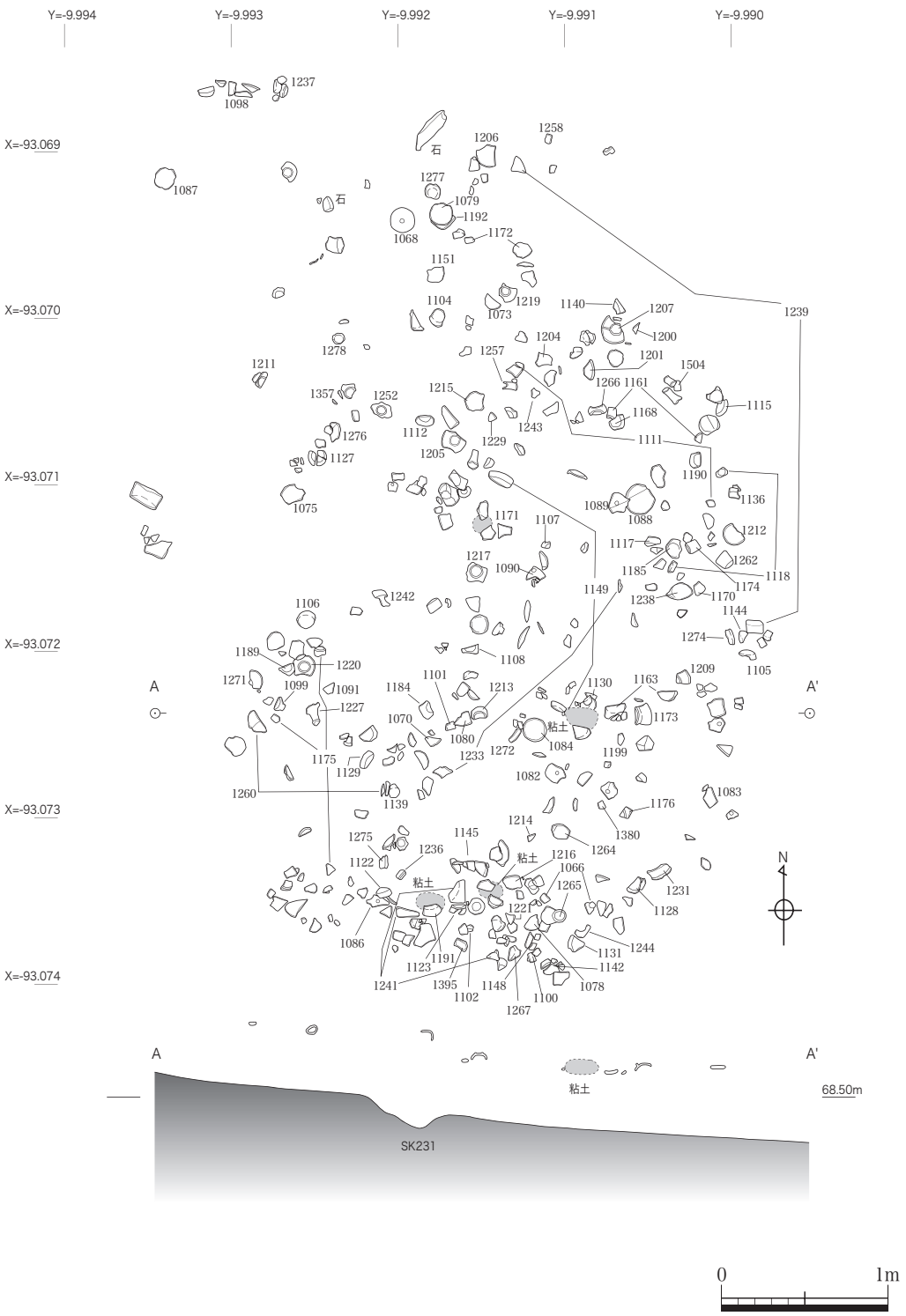

Y=-9.994
Y=-9.993
Y=-9.992
Y=-9.991
Y=-9.990
X=-93.069
X=-93.070
X=-93.071
X=-93.072
X=-93.073
X=-93.074
A
A'
粘土
68.50m
SK231
N
0
1m

図 20　SU07（1：40）

第Ⅲ章　遺　物

出土遺物は整理箱で230箱得られた。土器・陶器類・土製品・石製品・石器・金属関連遺物などがみられるが、量的には圧倒的に土器・陶器類が多い。

1　Ⅰ期の土器・陶器（図21～56－1～1411）

ここでは、これらについて順に具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるために、若干の整理を行う。

種類と器種

土器・陶器類の種類としては、前者には土師器が、後者には須恵器・灰釉陶器・灰白軟陶がある。

須恵器

須恵器の器種として蓋・無台杯・有台杯・双耳杯・椀・盤・有台盤・脚台盤・脚付盤・横瓶・甑・ハソウ・陶臼・仏鉢形土器・鉢・円面硯・風字硯などがある。

特徴的器種

以下に、須恵器の特徴的な器種について概観する。まず、蓋は頂部に釦形の鈕が付くものを原則とするが、宝珠形となるものも含まれている。ここでは機械的に「鈕の高さ／直径」が0.5以上を宝珠形、それ以下を釦形とした。上面の回転ヘラ削り調整はラフなものが多く、範囲は口径の１／２以下、大半が１回転程度の調整で仕上げられている。頂部に糸切り痕が残存する資料も存在する。無台杯は実際には複数の器種に細分できる。平底で腰部から屈曲して直線的に伸びるものが主体だが、屈曲を持たないものや、丸底となるものも含まれている。腰部で屈曲するものは底部糸切りを原則とし、多くは回転ヘラ削り調整でこれを消す。回転ヘラ削り調整はラフなものが多く、大半が１回転程度で仕上げられている。範囲も底部とその周囲のみに施すものが圧倒的で、屈曲部までこれが及ぶ資料は乏しい。有台杯も実際には複数の器種に細分できるであろうが、まず腰部で屈曲して直線的に伸びるものと、腰部に丸みを有する椀形状とに大別できる。後者は有台椀と呼ぶべきかもしれないが、椀が外底部に糸切り痕を残すのに対して、これらはほとんどがヘラ削り調整を施して消されている。これを理由として本書では一応有台杯に含めている。双耳杯は基本的に有台で、有台杯と同様に腰部で屈曲して短い耳（把手）が付くものと、椀形状で長い耳を持つものに大別できる。盤は底部の形状から４つに区分している。無高台の盤、高台を持つ有台盤、これがやや高い脚台盤、脚部となる脚付盤である。仏鉢形土器は仏具で、史料にも登場する『瓦鉢』もしくは『磁鉢』と推定できるものである。鉢は杯より深く大振りな、複数の器種をまとめた。ただし、分離が容易な甑と陶臼は別器種としている。

灰釉陶器

灰釉陶器の器種としては、椀・平皿・広縁段皿・狭縁段皿・耳皿・三足盤・蓋・長頸瓶・平瓶・浄瓶・双耳瓶・環状手付瓶などがある。瓶類に代表されるいわゆる原始灰釉陶器は、須恵器の範疇とする意見もあり傾聴すべきだが（木村・池田　1994）、本書ではこれらを

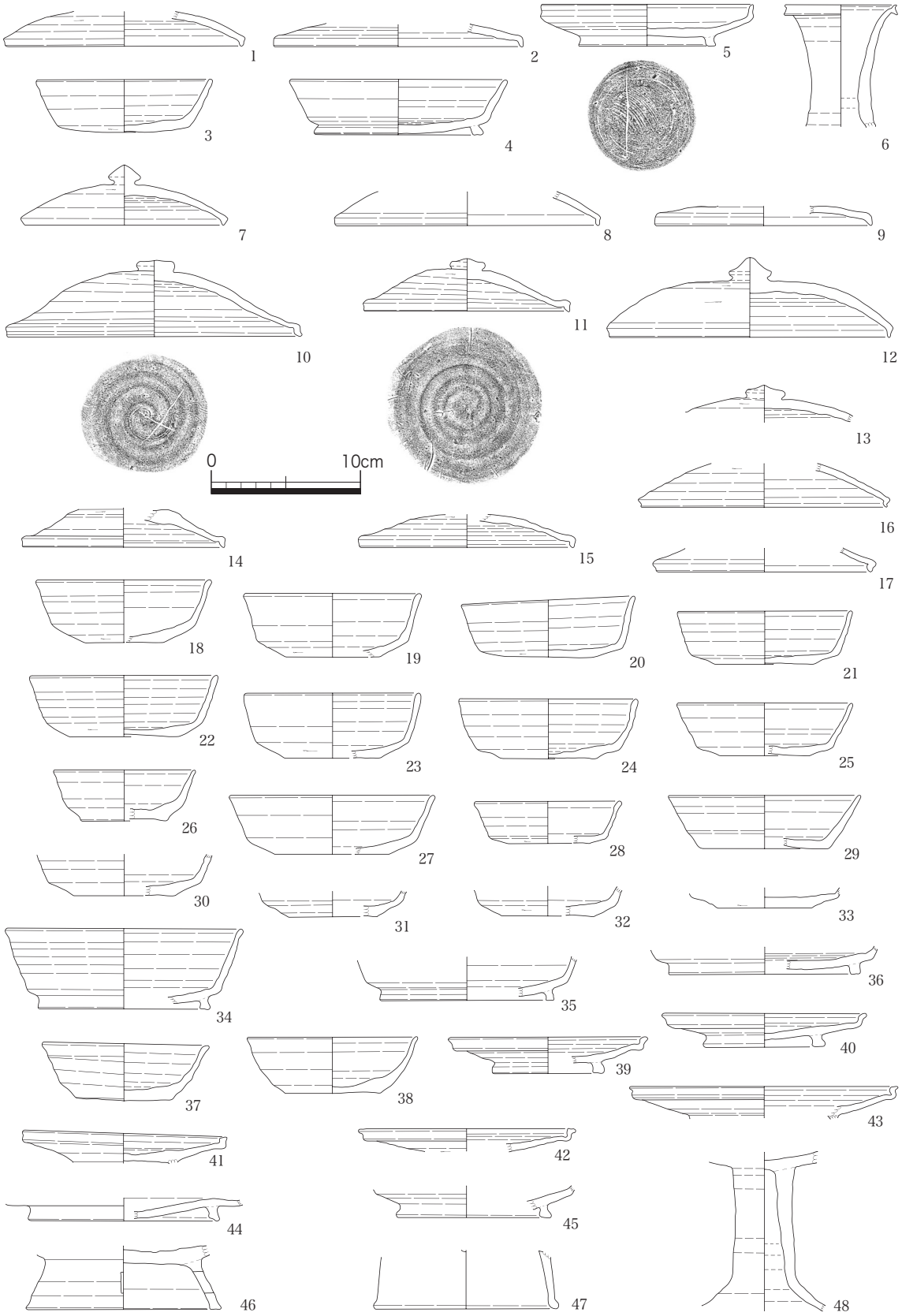


図 21　出土遺物実測図 1

厳密に区分することが困難であることを理由として、便宜的にこれらを全て灰釉陶器として扱うことにする。なお、胎土の色調も問題となろうが、これについては紙面の関係で本書に添付するCD-ROMに収納してある遺物計測一覧を参照とする。

土　師　器

土師器は甕が確認できているのみである。ほとんどが東濃系（永井　1996）となり、外面にケズリ調の荒いハケメ調整を施す。また、ヨコナデ調整で仕上げる三河型（北村2001）も若干含まれている。なお、灰白軟陶は蓋が1点得られているのみである。

灰白軟陶

観察項目

また、後述するように本遺跡は土器製作とその出荷に関わる集落遺跡と推定できるため、特に製品の二次選別を証明するため、実測図掲載資料について硬度・胎土・気泡（焼き膨れ）・歪み率・亀裂（焼き割れ）、黒斑などの様子も観察した。本書添付のCD-ROMに収納してある遺物計測一覧にその結果を掲載している。硬度については、ヒトの爪（モース硬度計硬度3）を基準とし、堅いものを○、柔らかいものを×とした。気泡は直径2cmを基準として、これより大きいものを○、小さいものを△、気泡が確認できないものを×とした。歪み度は、口縁部または底部が残存するもののみ観察した。図示した径に対して半径で±5mm以上を歪みと判断し、推定径を12分割した数値（四捨五入）を、「歪み部／残存部」として表記した。なお、口縁部で計測した場合をA、底部で計測した場合をBとし、双方にひずみが確認できる場合はより多く残存する方を、これらが同数なら口縁部を優先した。亀裂については、最大幅1mmで判断し、口縁部をA、底部をB、高台をCとした。使用痕は須恵器・灰釉陶器などは高台接地部や、内面底部などに損耗が確認できるものを○、できないものを×と表記した。土師器についてはススの付着や変色でこれを判断した。黒斑は、須恵器・灰釉陶器のみ観察した。直径1mm以上を対象とし、一辺2センチの正方形の範囲に2か所以上確認できるものをA、これが5か所以上となるものをBとした。

SB01
（図21－1～6）

1～5は須恵器。1･2は蓋。3は無台杯で丸底となる。4は有台杯である。5は有台盤で、外底部にヘラ記号『｜』が確認できる。6は灰釉陶器の長頸瓶である。頸部はやや長い。

4～6は鳴海32号窯式、1～3はこれをややさかのぼる。

SB02
（図21－7～9）

7～9は須恵器の蓋で、7は器高が高く丸みを持った天井部に、宝珠形の鈕が付く。蓋として図示するが天井部内面は摩滅し、転用硯であろう。9は他の製品の一部が釉着する。

時期はいずれも鳴海32号窯式に属する。

SB03
（図21・22－10～61）

10～54は須恵器。10～17は蓋である。10･11･13が釦形、12は宝珠形の鈕が付く。10・11は天井部内面にヘラ記号が確認でき、10は『＋』、11は『｜』となる。18～33は無台杯。29は腰部で屈曲しない形状。26・28は小振りでミニチュアに含めるべきかもしれない。24は窯壁が付着し、一部がゆがむ。20は外底部にヘラ記号『｜』が確認できる。34～36は有台杯。34は器高が高い。36はやや大振りとなる。37・38は椀。39～45は有台盤。46・47は脚台盤。脚部にスカシが確認でき、46は長方形で4か所と推定して図示した。47は形状・数ともに不明となる。48は脚付盤。細く柱状となる。外面は黄土塗布か。49は横瓶。口縁部は短く、端部はフラットとなる。外面は黄土塗布。50～52は甑。50・51は底部片で残存する体部外面に50が縦方向、51がラフな横方向の手持ちヘラ削り調整を施す。50・52は手づくね痕が明瞭な太い粘土紐を半円状に曲げて体

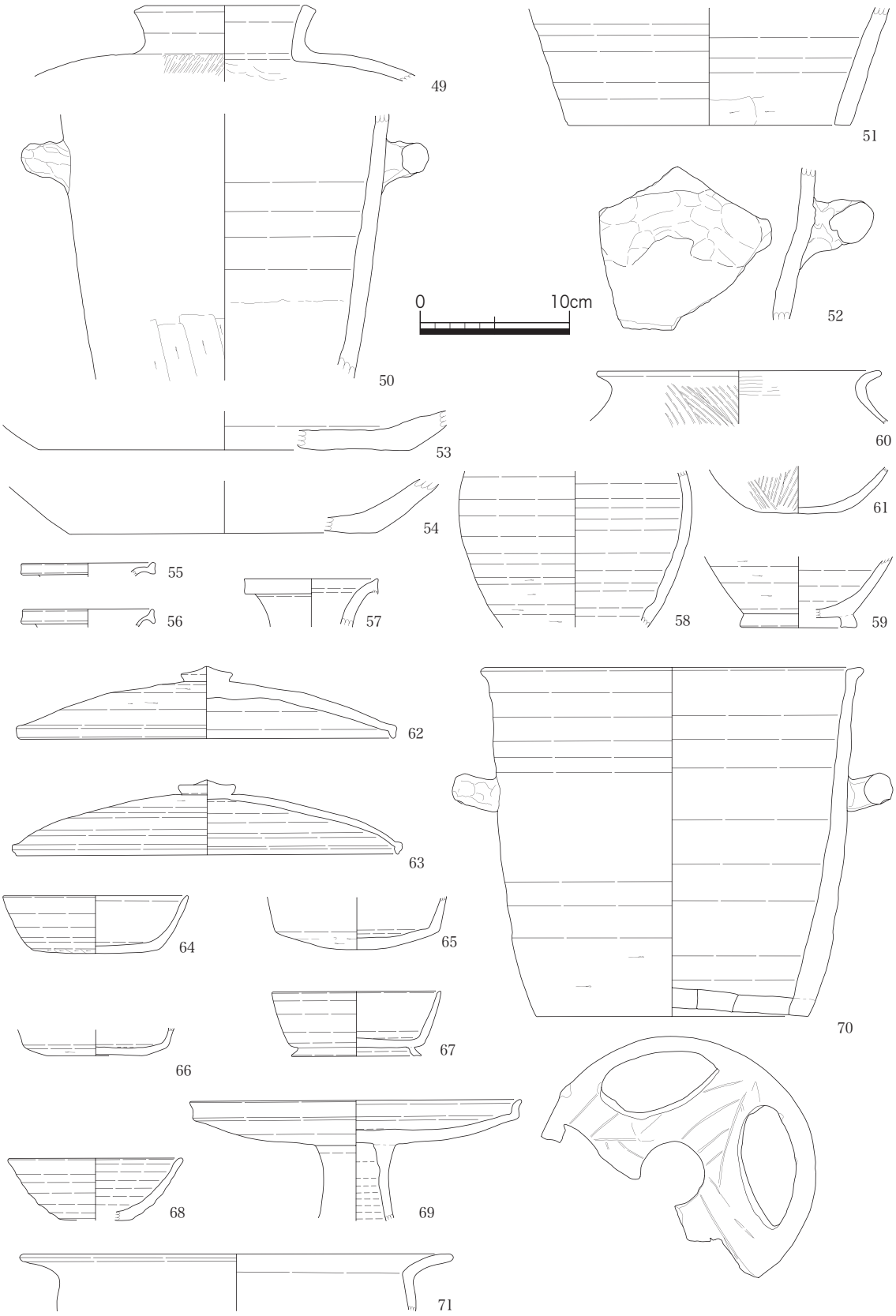


図 22　出土遺物実測図 2

部の横方向に貼付している（以下、環状把手）。53・54 は鉢の底部。底径は広い。

55 ～ 59 は灰釉陶器の長頸瓶である。55 ～ 57 は口縁部片。58・59 も長頸瓶か。58 は体部片、59 は底部片。55・56・58 は黄土塗布が確認できる。

時期は鳴海 32 号窯式を中心として、46 はややさかのぼり、14、37 ～ 41 は折戸 10 号窯式。

60・61 は土師器で濃尾系甕。60 は口縁部片で、61 は底部片である。

SB04
（図 22 － 62 ～ 71）

62 ～ 70 は須恵器。62・63 は蓋で、いずれも大振りで鈕は釦形となる。63 は黄土が塗布されているかもしれないが、発色は不十分となる。64 ～ 66 は無台杯。64・65 は丸底となり、64 は外底部に手持ちヘラ削り調整を施す。67 は有台杯、68 は椀である。69 は脚付盤。脚部上方は柱状となる。70 は甑。体部外面の下部には横方向のヘラ削り調整を施す。体部に環状把手を貼付している。外底部には木葉痕が確認できる。

時期は折戸 10 号窯式が中心だが、64 は鳴海 32 号窯式に属する。

71 は土師器で、三河型甕となる。

SB05
（図 23 － 72）

72 は灰釉陶器の蓋で、器壁は薄くシャープ。無鈕である。時期は井ヶ谷 78 号窯式～黒笹 14 号窯式だが、混入であろう。

SB06
（図 23 － 73 ～ 88）

73 ～ 87 は須恵器。73 は蓋。74 ～ 79 は無台杯。80･81 は有台杯。82･83 は椀となる。82 はやや扁平である。84 は有台盤。85 ～ 87 は盤の口縁部片。88 は灰釉陶器の短頸壺。体部は丸みを帯び、口縁部はにぶく屈曲して直立する。

時期はいずれも折戸 10 号窯式に属する。

SB07
（図 23 － 89・90）

89 は須恵器盤の口縁部片。90 は灰釉陶器の長頸瓶で、口縁部片である。

時期はいずれも折戸 10 号窯式に属する。

SB09
（図 23 － 91 ～ 115）

91 ～ 95 は蓋。91・92 は釦形の鈕。92 は蓋として図示するが、天井部内面がわずかに摩滅する。転用硯か。96 ～ 98 は無台杯。99・100 は有台杯。100 は小振りで体部が直立気味となる。110 は鉢の口縁部片とするが、盤の脚部かもしれない。111 は鉢の底部片で、内外面に黄土を塗布する。112 は横瓶。口縁部は短く外反して端部がフラットとなる。

113 は灰釉陶器の長頸瓶。頸部外面にヘラによる線刻が確認できる。外面は黄土塗布か。

時期は折戸 10 号窯式を中心とするが、101 ～ 104･108･112･113 は井ヶ谷 78 号窯式か。

114・115 は土師器で、濃尾系甕となる。

SB10
（図 23 － 116）

116 は須恵器の脚付盤。杯部は扁平で、脚部は上方がやや太く、外反する裾部を持つ。時期は井ヶ谷 78 号窯式か。

SB11
（図 23 － 117 ～ 119）

いずれも須恵器となる。117・118 は蓋で、119 は盤の口縁部である。

時期は折戸 10 号窯式～井ヶ谷 78 号窯式に属する。

SK01
（図 24・25 － 120 ～ 164）

120 ～ 130 は須恵器。120 は蓋で鈕は釦形。121・122 は無台杯。腰部がやや高く、屈曲もややにぶい。123・124 は有台杯。高台を除く形状は灰釉陶器椀と酷似する。125 ～ 127 は椀。器壁が薄く口縁部は外反する。128 ～ 130 は有台盤。口縁部は屈曲せず端部には面を持つ。

131 ～ 162 は灰釉陶器。131 ～ 145 は椀で、角高台のものと（131 ～ 133）、三日月高台のもの（134 ～ 145）が存在する。なお、136 の内面には『十』の線刻が確認できる。131・134 は外面に焼台片、139・141 は他の製品の一部がそれぞれ釉着する。137 は窯

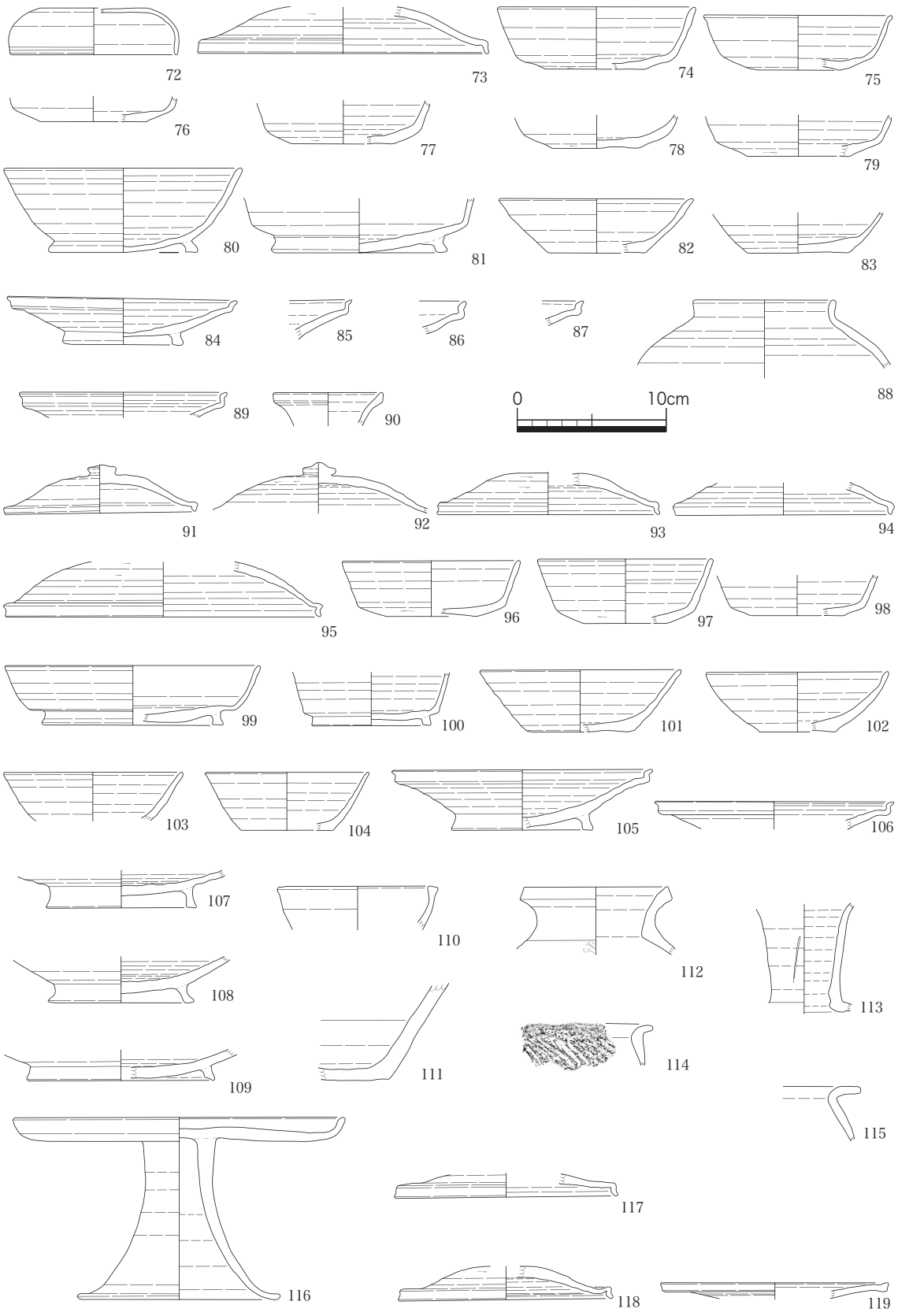


図 23　出土遺物実測図 3

壁の極小片がほぼ一面に付着するが、大まかな凸凹は削り整えられている。146 ～ 153 は平皿。やはり角高台のものと（146・147）、三日月高台のもの（148 ～ 153）が存在する。148 の外底部には『十』のヘラ記号が確認できる。146 は内面に三又トチンの端部が釉着する。154 ～ 157 は広縁段皿。154・155 は角高台、156・157 は三日月高台が付く。158・159 は狭縁段皿。いずれも三日月高台となる。160 ～ 162 は長頸瓶。いずれも二段成形。160 は頸部がやや短く口径が広く、広口瓶とすべきかもしれない。161 は底部が最大幅 2mm 程度焼き割れる。

時期は黒笹 14 号窯式～黒笹 90 号窯式に属する。

163・164 は土師器。いずれも濃尾系甕となる。

SK23
（図 25 － 165・166）

いずれも須恵器で、165 は無台杯。平底で腰部に屈曲を持たない形状。166 は鉢の底部。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK37
（図 25 － 167 ～ 175）

167 ～ 174 は須恵器。167･168 は蓋で、167 の鈕は釦形となる。169 ～ 171 は有台杯。170 は口径の割に器高が低い。173･174 は盤の口縁部片。175 は灰釉陶器の長頸瓶である。

時期はいずれも折戸 10 号窯式だが、169 はこれをややさかのぼるかもしれない。

SK86
（図 25 － 176）

176 は鉢の底部で平底。外面は黄土塗布、外底部には網代の圧痕も確認できる。時期は特定できない。

SK87
（図 25 － 177 ～ 185）

177 ～ 184 は須恵器。177 ～ 179 は蓋。177 は器高が高い。180 は無台杯、181 は有台杯となる。182 は鉢で、底部には回転糸切り痕が観察できる。183 は甑。外面は縦方向のヘラ削り調整。184 は甕の口縁部で、頸部の外面にはヘラによる直線文と櫛による波状文を交互に重ね、内外面に黄土も塗布する。185 は、灰釉陶器の長頸瓶である。やはり黄土塗布か。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK88
（図 25 － 186・187）

186 は須恵器の無台杯。時期は折戸 10 号窯式。187 は土師器で濃尾系甕となる。

SK90
（図 26 － 188）

188 は須恵器の鉢。体部外面は二本一組の沈線文。外面に黄土を塗布しているかもしれない。時期は特定できない。

SK93
（図 26 － 189 ～ 197）

189 ～ 196 は須恵器。189 ～ 191 は蓋。189･190 は釦形の鈕が付く。191 は扁平となる。192 ～ 194 は無台杯。195 は双耳杯。耳部は長く水平に伸びる。196 は甕。外面は黄土を塗布、内面は不明。197 は灰釉陶器の蓋で、鈕は宝珠形となる。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK97
（図 26・27 － 198 ～ 248）

198 ～ 241 は須恵器。198 ～ 206 は蓋。198 ～ 205 は鈕が残存し、形状は釦形となる。207 ～ 219 は無台杯。207 は丸底で、底部はヘラ切り無調整である。209・219 は外底部にヘラ記号『｜』が確認できる。220・221 は有台杯。222 ～ 229 は椀。222・224 は腰部の張りが弱く、223 はほぼ直線的となる。225 は内底部に線刻が確認できる。239・240 は鉢。239 はバケツ状の体部とややくびれる口縁部をもつ。外底部は回転糸切り痕が確認できる。240 は底部片。平底で壺に含めるべきかもしれない。241 は甑の口縁部。外面には黄土を塗布しているかもしれない。

243 ～ 245 は灰釉陶器で、長頸瓶か。ただし 243 は体部が細身で、水瓶もしくは浄瓶かもしれない。外面は黄土塗布。

時期は、折戸 10 号窯式を中心とするが 220・222・223 はやや下がる。

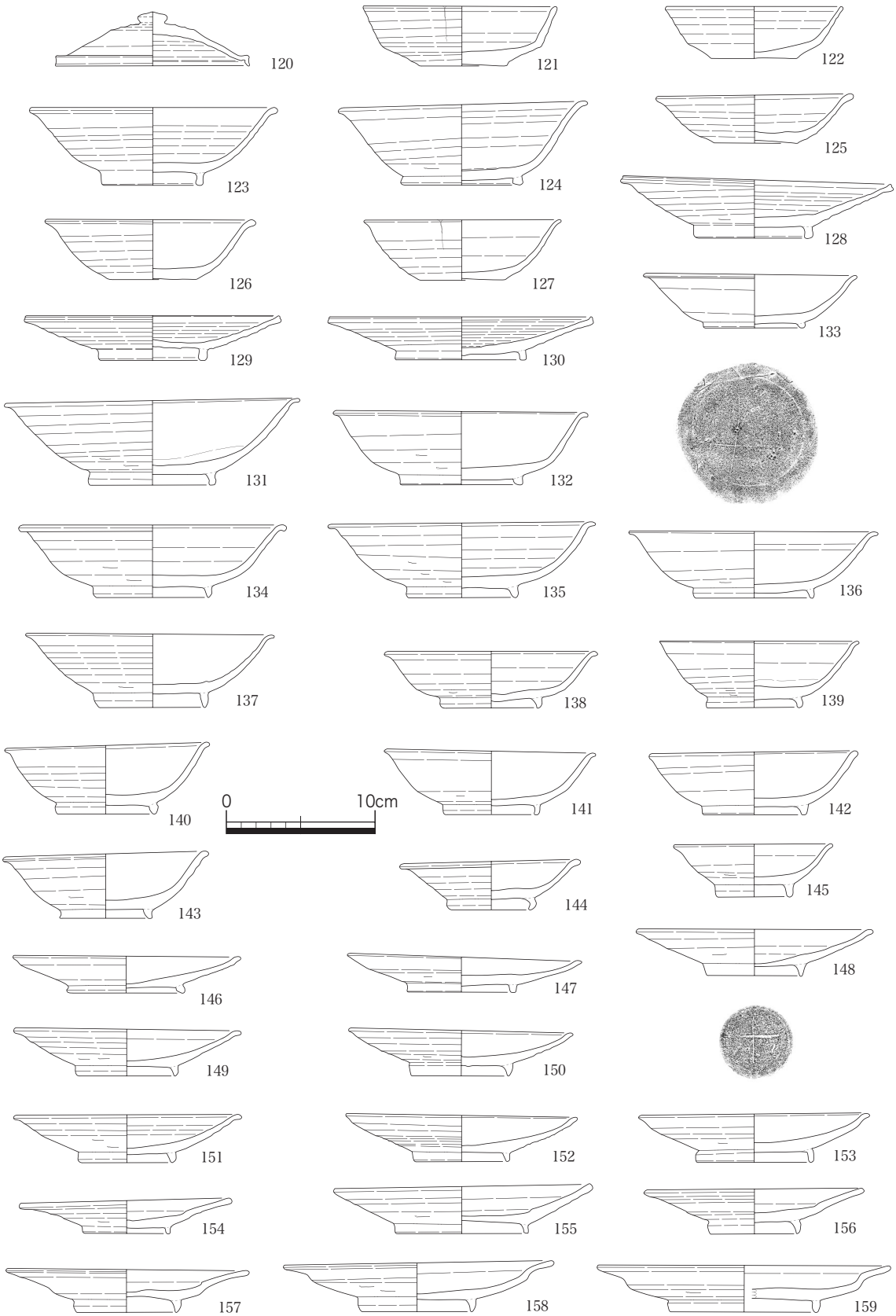


図 24　出土遺物実測図 4

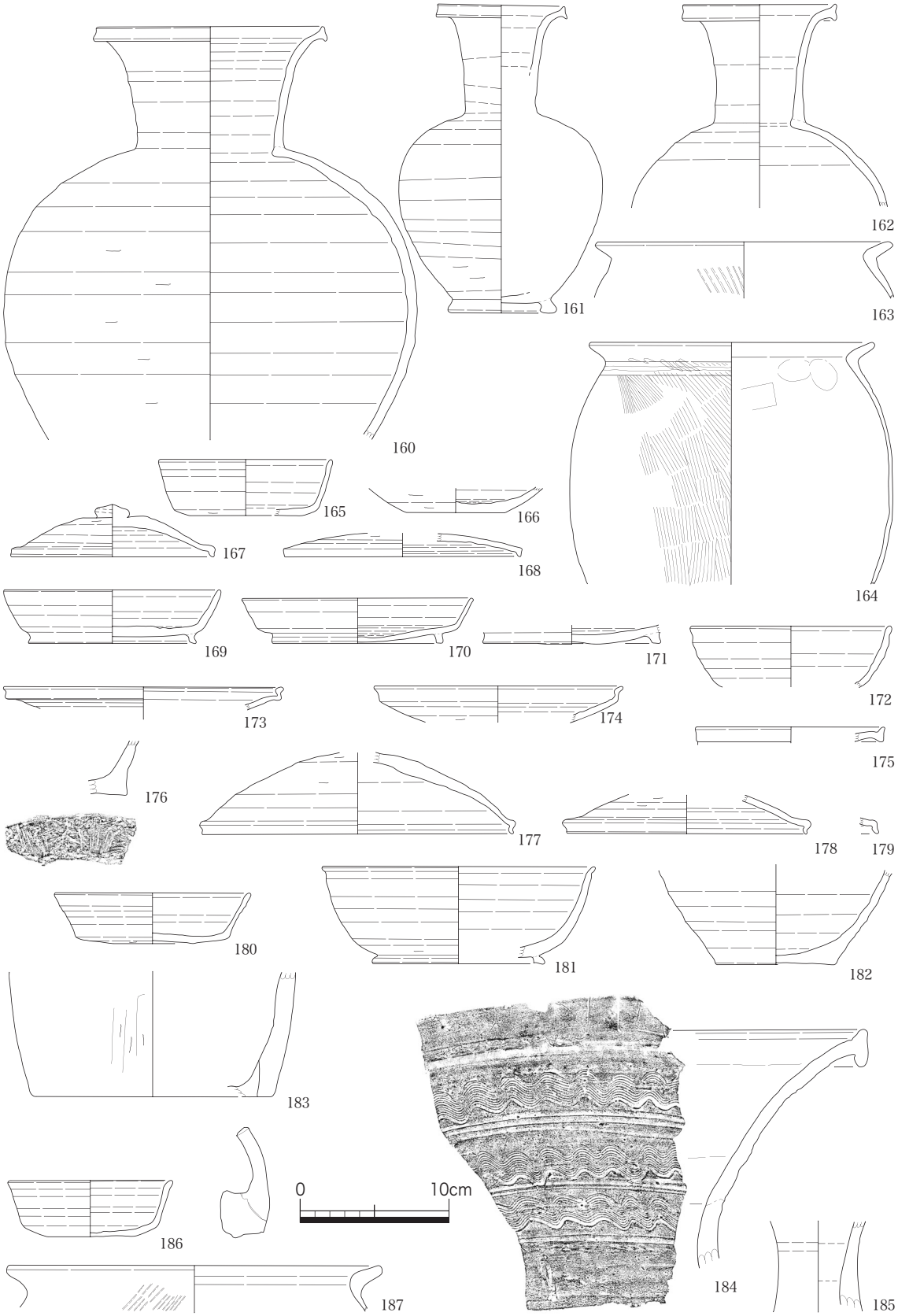


図 25　出土遺物実測図 5

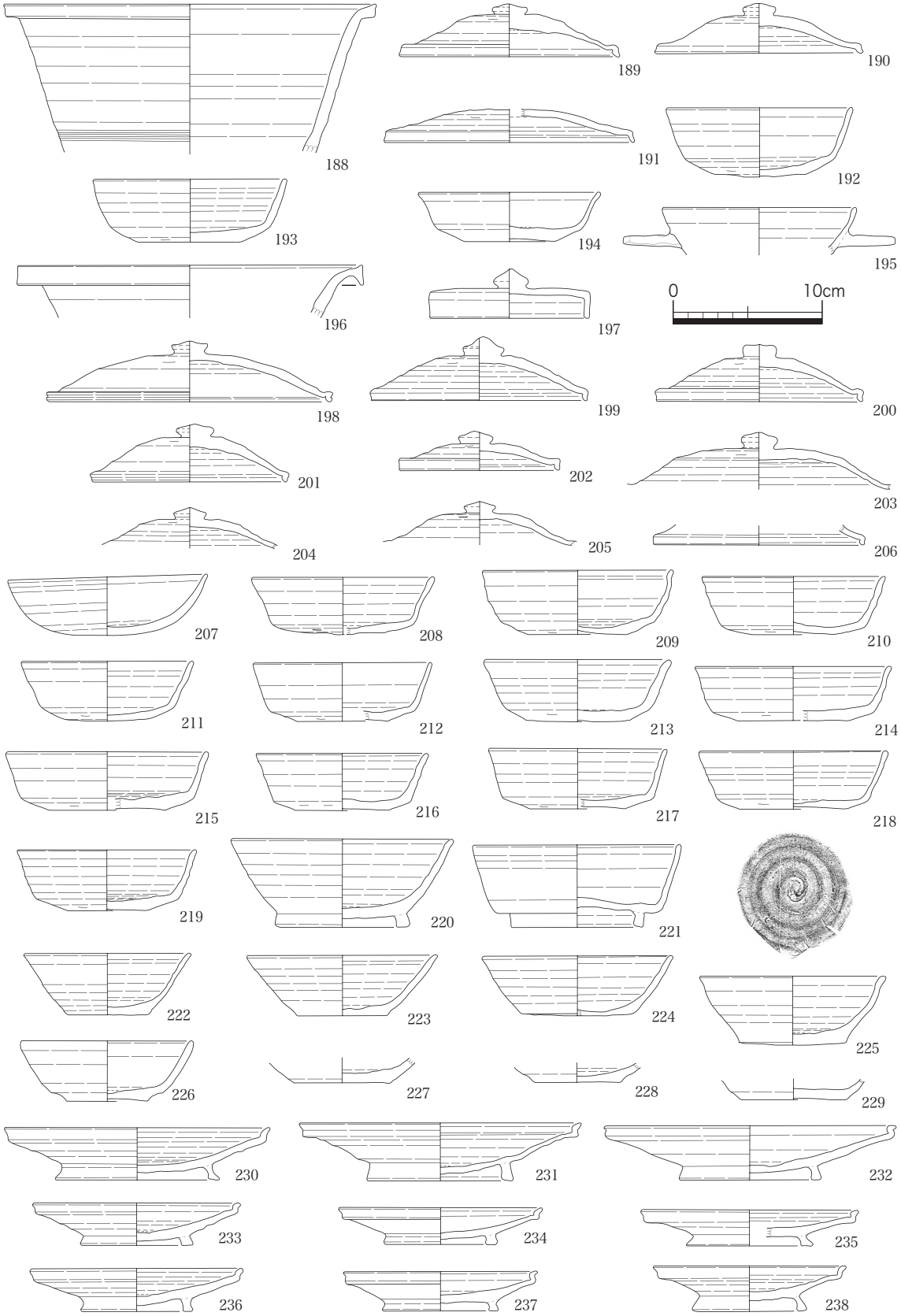


図 26　出土遺物実測図 6

246 ～ 248 は土師器甕。246・248 は濃尾系、247 は三河型となる。

SK98
（図 27 － 249 ～ 260）

249 ～ 258 は須恵器。249 は大振りな蓋。鈕は釦形となる。250 ～ 253 は無台杯。このうち 250 は丸底となる。外底部は風化が著しい。254 は有台杯の底部片、255 は脚台盤か。256・257 は鉢。256 はたらい状の鉢で、口縁部はわずかにくびれ、上面がフラットとなる。体部下方にラフな手持ちヘラ削りを施し、外底部は平底となる。外面は黄土塗布。257 は底部片で外底部に木葉痕が確認できる。258 は甕。外面に二本一組の沈線文を施す。内外面に黄土塗布。

259・260 は灰釉陶器。259 は長頸瓶の口縁部片。外面には二本一組の沈線文を施す。

時期はほぼ折戸 10 号窯式だが、250・259 はこれより古いかもしれない。

SK121
（図 27 － 261）

261 は須恵器の蓋で、鈕を欠く。時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK128
（図 27 － 262・263）

いずれも須恵器で、262 は有台杯の底部片。263 は鉢。時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK150
（図 27 － 264）

264 は須恵器の無台杯。時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK157
（図 28 － 265 ～ 272）

265 ～ 271 は須恵器。小片のみ出土した。265 は蓋、266 は無台杯、267 ～ 269 は有台杯、270 は椀。底部は手持ちヘラ削り調整。271 は有台盤。

272 は灰釉陶器で、長頸瓶の底部か。外面に黄土を塗布する。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK259
（図 28 － 273 ～ 288）

273 ～ 283 は須恵器。273 は蓋で鈕は釦形。275 ～ 278 は椀。276 は口縁部で内湾気味に直立し、端部直下でくびれて玉縁状となる。外底部は回転糸切り痕が観察できる。一応椀に含めたが、鉢とすべきかもしれない。279 は有台盤。280 は鉢。平底で肩部が張り口縁部が直立する。外底部は回転糸切り痕が観察できる。体部外面の最下部に手持ちヘラ削りを施す。281 ～ 283 は甕。いずれも黄土を塗布する。281 は、短い頸部を持つ。端部は幅の狭い縁帯となる。

284 ～ 286 は灰釉陶器。284 は椀。角高台が付く。混入品か。285 は環状手付瓶。頸部は三段成形。環状把手を縦方向に貼付する。286 は長頸瓶の底部片か。外面は黄土塗布。

時期は折戸 10 号窯式を中心とする。

287・288 は土師器で、濃尾系甕となる。

SK260
（図 28 － 289 ～ 299）

全て須恵器で小片が多い。289 ～ 293 は蓋。291 は器高が高く、293 は扁平となる。294・295 は無台杯、296 は有台杯か。かなり大振りとなる。299 は甕。外面は黄土を塗布する。

時期は折戸 10 号窯式を主体とするが、295 はやや下がるかもしれない。

SK281
（図 28 － 300 ～ 305）

全て須恵器でやはり小片が多い。300 ～ 302 は蓋。300・301 は器高が高い。303 は無台杯。丸底で深手となる。表面の風化が進み不明確だが、外底部は手持ちヘラ削り調整か。304 は盤。脚部を有するのか。305 は擬尖底の鉢。仏鉢形土器の底部片か。

時期は岩崎 25 号窯式に属する。

SK292
（図 28 － 306 ～ 310）

図示した資料は全て須恵器。306・307 は蓋で、鈕は釦形。308 は鉢。口縁部でわずかに内湾する。309・310 は甕。309 は頸部が短くほぼ直線的。端部はフラットとなる。外面と頸部内面に黄土塗布。310 は平底の底部片。残存する体部下方にラフな手持ちヘラ削り調整を施す。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

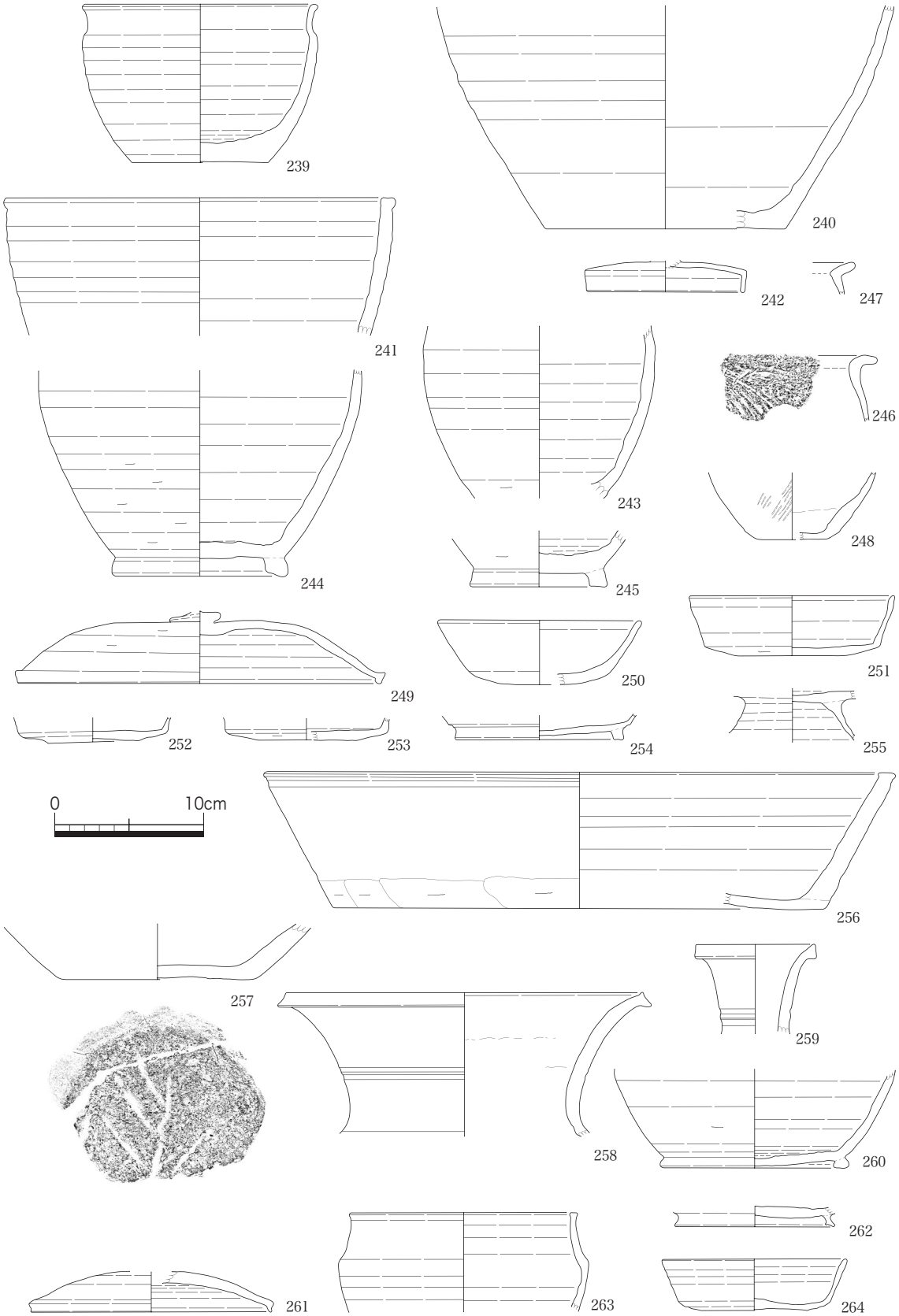


図 27　出土遺物実測図 7

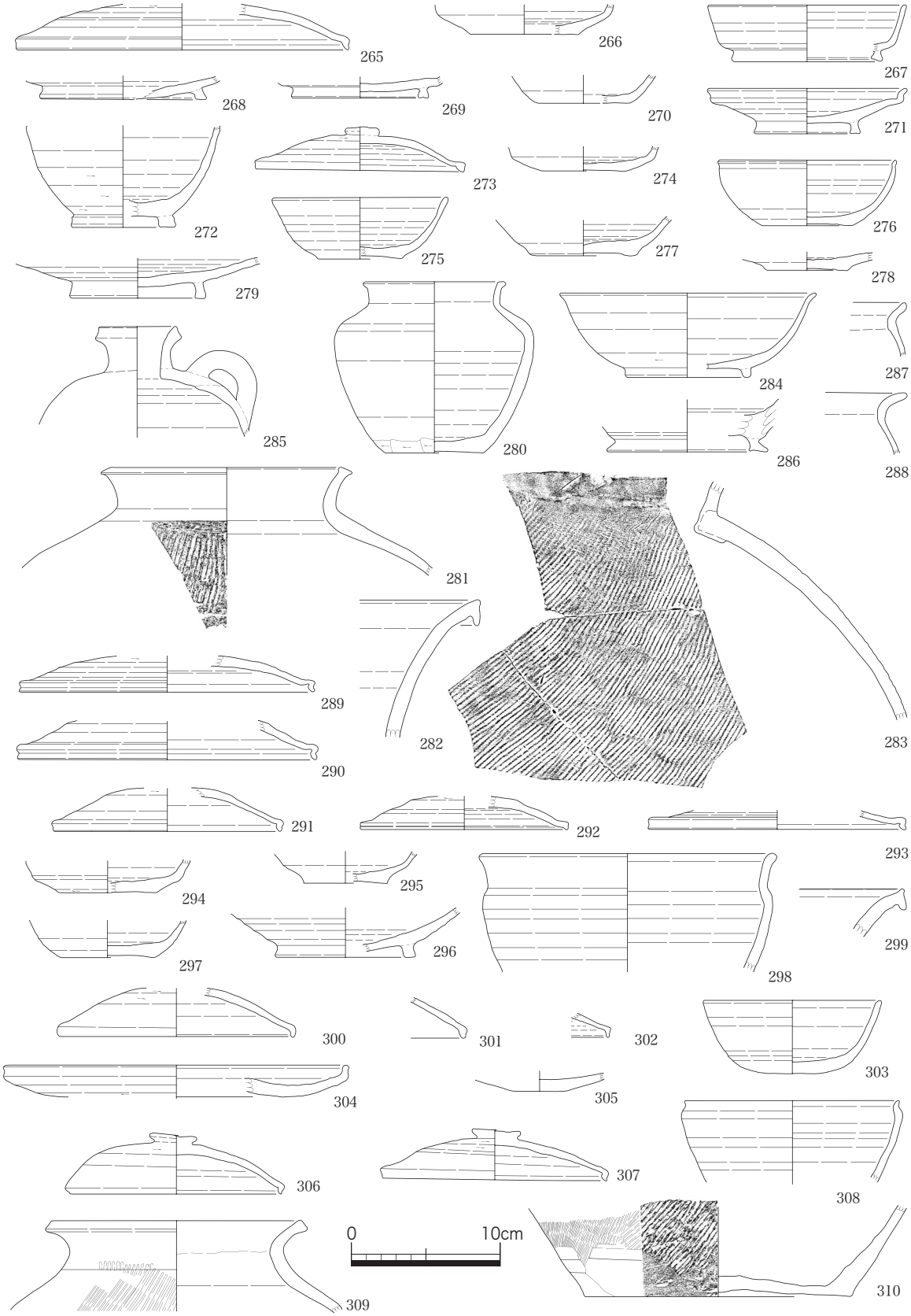


図 28　出土遺物実測図 8

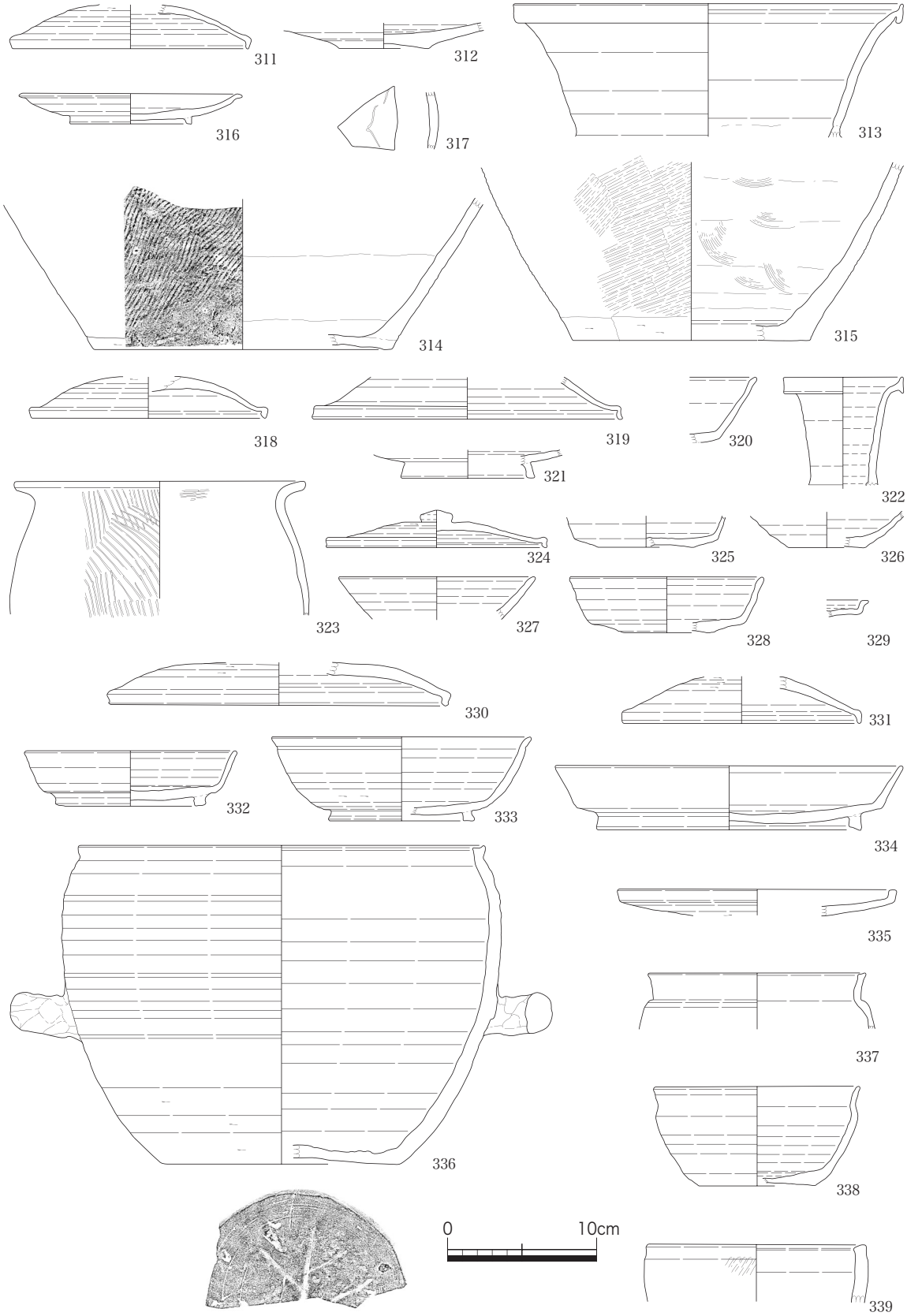


図 29　出土遺物実測図 9

SK309
（図 29 － 311 ～ 317）

311 ～ 315 は須恵器。311 は蓋。312 は無台杯の底部片としたが、無鈕の蓋とすべきかもしれない。器壁は厚く大振りとなる。313 ～ 315 は甕。314・315 は底部片で、残存する体部下方にラフなヘラ削り調整を加える。

316・317 は灰釉陶器。316 は平皿で角高台を持つ。317 は瓶の肩部片で、外面に陰刻文を施す。

時期は黒笹 14 号窯式だが、311 はやや遡る。

SK317
（図 29 － 318 ～ 322）

318 ～ 321 は須恵器。320 は深手の有台杯。高台は剥離する。321 は有台盤の底部片で、やや高い高台を持つ。322 は灰釉陶器の長頸瓶の頸部。外面は黄土塗布か。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK319
（図 29 － 323）

323 は土師器の濃尾系甕となる。

SK324
（図 29 － 324 ～ 327）

いずれも須恵器。324 は蓋で、鈕は釦形となる。325 は無台杯、326・327 は椀か。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK378B
（図 29 － 328・329）

いずれも須恵器。328 は無台杯、329 は盤の口縁部片。時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK388
（図 29・30 － 330 ～ 344）

330 ～ 339 は須恵器。330・331 は蓋。332 ～ 334 は有台杯。333 は口縁端部直下の外面に沈線を一条施す。334 は大振りで扁平となる。335 は台付盤で、高台は剥離する。336 ～ 338 は鉢をまとめた。336 は大振りの鉢で、太鼓状の体部を有する。外面には黄土を塗布する。平底で外底部には木葉痕が観察でき、体部には環状把手を貼付する。339 は陶臼の口縁部片。外面にタタキ整形の痕跡をわずかに留め、黄土を塗布する。

340 ～ 344 は灰釉陶器。340・341 は長頸瓶。341 は二本一組の沈線文を施す。頸部は三段成形。342 ～ 344 は長頸瓶の底部か。344 は高台が剥離する。342 は黄土を塗布する。343 も同様か。

時期は折戸 10 号窯式を中心とするが、331・335・340・341 はやや遡る。

SK404
（図 30 － 345・346）

いずれも須恵器で小片のみ得られた。345 は蓋、346 は無台杯。

時期は折戸 10 号窯式頃か。

SK410
（図 30 － 347・348）

347 は須恵器の鉢か。体部片で小型化した舌状の把手（以下、舌状把手）が貼付される。

348 は灰釉陶器の浄瓶。時期は折戸 10 号窯式頃か。

SK412A
（図 30 － 349 ～ 372）

いずれも須恵器である。349 ～ 353 は蓋。349・350 の鈕は釦形となる。354 ～ 358 は無台杯、359 ～ 362 は有台杯、359 は小振りとなる。363 ～ 367 は椀、364 は小振りとなる。368 は有台盤。371 は脚付盤で、脚部上方の破片となる。372 は鉢。外面は黄土塗布か。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK412B
（図 30 － 373・374）

小片のみが得られた。いずれも須恵器で、373 は蓋、374 は甕の口縁部片。内外面に黄土を塗布する。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SK420
（図 30 － 375）

小片のみが得られた。375 は須恵器の蓋。

折戸 10 号窯式に属する。

SK455
（図 30 － 376 ～ 378）

いずれも須恵器。376 は無台杯で、腰部で屈曲しない。377 は椀。内面は黄土塗布か。378 は風字硯の小片か。使用痕は確認できない。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

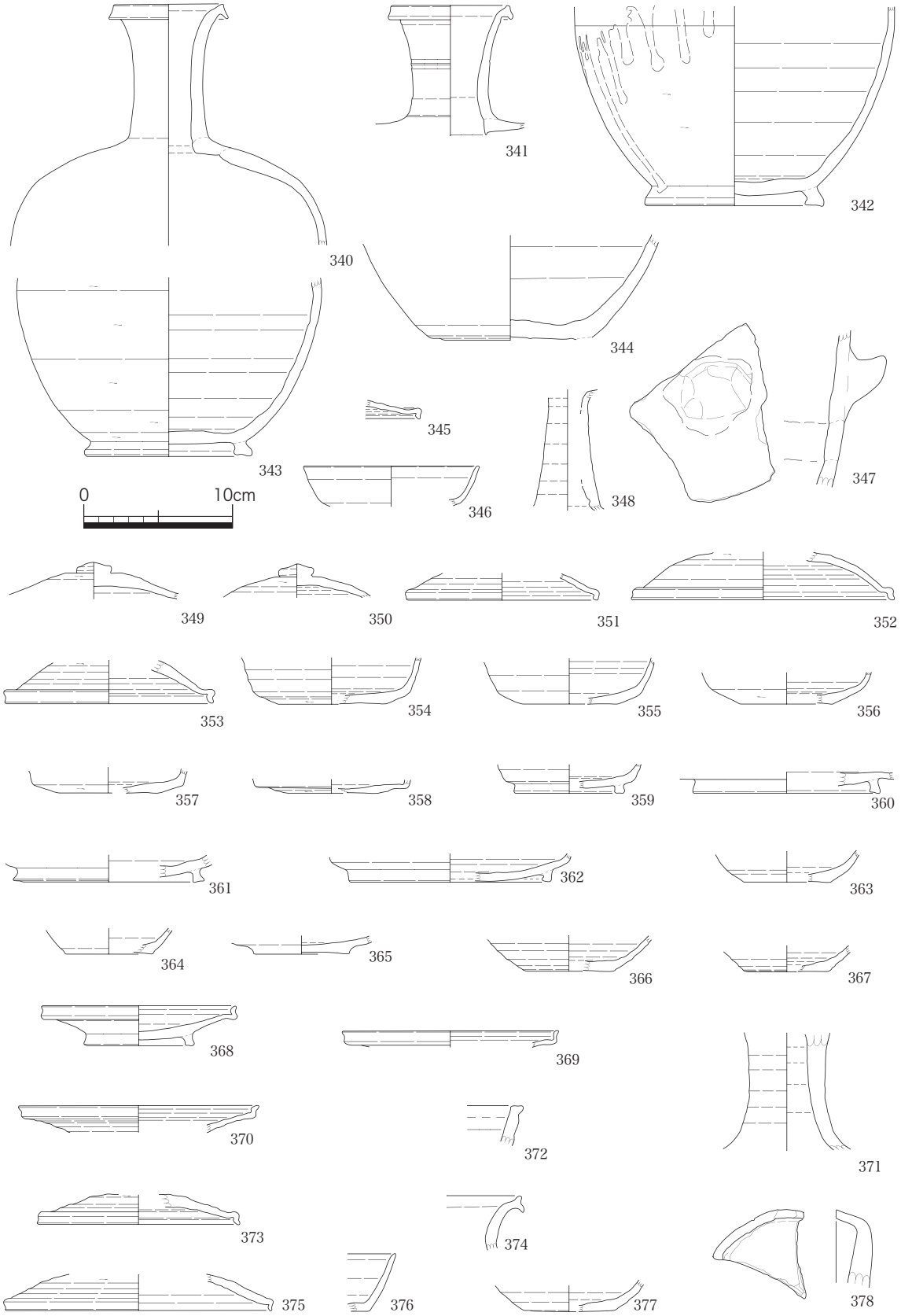


図 30　出土遺物実測図 10

SD09
（図 31 － 379 ～ 398）

379 ～ 395 は須恵器。379 ～ 385 は蓋。このうち 379 ～ 381 は釦形の鈕が付く。383 は天井部に黄土を塗布しているかもしれない。386 ～ 389 は無台杯。このうち 386・387 は丸底で、386 は外底部に手持ちヘラ削り調整も施す。387 も不鮮明だが同様か。390・391・392 は椀で、392 は小振りとなる。393・395 は有台盤で、やはり小振り。

396・397 は灰釉陶器の椀。396 は角高台、397 は三日月高台となる。混入か。

時期は、須恵器については折戸 10 号窯式を中心とするが、これを前後する資料も含まれる。

398 は土師器で濃尾系甕である。

SD10
（図 31 ～ 33 － 399 ～ 493）

399 ～ 466 は須恵器。399 ～ 412 は蓋で、399 は宝珠形の鈕、400 ～ 408 は釦形の鈕が付く。409 はやや大振りとなる。406 は天井部がひどくゆがむ。413 ～ 424 は無台杯。418・419 は小振りとなる。413・421 は外底部にヘラ記号が確認できる。413 が『＋』、421 が『｜』。425 ～ 435 は有台杯。435 の口縁部付近の外面は、にぶい段状となる。425・426 はやや大振りで、426 は扁平、428 ～ 430 はやや小振りで、口径の割に器高が高い形状となる。436 は双耳杯で器高がやや高い。437 ～ 443 は椀、444 ～ 450 は有台盤。444 はひどくゆがむ。448・449 は器高が高く小振り、445 ～ 447 は扁平となる。451・452 は脚付盤で、451 は外面に黄土を塗布する。453 は横瓶。やはり黄土塗布。454 は鉢。平底で、肩部で屈曲し口縁部は直立する。455 ～ 459 は甑。455 は環状把手が付く。460 は陶臼。外面は黄土塗布か。461 は仏鉢形土器の口縁部片か。462 ～ 466 は甕。462 は黄土を塗布する。463 も同様か。

467 ～ 491 は灰釉陶器。467 ～ 476 は椀で、467 ～ 475 は底部が残存し、三日月高台が付く。470 は内底部に線刻が確認できる。477 ～ 481 は平皿。やはり、三日月高台が付く。482 は広縁段皿。角高台を持つ。483 ～ 486 は狭縁段皿。やはり、三日月高台が付く。487 は三足盤。脚部は手持ちヘラ削り調整による。488 は蓋。宝珠形の鈕が付く。489 ～ 491 は長頸瓶。489・490 は口縁部片。491 は頸部が二段成形となる。

時期は折戸 10 号窯式～黒笹 90 号窯式に属する。

492・493 は土師器の濃尾系甕となる。

SD11
（図 34 － 494 ～ 535）

494 ～ 528 は須恵器。494 ～ 506 は蓋。鈕の形状は 494・495 が宝珠形、496 ～ 504 が釦形となる。495 は蓋として図示するが、天井部内面が摩滅し、転用硯であろう。507 ～ 512 は無台杯。507 は丸底で、器高がやや高い。507・511 は底部ヘラ切り。513 ～ 523 は有台杯。516 はひどくゆがむ。517 は小振りで器高が高い。黄土を塗布しているのかもしれない。521 は底部が高台より突出する。518 の外面には線刻の一部、522 の外底部にはヘラ記号『｜』が確認できる。526 はハソウ。有台で無文。外面は黄土を塗布する。527 は鉢と報告する。形状は丸底の無台杯に類似するが、やや狭い平底で口縁部外面に沈線が施される。528 は甕の底部片。

529 ～ 532 は灰釉陶器。529 は蓋として図示するが、天井部内面が摩滅し、転用硯であろう。530・531 は長頸瓶か。531 は外面に黄土塗布。532 は浄瓶である。

時期は折戸 10 号窯式を中心とするが、これを前後する資料も含まれる。

533 ～ 535 は土師器の濃尾系甕。いずれも底部片でやや平底気味となる。535 の外底部には木葉痕が観察できる。

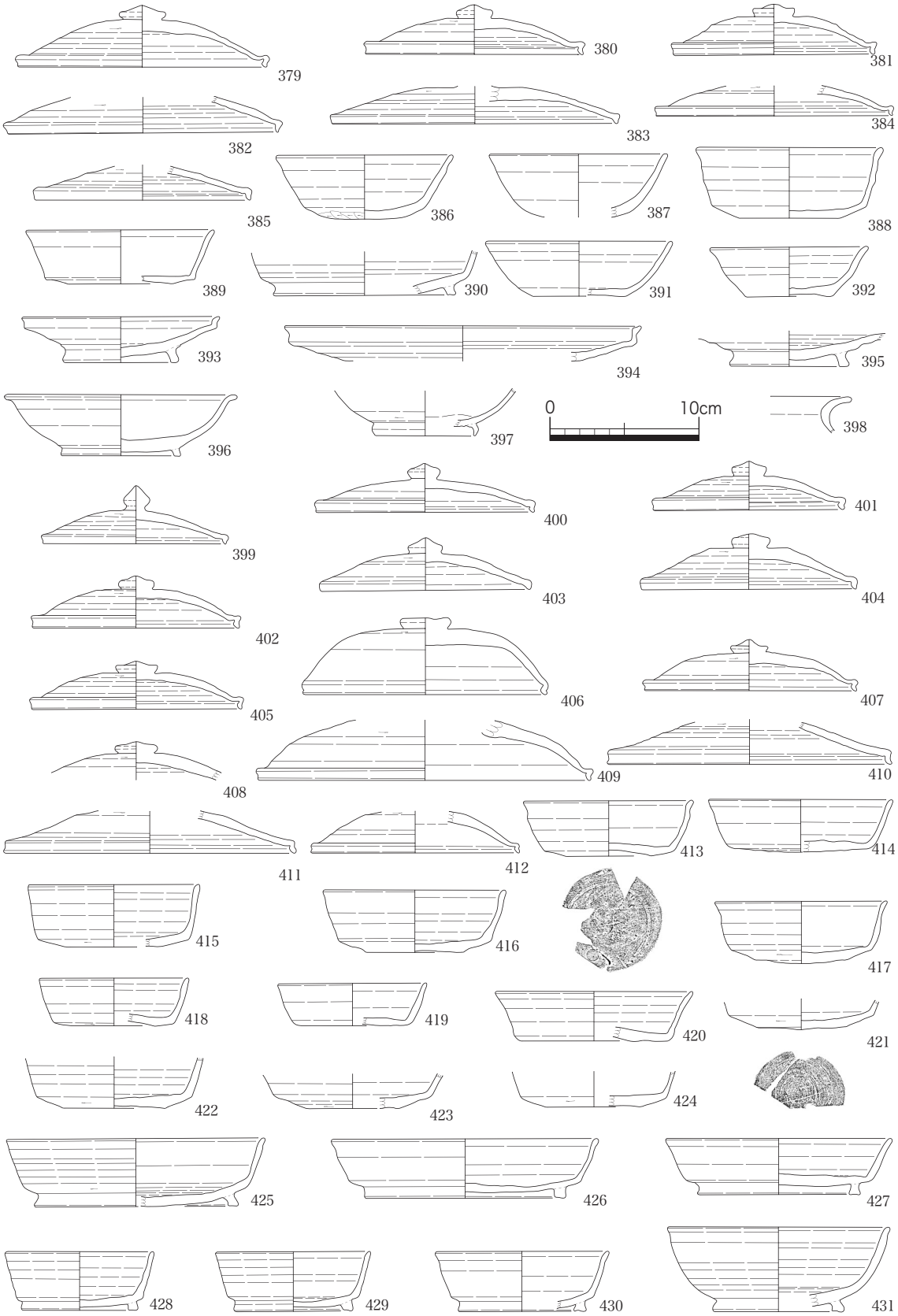


図 31　出土遺物実測図 11

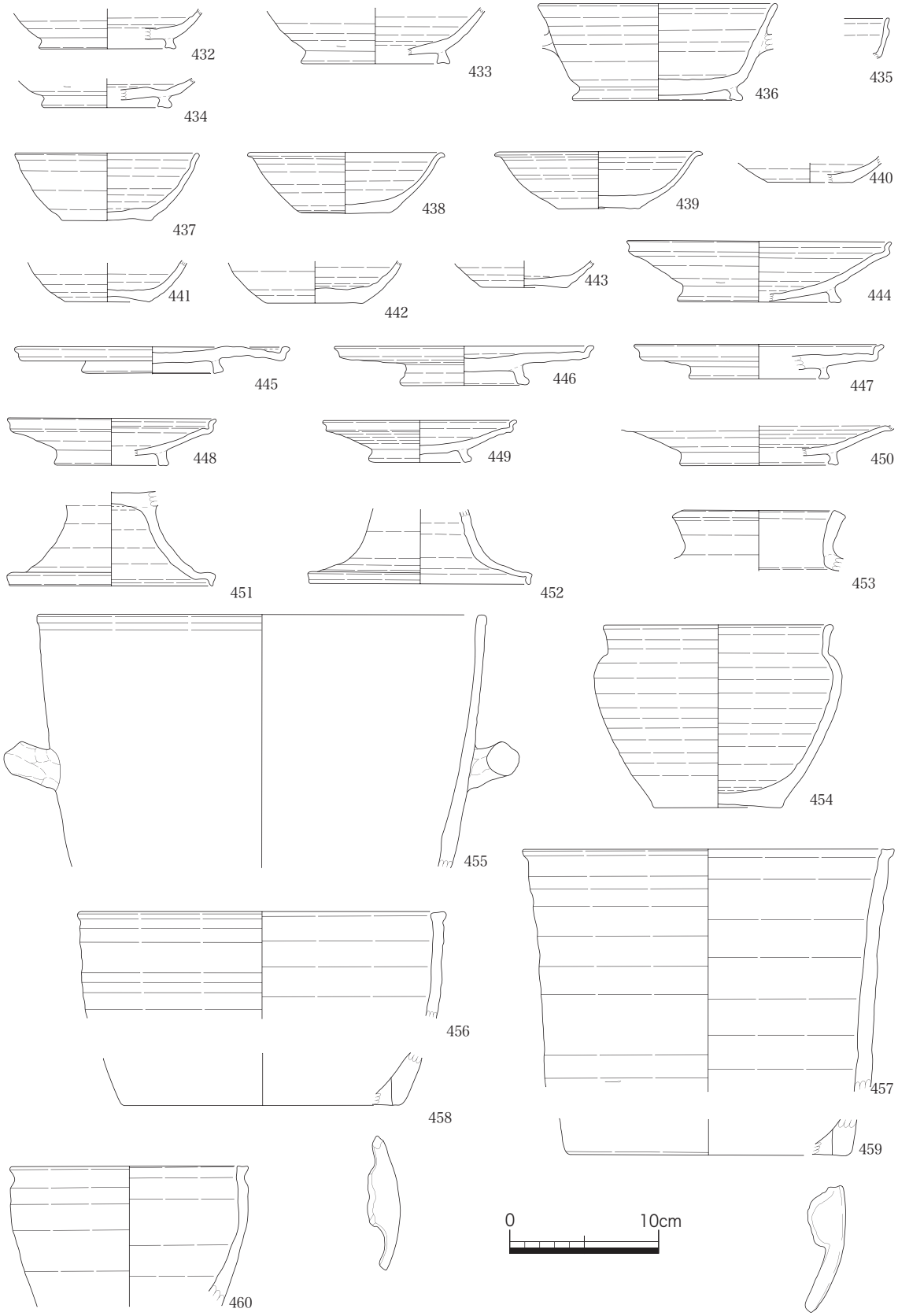


図 32　出土遺物実測図 12

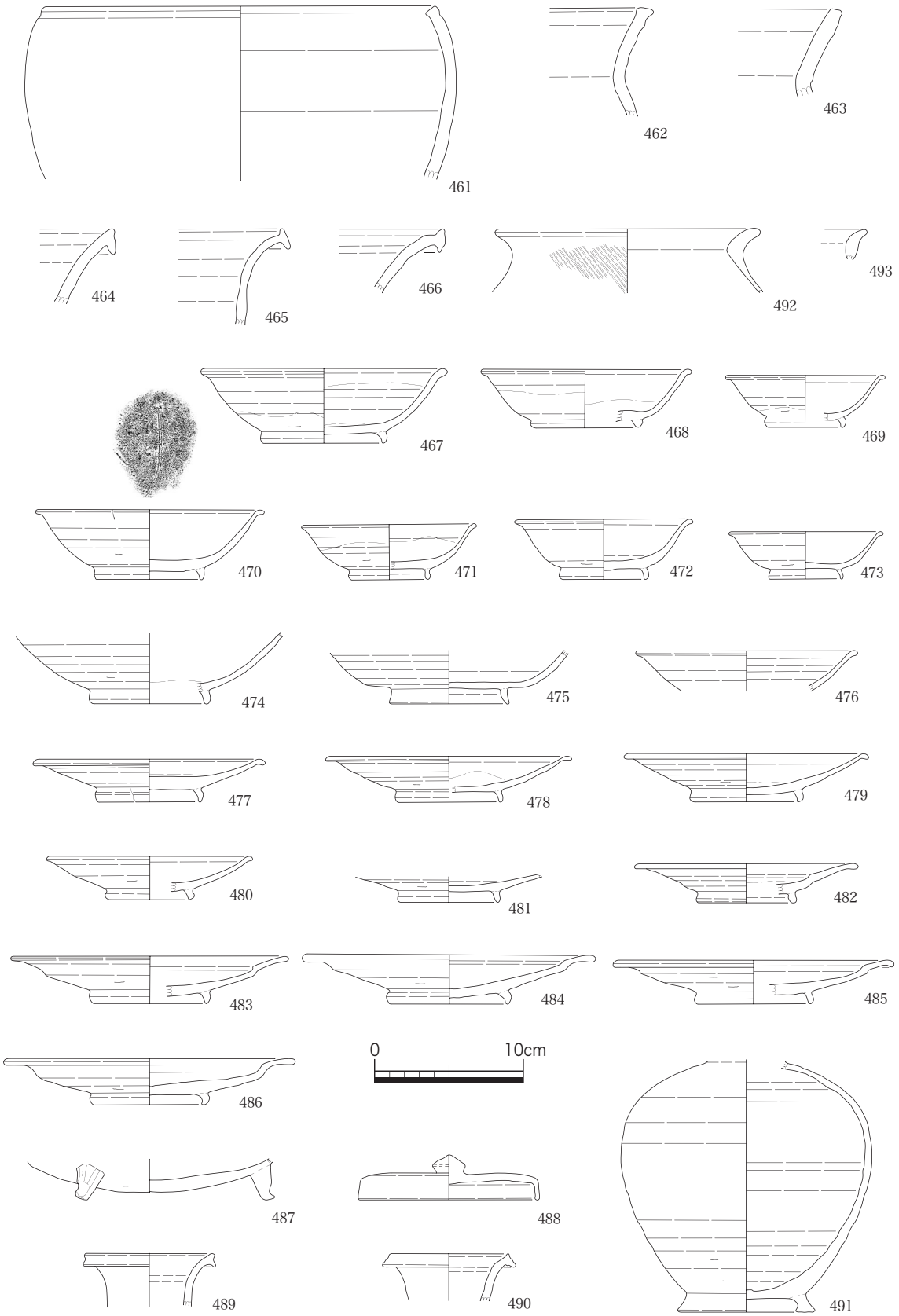


図 33　出土遺物実測図 13

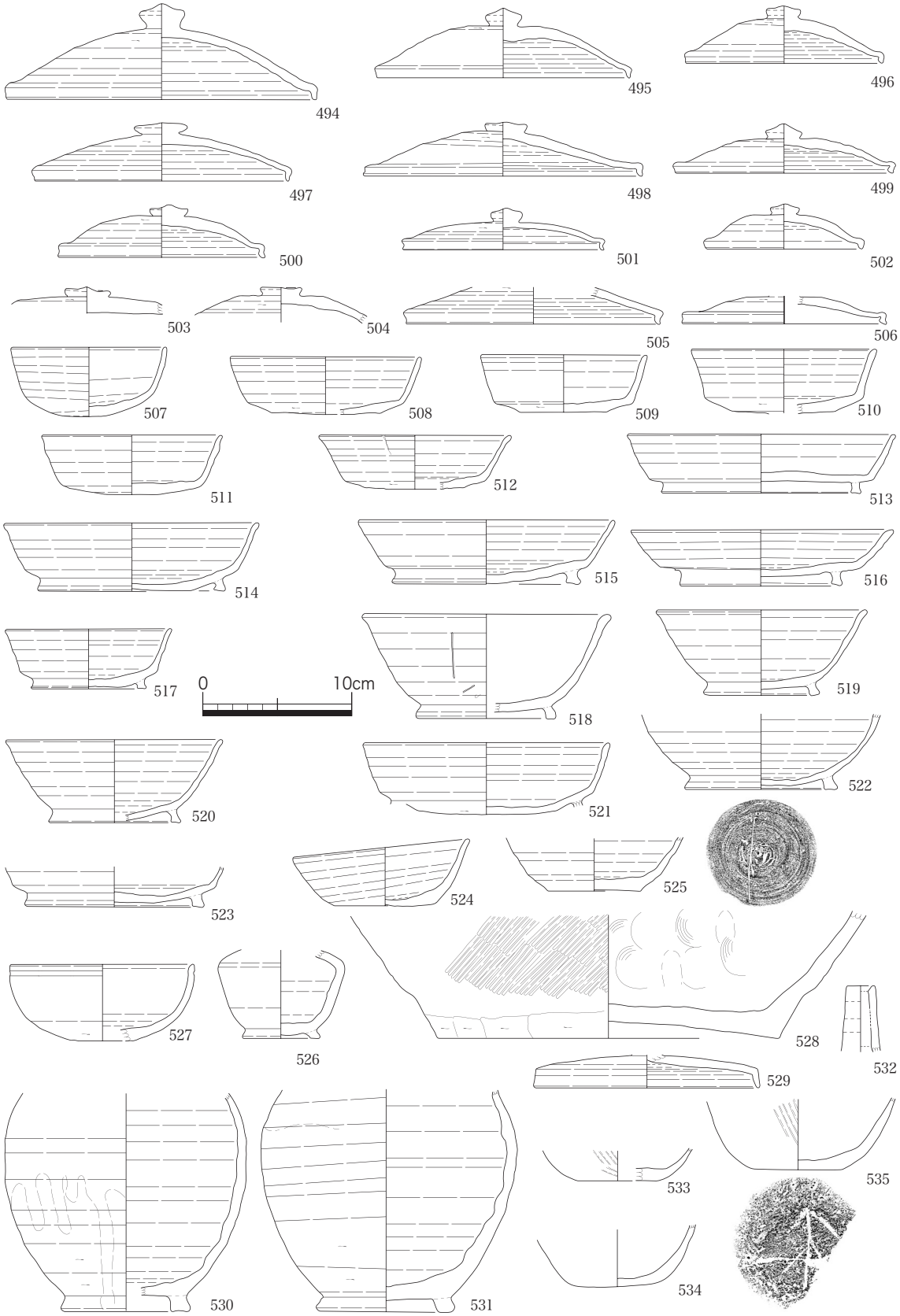


図 34　出土遺物実測図 14

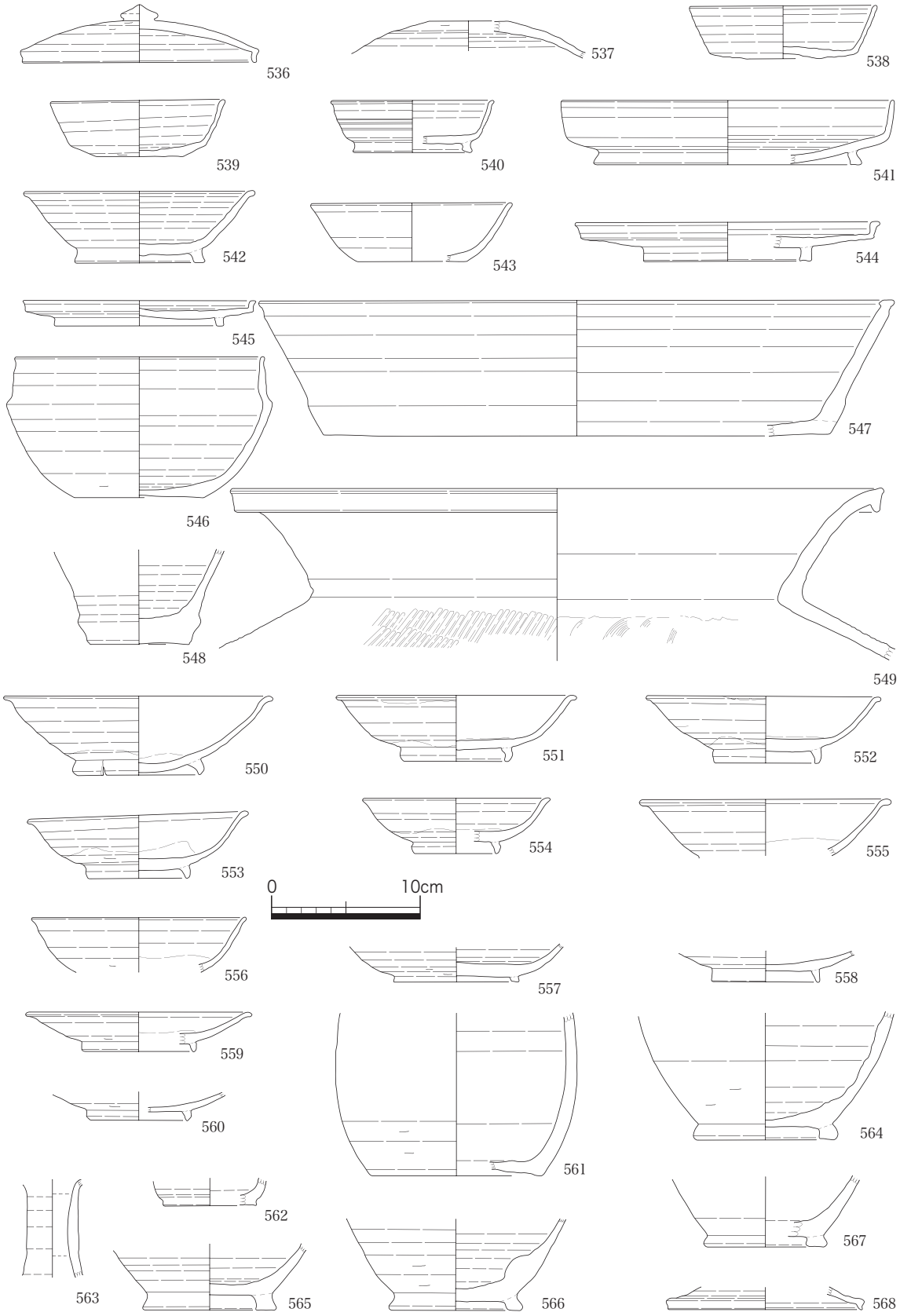


図 35　出土遺物実測図 15

SD12
（図 35 － 536 ～ 567）

536 ～ 549 は須恵器。536・537 は蓋。536 は釦形の鈕が付く。540 ～ 542 は有台杯。540 は小振り、541 は大振りとなる。544・545 は有台盤。544 はやや大振りで、545 は小振りとなる。546･547 は鉢。546 はバケツ状の体部に、屈曲して直立する口縁部がつく。547 はたらい状で平底。内外面に黄土塗布。548 は陶臼で小振りとなる。内底部は使用痕大。549 は甕。口径の割に頸部が短い。内外面に黄土を塗布する。

550 ～ 567 は灰釉陶器。550 ～ 557 は椀。557 が角高台のほかは三日月高台が付く。559・560 は平皿。いずれも三日月高台。562 は小瓶、563 は水瓶もしくは浄瓶。564 ～ 567 は長頸瓶の底部か。

時期は折戸 10 号窯式～黒笹 90 号窯式を中心とする。

SD17
（図 35 － 568）

568 は須恵器の蓋で鈕を欠く。時期は折戸 10 号窯式に属する。

SU01
（図 36 ～ 39 － 569 ～ 700）

569 ～ 655 は須恵器。569 ～ 588 は蓋。569 ～ 584 は鈕が釦形となる。587 は大振りとなる。580 は天井部内面がわずかに摩滅する。蓋として図示しているが、転用硯であろうか。589 ～ 603 は無台杯。603 は大振りとなる。598 の外底部にはヘラ記号『｜』が確認できる。604 ～ 606 は有台杯。604 は大きくひずむ。606 は体部の形状が灰釉椀と類似する。607 ～ 617 は椀。612 は腰部がにぶく屈曲し、無台杯とすべきかもしれない。619 ～ 629 は有台盤。619 ～ 621・626 は大振り、625 は小振りとなる。632 は横瓶。やや太い頸部で、端部に面を持つ。633 ～ 635 は鉢。635 は小振りで体部は丸みを帯びる。平底で体部外面の最下段に手持ちヘラ削りを施す。636 ～ 641 は陶臼。このうち 636 ～ 638 には指押さえによる注口が付く。637・639 は外面に黄土を塗布、641 は底部が薄い。636・641 は内底部に使用痕大。642・643 はたらい状の鉢。642 は口縁部に注口が付く。いずれも黄土塗布。645 ～ 648 は甑。648 は底部に高台を持つ。把手は 645 が舌状、647 が環状である。なお、645・647 は外面に沈線を施すが、647 はさらに線刻も確認できる。650 ～ 655 は甕。650 は頸部外面に縦方向のナデを等間隔に並べて文様状となす。内外面に黄土を塗布。

656 ～ 694 は灰釉陶器。656 ～ 665 は椀。高台の形状は 656 が角高台、657 ～ 665 は三日月高台となる。666 は大平鉢。667・668 は平皿。667 は三日月高台、668 は角高台となる。669 は広縁段皿、670・671 は狭縁段皿。671 は段部が高い。いずれも三日月高台が付く。672・673 は蓋で、673 は器高が高く双耳瓶の蓋か。674・675 は長頸瓶。675 は細く長い頸部となる。三段成形による。676 ～ 688 も長頸瓶か。677・678 は二段成形となる。686 は細身となり、浄瓶もしくは水瓶かもしれない。687 は外底部にヘラ記号『｜』を施す。679・680・681・684・686・687 は黄土塗布が確認できる。689 は環状手付瓶。体部はソロバン玉状で、環状把手は基部を残して欠損する。外面は黄土塗布か。690 は手付瓶で把手を欠く。器高が高く肩部の張りはわずかとなる。外面には灰釉をハケ塗りする。691 ～ 693 は平瓶。いずれも外面に黄土塗布。694 は双耳瓶の体部片となる。

時期は折戸 10 号窯式～黒笹 90 号窯式に属する。

695 ～ 700 は土師器で、いずれも濃尾系甕となる。

SU02
（図 40・41 － 701 ～ 781）

701 ～ 745 は須恵器。701 ～ 708 は蓋。701・702 は釦形の鈕が付き、706 ～ 708 は無鈕となる。701 はひどくゆがむ。702 は小振り。709 ～ 720 は無台杯。712 は腰部で屈曲しない形状。721 ～ 725 は有台杯。723 はひどくゆがむ。724 は器高がやや高い。

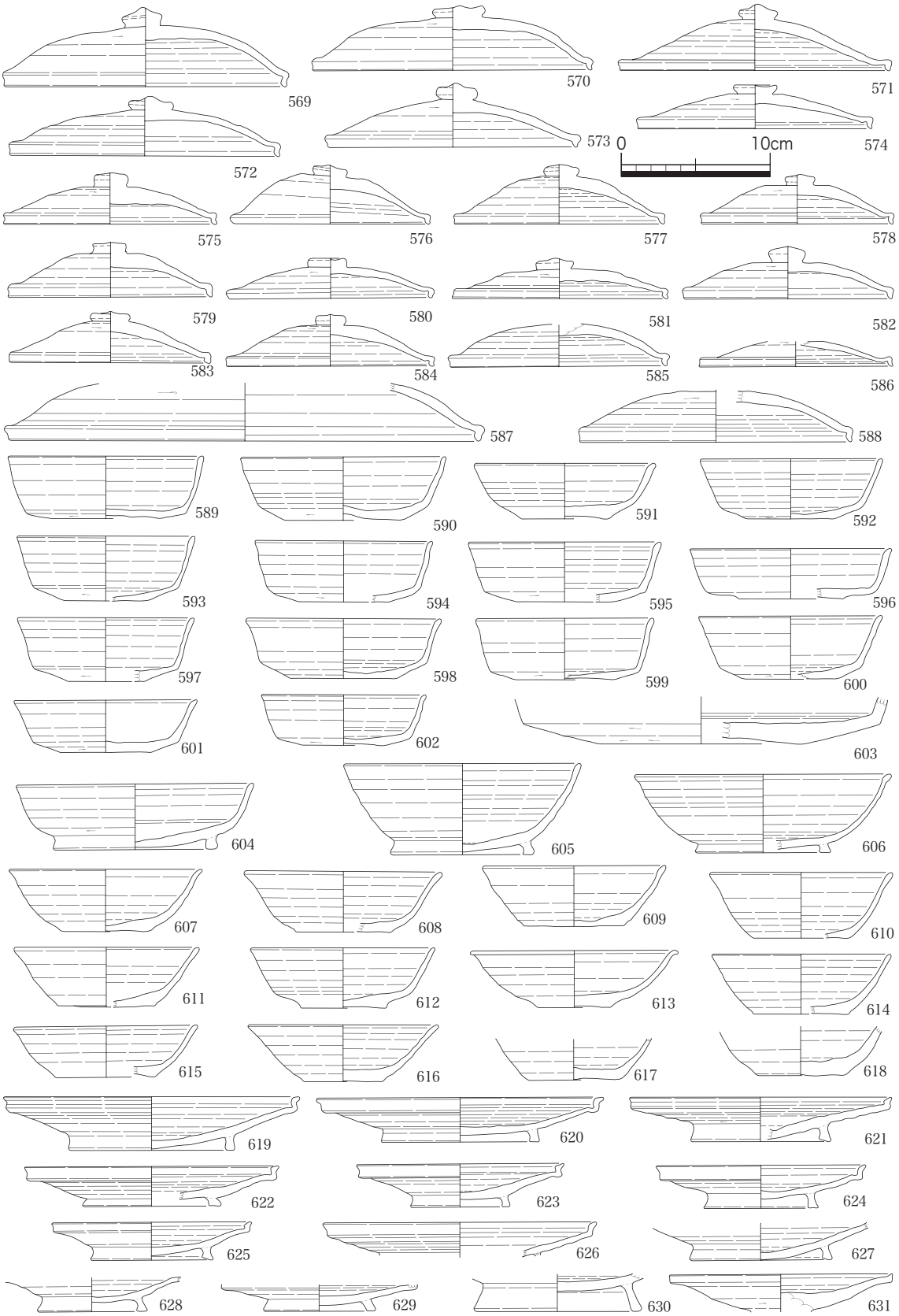


図 36　出土遺物実測図 16

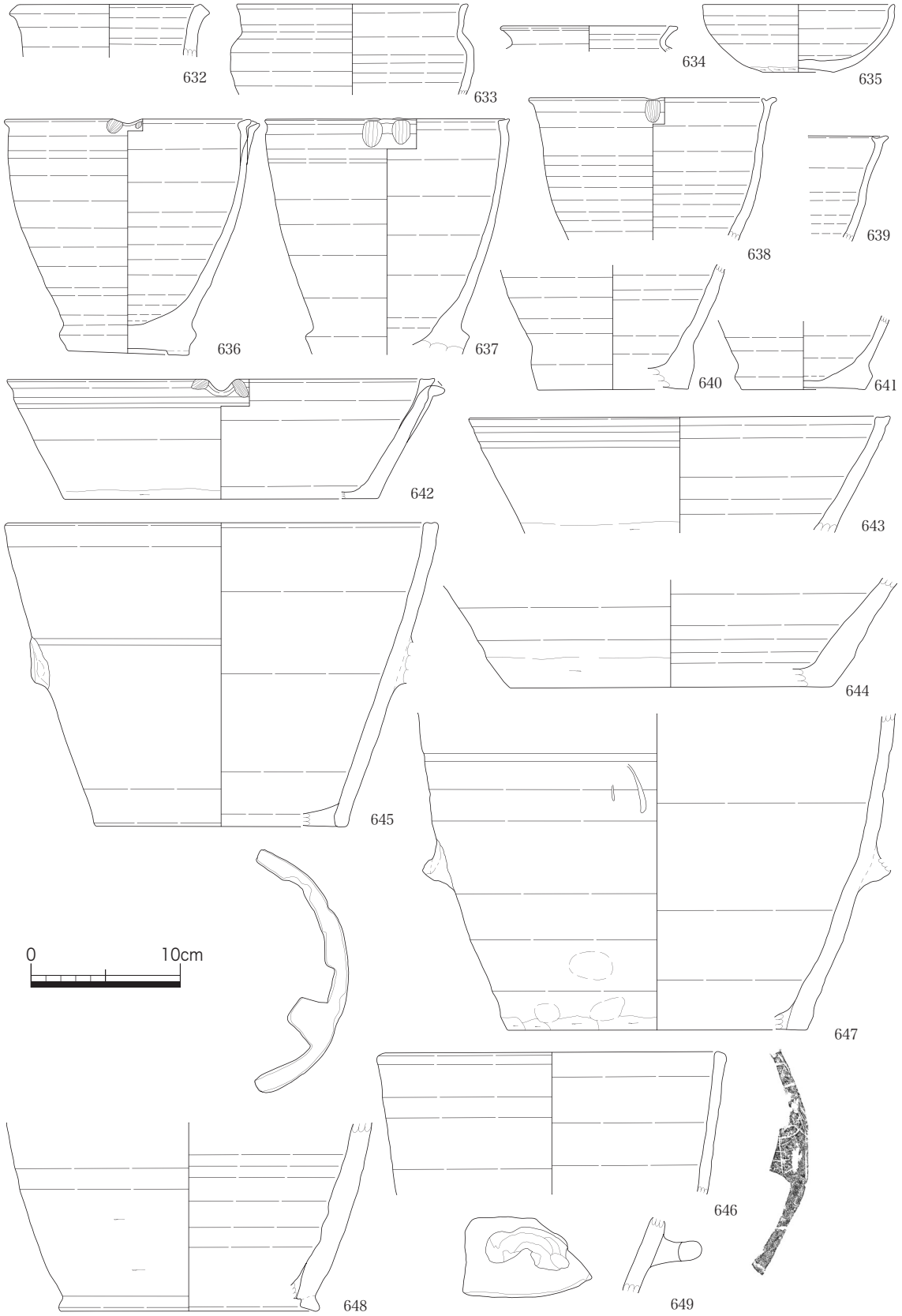


図 37　出土遺物実測図 17

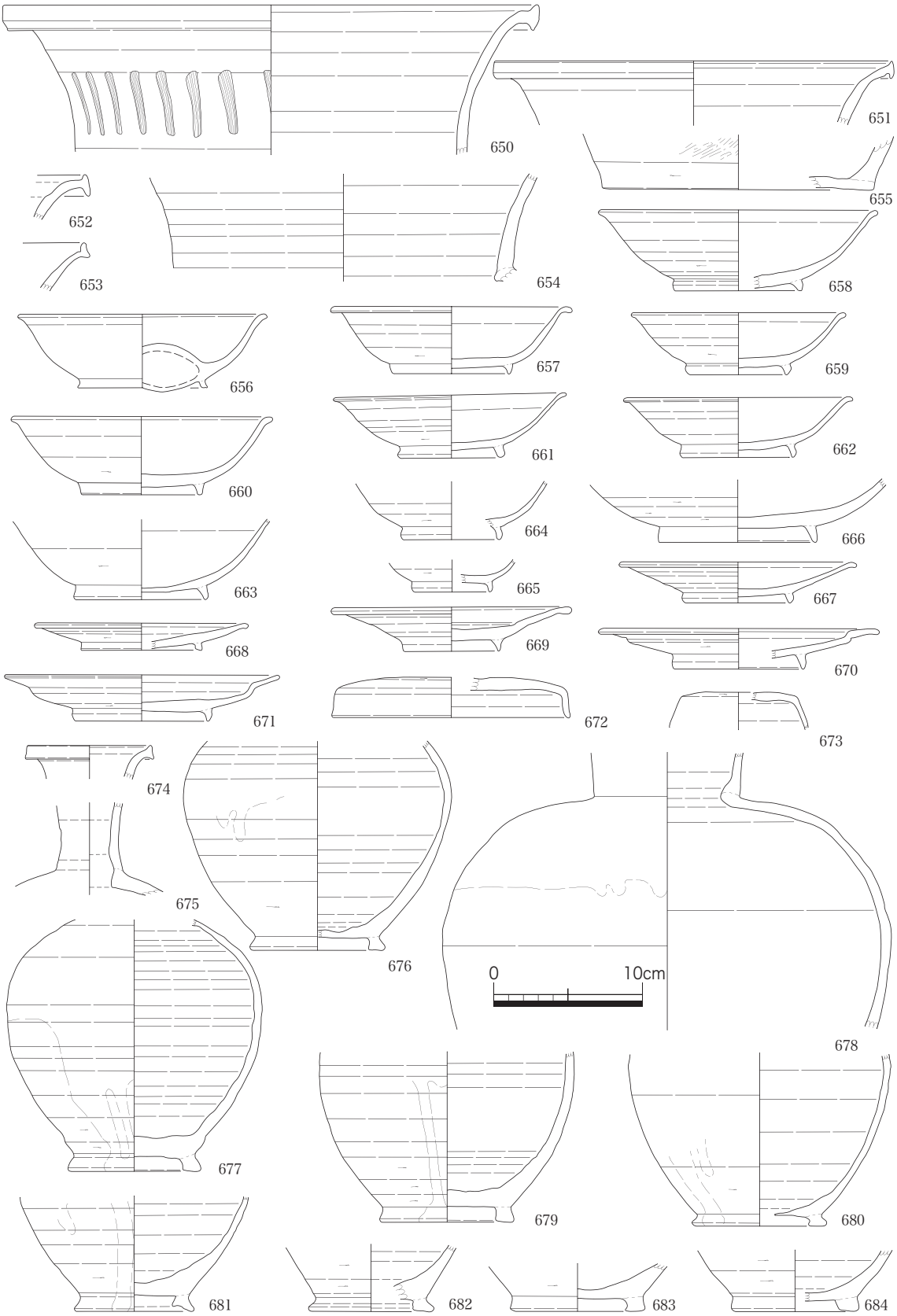


図 38　出土遺物実測図 18

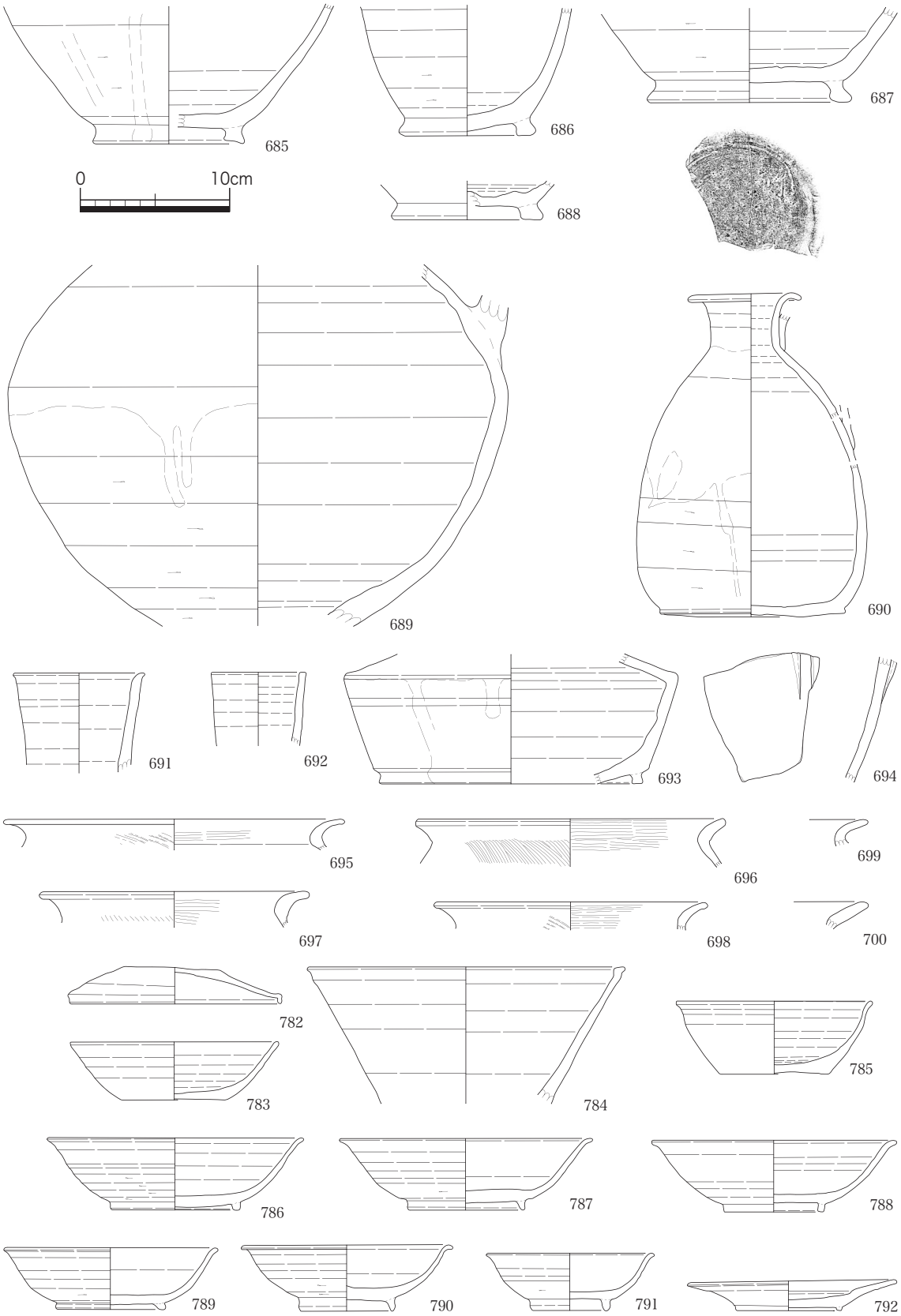


図 39　出土遺物実測図 19

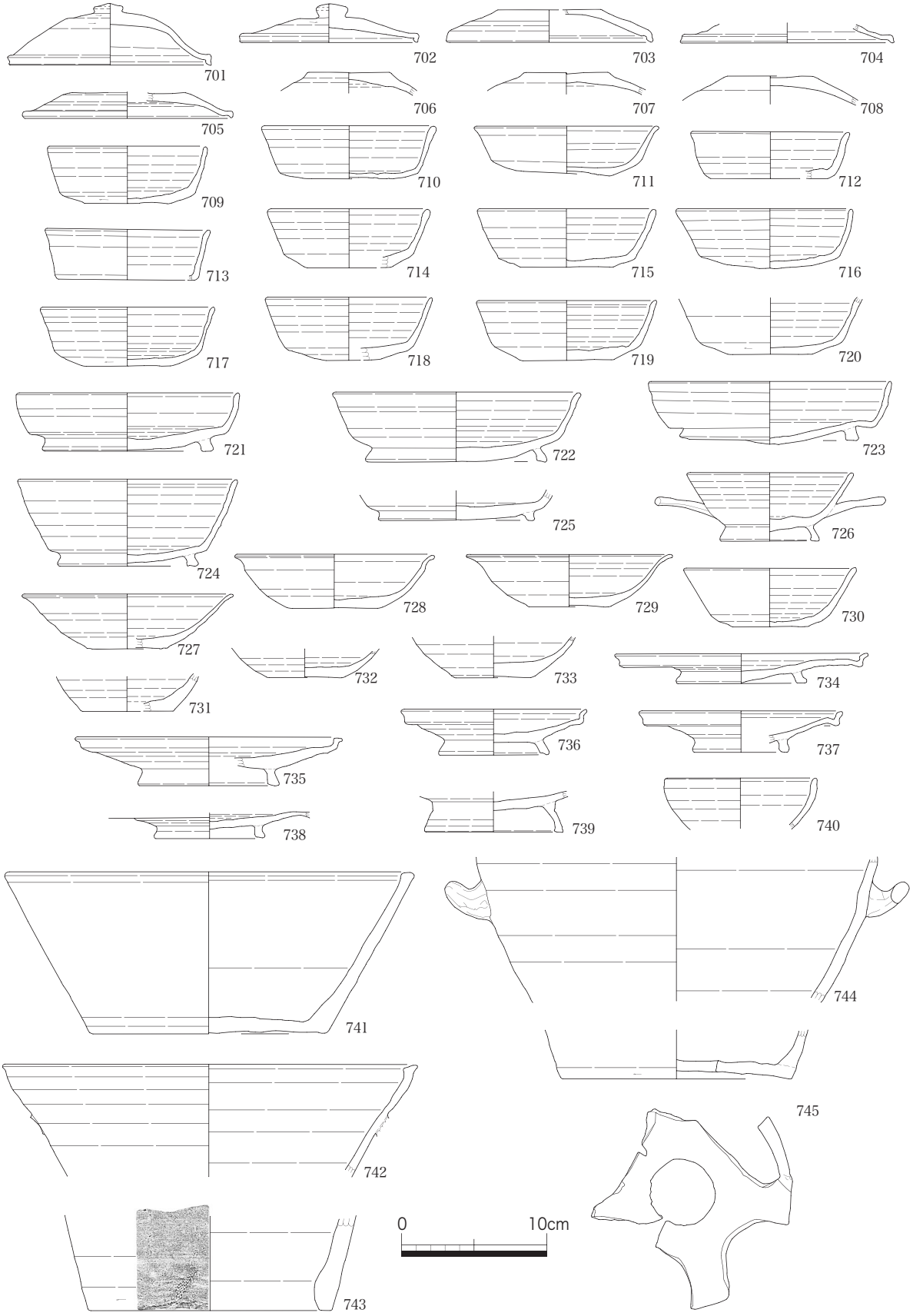


図 40　出土遺物実測図 20

杯部は外に開いて立ち上がる。726 は双耳杯。耳部は長く斜め上方に伸びる。高台はやや高い。727 ～ 733 は椀。727 ～ 729 は器高が低く扁平となる。734 ～ 738 は有台盤。736・737 は小振りとなる。734 は外底部にヘラ記号『∨』を施す。739 は脚台盤。脚は中程でにぶく屈曲する。740 は小振りの鉢とした。底部を欠くが、体部は丸みを帯び口縁部はほぼ直立する。741・742 はたらい状の鉢。口縁部は肥厚して上部に面を持つ。744 は鉢の体部片で、外面に舌状の把手が付く。743・745 は甑。743 は外面に布の圧痕が観察できる。

746 ～ 778 は灰釉陶器。746 ～ 763 は椀。高台の形状は、746・747・751・752・756・758 が角高台、748 ～ 750・753 ～ 755・757・759 ～ 763 が三日月高台となる。747 は形状や焼成状況がわずかに異なり、須恵器とすべきかもしれない。764 ～ 769 は平皿。いずれも三日月高台となる。770・771 は広縁段皿で、770 は器壁が厚い。いずれも角高台となる。772・773 は狭縁段皿。器高が高い。いずれも三日月高台となる。774・775 は大平鉢。774 は角高台を持つ。778 は長頸瓶の頸部片で、小振りである。

時期は折戸 10 号窯式～黒笹 90 号窯式を中心とするが、これを遡る資料も含まれる。

779 ～ 781 は土師器甕の口縁部。779・780 は濃尾系で、781 は三河型。779 は小型品となる。

SU03
（図 39 － 782 ～ 792）

土器集積遺構としては小規模で資料数が乏しい。782 ～ 785 は須恵器。782 は蓋で無鈕となる。783 は椀で、扁平である。784 は陶臼か。口縁部が大きく開き、大口径となる。

786 ～ 792 は灰釉陶器。786 ～ 791 は椀。高台の形状は 786 ～ 789 が角高台、790・791 が三日月高台となる。792 は広縁段皿。高台は角高台となる。

時期は黒笹 14 号窯式～黒笹 90 号窯式に属する。

SU04
（図 41・42 － 793 ～ 826）

793 ～ 821 は須恵器。793 ～ 797 は蓋。793 は釦形の鈕が付く。794 は無鈕。端部に面を持ち、盤とすべきかもしれない。798 ～ 802 は無台杯。803 ～ 808 は有台杯。809・810 は椀。809 は底形がやや広い。811 は双耳杯。耳部は基部を残して欠損する。812 ～ 817 は有台盤。818・819 は脚台盤。818 は部分的にひどくゆがむ。819 は杯部を意図的に打ち欠いているのかもしれない。820 は陶臼。器壁は薄い。底部の稜は明瞭となる。外面に黄土を塗布。内底部に使用痕大。821 は甕で、口径の割に頸部が短い。内外面に黄土を塗布か。

822 ～ 826 は灰釉陶器。822 は椀。角高台が付く。823 は長頸瓶。頸部は太く口縁部付近で外反する。824 ～ 826 も長頸瓶か。824・825 の頸部は二段成形、825・826 は黄土を塗布する。

時期は黒笹 14 号窯式～黒笹 90 号窯式に属するが、これを遡る資料も含まれる。

SU05
（図 42 ～ 44 － 827 ～ 925）

827 ～ 908 は須恵器。827 ～ 848 は蓋。827 は宝珠形の鈕、828 ～ 845・847 は釦形の鈕が付く。846 は無鈕となるが、無高台の盤であるかもしれない。827 は大振りで器高が高い。830 は蓋として図示するが、天井部内面が摩滅し、転用硯であろう。849 ～ 866 は無台杯。854 は全面黄土塗布か。858 は腰部に他の製品が釉着するが、上面は研磨され凸凹は除かれている。867 ～ 874 は有台杯。867・869・871 は器高が高く、870 は扁平となる。872 は口縁部付近で短かく屈曲する。875 ～ 886 は椀。877 は底部がやや強く突出する。887 ～ 901 は有台盤。895 は底部中央に赤色の付着物が確認できる。903 ～

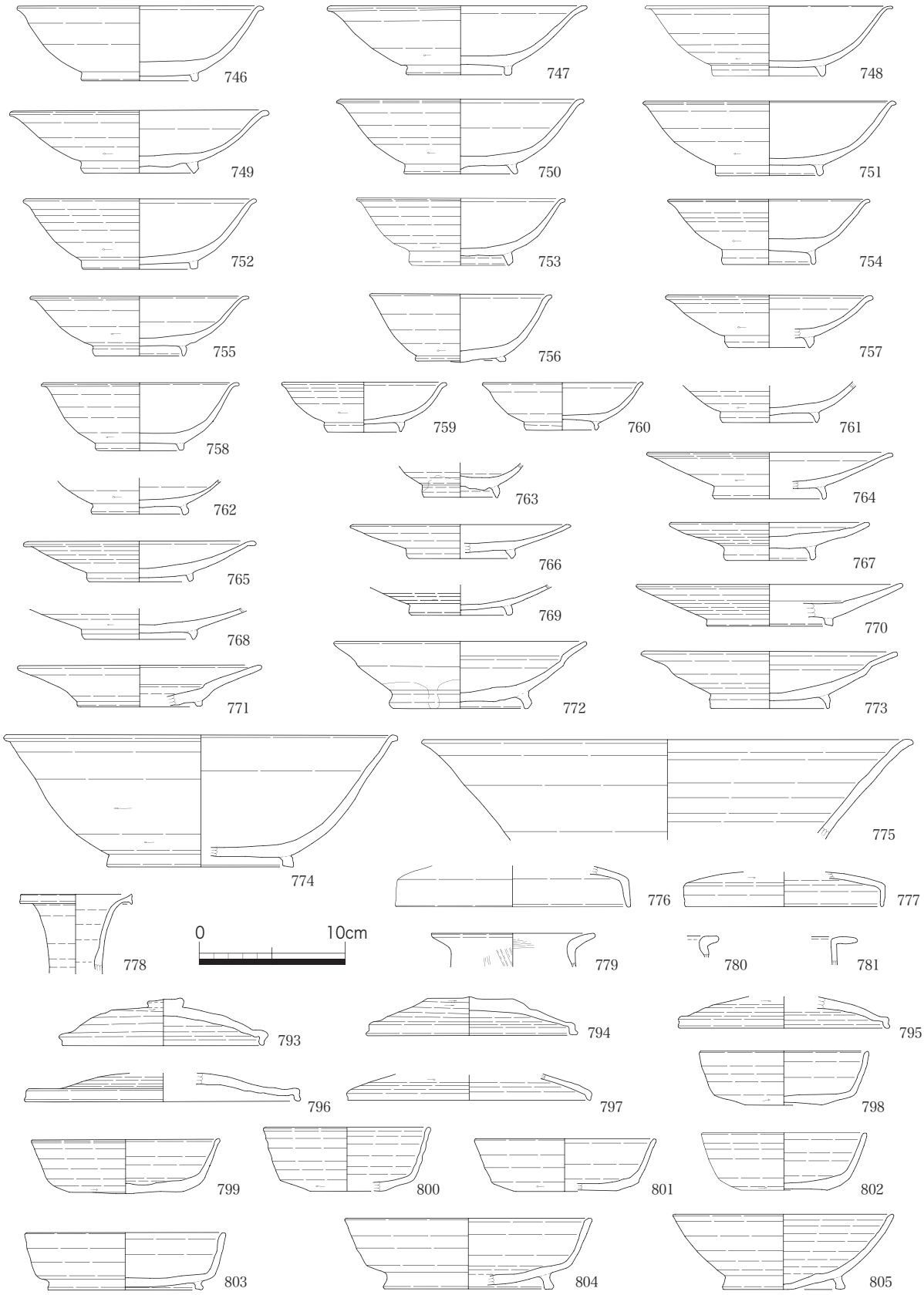


図41　出土遺物実測図21

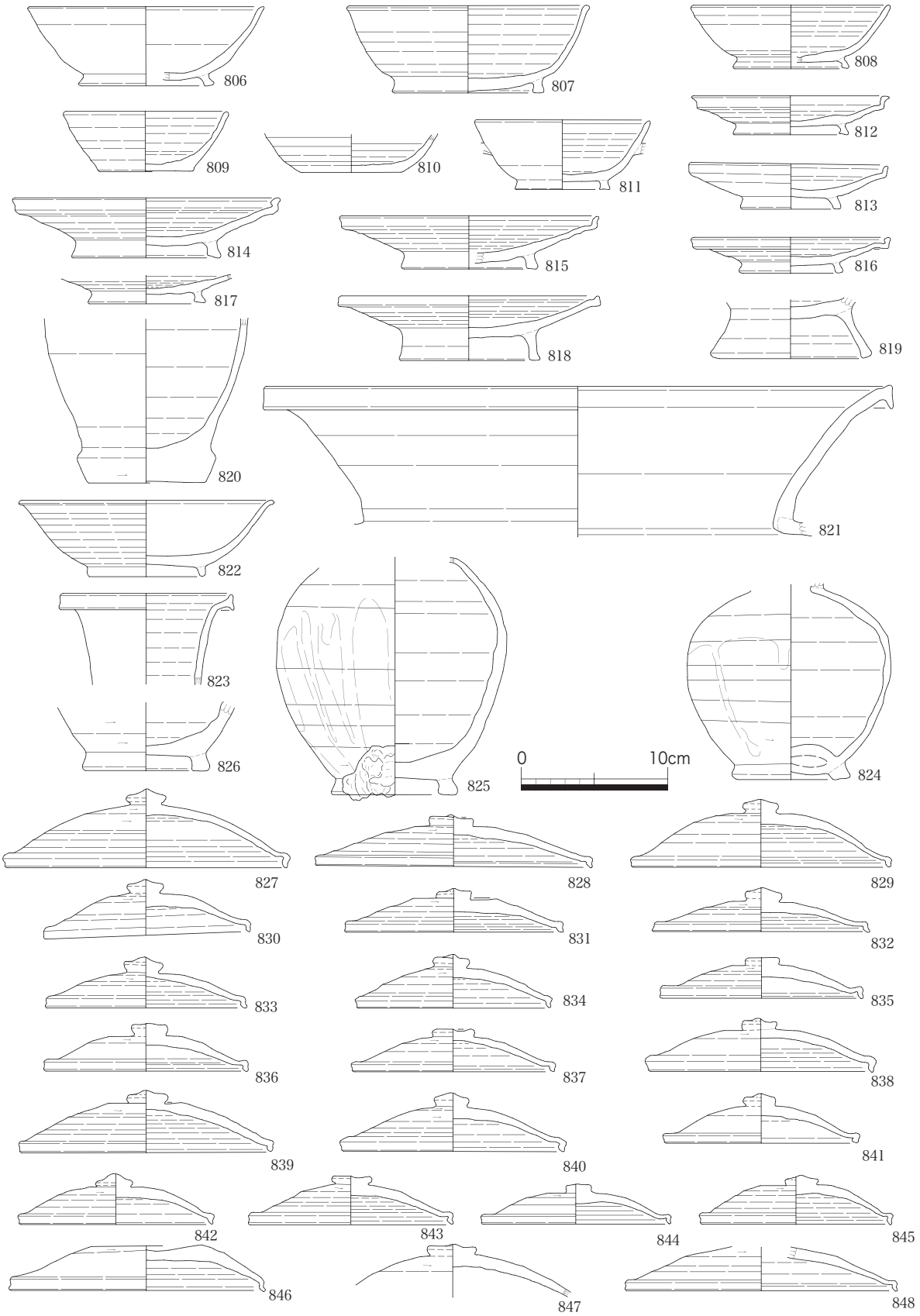


図 42　出土遺物実測図 22

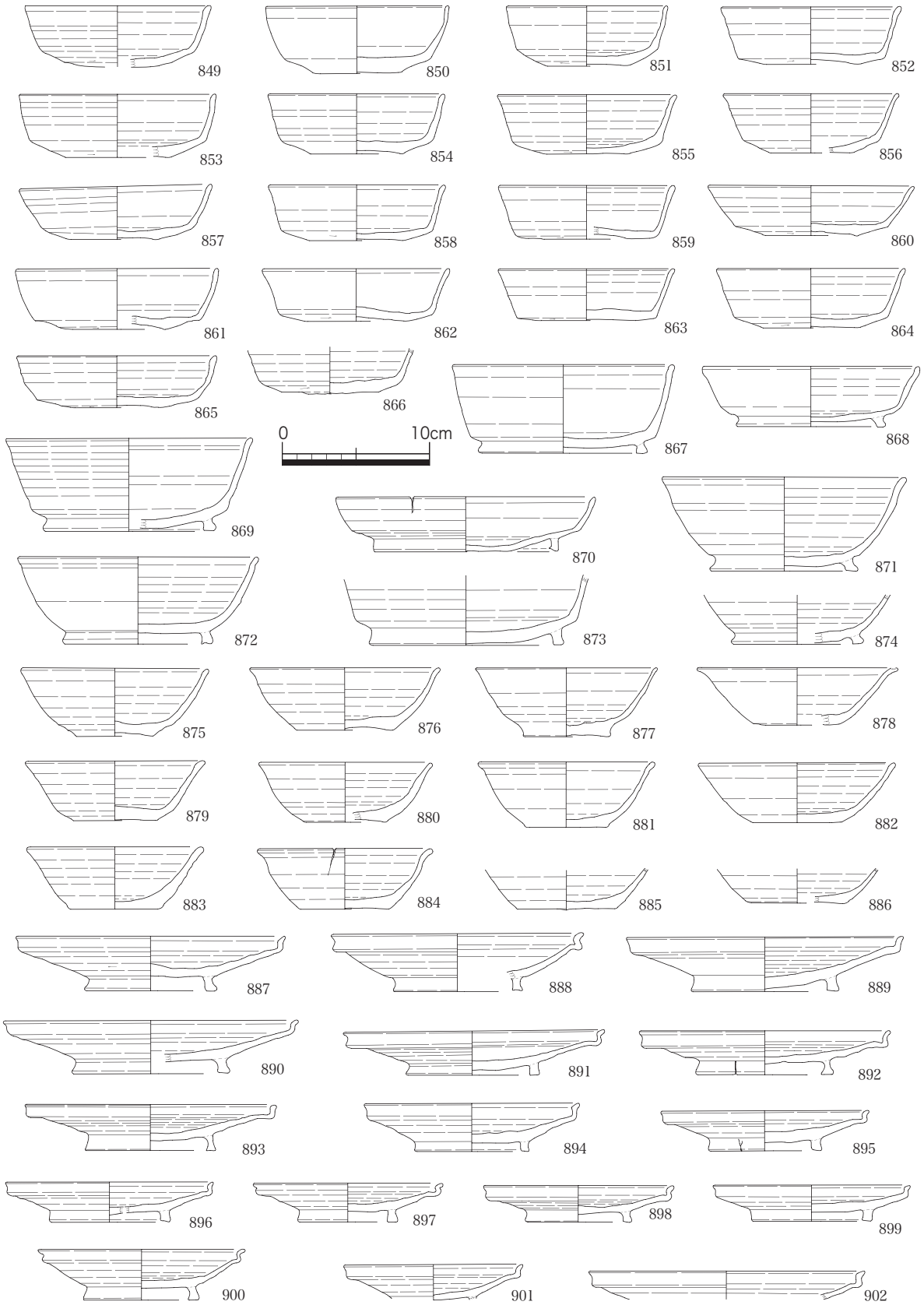


図 43　出土遺物実測図 23

905 は脚付盤。903 は大振りで、脚部も太い。スカシは四方向に配されるが、一部はヘラによる切り込みが成されるのみで、スカシとして抜き取られてはいない。杯部の底面には貫通する十字の切り込みが施される。906 は鉢で、太鼓状の体部。環状把手が付く。907 は甑。908 は甕。外面にクシによる直線文と波状文を重ねる。内外面に黄土塗布か。

909 ～ 923 は灰釉陶器。909・910 は椀で、いずれもシャープな作り。911 ～ 913 は長頸瓶の頸部片で、911 は頸部がやや太い。913 は口径が広く、広口瓶とすべきかもしれない。914 ～ 923 も長頸瓶か。917 は大きくひずみ、底径は広い。

時期は折戸 10 号窯式が中心だが、黒笹 14 号窯式までの資料も含まれている。

924・925 は土師器の濃尾系甕。924 は口縁部片、925 は底部片である。

SU06
（図 45 ～ 48 － 926 ～ 1063）

926 ～ 1047 は須恵器。926 ～ 950 は蓋で、926・927・943・944 は大振り、937 は小振りとなる。926 ～ 942 は釦形の鈕が付く。940 ～ 942 の天井部内面にはヘラ記号『｜』が確認できる。942 は蓋として図示するが、天井部内面が摩滅し、転用硯であろう。951 ～ 984 は無台杯。982・983 は底部が上げ底状に大きくひずむが、本来は平底ではなく、腰部で屈曲する形状となる。985 ～ 999 は有台杯。987 は扁平で、腰部の屈曲もにぶい。990 ～ 993 は大振りで深手、994 は小振りだが口径に比して、器高が高い。985・986・989 は底部が高台より突出する。995 ～ 999 は腰部に丸みを持つ形状となる。966 には『｜』・973 には『＋』のヘラ記号が外底部に確認できる。1000 は双耳杯。1001 ～ 1018 は椀で、器壁がやや厚く、体部下方の屈曲と口縁部の外反が観察できないものが多い。1017・1018 の外底部にはヘラ記号『｜』が確認できる。1019 ～ 1032 は有台盤。1031 は外面に黄土塗布か。1027・1030 の外底部にはヘラ記号『｜』が確認できるが、1030 には内面にも線刻が確認できる。1033 は脚付盤の杯部片か。大振りとなる。1035 ～ 1037 は鉢。肩部で屈曲し口縁部が直立する形状となる。1035・1037 は平底。1035 は口径が狭く壺に近似するが、1036・1037 は口径が広く扁平となる。1038 ～ 1040 は甑。1038 は体部がバケツ状を呈する。外面の中央には環状把手が付き、下端には幅 15mm の突帯を巡らす。口縁部は、直下がややくびれ、上面は肥厚してフラットとなる。1041 ～ 1043 は陶臼。1041・1043 は内底部に使用痕が大となる。1043 は外底部に、直径 5mm の棒状工具による刺突が不規則に施される。貫通せず、中程でとまっている。1044・1045 はたらい状の鉢。1044 は扁平で、1045 は器高が高い。1046・1047 は甕。1046 は頸部が短い。口縁部内外面と体部外面に黄土塗布。1047 は底部片。

1048 ～ 1063 は灰釉陶器。1048・1049 は蓋で鈕を欠く。1050 は短頸壺。平底で器高が高く、細身となる。口縁部は短く直立する。1052・1053 は長頸瓶。頸部はやや長い。1054 ～ 1063 も長頸瓶か。頸部は 1055 が三段成形、1056 は二段成形となる。

時期は折戸 10 号窯式に属する。

SU07
（図 49 ～ 53 － 1064 ～ 1278）

1064 ～ 1246 は須恵器。1064 ～ 1092 は蓋。1073・1074・1078・1085・1086 は宝珠形の鈕、それ以外は釦形の鈕が付く。1064 は大振りで器高が高い。1087・1088 の天井部内面にはヘラ記号『｜』が確認できる。1079 は蓋として図示するが、天井部内面が摩滅し、転用硯であろう。1093 ～ 1144 は無台杯。1093・1094 は丸底となる。1093 はヘラ切り、1094 は外底部に手持ちヘラ削り調整を施す。1095 は大振りとなる。1141 ～ 1144 の外底部にはヘラ記号が確認でき、1141 ～ 1143 が『｜』、1144 が『＋』となる。

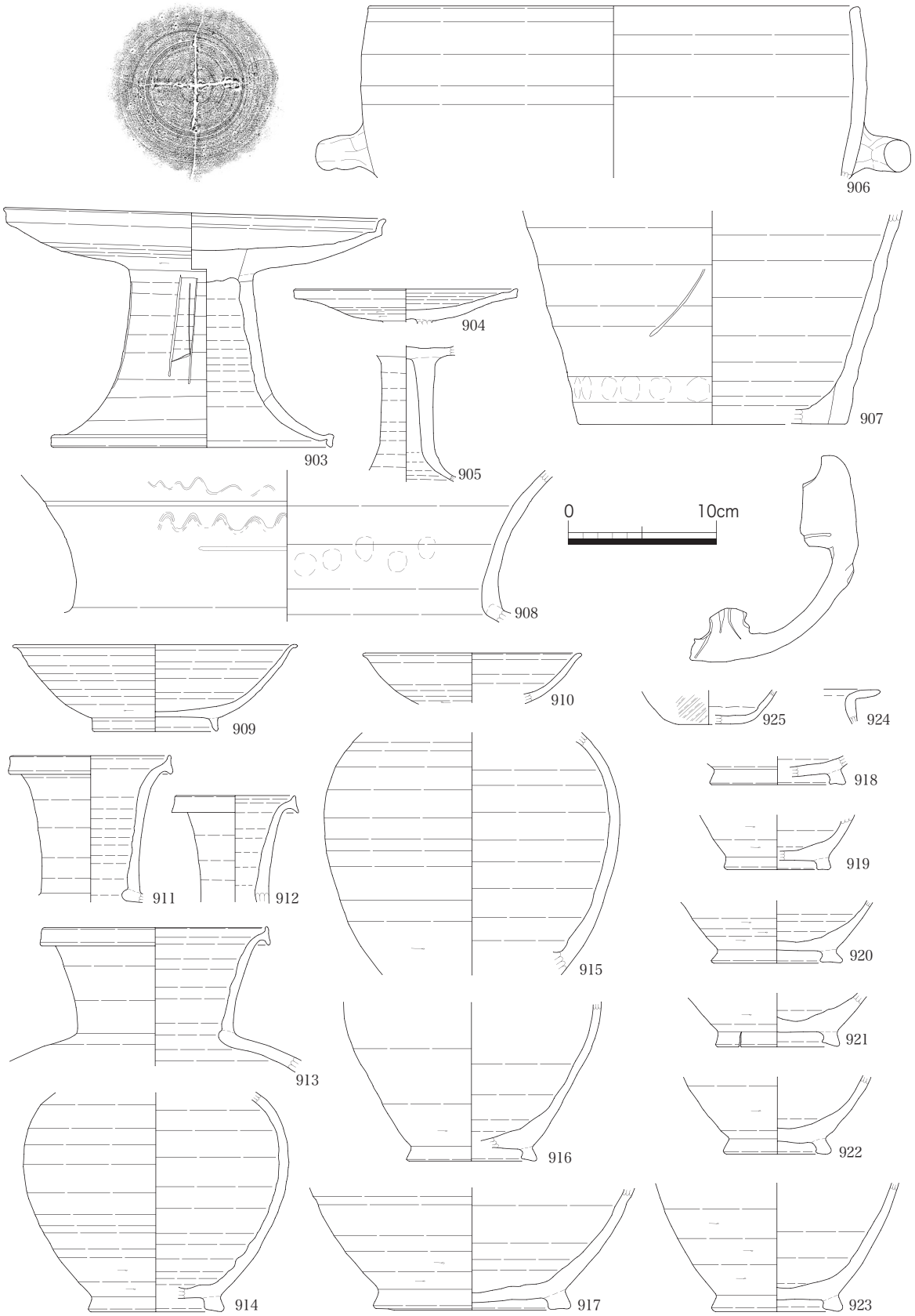


図 44　出土遺物実測図 24

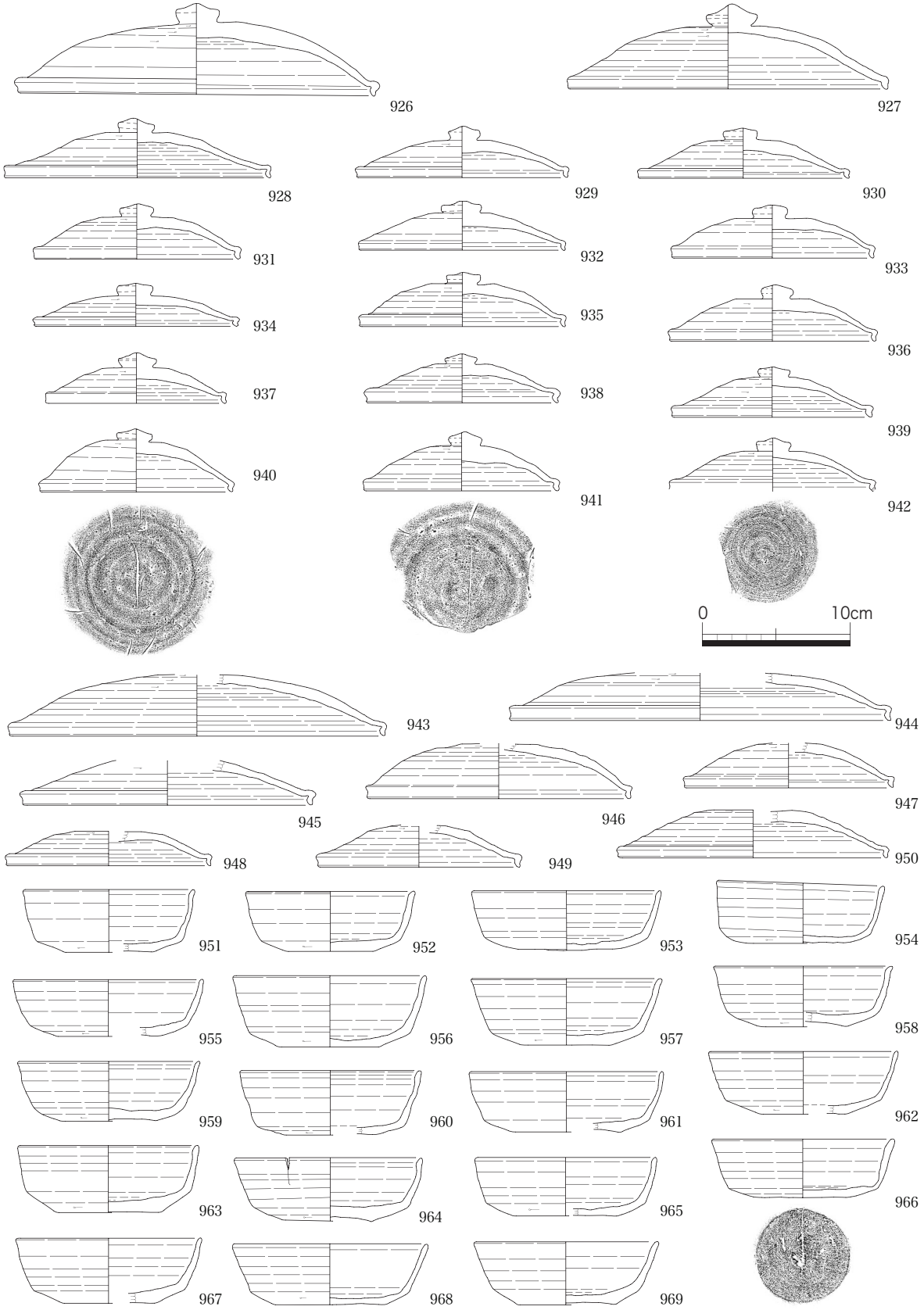


図 45　出土遺物実測図 25

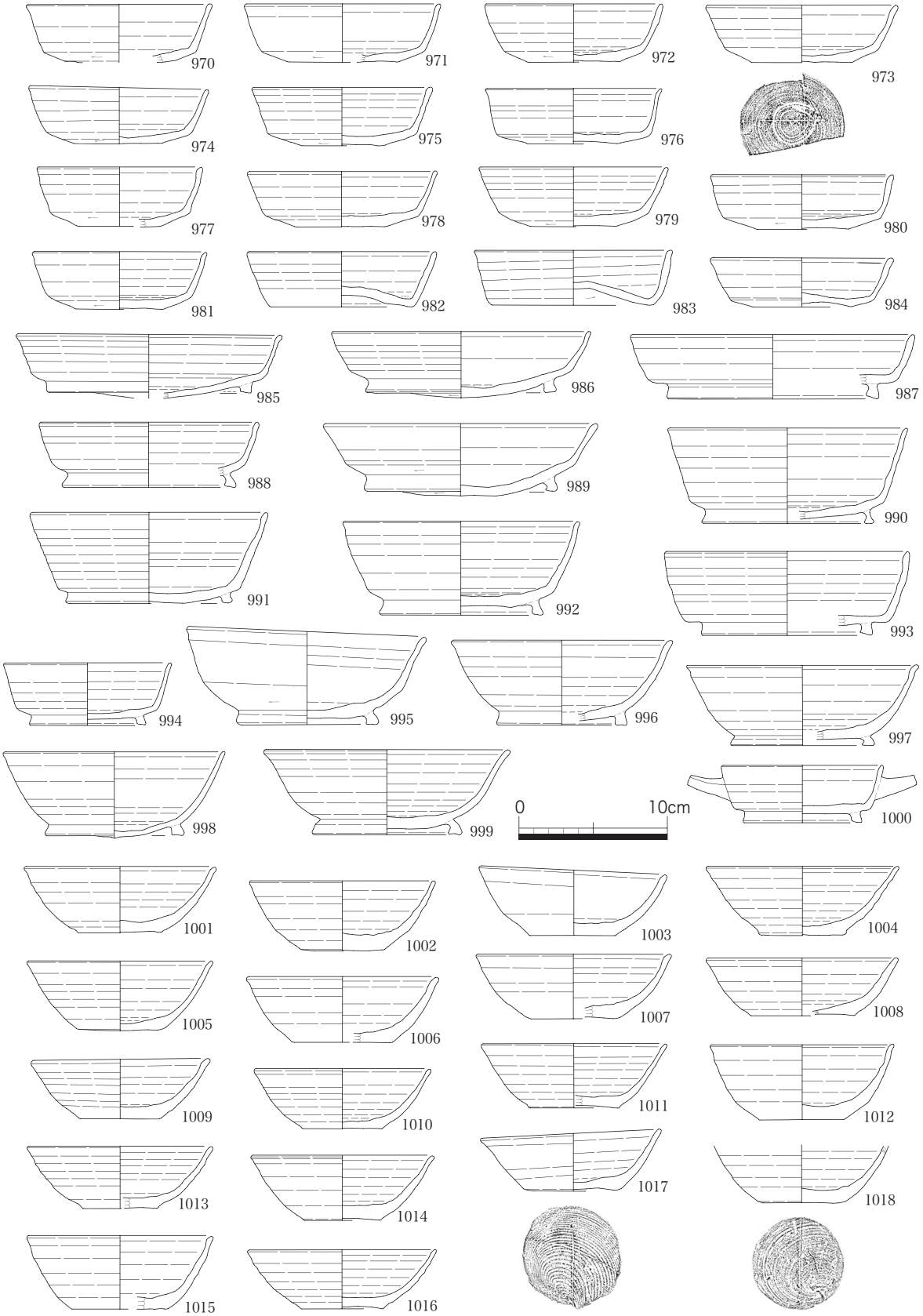


図 46　出土遺物実測図 26

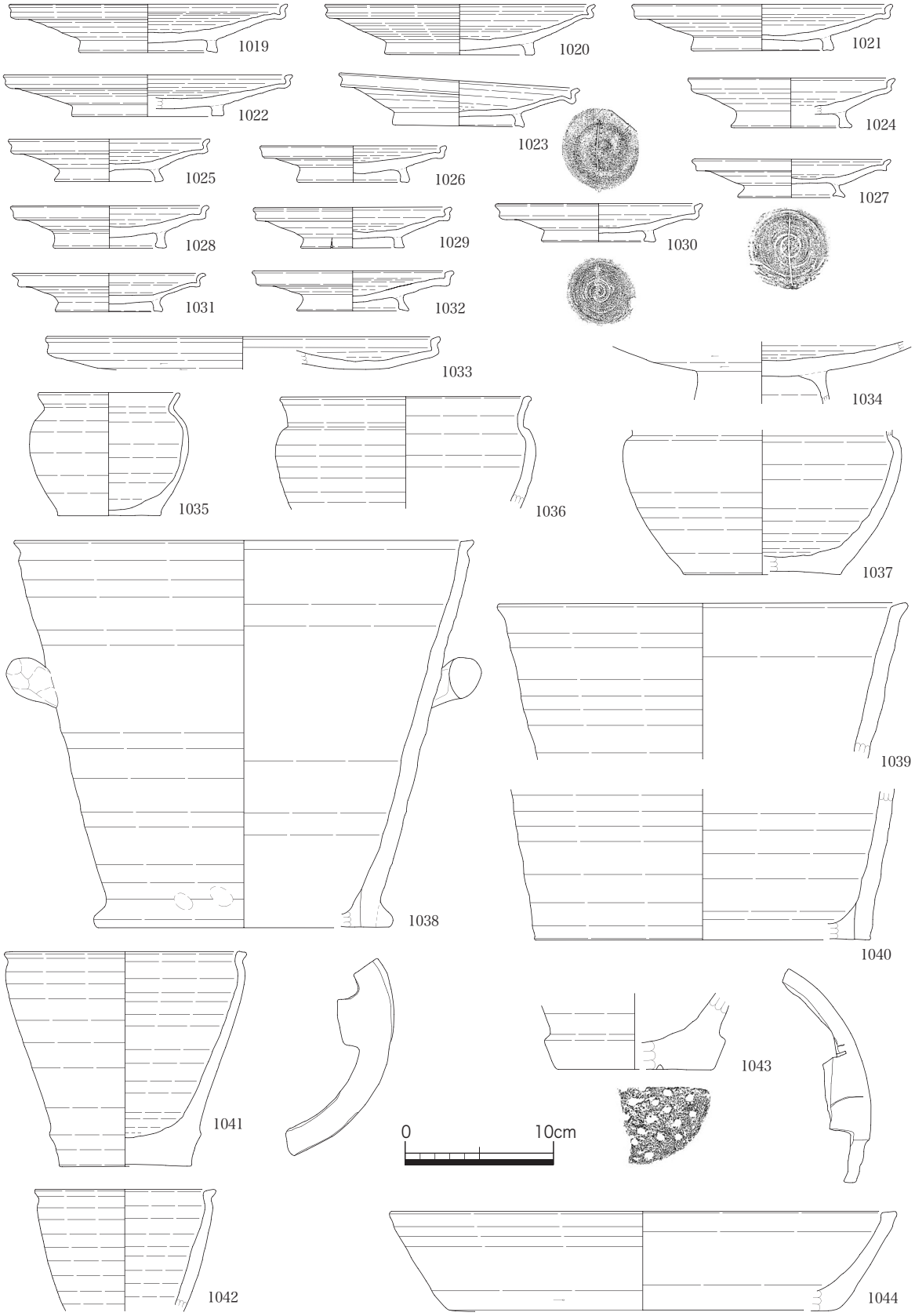


図 47　出土遺物実測図 27

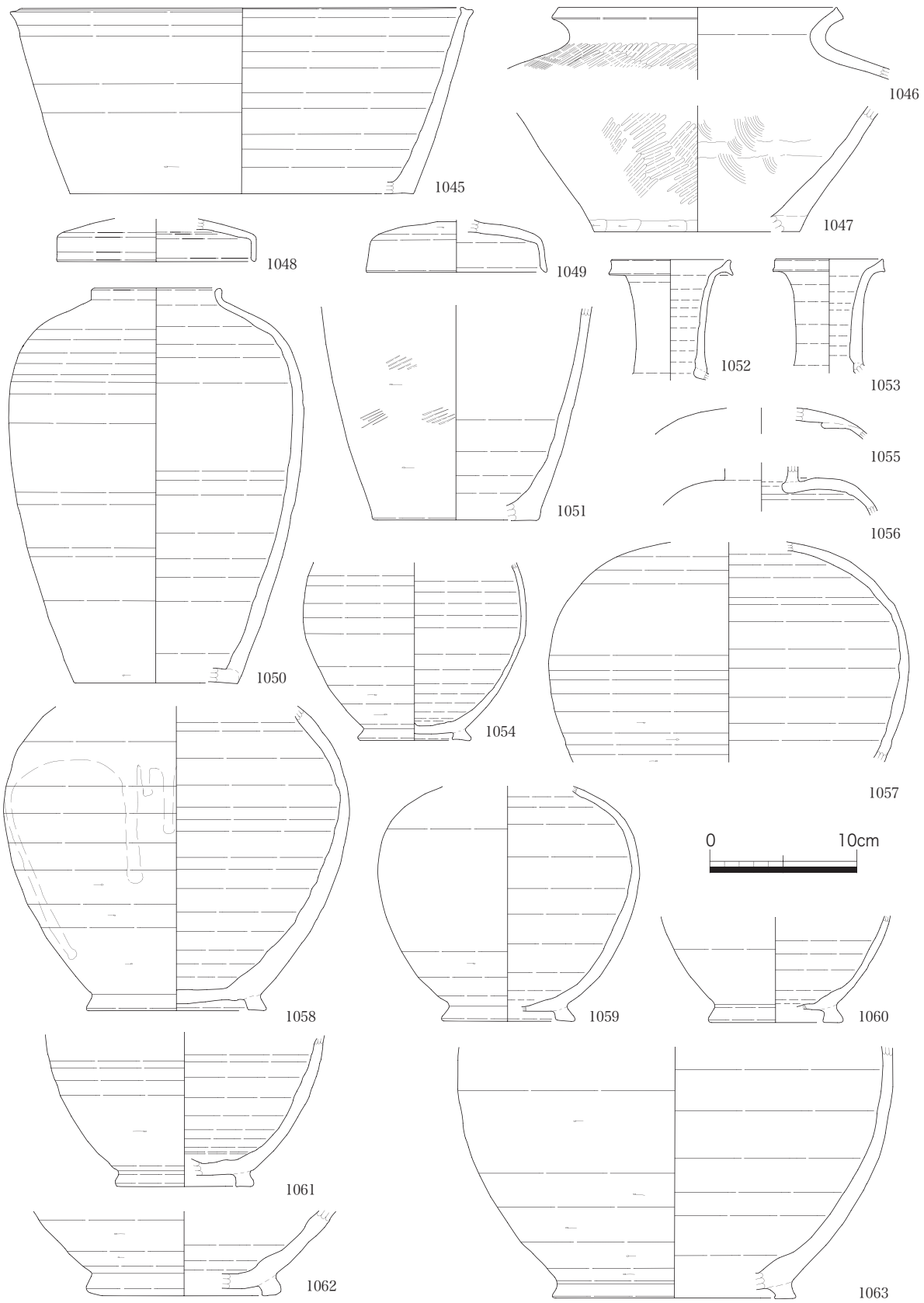


図 48　出土遺物実測図 28

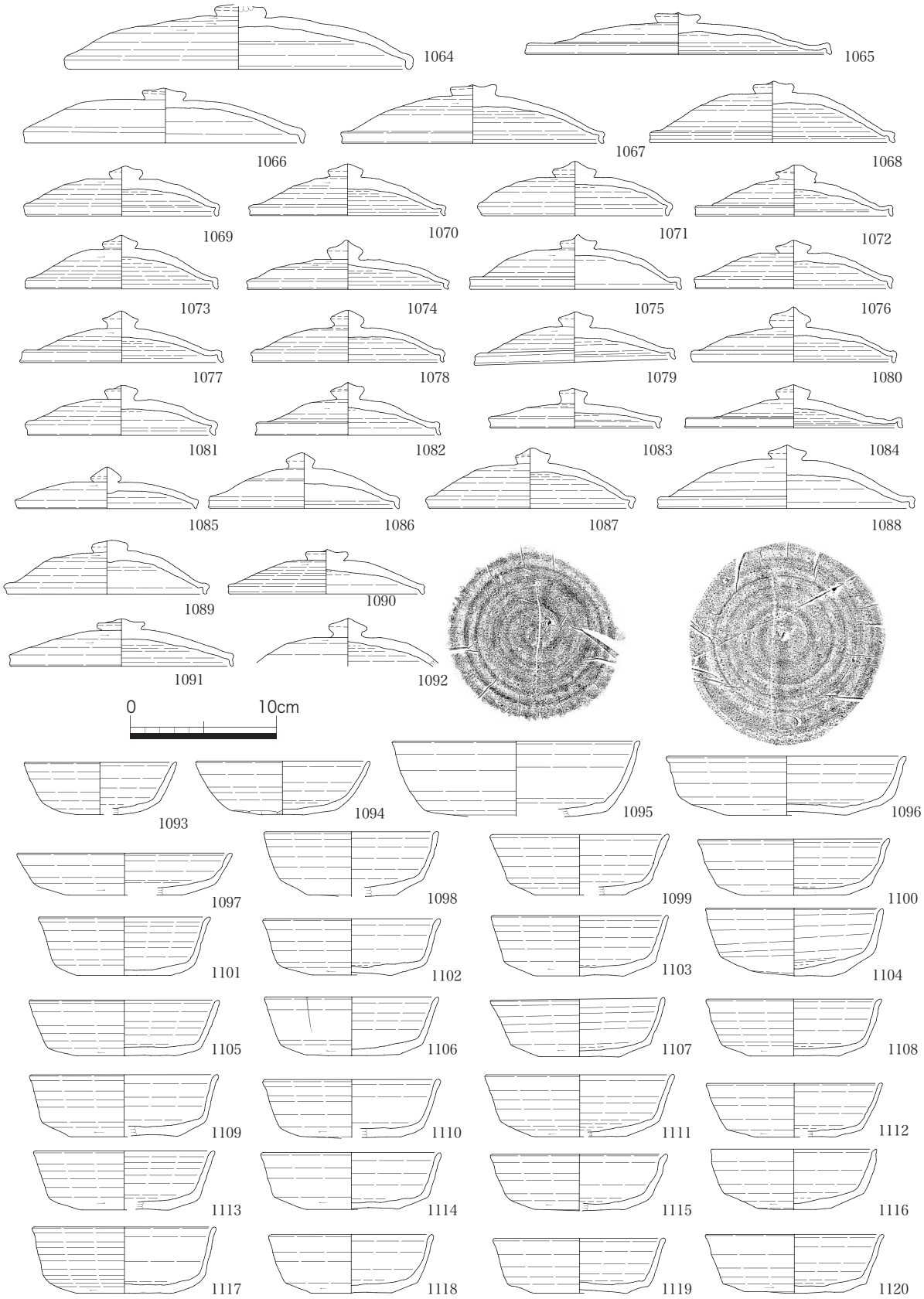


図 49　出土遺物実測図 29

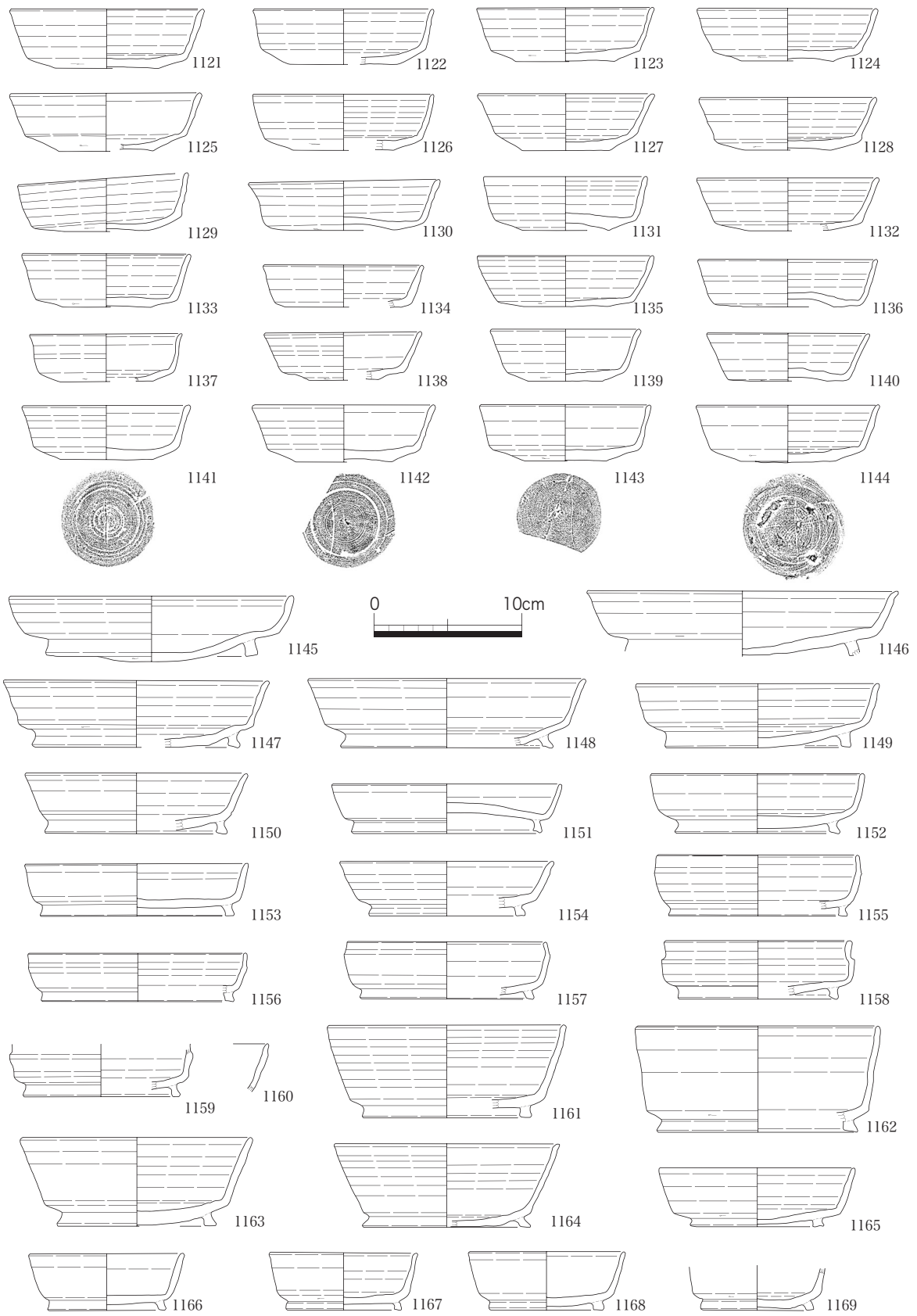


図 50　出土遺物実測図 30

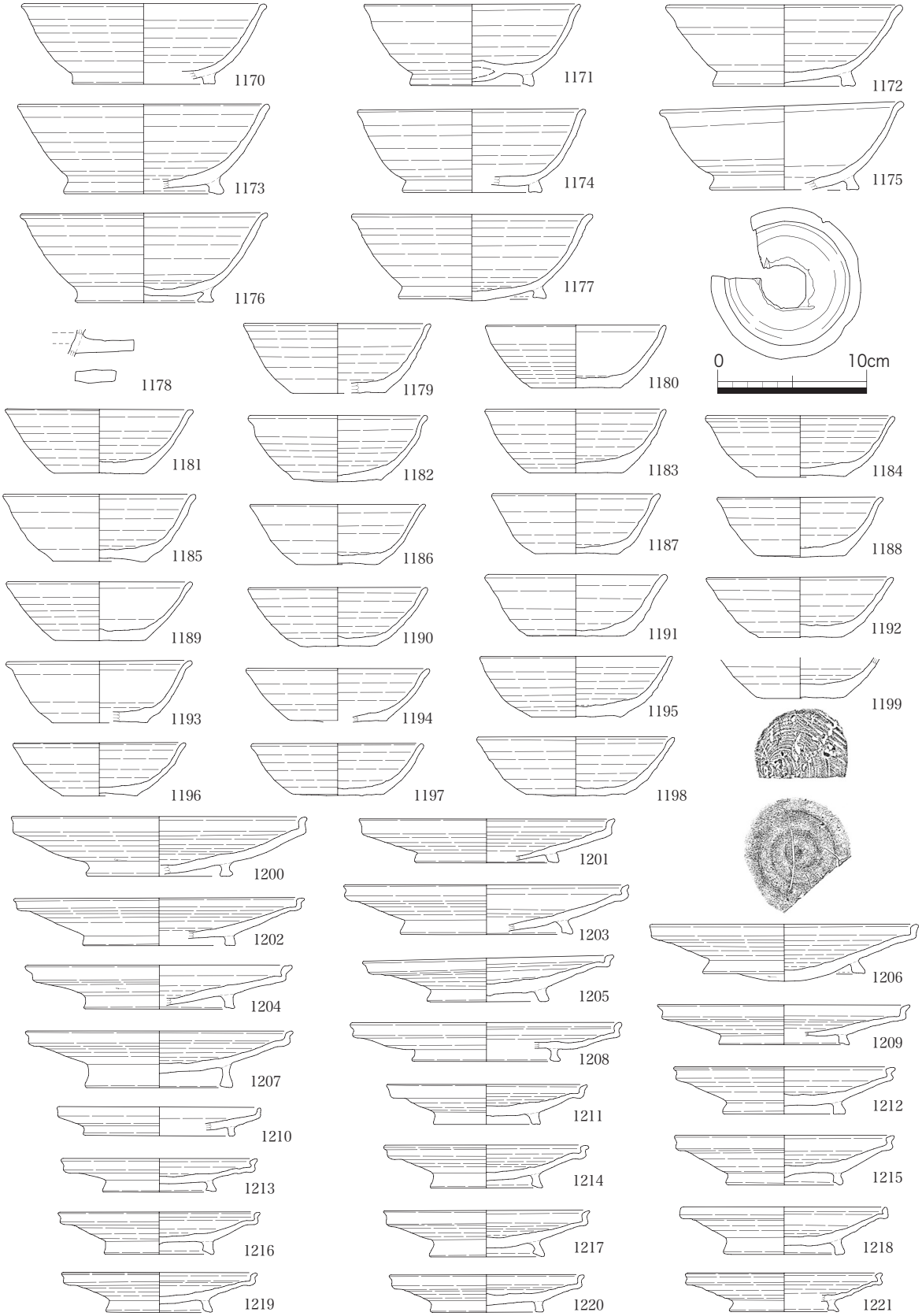


図 51　出土遺物実測図 31

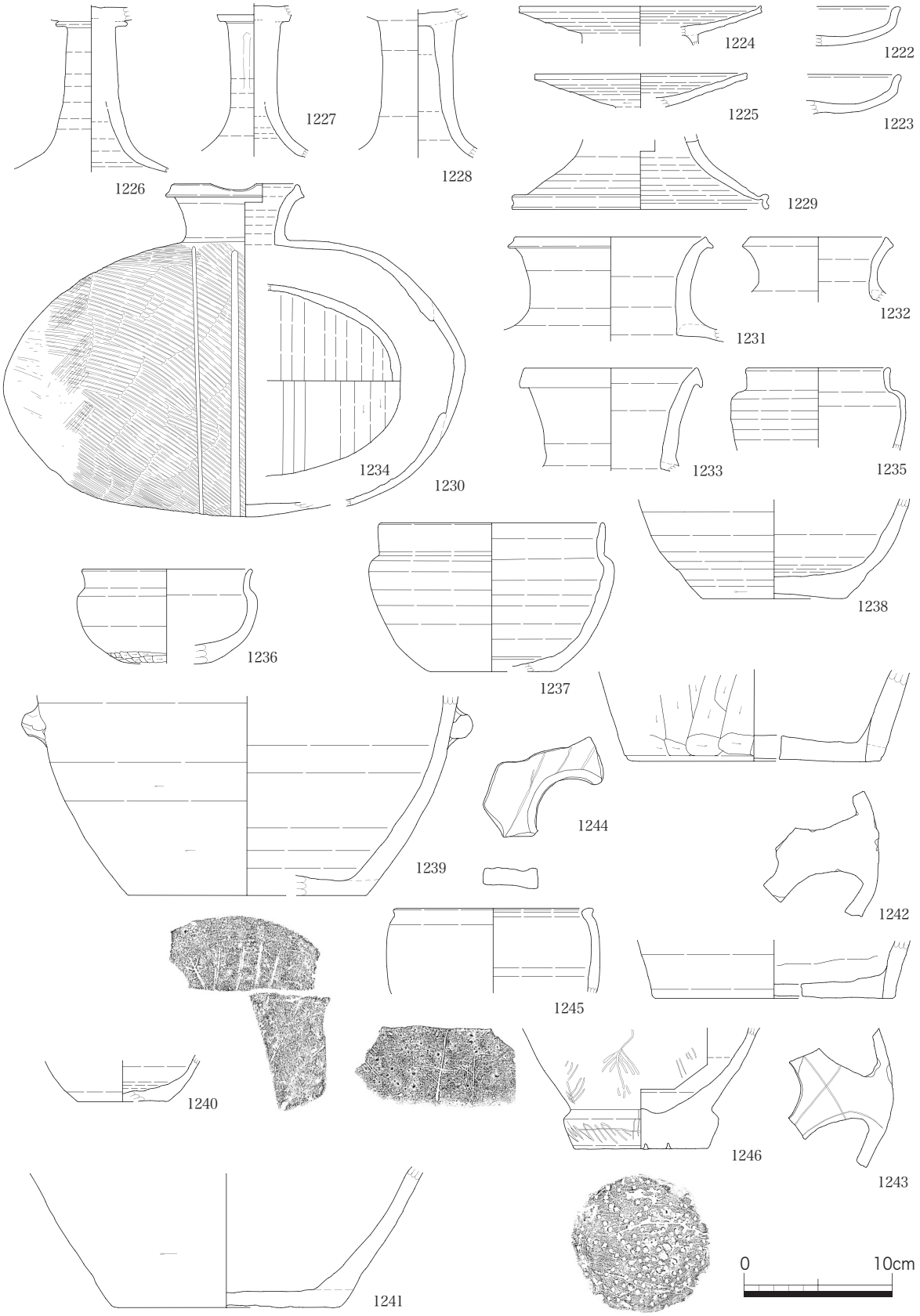


図 52　出土遺物実測図 32

1145 ～ 1177 は有台杯。1145・1146 は大口径だが器高は低く、腰部の屈曲もにぶい。1145 は高台より底部が突出する。1155 ～ 1160 は口縁部付近の外面がにぶい段状となる。段は 1155 ～ 1157・1160 は不明瞭だが、1158・1159 は発達する。1161 ～ 1164 は大振りで器高が高く、1166 ～ 1169 は小振りだが口径に比して器高が高い。1170 ～ 1177 は腰部で屈曲しない形状。1175 は底部が円形に欠損するが、人為的である可能性が強い。1178 は双耳杯の耳部片。1179 ～ 1199 は椀。1199 は外底部に紐の圧痕が残る。1200 ～ 1221 は有台盤。1206・1216 は内底部に線刻が確認できる。1224 は脚台盤。1225 ～ 1229 は脚付盤。1226･1227 は脚部上方が細く、杯部との境界に突帯が付く。1230 ～ 1234 は横瓶。1230 は短い口縁部が付く。端部はフラットとなる。口縁部の上面には切り欠きが確認できる。体部は長球形で長径の端部がにぶく尖る。1235 ～ 1241 は鉢。1236 は小振りで丸底。外底部には手持ちヘラ削り調整を施す。1237 は平底となる。1239 は大振りの鉢で、体部の張る形状を有する。平底で外底部には木葉痕が観察できる。体部には環状把手が付く。1241 は SU06 からも破片が得られた。1242 ～ 1244 は甑。1242 は体部外面に縦方向の手持ちヘラ削り調整を施した後に、下方には横方向の手持ちヘラ削り調整を加えるが、1243 はヨコナデ調整となる。1243・1244 の外底部には木葉痕が確認できる。1245・1246 は陶臼。1246 は外底部に直径 5mm の棒状工具による貫通しない刺突、体部外面には戯画が描かれる。草木をモチーフとするもので、下段は大きく崩れる鋸歯状の線刻となる。内底部には使用痕が大となる。

1247 ～ 1269 は灰釉陶器。1247 ～ 1251 は蓋で、1247 は宝珠形の鈕が付く。蓋として図示するが、天井部内面が摩滅しており、転用硯であろう。1250 は天井部の稜から口縁端部までがやや長くなる。1252 は角高台を持つ椀の底部片で、混入だろうか。1253 ～ 1257 は長頸瓶。1253 はやや太い頸部で、外面中程にヘラによる沈線を二条施す。頸部は三段成形となる。1254 ～ 1257 は細く長い。外面は黄土塗布か。1267・1268 も外面に黄土塗布。1258 ～ 1261、1263 ～ 1268 も長頸瓶か。頸部付近が残存する 1258 は三段成形となる。1265 の外底部にはヘラ記号『｜』が確認できる。

時期は折戸 10 号窯式に属するが、これを遡る資料も含まれる。

1270 ～ 1278 は土師器。いずれも濃尾系甕。1275 は小振りである。1276 ～ 1278 は底部片となる。平底だが底部は丸みを帯びる。1276 の下方には手持ちヘラ削り調整も加える。

SX01
（図 53 － 1279）

1279 は灰釉陶器椀もしくは皿の底部片となる。高台は三日月高台だが低くなる。時期は折戸 53 号窯式に属する。

SX02
（図 53 － 1280）

1280 は土師器の濃尾系甕で、平底となる。外底部には木葉痕を留める。

遺構外資料
（図 54・55 － 1281 ～ 1347）

1281 ～ 1345 は遺構外資料のうち主なものを集めた。1281 ～ 1307 は須恵器。1292 ～ 1294 は有台杯で、口縁部付近の外面に段を持つ。1296 は脚台が付く杯と理解した。腰部で屈曲するが、この部分の外面には突帯が貼付されている。1303 は脚台盤の脚部上方の破片だが、残存する杯部底が円形に欠損し、人為的打ち欠きである可能性が強い。1305 はハソウで有台となる。肩部に沈線を一条巡らすのみで無文となる。1308 は円面硯。使用痕は確認できない。1309 は器種不明。土器の脚部として図示した。筒状となる脚部は肉厚で、端部は平坦となる。

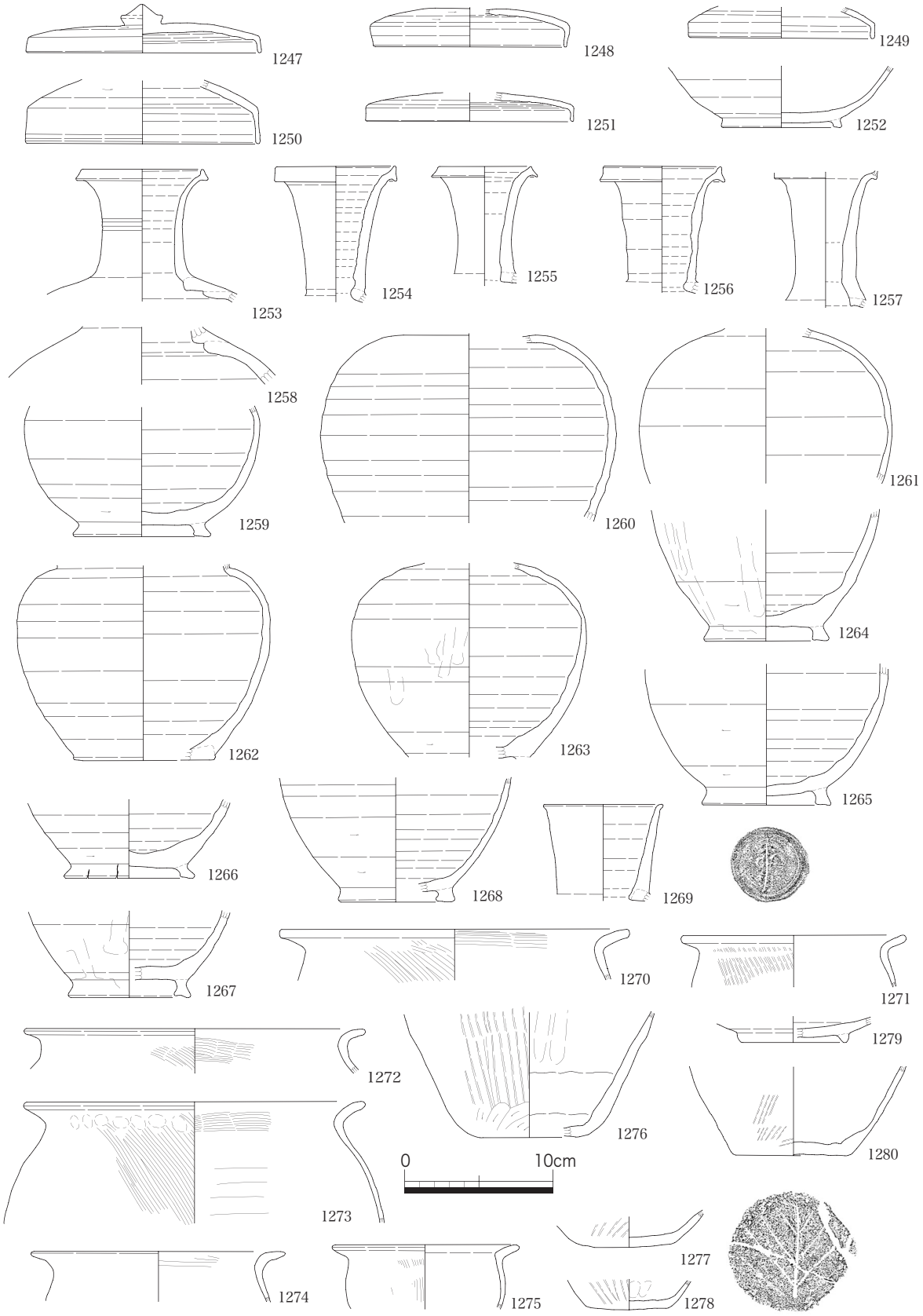


図 53　出土遺物実測図 33

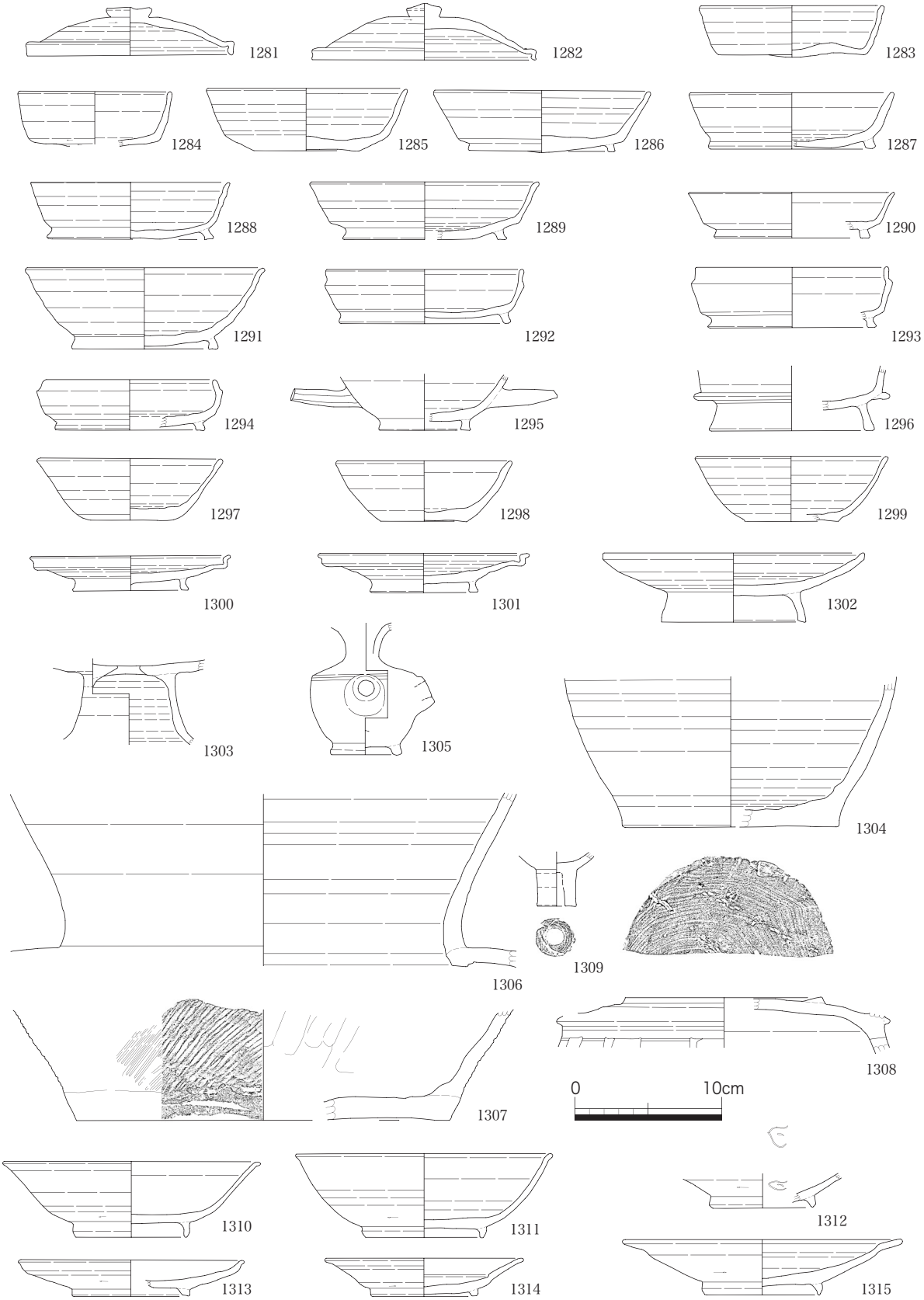


図 54　出土遺物実測図 34

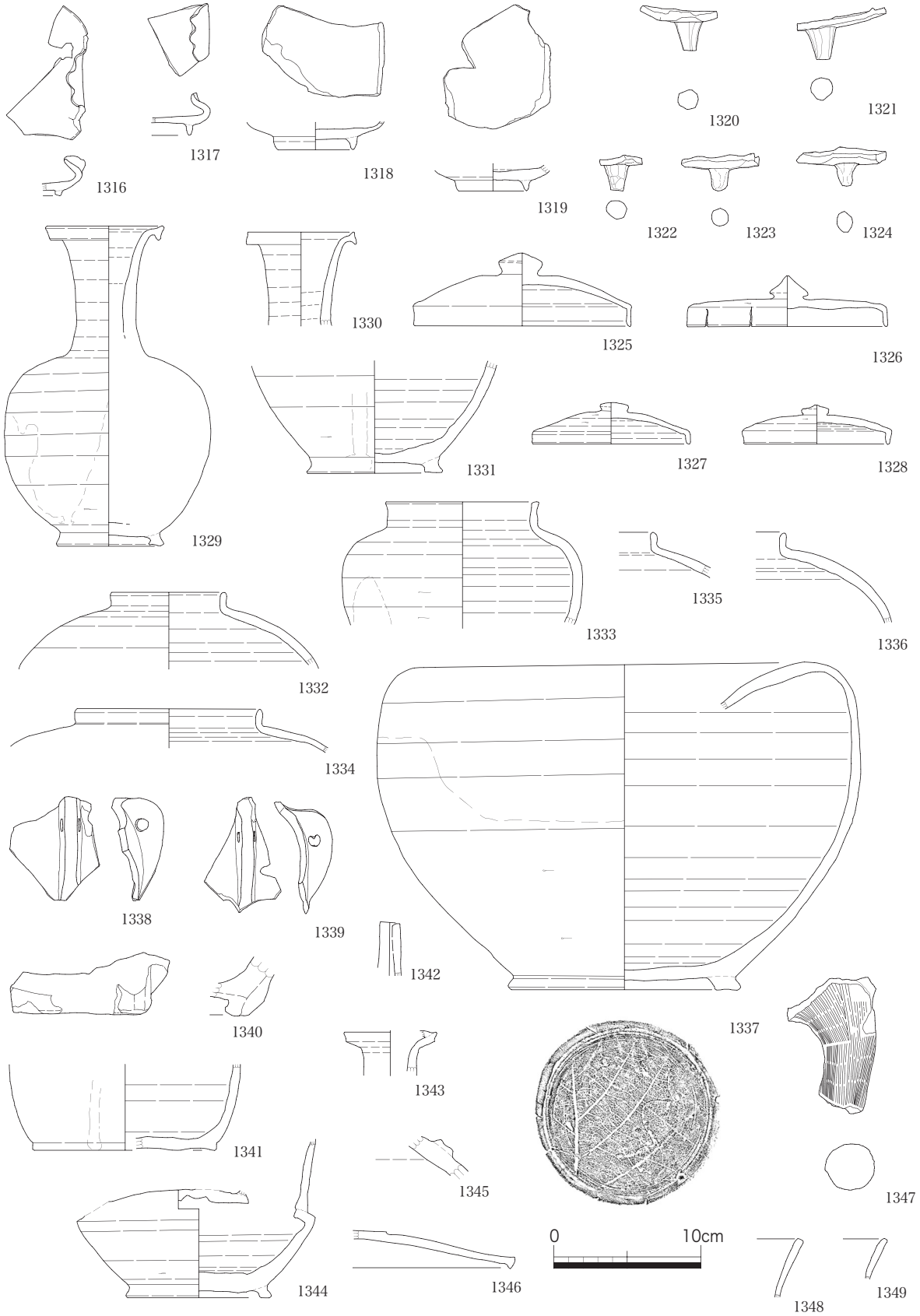


図 55　出土遺物実測図 35

1310 ～ 1345 は灰釉陶器。1312 の内底部には陰刻文が確認できる。1316 ～ 1319 は耳皿。1316・1317 は口縁部が残り、ヒダ付きとなる。1320 ～ 1324 は三足盤。脚部は 1320 ～ 1322 が手持ちヘラ削り調整、1323・1324 はナデ調整で仕上げる。1340 は高台を持つ壺の底部片で、外面に粘土紐を貼付する。1346 は灰白軟陶で蓋か。口縁部は天井部外面に段状の稜を持つ。

1347 は土師器で、器種は不明。外面にはハケメ調整を施す。

製塩土器
（図 55 － 1348・1349）

1348・1349 は製塩土器。口縁部片で、粗製となる。1348 は SU05 出土。

ミニチュア
（図 56 － 1350 ～ 1401）

1350 ～ 1401 はミニチュア品である。調査区中から得られたものを集めた。ミニチュアの規定は不明確だが、ここでは通常品と相似形で小さいことを一応の目安としている。ミニチュアには須恵器と灰釉陶器がある。遺構資料には、SK97 が 1355、SK259 が 1375・1399、SD12 が 1354、SU01 が 1368・1372・1376、SU02 が 1377、SU05 が 1369・1373・1374、SU06 が 1350・1356・1378・1394、SU07 が 1357・1379 ～ 1383･1395 がある。1350 ～ 1354 は須恵器で､1350 は蓋､1351 ～ 1354 は無台杯となる。1354 は形状がやや特異となるが､一応無台杯に含める。1355 ～ 1401 が灰釉陶器となる。1355 ～ 1367 は蓋だが、通常品と比較して鈕と口径とのバランスが異なるが、整形時の困難さに起因する問題と理解する。1368 ～ 1393 は長頸瓶、1394・1395 は平瓶となる。1396 ～ 1398 は短頸壺。1399 ～ 1401 は短頸壺の胴部片と考えているが、ツクに含めるべきかもしれない。

刻 書 土 器
（図 56 － 1402 ～ 1411）

1402 ～ 1411 は文字もしくは記号が確認できる資料のうち、ヘラ記号や性格不明の線刻を除く資料を集めた。全て焼成前によるもので、1411 のみ SU05 から出土しているが、その他は遺構外資料となる。

1402・1403 は文字風の刻書となる。釈読はできないが類似しており同一の文字ないし記号である可能性が高い。1404 ～ 1407 は『卄』。1408 ～ 1411 は『卄』の一部と考えられる。

2　II 期の土器・陶磁器（図 57 － 1412 ～ 1423）

近 世 陶 磁 器

II 期の土器・陶磁器は、前者には土師器が、後者には近世陶磁器などがある。

1412 ～ 1415 は SK427 出土。1412 はいわゆる柳茶椀。体部は丸みを帯びる。18 世紀末の美濃産か。1413・1414 は同一個体と考えられるが、接合はしない。ハケ塗りの丸椀で 18 世紀後半の瀬戸産か。1415 は椀の底部片である。18 世紀後半の瀬戸・美濃産。1416 は SK447 出土。いわゆる笠原鉢。18 世紀後半とするが、やや遡るかもしれない。美濃産か。口縁部片で内面にはクシによる直線文と波状文を施す。1417・1418 は、SD01 出土。1417 は腰錆椀。18 世紀末～ 19 世紀初頭か。1418 はこね鉢で瀬戸産か。19 世紀頃。

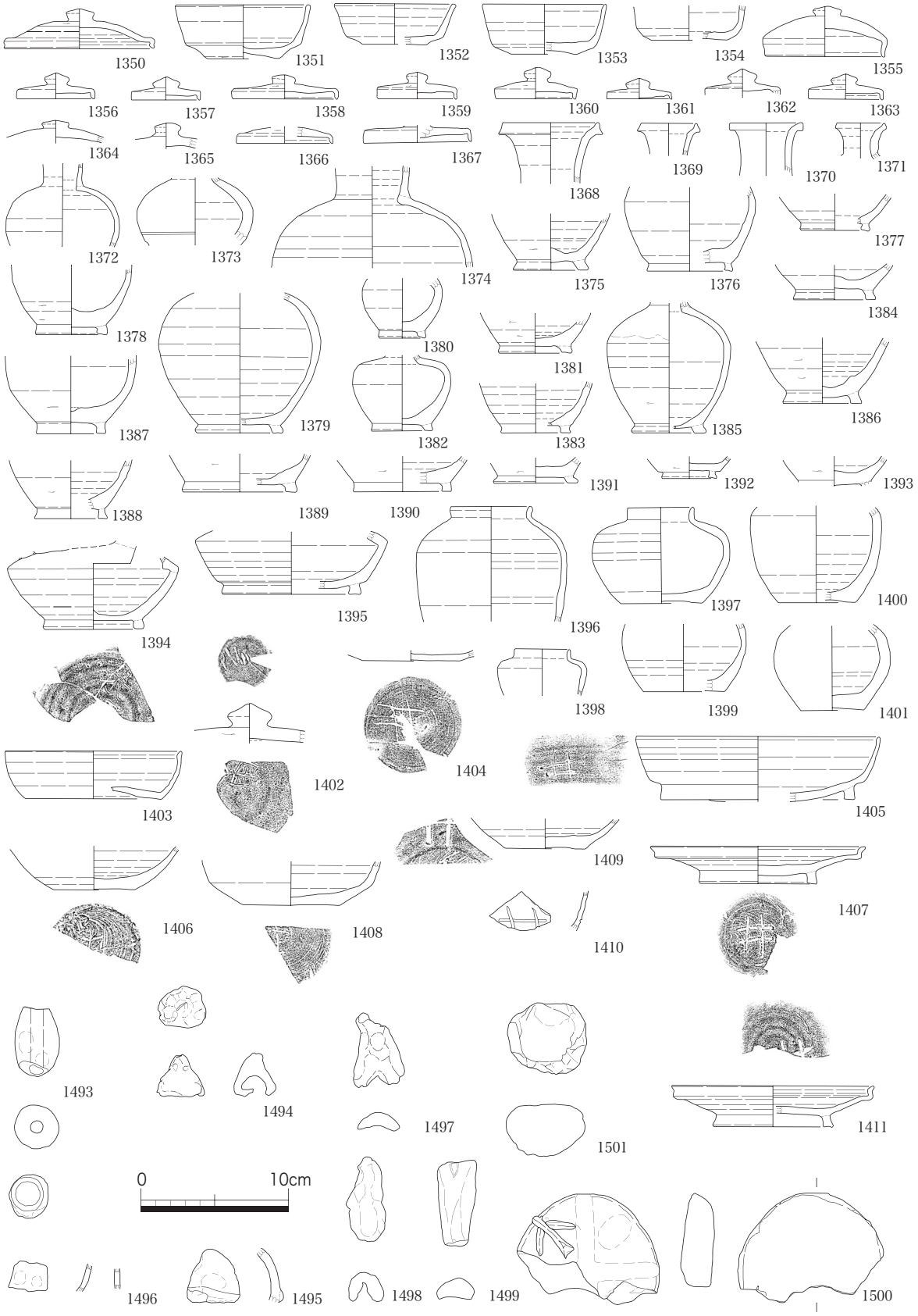


図 56　出土遺物実測図 36

3　その他の土器・陶器（図 57 － 1424 ～ 1437）

弥生土器と中世前期の灰釉系陶器椀・小皿・鉢や、施釉陶器天目茶椀・縁釉皿・おろし皿などが出土している。なお、遺構は中世前期の SK51 を除き検出されていない。

弥 生 土 器

1424 は弥生土器の台杯甕。後期に属する。

1425 は灰釉系陶器の椀で SK51 出土。腰部はわずかに丸みを持つ。口縁端部は丸い。南部系第 6 型式。1426 ～ 1434 は灰釉系陶器。1426 ～ 1432 は椀。1426 ～ 1428 は南部系、1429 ～ 1431 は北部系。1428 は椀の釉着資料である。1433 は小皿。1434 は鉢の口縁部片。1435 ～ 1437 は施釉陶器。1435 は天目椀、1436・1437 は縁釉皿となる。

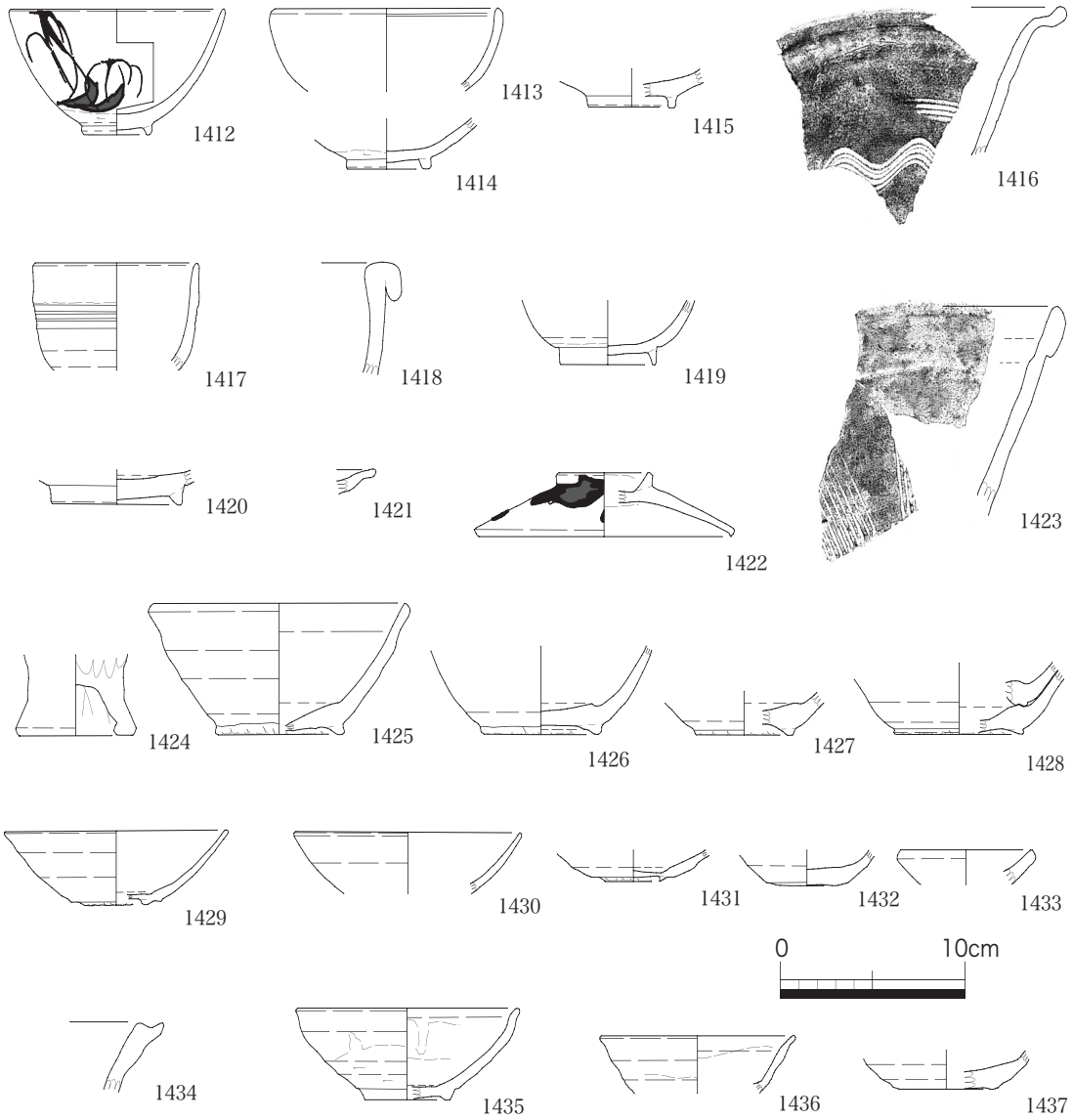


図 57　出土遺物実測図 37

4　窯道具（図 58 － 1438 ～ 1492）

大半が遺構外資料となるが、遺構資料は、SB03 が 1454・1486、SK01 が 1441、SK157 が 1489、SK321 が 1455、SK379 が 1468、SK412 が 1477、SD10 が 1448・1457、SU01 が 1438・1439・1458・1478、SU02 が 1440、SU04 が 1445、SU05 が 1469、SU06 が 1461・1462・1465、SU07 が 1459・1472・1473 である。

1438 ～ 1440 はサヤ。円柱形の鉢で、1440 は器高が高い。1438・1440 の外面は縦方向のナデを等間隔に並べる。　サヤ

1441 ～ 1470 はツク。コップ状のもの（1441 ～ 1443）、口縁部でくびれるもの（1444 ～ 1452）、鉢に類似するもの（1453 ～ 1460）、口縁部形状は不明だが、筒状で中程がくびれるもの（1466･1467）に大別できる。ただし、鉢に類似するものと前述したミニチュアとの区別は厳密ではなく、回転ナデ調整と回転糸切りによりラフに仕上げられたものを一応、窯道具としているが、1464・1465 のように手持ちヘラ削り調整を施すにもかかわらず、形状からツクと分類した資料も含まれている。コップ状の 1441 ～ 1443 は自然釉もほとんどかからず、窯道具ではなく製品として考えるべきかもしれない。ただし底部は回転糸切りのままで、周囲に調整は加えない。1470 は脚台盤の脚部をツクとして転用した資料となる。　ツク

1471 は異形のトチンで、1 点のみ得られた。全面手づくねにより成形され、ナデ調整は施されていない。円盤状の底部に 3 本の支持部を持つものとして図化した。支持部の先端は剥離しており、この部分が製品と接していたものと予測できる。　トチン

1472 ～ 1483 は棒状のトチンか。1472 ～ 1476 には 1 面にタタキ調整痕が観察できる。例えば甕の体部に頸部を接合する際に、微調整のため切り落とされた端材を支持具として使用したものであろう。

1484 は、甕の体部片を再利用して焼台に転用している。1485 ～ 1492 は破面の一部に摩滅が確認でき、明瞭なものは 7 点を数えた。破片を転用した研磨具と理解しておく。なお、器種・使用部位に共通性はうかがえない。　破片の転用

5　土製品（図 56 － 1493 ～ 1501）

1493 は土錘で、1 点のみ得られた。紡錘形を呈し、全面ナデ調整を施す。一部が剥離するが、使用に伴うものか。残存重量は 28.3g、穴の直径は 8mm となる。　土錘

1494 は土鈴。SU07 出土。粗製でイチジク形を呈する。鈴口の一部を欠くがほぼ完形となる。柄は短く、紐孔が省略されている。1495 は、球形と推定される土製品の破片で、幅 9mm、高さ 4mm の突帯を貼付している。土鈴の体部片である可能性を残す。1496 は環状の土製品で、器壁は 3mm と薄い。図示した位置で上下とも欠損しており、形状は不明となる。1497 ～ 1499 は粗製で棒状、1500 は円盤状となる土製品。1500 の片面には粘土紐が貼付される。1501 は SK01 出土。スサ入りの焼土塊である。　（池本正明）　土鈴

6　石製品（図 59・60 － 1502 ～ 1514）

砥石 17 点、不明石製品 1 点を数えた。遺跡外から搬入されたと推定される自然石 6 点もここで報告する。出土場所の傾向としては、帰属時期不明の砥石 2 点を除き、概ね I 期の遺構から出土している。なお、石材については、堀木真美子（本センター調査研究員）の肉眼観察によった。

(1) 砥石（図 59 － 1502 ～ 1513）

大半が I 期に属するものと考えられる。

今回形状によって分類し、規格性を見いだすことはおよそ困難であった。出土量が分類に耐えうる量に達していないこと、また使用過程によってその形状が異なるという砥石の性質が原因しているものと考えられる。あえて特徴をあげるならば、使用面数が多いということ、よく使用したために研ぎ面が凹むものが多いということがいえよう。また、そのために不定多面体となっているものがある。ここでは、石材別に各報告をおこなうこととする。

泥質凝灰岩

泥質凝灰岩製は、7 点を数え、うち 6 点を図示した。本遺跡では比較的薄い印象を持たせる砥石が 7 点あるが、このうち 6 点は泥質凝灰岩製に属する。ここでは、よく使用されたために薄くなり、凹んでいて側面が無くなりつつあるものを 1 類（3 点。うち 2 点が 1502・1503）、やや薄めで側面がしっかりとあるもの（1504・1505）を 2 類、使用面や使用面積の少ないもの（1506・1507）を 3 類と区分した。

1 類の 1502 は、SU02 出土。面積の広い対応する 2 面を上面・下面とし、それ以外を側面とした場合、上下面を使用している。両面ともよく摩滅しており、凹んでいる。上面は 2 分されているため、使用面数としては 3 面を数える。1503 は SU06 出土。横断面が三角形に近く、全体的な大きさの割に非常に薄い。整形痕が見られる。全体的によく摩滅し、使用面は凹んでいる。使用面数は 4 面。

2 類の 1504 は SU07 出土。上面を 2 分するほか、下面と 1 側面を使用している。上面が最もよく摩滅し、凹んでいる。1505 は SB03 出土。縦断面が台形型を呈す。上下面の 2 面を使用し、使用面積の広い上面がよく摩滅している。

3 類の 1506 は SK97 出土。5 面体を呈す。2 面を使用し、面積にして広く使われている方の面は、よく摩滅し凹んでいる。1507 は SU06 出土。薄型。側面 1 面のみが若干摩滅する。

凝灰質泥岩

凝灰質泥岩製は 4 点を数え、比較的形の整っている 2 点（1508・1509）を図示したが、自然面を多く残した不定多面体のものが 2 点ある。

1508 は遺構外資料だが、SU07 に近い位置から出土している。直方体を呈し、角が削れている。側面 3 面を使用し、削りが入り異形な面を作っている 1 面が特に摩滅している。

1509 は遺構外資料。縦断面長方形を呈し、小型である。上下面のほか、側面 1 面を使用する。最も面積の広い上面がよく摩滅し、凹んでいる。

凝灰質砂岩

凝灰質砂岩製は比較的大きさのある 3 点。

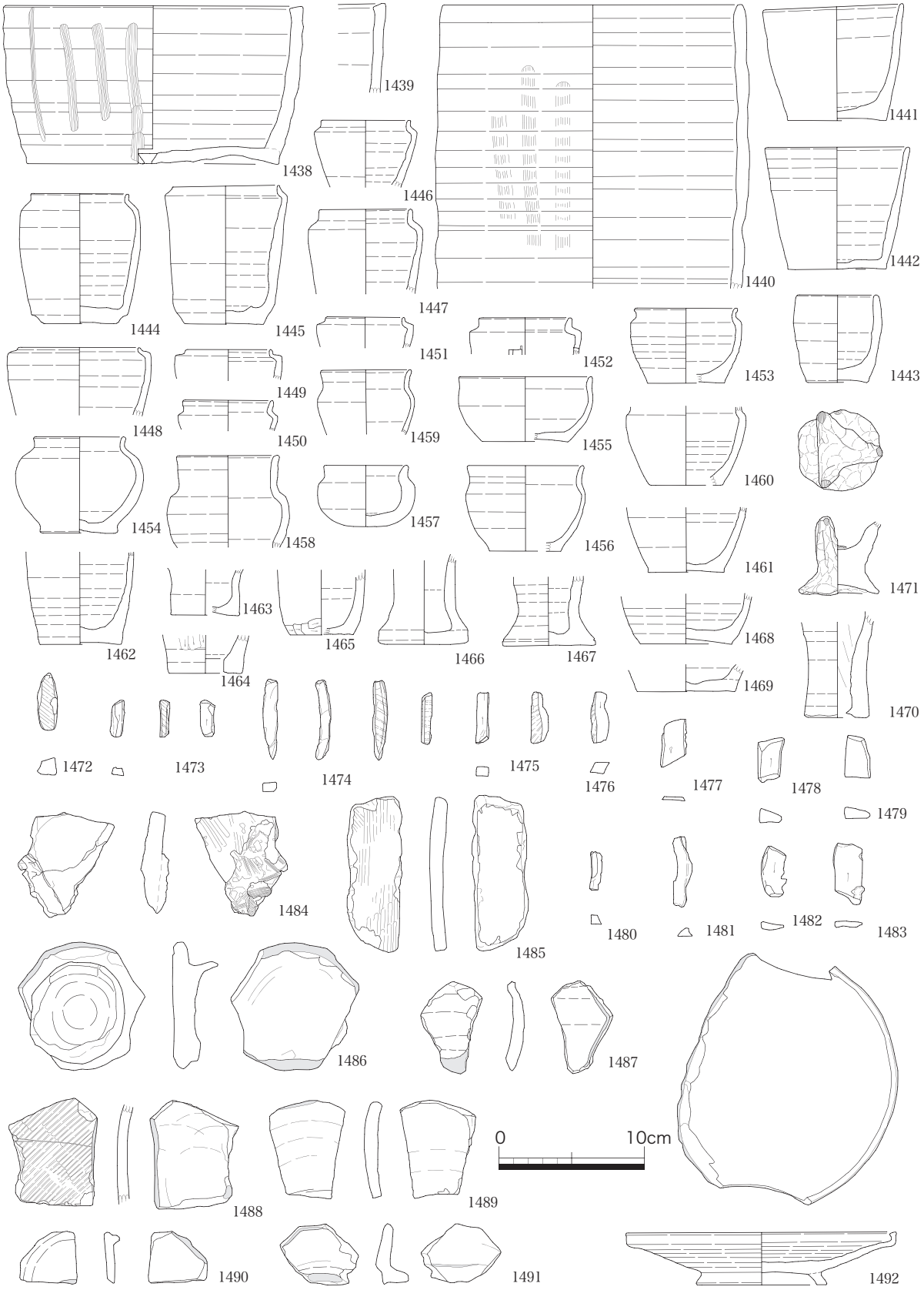


図 58　出土遺物実測図 38

1510・1511 は SD09 資料で、共に扁平で大きく、重量があり、上下面を広く使用する点が目立って共通する。それぞれ側面も 1 面ずつ使用しているが、その幅は狭い。1510 は側面が最もよく摩滅し、凹んでいる。重さは 4165.9g。1511 は広く使用する上下面に薄く赤茶のシミが見られる。重さ 872.7g。

1512 は遺構外資料だが、SU07 に近い位置から出土している。先の灰色の 2 点と違い、赤茶けた石色をしている。整った直方体を呈し、角は丸くなっている。上下面の 2 面が摩滅し凹んでいる。

その他の石材

その他の石材には凝灰岩製、アップライト製、ホルンフェルス製が各 1 点ある。

1513 は凝灰岩製。遺構外資料で、直方体を呈す。若干ではあるが、ほとんどの面に使用した痕跡が見られ、最も摩滅する面は下面の斜になった部分である。II 期に属する資料と考えられ、『大脇城遺跡』で試みられた 15 世紀後半～ 17 世紀後葉に属する砥石の分類（北村　1999）にあてはめると A 類に類似する。

ほか図示しなかったが、使用面が赤色化するものが 1 点あった。アップライト製の砥石で、SK309 資料。整った直方体で大きく、重さ約 2300g を量る。側面 4 面を使用する。

（2）不明石製品（図版 27 － 1514）

1514 は SB03 資料。平たく整った円形をなしているが、特に調整痕などは見られない。重さ 75.2g を量り、他の自然石より小さくて軽いこと、東海地方では見られない産地不明の凝灰質泥岩であることから、自然石ではなく、あえて不明石製品としてあげた。

（3）自然石

加工痕が見られず、本遺跡周辺に存在しうる石材の自然石 6 点が、 I 期の遺構から出土している。石材の種類はチャート 3 点ほか、凝灰質泥岩、珪質岩、アップライト各 1 点。その重さは、500g 程のものが 1 点、1kg 前後のものが 2 点、2kg 前後のものが 3 点である。その中で、SU07 資料の珪質岩製のものについて、割れ面以外の表面全体にススの付着が確認された。

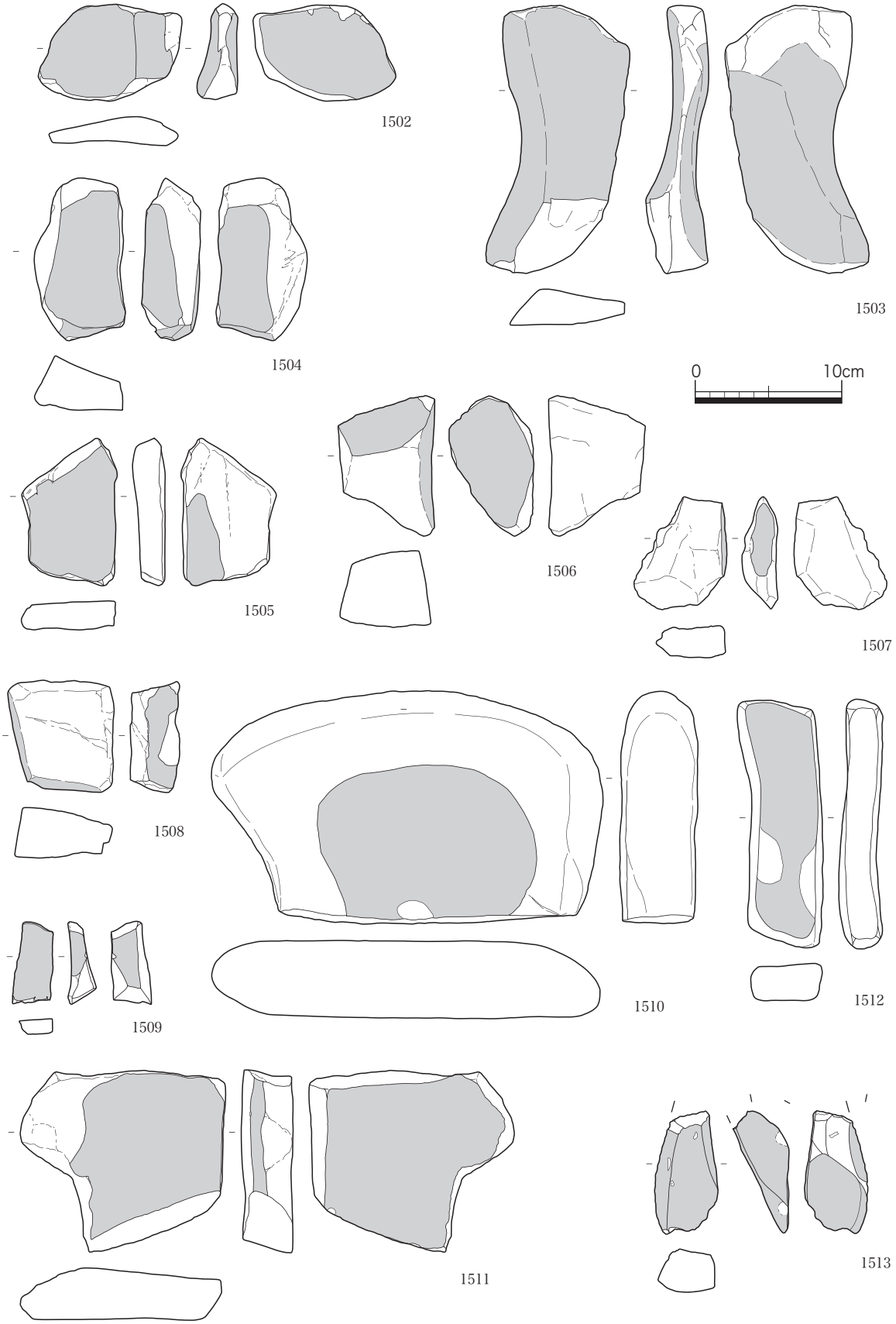
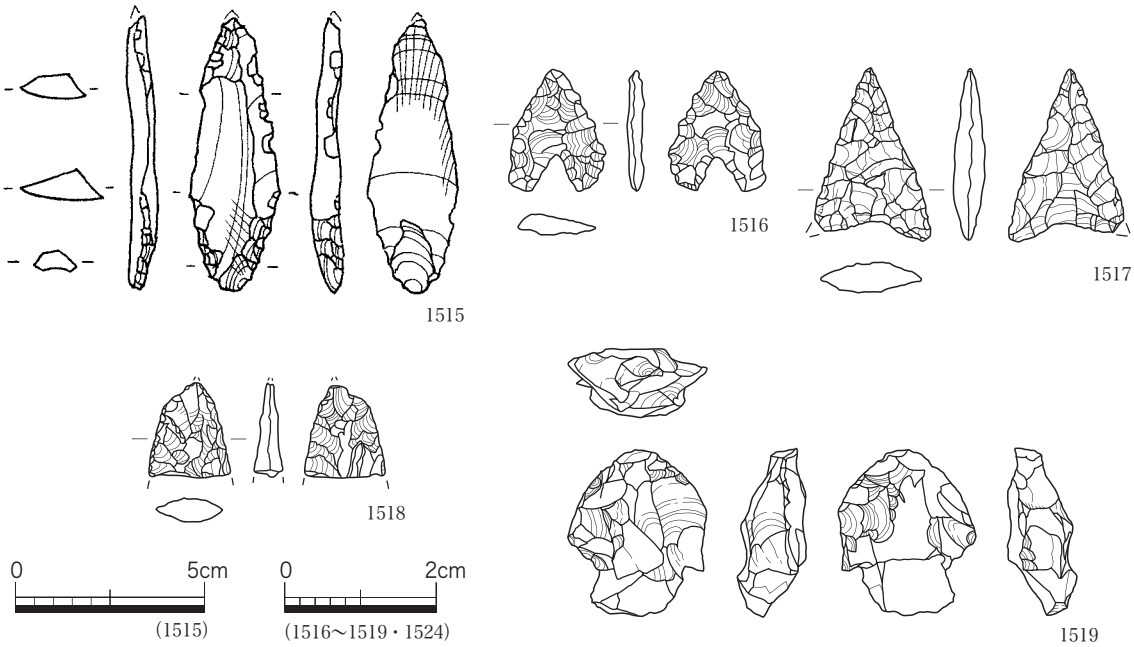


図 59　出土遺物実測図 39



1515は原図・トレースともに齊藤基生氏による

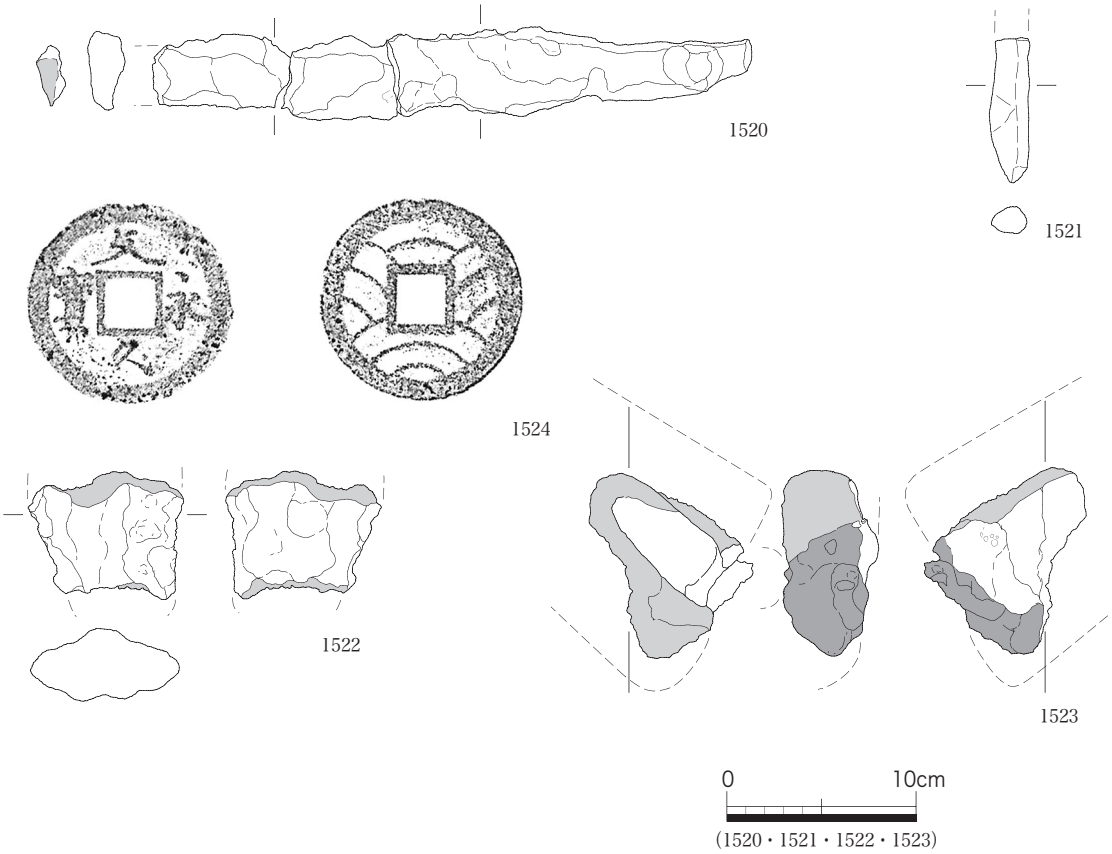


図 60　出土遺物実測図 40

7　石　　器（図 60 － 1515 ～ 1519）

まとまりをもって出土しているものではないが、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の石鏃などのほか、石核が出土している。全部で 5 点を数える。

（1）ナイフ形石器（図 60 － 1515）

長さ 3.5cm、幅 1.1cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.3g。先端部を若干欠く。縦長剥片を用いた基部加工のナイフ形石器。石質は黒曜石である。2 万年前から 1.6 万年前のものと考えられる。

後期旧石器

（2）石鏃（図 60 － 1516 ～ 1518）

1516・1518 ともに平面形状が三角形を呈する凹基無茎鏃である。1516 は長さ 1.6cm、幅 1.3cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.4g で、1517 よりも小型で薄い。側辺が外弯し、右側に鋸歯状側縁がみられる。抉り部は深め。石質は黒曜石。

1517 は長さ 2.3cm、幅 1.6cm、厚さ 0.5cm、重さ 1.0g。左脚部を若干欠く。先端部は鋭角である。抉り部は浅い。石質はチャート。

1518 は先端部若干と基部が大きく欠損している。長さ残 1.3cm、幅 1.1cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.5g。ここでは石鏃としてあげたが、基部（胴部）の割れ口部分に厚みがあるため、有舌尖頭器の可能性も考えられる。石質はチャート。

（3）石核（図 60 － 1519）

重さ 25.2g。剥離の仕方に規格性はみられず、打面転位をしながら剥片をとっている。石質はチャート。

（神谷巳佳）

8　金属関連遺物（図 60 － 1520 ～ 1524）

鉄製品が 2 点、銅銭 1 点、椀型鉄滓 1 点、流動鉄滓 1 点、鞴の羽口 2 点、含鉄遺物 2 点あり、SU05 と SU06 などから鉄製品と鍛冶関連遺物の出土がある。

1520 は刃幅 1.5cm 前後の刀子で、先端部と基部が欠損している。1521 は釘状の鉄製品、1522 は 4 分の 1 分割の椀型滓で、上面が盛り上がるもの、1523 は鞴の羽口先端部で 45 度弱の角度で鍛冶炉に挿入されたものである。1524 は「文久永寳」で波銭である。

鉄　製　品

銭　　貨

（蔭山誠一）

第Ⅳ章　科学分析

1　土器胎土分析

（1）試料と分析手順

胎土分析は第四紀地質研究所に委託した。同一試料をＸ線回折と蛍光Ｘ線を用いた二つの分析が実施されている。以下には提出された報告書を池本正明が加筆・要約したものを掲載する。

試料の性格

試料は、本遺跡出土遺物と周辺の窯跡出土遺物から採取した。本遺跡では、須恵器・灰釉陶器の他に、遺構埋土から採取した白色粘土塊（以下、粘土）とオニイタ、周辺の窯跡では日進市教育委員会の御厚意により岩崎 15・24・45 号窯（斉藤　1984、高柳　1996）、海老池 1 号窯（折戸 37 号窯、稲垣他　1980）の出土遺物から採取させていただいた（以下、岩崎窯）。

分析の目的は、遺跡内の問題として、須恵器・灰釉陶器類と土師器の他にこれらの素地と推定される粘土との関連、もう一つは須恵器と一部の灰釉陶器に観察できる黄土と、本遺跡出土のオニイタとの比較である。また､比較資料は土器集積遺構の存在を念頭として、本遺跡資料がどのくらいの範囲の土器胎土と類似するのかを確認するためである。

実験の条件

Ｘ線回折試験の測定は、各試料を洗浄・乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し粉末試料とした後、日本電子製 JDX － 8020X 線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度：0.2°
計数時間：0.5 秒。

実験の結果は胎土性状表（表 2）に示す通りである。右側にはＸ線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。Ｘ線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

次に、蛍光Ｘ線分析による元素の分析（以下、化学分析）は、土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄・乾燥後、表面をコーテングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入して分析した。測定には日本電子製 5300LV 型電子顕微鏡に 2001 型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用い、次の実験条件で実験した。

表 2-1　胎土性状表

図版番号	試料番号	タイプ分類	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備考		
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mull-ite	K-fels	Hal-loy	Kaol	Pyrite	Au	種類	器種	遺跡
1525	1	C	14	20						2326	159	599	144						灰釉陶器	椀	遺構外
1526	2	C	14	20						1644	91	1115	170						灰釉陶器	椀	遺構外
1527	3	C	14	20						3194	74	358	112	97					灰釉陶器	椀	遺構外
1528	4	C	14	20						2905	71	392	140	105					灰釉陶器	椀	遺構外
1529	5	C	14	20						1997	82	486	151	110					灰釉陶器	椀	遺構外
1530	6	C	14	20						3055	94	1169	147						灰釉陶器	皿	遺構外
1531	7	C	14	20						2132	95	1018	149	100					灰釉陶器	皿	遺構外
1532	8	C	14	20						2464	84	188	147						灰釉陶器	皿	遺構外
1533	9	C	14	20						2836	83	136	142						灰釉陶器	皿	遺構外
1534	10	C	14	20						2274	84	284	119						灰釉陶器	皿	遺構外
1535	11	C	14	20						1749	88	665	160						灰釉陶器	大平鉢	遺構外
1536	12	C	14	20						1679	92	574	167	99					灰釉陶器	大平鉢	遺構外
1537	13	C	14	20						1372	89	946	182						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1538	14	C	14	20						1438	81	1476	196						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1539	15	C	14	20						2693	82	701	110						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1540	16	C	14	20						1029	97	712	197						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1541	17	C	14	20						818	86	723	230						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1542	18	C	14	20						3567	62	197	99						須恵器	蓋	遺構外
1543	19	C	14	20						2935	63	208	126						須恵器	蓋	遺構外
1544	20	C	14	20						2689	60	358	172						須恵器	蓋	遺構外
1545	21	C	14	20						2415	69	299	115						須恵器	蓋	遺構外
1546	22	C	14	20						2145	86	1429	151						須恵器	蓋	遺構外
1547	23	C	14	20						3008	69	782	117						須恵器	無台杯	遺構外
1548	24	C	14	20						2005	76	1328	174						須恵器	無台杯	遺構外
1549	25	C	14	20						4276	61	772	126						須恵器	無台杯	遺構外
1550	26	C	14	20						2961	51	197	79						須恵器	椀	遺構外
1551	27	C	14	20						3177	67	411	136						須恵器	椀	遺構外
1552	28	C	14	20						1936	81	1600	146						須恵器	有台杯	遺構外
1553	29	C	14	20						3217	56	253	109	167					須恵器	有台杯	遺構外
1554	30	C	14	20						2662	60	703	125						須恵器	有台杯	遺構外
1555	31	C	14	20						2644	65	699	112	85					須恵器	盤	遺構外
1556	32	C	14	20						3377	61	102	104						須恵器	盤	遺構外
1557	33	C	14	20						2810	64	440	124						須恵器	甑	遺構外
1558	34	C	14	20						4262	48	91	81	118					須恵器	甑	遺構外
1559	35	C	14	20						3758	61	111	112	138					須恵器	鉢	遺構外
1560	36	C	14	20						4694	53	83	60	138					須恵器	陶臼	遺構外
1561	37	C	14	20						1570	96	1405	205						須恵器	陶臼	遺構外
1562	38	C	14	20						1865	72	289	203						須恵器	甕	遺構外
1563	39	C	14	20						1872	74	742	200						須恵器	甕	遺構外
1564	40	C	14	20						3701	61	109	97						須恵器	甕	遺構外
1565	41	C	14	20						3998	76	109	129						須恵器	甕	遺構外
1566	42	C	14	20						1618	83	1184	220						須恵器	甕	遺構外
1567	43	C	14	20						3070	67	152	126						窯道具	サヤ	遺構外
1568	44	C	14	20						1143	85	1398	140						窯道具	サヤ	遺構外
1569	45	C	14	20						3650	61	123	97	105					窯道具	サヤ	遺構外
1570	46	B	8	20		54				7326	66								粘土		ＳＫ 16
1571	47	A	8	8		83		92		5502	164					91			粘土		ＳＫ 97
1572	48	A	8	8		129		120		4429	294	205				118			粘土		ＳＫ 128
1573	49	B	8	20		108				5060	137					79			粘土		ＳＫ 412
1574	50	A	8	8		91		114		6174	82					90			粘土		ＳＵ 06
1575	51	C	14	20						1585	76	1396	215						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1576	52	C	14	20						1177	81	814	202						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1577	53	C	14	20						1599	89	857	167	92					灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1578	54	C	14	20						1885	75	202	155						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1579	55	C	14	20						1023	83	1236	259						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1580	56	C	14	20						1526	101	646	163						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1581	57	C	14	20						1631	93	1048	183						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1582	58	C	14	20						1741	90	704	154						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外

表 2-2　胎土性状表

図版番号	試料番号	タイプ分類	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備　考		
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mull-ite	K-fels	Hal-loy	Kaol	Pyrite	Au	種　類	器　種	遺　跡
1583	59	C	14	20						1232	87	621	185						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1584	60	C	14	20						1242	95	404	185						灰釉陶器	長頸瓶	遺構外
1585	61	C	14	20						1840	95	1716	141						須恵器	無台杯	遺構外
1586	62	C	14	20						3280	54	131	100						須恵器	無台杯	遺構外
1587	63	C	14	20						4598	43	94	90	88					須恵器	椀	遺構外
1588	64	C	14	20						3469	63	332	113						須恵器	椀	遺構外
1589	65	C	14	20						1917	72	789	152						須恵器	有台杯	遺構外
1590	66	C	14	20						2284	77	833	171	96					須恵器	有台杯	遺構外
1591	67	B	8	20		95				5072	107			297					土師器	甕	遺構外
1592	68	A	8	8		98		128		5668	150			450					土師器	甕	遺構外
1593	69	B	8	20		101				3248	380								土師器	甕	遺構外
1594	70	B	8	20		88				3251	554								土師器	甕	遺構外
1595	71	B	8	20		87				4726	166								土師器	甕	遺構外
1596	72	C	14	20						1441	67	1996	143						須恵器	有台杯	遺構外
1597	73	C	14	20						2074	69	983	140						須恵器	有台杯	遺構外
1598	74	C	14	20						2701	75	988	131						須恵器	有台杯	遺構外
1599	75	C	14	20						1504	81	1004	142						須恵器	無台杯	遺構外
1600	76	C	14	20						2089	81	1583	133						須恵器	無台杯	遺構外
1601	77	C	14	20						1502	85	1306	153						須恵器	蓋	遺構外
1602	78	C	14	20						1763	86	1287	142						須恵器	無台杯	遺構外
1603	79	C	14	20						2144	73	1103	118						須恵器	蓋	遺構外
1604	80	C	14	20						4187	48	101	90						須恵器	蓋	遺構外
1605	81	C	14	20						1614	74	1421	173						須恵器	蓋	遺構外
1606	82	C	14	20						2255	63	768	127						須恵器	蓋	遺構外
1607	83	C	14	20						1815	70	1056	116						須恵器	蓋	遺構外
1608	84	C	14	20						2411	69	823	117	84					須恵器	盤	遺構外
1609	85	C	14	20						1920	66	1306	125						須恵器	盤	遺構外
1610	86	C	14	20						1823	71	1397	150						須恵器	盤	遺構外
1611	87	C	14	20						1448	74	2232	148						須恵器	盤	遺構外
1612	88	C	14	20						2486	73	572	126						須恵器	鉢	遺構外
1613	89	C	14	20						843	76	1035	209						須恵器	瓶	遺構外
1614	90	C	14	20						852	94	1105	170						灰釉陶器	短頸壺	遺構外
1615	91	C	14	20						1174	82	1890	150						須恵器	甕	遺構外
1616	92	C	14	20						1522	78	698	147						須恵器	有台杯	岩崎１５号窯
1617	93	C	14	20						3224	55	112	94	79					須恵器	有台杯	岩崎１５号窯
1618	94	C	14	20						2843	57	94	83	116					須恵器	有台杯	岩崎１５号窯
1619	95	C	14	20						1142	78	913	169						須恵器	横瓶	岩崎１５号窯
1620	96	C	14	20						1783	76	1219	134	78					須恵器	鉢	岩崎１５号窯
1621	97	C	14	20						790	74	1375	139						灰釉陶器	長頸瓶	岩崎１５号窯
1622	98	C	14	20						3341	54	120	97	68					須恵器	椀	岩崎２４号窯
1623	99	C	14	20						4244	58	82	103	88					須恵器	椀	岩崎２４号窯
1624	100	C	14	20						2896	68	278	119						灰釉陶器	椀	岩崎２４号窯
1625	101	C	14	20						2960	65	120	140	85					灰釉陶器	椀	岩崎２４号窯
1626	102	C	14	20						2117	82	466	158						灰釉陶器	瓶	岩崎２４号窯
1627	103	C	14	20						1838	84	405	137						灰釉陶器	長頸瓶	岩崎２４号窯
1628	104	C	14	20						1286	80	333	161						須恵器	無台杯	岩崎４５号窯
1629	105	C	14	20						1800	90	590	114						須恵器	椀	岩崎４５号窯
1630	106	C	14	20						2307	67	114	133						須恵器	蓋	岩崎４５号窯
1631	107	C	14	20						1191	87	454	187						灰釉陶器	長頸瓶	岩崎４５号窯
1632	108	C	14	20						1507	73	1003	133						灰釉陶器	長頸瓶	岩崎４５号窯
1633	109	C	14	20						1156	75	705	144	89					灰釉陶器	長頸瓶	岩崎４５号窯
1634	110	C	14	20						1623	75	737	141						須恵器	椀	海老池１号窯
1635	111	C	14	20						2044	82	196	115						須恵器	甕	海老池１号窯
1636	112	C	14	20						1562	77	654	156	90					灰釉陶器	椀	海老池１号窯
1637	113	C	14	20						2296	74	706	136	82					灰釉陶器	狭縁段皿	海老池１号窯
1638	114	B	8	20		67				1367	56			69			103		オニイタ		ＳＵ07

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石 Ch：緑泥石（Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射）Qt：石英 Pl：斜長石　Crist：クリストバライト
Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石　Halloy：ハロイサイト Kaol：カオリナイト　Pyrite: 黄鉄鉱 Au：普通輝石 Py: 紫蘇輝石

加速電圧:15kV、分析法:スプリント法、分析倍率:200 倍、分析有効時間:100 秒、分析指定元素 10 元素。

実験結果は化学分析表（表 3）に示す通りである。

(2) X 線回折試験結果

Qt－Pl

ここでは石英（Qt）と斜長石（Pl）の相関に着眼した。Qt － Pl 相関図（図 63・64）に示すように、Qt（石英）の強度が低い領域から高い領域にかけて Qt：小、Qt：中、Qt：大、Qt・Pl：中、Qt 中・Pl：高、Qt 大・Pl：中、Qt：最大の 7 タイプに分類される。

「Qt：小」タイプは、Qt が 600 ～ 1800、Pl が 60 ～ 110 の領域に分布する。灰釉陶器の長頸瓶が集中し、須恵器と土師器が共存する。「Qt：中」タイプは Qt が 1600 ～ 3800、Pl が 40 ～ 80 の領域である。灰釉陶器が集中し、須恵器と土師器が共存する。「Qt:大」タイプは Qt が 3800 ～ 4800、Pl が 40 ～ 70 の領域で、須恵器が集中する。「Qt・Pl：中」タイプは Qt が 2000 ～ 3200、Pl が 80 ～ 100 の領域に分布し、灰釉陶器の皿が集中する。「Qt 中・Pl 高」タイプは Qt が 3200 ～ 3300、Pl が 300 ～ 600 の領域で、土師器の甕が集中する。「Qt 大・Pl 中」タイプは Qt が 4700 ～ 5700、Pl が 100 ～ 170 の領域に分布する。やはり土師器の甕が集中し、ここでは粘土と共存する。「Qt 最大」タイプは Qt が 6000 ～ 7500、Pl が 60 ～ 80 の領域で、粘土が集中する。

これを土器の種類差で考えると、「Qt：小」タイプには灰釉陶器、「Qt：中」タイプには須恵器、「Qt：大」タイプには須恵器が分布し、土師器は「Qt 中」・「Pl 高」と「Qt 大・Pl 中」に含まれ、種類によって領域が異なることが指摘できる。なお、1572（試料番号 48）は、どのタイプにも属さず、異質となる。

(3) 化学分析結果

ノーマル法（10 元素全体で 100％になる）で計算して、化学分析表（表 3）を作成した。ここから、SiO_2 と Al_2O_3、Fe_2O_3 と TiO_2、K_2O と CaO の関係が試料の特色を表現しやすいと判断して、SiO_2 － Al_2O_3 相関図、Fe_2O_3 － TiO_2 相関図、K_2O － CaO 相関図（図 65 ～ 67）を作成した。

SiO_2 － Al_2O_3

まず、SiO_2 と Al_2O_3（図 65）に着眼する。ここでは SiO_2 が低い領域から高い領域に向かって、Ⅰ～Ⅳタイプに分類できる。Ⅰタイプとしたのは SiO_2 が 55 ～ 66％、Al_2O_3 が 25 ～ 34％の領域で、土師器の甕が広い領域に分散して分布する。Ⅱタイプとしたのは SiO_2 が 64 ～ 72％、Al_2O_3 が 17 ～ 25％の領域で、須恵器が集中し、これに土師器が混在する。Ⅲタイプとしたのは SiO_2 が 68 ～ 75％、Al_2O_3 が 15 ～ 22％の領域で、灰釉陶器・須恵器・粘土が混在する。Ⅳタイプは SiO_2 が 73 ～ 79％、Al_2O_3 が 13 ～ 18％の領域で灰釉陶器と須恵器が混在する。SiO_2 と Al_2O_3 との関係では、タイプの違いは種類の差と一致することがうかがえる。これをまとめると、土師器はⅠ・Ⅱタイプ、須恵器はⅡタイプが主体で、Ⅲ・Ⅳタイプにも分布する。粘土はⅡタイプとなる。

Fe_2O_3 － TiO_2

次に、Fe_2O_3 と TiO_2（図 66）では、Fe_2O_3 が小さい領域から大きい領域に向かって分布している。まず、「Fe_2O_3：小」タイプは、Fe_2O_3 が 1.5 ～ 3.5％、TiO_2 が 0.4 ～ 1.6％の領域にあり、灰釉陶器が集中し、これに粘土が共存する。次に、「Fe_2O_3：中」タイプ

表 3-1　胎土科学分析表

図版番号	試料番号	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	NiO	Total
1525	1	0.26	0.00	16.86	75.12	3.57	0.11	1.11	0.18	2.77	0.03	100.01
1526	2	0.08	0.00	19.68	72.94	2.64	0.22	1.33	0.10	2.84	0.17	100.00
1527	3	0.07	0.00	16.85	75.59	3.32	0.10	1.58	0.00	2.38	0.12	100.01
1528	4	0.08	0.00	16.64	76.56	3.12	0.08	1.22	0.13	2.16	0.00	99.99
1529	5	0.19	0.00	18.70	74.25	2.99	0.14	1.13	0.17	2.28	0.15	100.00
1530	6	0.23	0.00	14.21	77.75	3.05	0.20	1.11	0.04	3.25	0.16	100.00
1531	7	0.00	0.00	15.08	78.62	2.86	0.05	1.04	0.00	2.02	0.34	100.01
1532	8	0.20	0.00	16.46	77.22	2.93	0.15	1.01	0.00	2.04	0.00	100.01
1533	9	0.15	0.00	19.62	72.57	3.70	0.15	1.18	0.00	2.55	0.10	100.02
1534	10	0.19	0.00	17.79	74.40	3.40	0.08	1.22	0.31	2.52	0.09	100.00
1535	11	0.13	0.00	17.58	75.56	3.32	0.04	0.88	0.00	2.39	0.10	100.00
1536	12	0.13	0.00	17.49	75.62	3.52	0.25	1.00	0.10	1.79	0.08	99.98
1537	13	0.16	0.00	18.80	69.98	3.18	0.17	1.21	0.11	6.36	0.02	99.99
1538	14	0.00	0.00	20.76	69.80	2.93	0.11	1.09	0.00	5.29	0.02	100.00
1539	15	0.28	0.00	14.34	77.19	3.03	0.21	0.83	0.00	4.13	0.00	100.01
1540	16	0.38	0.00	17.59	73.74	3.39	0.20	1.10	0.41	3.15	0.04	100.00
1541	17	0.17	0.00	21.34	70.23	2.83	0.25	1.02	0.06	4.10	0.00	100.00
1542	18	0.21	0.00	19.35	67.96	2.91	0.00	1.50	0.00	7.79	0.28	100.00
1543	19	0.09	0.00	21.03	68.55	2.49	0.11	1.19	0.23	6.31	0.00	100.00
1544	20	0.18	0.00	19.46	70.77	2.74	0.16	1.02	0.21	5.42	0.03	99.99
1545	21	0.20	0.00	22.00	68.14	2.82	0.16	0.91	0.39	5.36	0.01	99.99
1546	22	0.00	0.00	17.31	71.89	3.16	0.16	1.21	0.50	5.76	0.01	100.00
1547	23	0.01	0.00	17.59	70.83	2.94	0.22	1.33	0.26	6.67	0.16	100.01
1548	24	0.10	0.00	17.17	72.32	3.05	0.18	1.32	0.00	5.86	0.00	100.00
1549	25	0.10	0.00	17.47	72.91	2.66	0.34	1.10	0.11	5.30	0.00	99.99
1550	26	0.15	0.00	15.52	71.65	3.11	0.19	1.29	0.19	7.90	0.00	100.00
1551	27	0.14	0.00	18.86	72.11	2.54	0.10	1.12	0.00	4.92	0.21	100.00
1552	28	0.08	0.00	16.88	74.68	2.94	0.06	1.28	0.07	3.90	0.12	100.01
1553	29	0.23	0.00	18.06	70.95	2.96	0.14	0.91	0.37	6.38	0.00	100.00
1554	30	0.06	0.00	18.24	69.33	3.27	0.20	1.16	0.23	7.51	0.00	100.00
1555	31	0.01	0.00	17.06	72.14	2.77	0.08	0.95	0.10	6.88	0.00	99.99
1556	32	0.34	0.00	22.98	66.58	3.59	0.15	1.15	0.00	5.22	0.00	100.01
1557	33	0.28	0.00	18.72	68.32	2.77	0.09	1.08	0.38	8.24	0.12	100.00
1558	34	0.15	0.00	23.27	64.45	2.75	0.20	1.17	0.64	7.37	0.00	100.00
1559	35	0.12	0.00	18.12	73.54	2.96	0.23	1.36	0.18	3.49	0.00	100.00
1560	36	0.06	0.00	24.31	64.53	1.89	0.56	1.31	0.49	6.74	0.09	99.98
1561	37	0.37	0.00	16.76	73.52	3.08	0.15	1.07	0.09	4.88	0.09	100.01
1562	38	0.24	0.00	20.02	71.86	3.20	0.21	0.80	0.06	3.61	0.00	100.00
1563	39	0.24	0.00	21.37	69.79	3.27	0.22	0.86	0.17	4.09	0.00	100.01
1564	40	0.54	0.00	20.32	67.01	3.72	0.25	1.10	0.00	7.06	0.00	100.00
1565	41	0.37	0.00	20.66	69.84	3.14	0.23	1.11	0.14	4.44	0.08	100.01
1566	42	0.15	0.00	17.14	71.22	3.58	0.20	1.25	0.27	6.20	0.00	100.01
1567	43	0.06	0.00	21.76	70.35	2.55	0.33	1.13	0.09	3.40	0.33	100.00
1568	44	0.15	0.00	18.73	70.72	2.94	0.14	1.17	0.25	5.66	0.24	100.00
1569	45	0.00	0.00	21.72	69.79	3.06	0.16	0.93	0.00	4.30	0.04	100.00
1570	46	0.14	0.00	11.07	81.85	3.30	0.17	0.64	0.04	2.52	0.27	100.00
1571	47	0.23	0.00	17.93	73.91	3.25	0.08	1.10	0.57	2.90	0.03	100.00
1572	48	0.09	0.00	20.36	71.28	3.37	0.23	1.12	0.10	3.43	0.00	99.98
1573	49	0.00	0.00	17.94	69.85	3.09	0.05	1.10	0.40	7.41	0.16	100.00
1574	50	0.00	0.00	19.62	71.21	3.17	0.10	0.86	0.33	4.69	0.01	99.99
1575	51	0.22	0.00	18.44	71.51	3.31	0.19	1.10	0.07	5.17	0.00	100.01
1576	52	0.24	0.00	19.25	72.21	3.21	0.11	0.93	0.20	3.79	0.06	100.00
1577	53	0.13	0.00	17.43	73.35	3.19	0.05	1.02	0.03	4.78	0.00	99.98
1578	54	0.05	0.00	19.23	71.85	3.40	0.15	1.27	0.05	3.99	0.00	99.99
1579	55	0.03	0.00	20.23	71.00	2.60	0.09	1.08	0.15	4.81	0.00	99.99
1580	56	0.28	0.00	18.03	74.32	3.54	0.26	0.83	0.49	2.24	0.00	99.99
1581	57	0.30	0.00	19.05	74.09	3.09	0.21	0.88	0.00	2.37	0.00	99.99
1582	58	0.08	0.00	16.20	77.22	3.32	0.09	1.14	0.00	1.96	0.00	100.01
1583	59	0.34	0.00	18.64	71.13	4.00	0.21	1.19	0.05	4.35	0.10	100.01
1584	60	0.55	0.00	19.10	72.57	3.44	0.28	0.81	0.02	2.76	0.48	100.01
1585	61	0.10	0.00	15.46	76.45	2.48	0.06	1.13	0.14	4.17	0.00	99.99
1586	62	0.00	0.00	20.41	68.86	2.96	0.15	1.25	0.00	6.22	0.16	100.01
1587	63	0.06	0.00	20.76	66.08	2.12	0.01	1.17	0.07	9.68	0.05	100.00
1588	64	0.00	0.00	16.61	72.16	3.05	0.20	1.06	0.09	6.84	0.00	100.01

表 3-2　胎土科学分析表

図版番号	試料番号	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	NiO	Total
1589	65	0.19	0.00	19.55	70.72	3.03	0.31	0.95	0.20	5.06	0.00	100.01
1590	66	0.05	0.00	20.18	69.97	3.14	0.10	1.13	0.36	5.06	0.00	99.99
1591	67	0.05	0.00	20.59	69.49	1.21	0.17	4.12	0.18	4.12	0.06	99.99
1592	68	0.31	0.00	26.10	64.57	2.98	0.15	1.62	0.00	4.27	0.00	100.00
1593	69	1.07	0.00	25.77	60.54	2.86	0.34	1.09	0.30	8.04	0.00	100.01
1594	70	0.68	0.00	19.62	66.30	3.92	0.27	1.09	0.00	8.12	0.00	100.00
1595	71	0.43	0.00	33.25	56.61	2.53	0.09	1.17	0.11	5.79	0.01	99.99
1596	72	0.10	0.00	16.91	73.93	2.72	0.22	1.07	0.23	4.69	0.13	100.00
1597	73	0.21	0.00	14.63	74.86	3.02	0.09	0.89	0.42	5.86	0.00	99.98
1598	74	0.17	0.00	18.80	72.40	2.57	0.17	1.06	0.03	4.81	0.00	100.01
1599	75	0.26	0.00	16.41	73.71	2.83	0.34	1.10	0.01	5.24	0.11	100.01
1600	76	0.00	0.00	15.60	75.21	2.42	0.02	1.13	0.30	5.19	0.13	100.00
1601	77	0.02	0.00	18.19	70.97	2.94	0.11	0.90	0.00	6.88	0.00	100.01
1602	78	0.03	0.00	18.15	73.60	2.39	0.07	1.16	0.14	4.46	0.00	100.00
1603	79	0.01	0.00	17.63	73.16	2.50	0.14	1.02	0.42	5.13	0.00	100.01
1604	80	0.16	0.00	19.56	66.86	2.01	0.15	1.53	0.66	8.90	0.18	100.01
1605	81	0.08	0.00	17.93	72.89	3.06	0.19	0.94	0.00	4.92	0.00	100.01
1606	82	0.07	0.00	19.24	69.86	2.78	0.09	1.13	0.10	6.32	0.41	100.00
1607	83	0.00	0.00	18.27	69.75	2.71	0.11	1.19	0.12	7.78	0.07	100.00
1608	84	0.15	0.00	14.99	74.38	3.00	0.07	0.89	0.17	6.04	0.32	100.01
1609	85	0.02	0.00	15.66	75.19	2.88	0.30	1.13	0.08	4.55	0.19	100.00
1610	86	0.12	0.00	17.80	72.35	2.38	0.08	1.30	0.02	5.93	0.00	99.98
1611	87	0.27	0.00	17.42	74.88	2.88	0.15	1.08	0.18	3.15	0.00	100.01
1612	88	0.10	0.00	19.15	70.87	3.13	0.12	1.21	0.20	5.14	0.09	100.01
1613	89	0.15	0.00	19.74	70.89	3.06	0.12	1.17	0.07	4.54	0.27	100.01
1614	90	0.57	0.00	18.86	71.42	2.93	0.24	1.01	0.08	4.82	0.07	100.00
1615	91	0.21	0.00	18.94	72.00	2.88	0.11	1.13	0.10	4.62	0.00	99.99
1616	92	0.37	0.00	20.10	70.88	2.98	0.22	0.97	0.00	4.47	0.01	100.00
1617	93	0.19	0.00	23.76	67.99	2.25	0.14	0.95	0.16	4.49	0.08	100.01
1618	94	0.34	0.00	21.07	68.13	3.10	0.27	1.05	0.41	5.47	0.16	100.00
1619	95	0.30	0.00	19.43	71.00	3.28	0.31	0.93	0.24	4.49	0.01	99.99
1620	96	0.26	0.00	17.44	73.09	3.07	0.17	0.94	0.25	4.50	0.29	100.01
1621	97	0.28	0.00	19.17	69.55	3.36	0.26	1.08	0.04	6.09	0.16	99.99
1622	98	0.20	0.00	20.19	65.15	2.90	0.24	1.57	0.46	9.27	0.02	100.00
1623	99	0.02	0.00	19.65	69.85	3.32	0.15	1.05	0.26	5.58	0.11	99.99
1624	100	0.08	0.00	19.51	73.32	3.15	0.14	0.96	0.07	2.67	0.10	100.00
1625	101	0.07	0.00	20.31	72.22	3.44	0.22	1.10	0.00	2.51	0.15	100.02
1626	102	0.00	0.00	17.39	75.82	3.30	0.20	0.80	0.10	2.30	0.09	100.00
1627	103	0.38	0.00	14.47	78.68	3.11	0.32	1.09	0.22	1.74	0.00	100.01
1628	104	0.44	0.00	19.08	70.01	3.55	0.33	1.16	0.28	5.15	0.00	100.00
1629	105	0.39	0.00	17.56	72.99	3.19	0.26	0.87	0.00	4.74	0.00	100.00
1630	106	0.26	0.00	20.10	69.31	3.41	0.24	1.08	0.16	5.44	0.00	100.00
1631	107	0.39	0.00	18.17	72.58	3.26	0.31	1.22	0.15	3.94	0.00	100.02
1632	108	0.46	0.00	18.39	73.24	2.79	0.27	0.71	0.10	3.99	0.05	100.00
1633	109	0.44	0.00	17.92	71.68	3.41	0.26	0.85	0.08	5.29	0.07	100.00
1634	110	0.29	0.00	18.76	72.39	2.89	0.20	0.88	0.00	4.58	0.00	99.99
1635	111	0.31	0.00	18.22	72.64	3.36	0.18	1.05	0.17	4.08	0.00	100.01
1636	112	0.13	0.00	16.75	76.36	3.20	0.38	1.09	0.04	2.04	0.00	99.99
1637	113	0.16	0.00	18.00	74.77	2.94	0.33	1.02	0.13	2.57	0.09	100.01
1638	114	0.33	0.22	11.05	37.19	2.26	0.15	0.28	1.82	46.60	0.11	100.01

表 4　黄土科学分析表

図版番号	試料番号	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	NiO	Total
1559	35	0.20	0.00	17.59	71.99	3.87	0.34	0.96	0.66	4.38	0.00	99.99
1561	37	0.56	0.05	18.90	67.60	5.34	1.66	1.00	0.40	4.49	0.00	100.00
1562	38	0.95	0.34	18.21	66.06	4.62	2.87	0.88	0.66	5.41	0.00	100.00
1563	39	1.04	0.40	19.08	63.62	6.47	2.20	1.01	0.59	5.59	0.00	100.00
1564	40	0.44	0.34	21.61	58.15	4.97	0.43	1.16	0.59	12.01	0.29	99.99
1565	41	0.54	0.00	19.44	61.60	3.60	0.23	1.22	0.55	12.60	0.22	100.00
1566	42	0.05	0.36	19.93	64.70	3.99	2.38	0.92	0.29	6.99	0.39	100.00
1568	44	0.30	0.49	18.43	67.02	4.30	1.72	0.98	0.24	6.54	0.00	100.02
1569	45	0.00	0.00	19.44	64.18	3.38	0.40	1.60	1.06	9.94	0.00	100.00
1638	114	0.33	0.22	11.05	37.19	2.26	0.15	0.28	1.82	46.60	0.11	100.01

は Fe_2O_3 が 3.5 ～ 6.6%、TiO_2 が 0.4 ～ 1.6%の領域で、灰釉陶器と須恵器が集中し、粘土と土師器が混在する。「Fe_2O_3:大タイプは」Fe_2O_3 が 5.5 ～ 8.2%、TiO_2 が 0.4 ～ 1.6%の領域で須恵器が集中し、粘土と土師器が混在する。「Fe_2O_3：最大」タイプは Fe_2O_3 が 8.5 ～ 10.2%、TiO_2 が 1.0 ～ 1.8%の領域には土師器が集中する。なお、1591（試料番号 67）は TiO_2 が 4.12%と高く、Fe_2O_3 － TiO_2 の相関関係から他者とは異質となる。

K_2O と CaO（図 67）では、K_2O が 2.2 ～ 3.3%、CaO が 0 ～ 0.4%の領域に須恵器が集中し、K_2O が 2.8 ～ 3.8%、CaO が 0 ～ 0.3%の領域には灰釉陶器と粘土が混在して分布する。1591（試料番号 67）は K_2O が小さく、1560（試料番号 36）は CaO が大きく、やはり他者とは異質である。

黄　土

また、土器表面には鉄分の強い粘土を塗布することがある。本書では黄土または黄土塗布と表記している。今回、遺跡から採取されたオニイタと黄土塗布が確認される土器 1560 ～ 1569（試料番号 36 ～ 45）の表面部分を化学分析による結果で比較してみた。

分析結果に基づいて、土器とその表面に塗布された黄土をやはり SiO_2 と Al_2O_3、Fe_2O_3 と TiO_2、K_2O と CaO の関係に着眼して比較した（図 68 ～ 70）。両者は明らかに異なる領域にあり異質である。なお、比較資料としたオニイタは、SU07 から出土した 1638（試料番号 114）である。分析結果は Fe_2O_3 が 46.6%と高く、土器に塗布されている黄土とは明らかに鉄の含有量が異なる。仮にこれが原料であるならば、直接破砕後にそのまま土器に塗布しているのではなく、粘土などを混和する調整がなされているとも想像できる。

(4) まとめ

X 線回折試験と化学分析での結果を取りまとめたものが組成分類表（表 5）である。特に SiO_2 と Al_2O_3、Qt と Pl の相関関係に着眼すると 18 タイプに分類できる。以下に示すように、これは、土器の種類と器種の違いとほぼ整合している。

胎土と器種

「SiO_2 と Al_2O_3 が I タイプ、Qt・Pl 大」のタイプは土師器。

「SiO_2 と Al_2O_3 が II タイプ、Pl 高」のタイプは土師器。

「SiO_2 と Al_2O_3 が II タイプ、Qt 中」のタイプは須恵器の坏と蓋類。岩崎 15・24・45 号窯の須恵器と共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 が II タイプ、Qt 大」のタイプは須恵器で、蓋･椀･盤･甑と多種にわたる。

「SiO_2 と Al_2O_3 が III タイプ、Qt 小」のタイプは須恵器で、坏と蓋が主体で岩崎 15・24・45 号窯と海老池 1 号窯の土器と共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 が III タイプ、Qt 中」のタイプは須恵器で、最も個体数が多いタイプである。坏と蓋が主体で、蓋・椀・甕・盤が共存し、岩崎 15・24・45 号窯と海老池 1 号窯の土器と共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 が III タイプ、Qt 大」のタイプは須恵器の坏・甕・椀の各 1 個。

「SiO_2 と Al_2O_3 が IV タイプ、Qt 小」のタイプは須恵器で、坏と盤が共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 と Al_2O_3 が IV タイプ、Qt 中」のタイプは須恵器で、坏と盤が共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 が III タイプ、Qt 小」のタイプは灰釉陶器で、長頸瓶が主体で、岩崎 15・24・45 号窯の土器と共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 がⅢタイプ、Qt・Pl 中」のタイプは灰釉陶器の皿。

「SiO_2 と Al_2O_3 がⅢタイプ、Qt 中」のタイプは灰釉陶器で、椀が主体で、長頸瓶が混在し、岩崎 15・24・45 号窯の土器と共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 がⅣタイプ、Qt 小」のタイプは灰釉陶器で、長頸瓶と大平鉢で、岩崎 15・24・45 号窯と海老池 1 号窯の土器と共存する。

「SiO_2 と Al_2O_3 がⅣタイプ、Qt・Pl 中」のタイプは灰釉陶器の皿。

「SiO_2 と Al_2O_3 がⅢタイプ、Qt 中」のタイプは窯道具のサヤで、灰釉陶器と須恵器のⅢタイプ、Qt 中と組成が類似する。

「SiO_2 と Al_2O_3 がⅢタイプ、Qt 大〜最大」のタイプは粘土で、化学組成としてはⅢタイプの灰釉陶器と須恵器の化学組成と類似するが、Qt の量が異なる。

(5) 考察

長頸瓶の胎土

灰釉陶器については、X 線回折試験で灰釉陶器の Qt − Pl 相関図（図 71）に示すように、灰釉陶器の長頸瓶は「Qt：小」の領域によく集中する。胎土に例えば水簸などにより Qt などを注意深く取り除いたものが使用された結果であろうか。本遺跡資料の中心となる折戸 10 号窯式の長頸瓶は、頸部接合が二段成形で体部の器壁をほぼ極限まで薄く仕上げるが、こうした技術は胎土の管理を前提としたものであったのかもしれない。

椀・皿の胎土

「Qt：中」・「Qt・Pl：中」の領域には灰釉陶器の椀・皿類が分布する。本遺跡と岩崎 15・24・45 号窯の灰釉陶器は灰釉陶器の Qt − Pl 相関図（図 71）で考える限り、よく一致しているといえる。また、「Qt・Pl：中」の領域には灰釉陶器の皿類が比較的集中する。皿類は口径の 40％前後が高台径となり、器高の低さと併せて考えると、ロクロ上での成形段階に形状を維持しにくい姿ともいえる。Pl の値がやや高くなるのはこうした理由であろうか。このように考えることができるのであれば、胎土の管理はここでもうかがうことができる。

次に、灰釉陶器の SiO_2 − Al_2O_3 相関図（図 72）から灰釉陶器をながめると、Ⅲタイプが主体で、Ⅳタイプにも分布している。なお、長頸瓶はⅢタイプにほぼ収まり、胎土のバラツキが少ない器種として注目したい。皿類は Qt − Pl ではまとまりが考えられたが、ここではⅢ・Ⅳタイプ中に分散する。

須恵器の胎土

次に須恵器は、X 線回折試験では須恵器の Qt − Pl 相関図（図 73）に示すように、「Qt：小」、「Qt：中」、「Qt：大」の領域に灰釉陶器より分散して分布する。これは化学分析でも同様で、SiO_2 − Al_2O_3（図 66）相関に注目すると須恵器はⅡタイプとⅢタイプが中心で、ⅣタイプのⅢタイプよりにも分布する。Ⅱタイプに集中する傾向はうかがえるが、やはり灰釉陶器より領域が広い。胎土管理の意職差であろうか。

水簸の存在

灰釉陶器と須恵器は、Ⅱタイプの胎土を中心とすることは共通するが、X 線回折試験では Qt のあり方に差が確認できる。灰釉陶器と須恵器は、この粘土から水簸などの作業により Qt を取り除いて胎土としている可能性も考えられる。

粘土ピット

なお、1570（試料番号 46）の粘土は SK16 の基底部に堆積した白色粘土だが、土器の胎土とは成分が異質となる。遺構の状況は粘土ピットと考えられるが、分析試料は土器胎土との関連性は乏しく、土器製作用の胎土とは異質となる。SK16 を粘土ピットと理解す

表５　組成分類表

図版番号	試料番号	備考 種類	器種	色調	遺跡名
Ⅰタイプ：土師器					
1592	68	土師器	甕	淡黄	金萩遺跡
1593	69	土師器	甕	橙	金萩遺跡
1595	71	土師器	甕	淡黄	金萩遺跡
Ⅱタイプ：土師器					
1591	67	土師器	甕	淡黄	金萩遺跡
1594	70	土師器	甕	橙	金萩遺跡
Ⅱタイプ：須恵器－Ｑｔ中					
1542	18	須恵器	蓋	淡黄	金萩遺跡
1543	19	須恵器	蓋	灰黄	金萩遺跡
1545	21	須恵器	蓋	灰	金萩遺跡
1556	32	須恵器	盤	浅黄	金萩遺跡
1557	33	須恵器	甑	明黄褐	金萩遺跡
1564	40	須恵器	甕	灰	金萩遺跡
1586	62	須恵器	無台杯	黄灰	金萩遺跡
1617	93	須恵器	有台杯	明黄褐	岩崎 15 号窯
1618	94	須恵器	有台杯	黄橙	岩崎 15 号窯
1622	98	須恵器	椀	灰	岩崎 24 号窯
Ⅱタイプ：須恵器－Ｑｔ大					
1558	34	須恵器	甑	にぶい黄橙	金萩遺跡
1560	36	須恵器	陶臼	にぶい黄橙	金萩遺跡
1587	63	須恵器	椀	橙	金萩遺跡
1604	80	須恵器	蓋	浅黄橙	金萩遺跡
Ⅲタイプ：須恵器－Ｑｔ小					
1561	37	須恵器	陶臼	灰白	金萩遺跡
1556	42	須恵器	甕	灰黄	金萩遺跡
1596	72	須恵器	有台杯	淡黄	金萩遺跡
1599	75	須恵器	無台杯	灰白	金萩遺跡
1601	77	須恵器	無台杯	灰	金萩遺跡
1602	78	須恵器	蓋	灰白	金萩遺跡
1605	81	須恵器	蓋	灰	金萩遺跡
1613	89	須恵器	瓶	黄灰	金萩遺跡
1615	91	須恵器	甕	浅黄	金萩遺跡
1616	92	須恵器	有台杯	灰	岩崎 15 号窯
1619	95	須恵器	横瓶	黄灰	岩崎 15 号窯
1620	96	須恵器	鉢	褐灰	岩崎 15 号窯
1628	104	須恵器	無台杯	灰	岩崎 45 号窯
1629	105	須恵器	椀	暗灰黄	岩崎 45 号窯
1634	110	須恵器	椀	灰黄	海老池 1 号窯
Ⅲタイプ：須恵器－Ｑｔ中					
1544	20	須恵器	蓋	灰白	金萩遺跡
1546	22	須恵器	蓋	浅黄	金萩遺跡
1547	23	須恵器	無台杯	浅黄	金萩遺跡
1548	24	須恵器	無台杯	浅黄	金萩遺跡
1550	26	須恵器	椀	黄灰	金萩遺跡
1551	27	須恵器	椀	橙	金萩遺跡
1553	29	須恵器	有台杯	にぶい黄橙	金萩遺跡
1554	30	須恵器	有台杯	灰黄褐	金萩遺跡
1555	31	須恵器	盤	にぶい黄褐	金萩遺跡
1559	35	須恵器	鉢	灰黄	金萩遺跡
1562	38	須恵器	甕	灰白	金萩遺跡
1563	39	須恵器	甕	灰白	金萩遺跡
1558	64	須恵器	椀	にぶい橙	金萩遺跡
1589	65	須恵器	有台杯	黄灰	金萩遺跡
1590	66	須恵器	有台杯	淡黄	金萩遺跡
1598	74	須恵器	有台杯	淡黄	金萩遺跡
1603	79	須恵器	蓋	灰白	金萩遺跡
1606	82	須恵器	蓋	灰	金萩遺跡
1607	83	須恵器	盤	灰	金萩遺跡
1610	86	須恵器	盤	灰	金萩遺跡
1612	88	須恵器	鉢	灰黄	金萩遺跡
1630	106	須恵器	蓋	灰黄褐	岩崎 45 号窯
1635	111	須恵器	甕	黄灰	海老池 1 号窯
Ⅲタイプ：須恵器－Ｑｔ大					
1549	25	須恵器	無台杯	にぶい橙	金萩遺跡
1565	41	須恵器	甕	灰白	金萩遺跡
1623	99	須恵器	椀	灰白	岩崎 24 号窯

図版番号	試料番号	備考 種類	器種	色調	遺跡名
Ⅳタイプ：須恵器－Ｑｔ小					
1585	61	須恵器	無台杯	灰	金萩遺跡
1611	87	須恵器	盤	灰白	金萩遺跡
Ⅳタイプ：須恵器－Ｑｔ中					
1552	28	須恵器	有台杯	褐灰	金萩遺跡
1597	73	須恵器	有台杯	灰白	金萩遺跡
1600	76	須恵器	無台杯	灰白	金萩遺跡
1608	84	須恵器	盤	灰	金萩遺跡
1609	85	須恵器	盤	灰	金萩遺跡
Ⅲタイプ：灰釉陶器－Ｑｔ小					
1614	90	灰釉陶器	短頸壺	灰黄	金萩遺跡
1575	51	灰釉陶器	長頸瓶	黄灰	金萩遺跡
1576	52	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1577	53	灰釉陶器	長頸瓶	黄灰	金萩遺跡
1578	54	灰釉陶器	長頸瓶	灰黄	金萩遺跡
1579	55	灰釉陶器	長頸瓶	黄灰	金萩遺跡
1580	56	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1581	57	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1583	59	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1584	60	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1526	2	灰釉陶器	椀	灰白	金萩遺跡
1537	13	灰釉陶器	長頸瓶	灰黄	金萩遺跡
1538	14	灰釉陶器	長頸瓶	灰	金萩遺跡
1540	16	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1541	17	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1621	97	灰釉陶器	長頸瓶	灰	岩崎 15 号窯
1631	107	灰釉陶器	長頸瓶	灰黄	岩崎 45 号窯
1632	108	灰釉陶器	長頸瓶	にぶい黄橙	岩崎 45 号窯
1633	109	灰釉陶器	長頸瓶	灰黄	岩崎 45 号窯
Ⅲタイプ：灰釉陶器－Ｑｔ・Ｐｌ中					
1533	9	灰釉陶器	Ⅲ	灰白	金萩遺跡
1534	10	灰釉陶器	Ⅲ	灰白	金萩遺跡
Ⅲタイプ：灰釉陶器－Ｑｔ中					
1529	5	灰釉陶器	椀	灰白	金萩遺跡
1539	15	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1624	100	灰釉陶器	椀	灰黄	岩崎 24 号窯
1625	101	灰釉陶器	椀	灰白	岩崎 24 号窯
Ⅳタイプ：灰釉陶器－Ｑｔ小					
1582	58	灰釉陶器	長頸瓶	灰白	金萩遺跡
1525	1	灰釉陶器	椀	灰白	金萩遺跡
1535	11	灰釉陶器	大平鉢	灰白	金萩遺跡
1536	12	灰釉陶器	大平鉢	灰白	金萩遺跡
1627	103	灰釉陶器	長頸瓶	灰黄	岩崎 24 号窯
1636	112	灰釉陶器	椀	灰黄	海老池 1 号窯
Ⅳタイプ：灰釉陶器－Ｑｔ・Ｐｌ中					
1530	6	灰釉陶器	Ⅲ	灰白	金萩遺跡
1531	7	灰釉陶器	Ⅲ	灰白	金萩遺跡
1532	8	灰釉陶器	Ⅲ	灰白	金萩遺跡
Ⅳタイプ：灰釉陶器－Ｑｔ中					
1527	3	灰釉陶器	椀	灰白	金萩遺跡
1528	4	灰釉陶器	椀	灰白	金萩遺跡
1626	102	灰釉陶器	（手付）瓶	黄灰	岩崎 24 号窯
1637	113	灰釉陶器	狭縁段Ⅲ	灰黄	海老池 1 号窯
Ⅲタイプ：窯道具－Ｑｔ中					
1567	43	窯道具	サヤ	灰白	金萩遺跡
1568	44	窯道具	サヤ	浅黄	金萩遺跡
1569	45	窯道具	サヤ	灰黄	金萩遺跡
Ⅲタイプ：粘土－Ｑｔ大～最大					
1571	47	粘土			金萩遺跡
1572	48	粘土			金萩遺跡
1573	49	粘土			金萩遺跡
1574	50	粘土			金萩遺跡
その他					
1570	46	粘土			金萩遺跡
オニイタ					
1638	114	オニイタ		赤褐	金萩遺跡

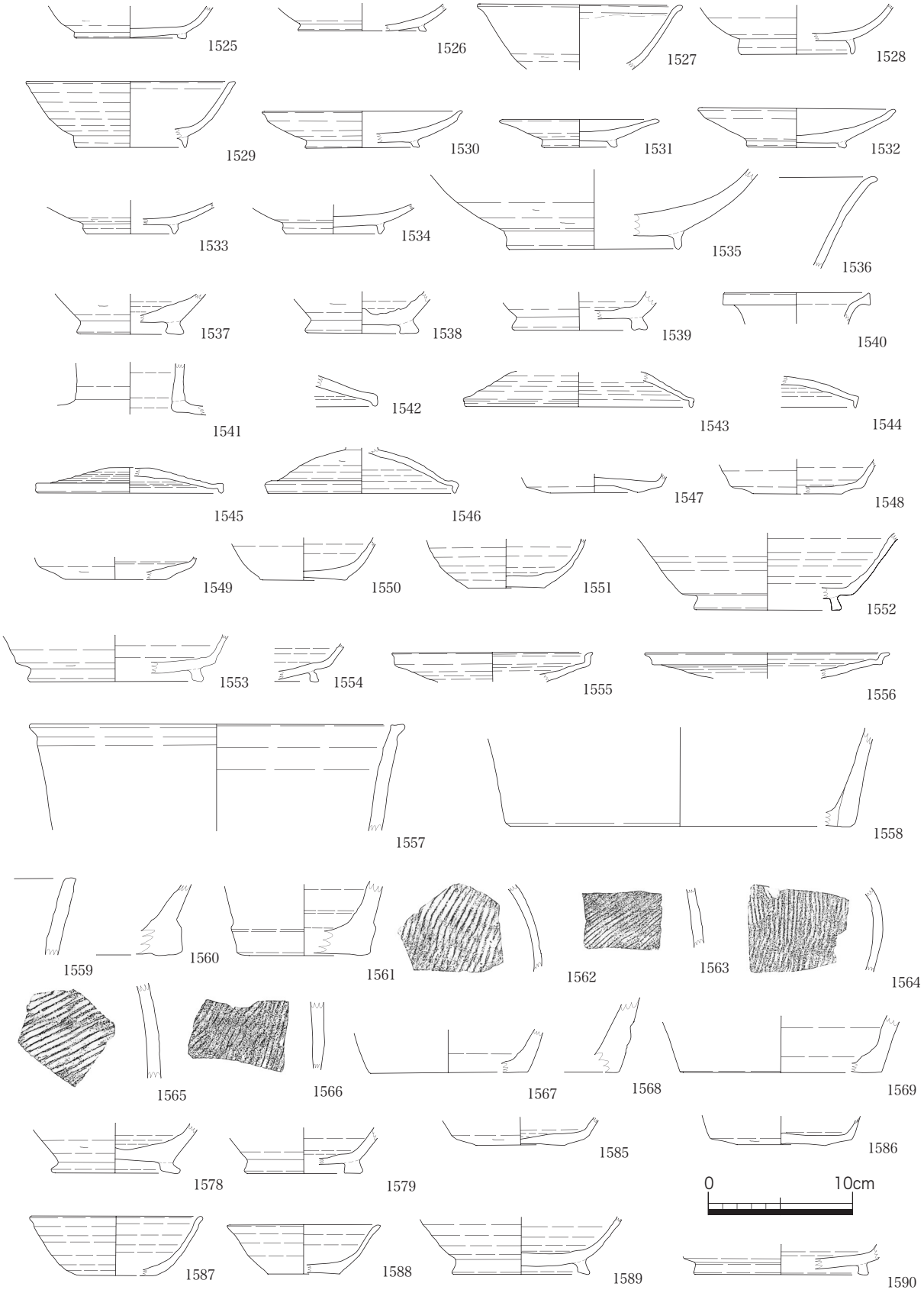


図 61　胎土分析資料実測図 1

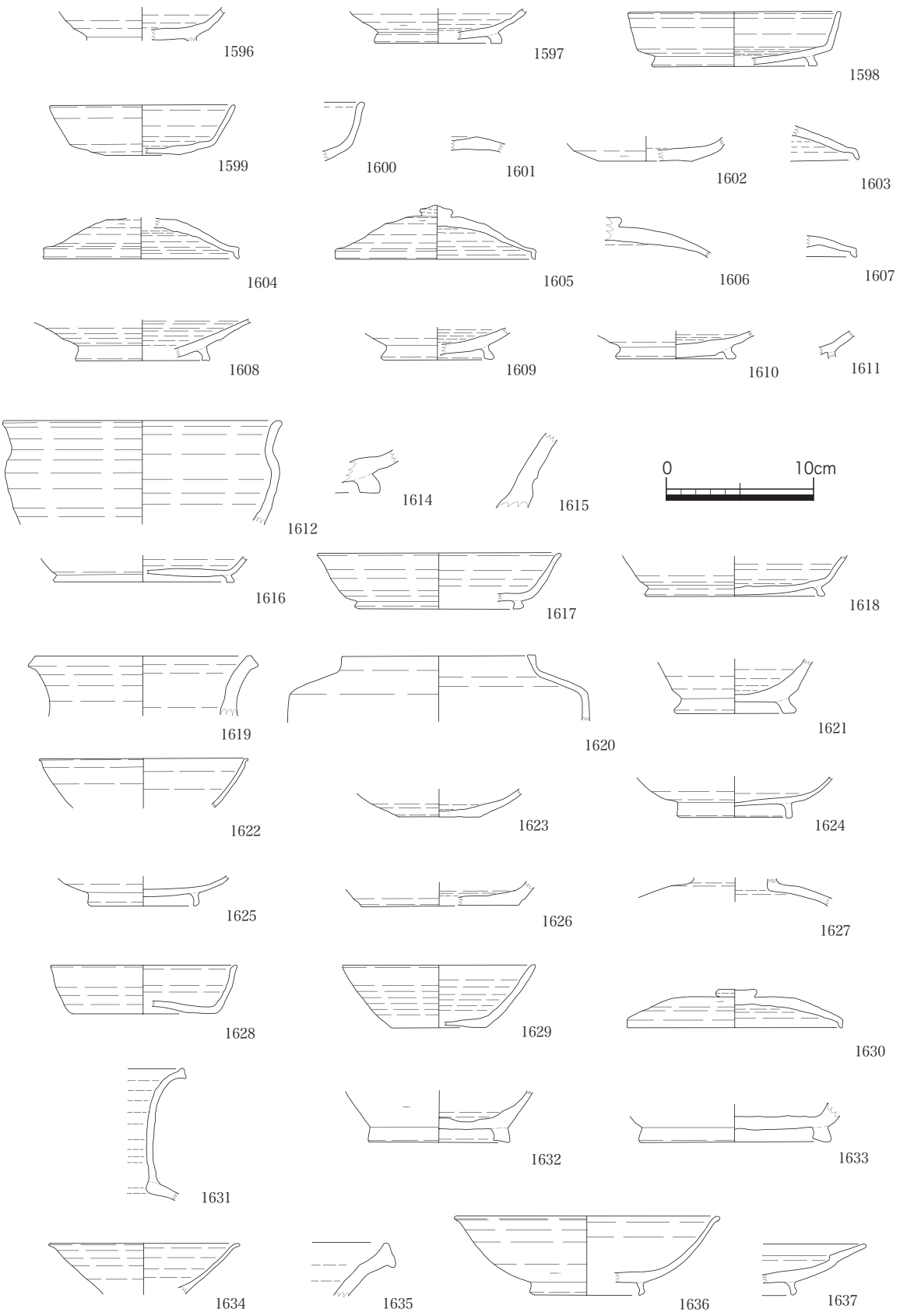


図 62　胎土分析資料実測図 2

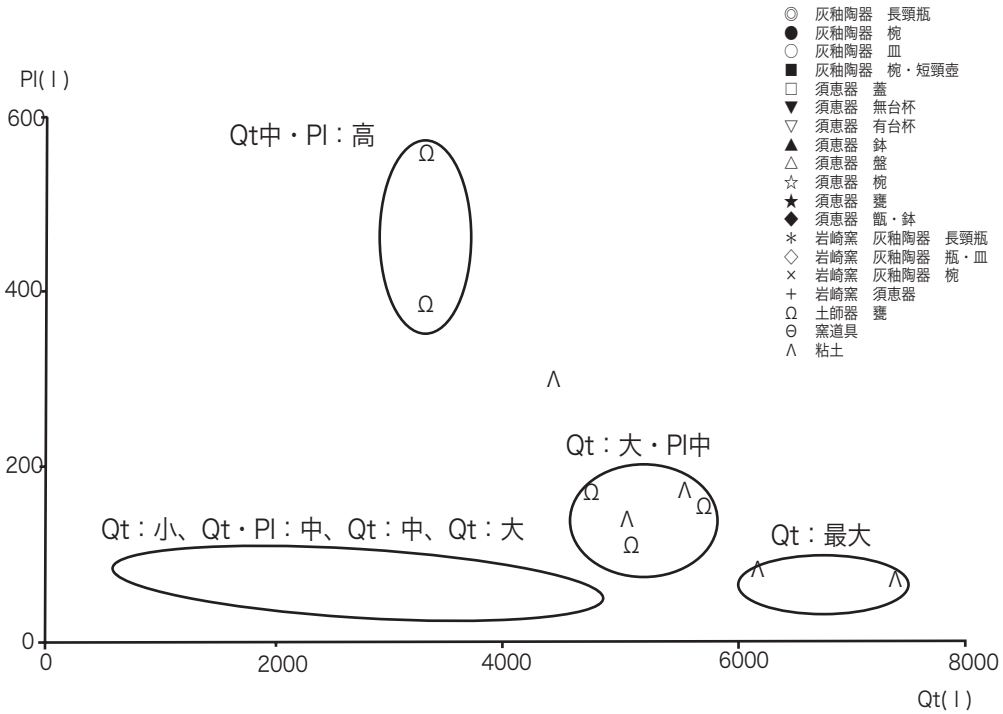


図 63　Qt-Pl 相関図 1

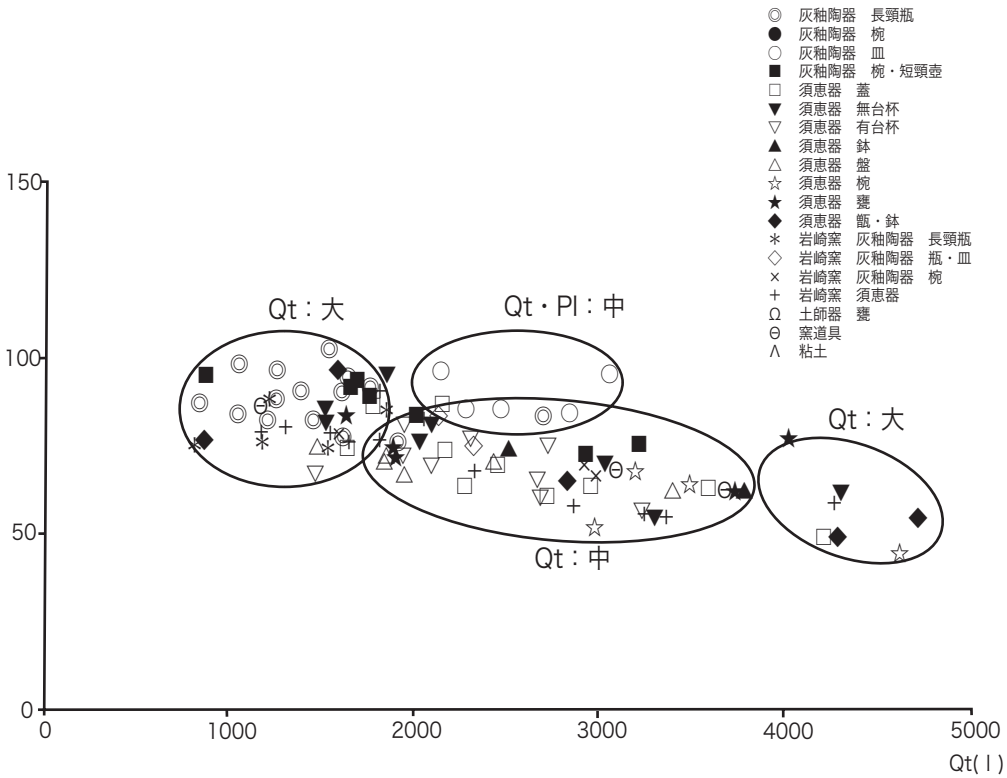


図 64　Qt-Pl 相関図 2

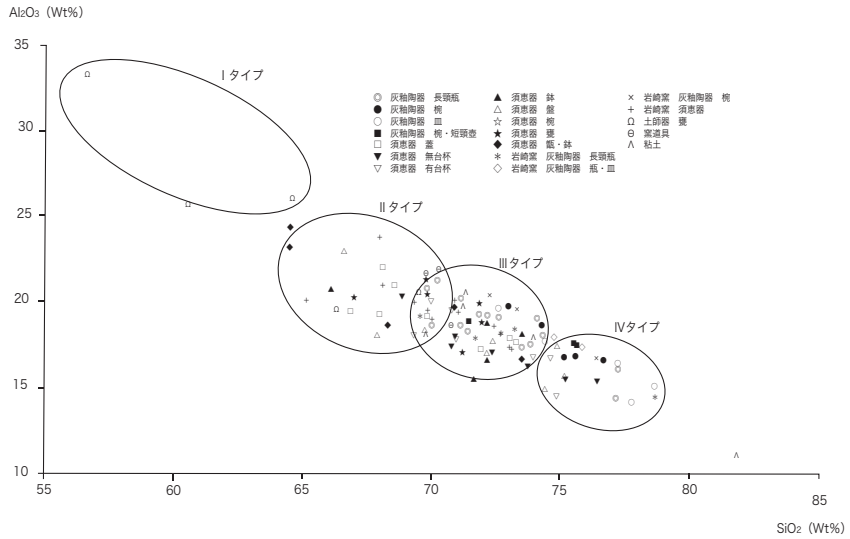


図 65　Sio_2-Al_2O_3 相関図

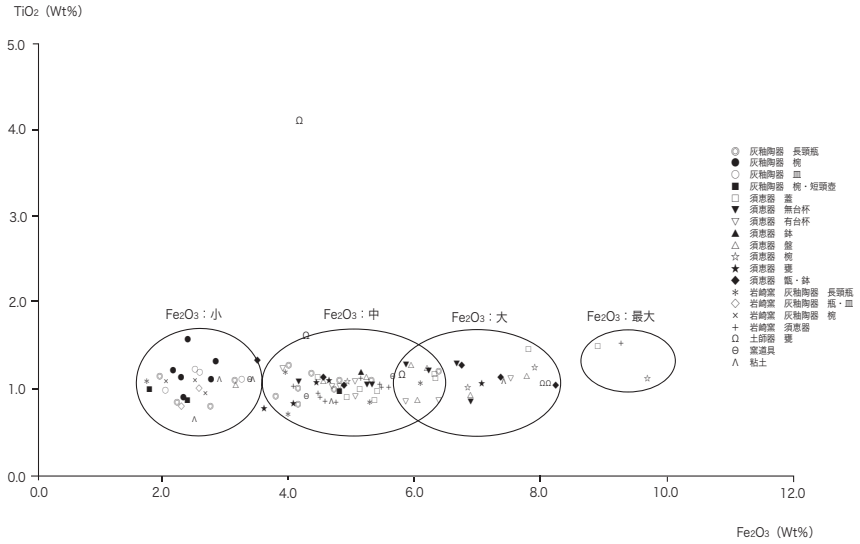


図 66　Fe_2O_3-TiO_2 相関図

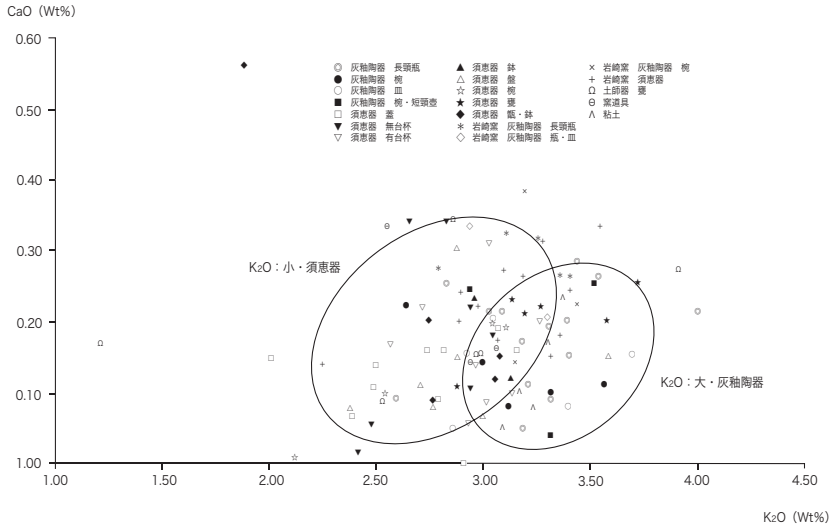


図 67　K_2O-CaO 相関図

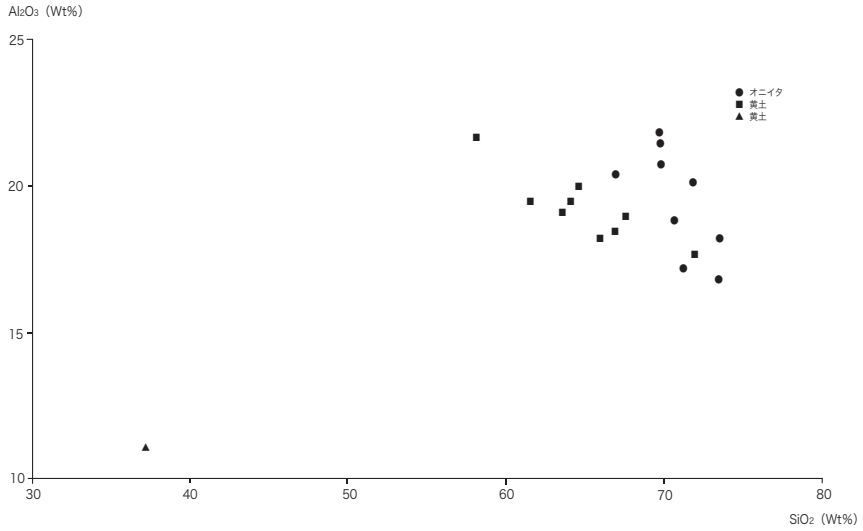


図 68　黄土の SiO_2-Al_2O_3 相関図

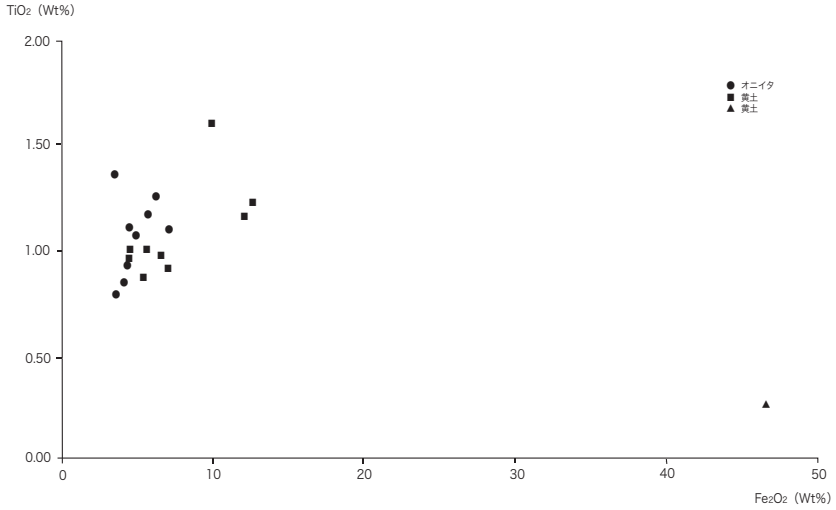


図 69　黄土の Fe_2O_3-TiO_2 相関図

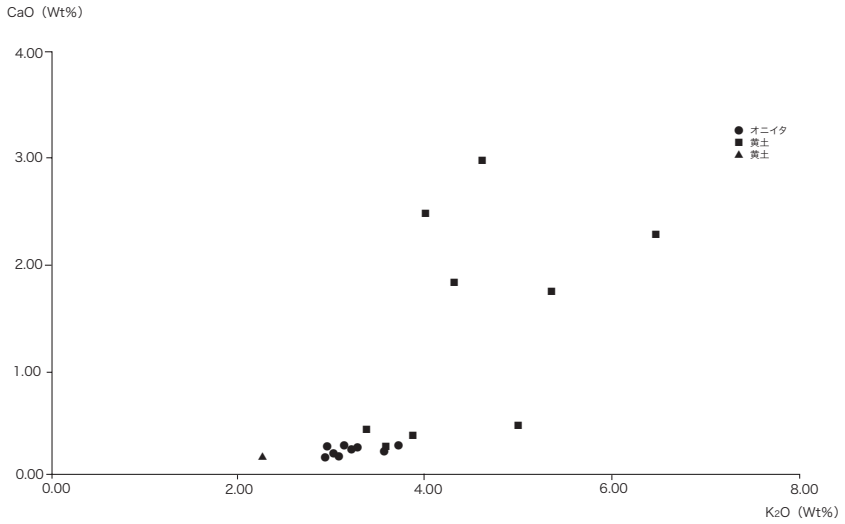


図 70　黄土の K_2O-CaO 相関図

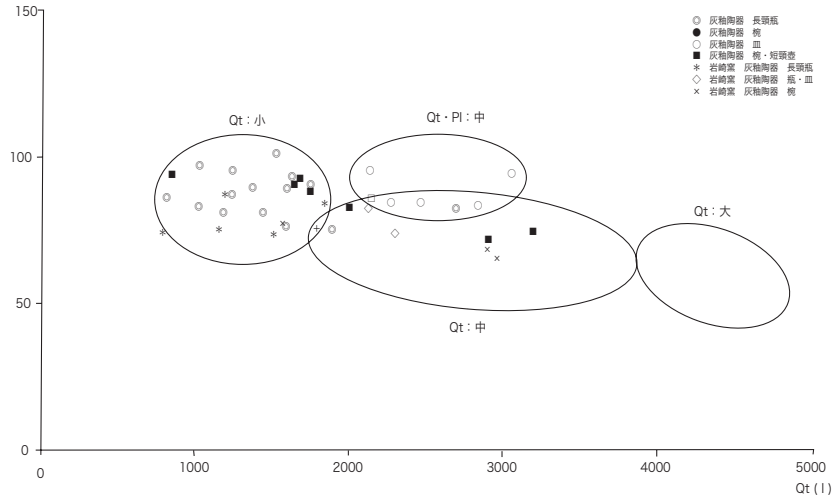


図 71　灰釉陶器の Qt-Pl 相関図

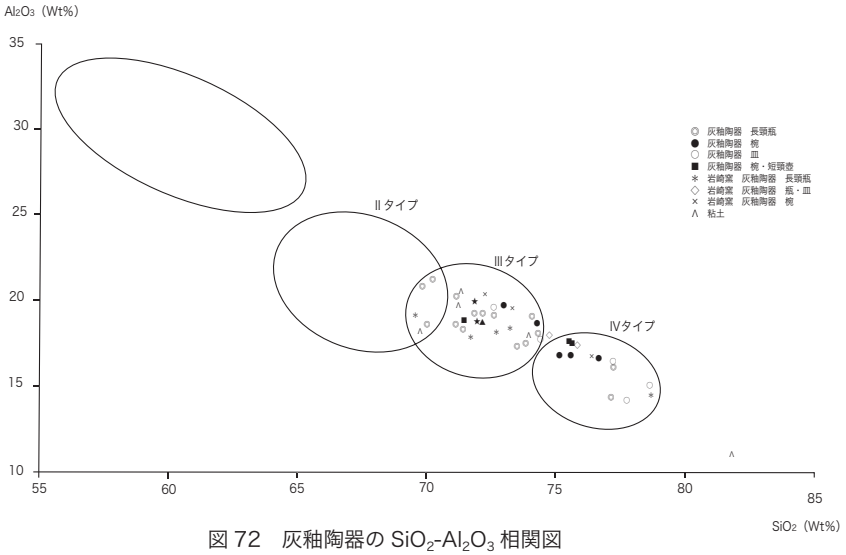


図 72　灰釉陶器の SiO_2-Al_2O_3 相関図

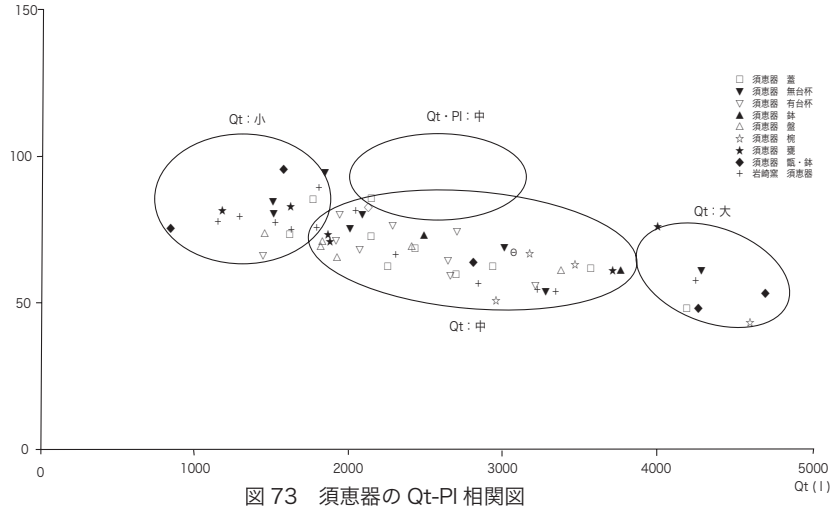


図 73　須恵器の Qt-Pl 相関図

るのであれば、窯体の補修材など別の用途も視野に入れなければならないであろう。また、確認できた白色粘土の厚さは約 1cm で、資料採取時に周辺の土壌も同時に採取してしまった可能性も否定できない。

（執筆は第四紀地質研究所　井上　巖、加筆・要約は池本正明）

2　炭化物の年代測定

(1)　試料と方法

試料の性格

試料は、SK74・SB01・SU01・SU07 からそれぞれ 1 点ずつ採取した炭化物（木片）である。年代測定はパレオ・ラボに委託した。以下には同社から提出された報告書を池本正明が要約したものを掲載する。

AMS 法

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

(2)　結果

表 6 に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値 -25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

暦年代に較正

なお、暦年代較正年代の算出には CALIB4.3 を使用した。暦年代較正値は ^{14}C 年代に

表 6　^{14}C 年代測定・暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1 σ暦年代範囲
PLD-1610 (AMS)	試料　1 SK74	-26.1	1365 ± 30	calAD660	calAD645-685(100%)
PLD-1611 (AMS)	試料　2 SB01	-25.3	1305 ± 30	calAD690	calAD670-720(68.2%) calAD745-765(31.8%)
PLD-1612 (AMS)	試料　3 SU01	-25.5	1275 ± 30	calAD695 calAD715 calAD750 calAD765	calAD690-725(50.1%) calAD735-775(49.9%)
PLD-1613 (AMS)	試料　4 SU07	-26.6	1350 ± 25	calAD665	calAD660-685(100%)

対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1 σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10％未満についてはその表示を省略した。1 σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。　（執筆はパレオ・ラボ　山形秀樹、加筆・要約は池本正明）

参考文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20. Stuiver, M and Reimer , P. J. (1993) Extended^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Rediocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spunk, M. (1998) INTCAL98 Rasiocarbon Age Calibraition, 24,000 − 0 cal BP, Rasiocarbon, 40, p.1041-1083.

3　磁気探査測定

(1)　磁気探査の経緯

窯跡を前提

本遺跡は、本書の第Ⅰ章に記されているように、当初は猿投窯岩崎地区に所在する窯跡の一つと理解されていた。調査に際しては地表面観察が実施されたが、土器片が集中する部分を灰原と想定するにはあまりに緩斜面となっていることも指摘されていた。一方、遺物の散布範囲を中心とした愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査では、遺構と推定される落ち込みも確認されていた。今回の調査区はこの成果をもとに設定されていたが、未知の窯体がこれとは多少はずれた位置に存在していることも予測されていた。

協議の結果、道路予定地内で調査区の西側にある斜面部を中心に平成 12 年 5 月 1 日～30 日にかけて磁気探査を実施することとなった。その結果、以下に報告されているように微少ながらも磁気異常が確認され、地下に窯体が存在する可能性が示唆された地点も指摘されたが、この部分については本調査に平行して試掘調査を実施し、磁気異常が埋没している窯体に起因したものではないことも確認している。

確認調査

以下に磁気探査を実施した応用地質株式会社から提出された報告書を要約して掲載する。なお、図 75 は応用地質株式会社が提示した磁気異常の範囲図と検出された遺構を重ね合わせて作製したものである。紙面の関係で煩雑になっており多少見づらい仕上がりであるが、本書に添付する CD-ROM では、これがカラー版となっている。　（池本正明）

(2)　調査方法

調査の方法

磁気探査は、地表面付近の地磁気を測定し、その磁気分布の中から、遺構や遺物による磁気異常パターンを検出することによって、遺構･遺物の埋蔵位置を推定するものである。窯の床面や壁面は、土器や瓦などの焼成時に受ける高熱のために、長期にわたって熱残留磁気を帯びる。このことから、窯跡や製鉄炉跡は、磁場の異常地点として検出することが可能となる。

地球磁場の強さの分布を測定するには、全磁力法と磁気傾度法とがあるが、今回の調査地は山林で竹や雑木が多いことから、操作性の良い磁気傾度法を用いた。これは、センサー直下の地表近くの地盤が磁場に及ぼす影響のみを測定するもので、人工的ノイズの影響は直接全磁力の大きさをはかる全磁力法よりも少ない。ただし全磁力法に比べて探査深度はやや浅くなる。

磁気傾度法

使用機器はセシウム磁力計（G-858）で、全磁力を測定することのできる２個のセンサーを、アルミ製のポールに上下に 50 センチメートル離して設置した。測定値は、それぞれのセンサーの位置で得られた地磁気強度の上下成分の差である。

測定の手順

調査範囲は約 5000 平方メートルに及ぶ（調査区は約 2500 平方メートル）。測量杭は、センター杭及び道路幅杭を基準に５メートルごとの格子状に設置した。さらにその間に１メートル間隔の格子状の測定点を設置して、測定を行った。測定点は 5431 点を数える。

(3) 解析方法

１メートルごとの測定値にＸ・Ｙ座標を組み合わせて、磁場強度の分布をコンター図にして表す。この際、データの良否を検討、異常データが見られる場合は再測定をする。その後、各測定データを１つに組み合わせて調査範囲内の磁気異常分布図を作成する。この磁気異常分布図から磁気異常箇所を見つけだし、地形や人工的ノイズの影響などを考慮しながら、遺構の可能性が考えられる磁気異常箇所を指摘していく。磁気探査では、窯跡の保存状態が良好であって、しかもノイズの影響を除去した適切な測定が為されれば、ほぼ的確に窯跡の所在を指摘することができる。窯跡があった場合の反応形状としては、日本のような北半球中緯度地域の場合、その南側で高磁力、北側で低磁力となるような正負一対の磁気異常パターンを示す。ただし、実際には窯跡によるものだけではなく、複雑な地形や地盤の影響を受けていることも考えられるので、探査の結果、遺構の可能性が考えられる磁気異常箇所は、全て網羅的に指摘した後、明らかに窯跡遺構以外の原因によるものとみられる箇所を除外することによって、可能性のある箇所を絞り込んでいく。さらに、窯跡の推定に当たっては、a. 磁気異常（アノマリー）パターンが、ある程度の広がりをもつこと、b. 窯跡が埋蔵するとみられるような傾斜面に現れること、c. 磁力値が±100nT（ナノテスラ）程度の範囲内であること（経験則より）、以上の３つの条件を参考にした。

解析の方法

(4) 調査結果

まず、調査地北側では斜面に直交するような方向で磁気異常が２ヶ所確認できた。アノマリーA･B と呼ぶ。アノマリーＡは、磁力値± 50 ± 100nT 前後。条件ａには不十分であるが、『窯跡の反応と同等の値であること』及び『やや連続した反応であること』、『適度な勾配の斜面に直交していること』から、要注意箇所と考えられる。アノマリーＢは、長さ約 20 メートル、幅４～５メートル程度の磁気異常。この部分においては金属板が浅部にあり、近辺にこの影響があると考えられるが、『金属板の影響を受けているが、その影響範囲としては広く、また窯跡に類似する反応形状であること』及び『適度な勾配の斜面に直交していること』から、要注意箇所と考えられる。

磁気異常地点

次に調査地中央付近では、アノマリーCが確認できた。磁力値± 50nT 以下の弱い反応。さらに不連続であるために、窯跡の可能性は極めて低い。が、窯体の大部分が切削されたと仮定すると、このような分割された探査結果が得られるとも考えられる。また、適度な勾配の斜面に直交していることやアノマリーCより低地側の山道付近において、多数の遺物が散布していたことから、注意箇所として挙げられる。

ノイズの存在

なお、調査地東側では、住宅地からの影響やゴミの焼却跡、農地の導水施設と思われるU字型金属板等の地表部の影響により磁気異常は強く乱れ、地下の磁気異常は捉えられなかった。また、ゴミ穴と思われる直径 40cm 程度の竪穴が 6 箇所確認でき、いずれも金属製ゴミと思われる強い磁気異常が現れた。また、山道沿いにも強い磁気異常が確認できたが、窯跡の反応にみられるような連続性はないため、金属製ゴミに起因するものと思われる。

(5) まとめ

調査地内の低地側には複数の土器片が散布していることから、窯跡の存在を推測することはできるが、斜面の大幅な切削によって地形が大きく改変されており、旧地形及び窯体の残存状況は良好ではないと考えられる。

三地点で確認

今回の磁気探査においては、必ずしも窯跡を示唆する明瞭な磁気異常ではないが、3 箇所の連続する磁気異常（アノマリーA～C）が検出できた。

（執筆は応用地質株式会社　畠山晃陽・高瀬尚人、要約は神谷巳佳）

図 74　磁気探査測定

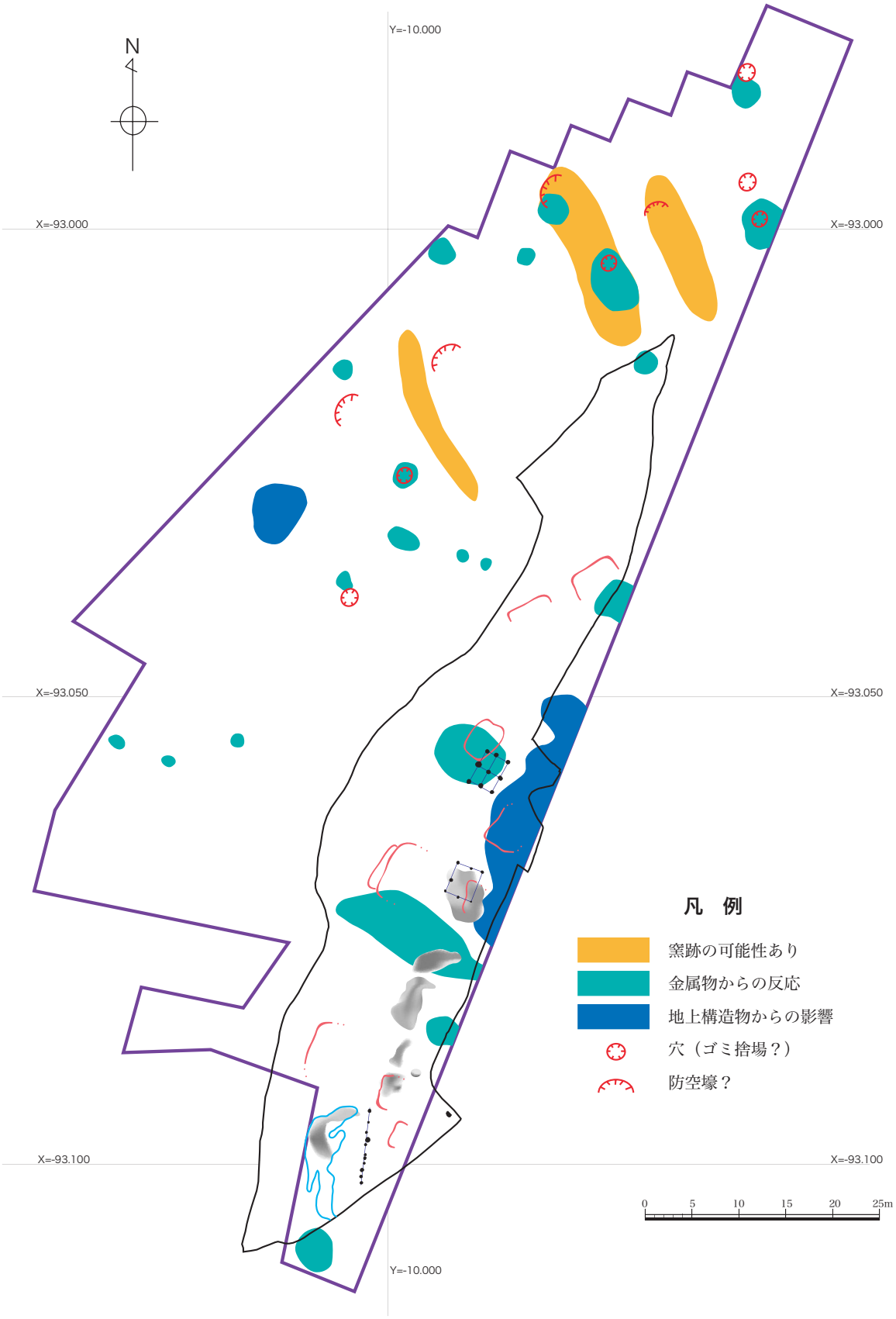


図 75　磁気探査結果と検出遺構

第Ⅴ章　Ⅰ期の遺構・遺物について

(1) 主要遺構の変遷

今回検出した遺構は、Ⅰ期とした奈良時代〜平安時代に集中している。調査区が狭く、空間的な動向は把握しにくいが、ここではⅠ期の遺構をさらにⅠ－1期とⅠ－2期に二分してみる。

まず、Ⅰ－1期は、岩崎25号窯式〜鳴海32号窯式頃となる。調査区内では、SB01・02、SK281などが検出される。遺構は希薄で、土器製作に関連する遺構も未検出となる。調査区内に限定すれば、土器工人集落としての性格をうかがうことができない。ただし、出土遺物には使用に耐えないような資料も含まれ、これらが調査区外に存在している可能性もある。

中心的時期

Ⅰ－2期は折戸10号窯式〜黒笹90号窯式頃となる。今回検出できた遺構のほとんどがこれに含まれる。調査区内にはロクロピットや土器集積遺構が登場し、土器製作集落としての性格が確立した段階と考えられる。竪穴住居もSB03･04･06･07が折戸10号窯式、09〜11が井ヶ谷78号窯式〜黒笹14号窯式の須恵器･灰釉陶器が出土していることから、これらを一応区分できるが、調査区内では分布状況などに差を見出すことができない。

ＳＢ０７

土器製作や搬出に関連する遺構としては、ロクロピットを付設するSB07がある（理由は後述）。土器集積遺構は、SU06とSU07がほぼ折戸10号窯式で占められ、SU01〜05には黒笹90号窯式までの灰釉陶器が含まれている。北側が古く南側が新しい傾向にある。

以下、今回検出できた遺構を観察する。ただし、本遺跡を特徴付ける土器製作集落としての性格に着眼するため、ほぼⅠ－2期に限定されたものとなっている。

(2)　土器生産の関連遺構

ここでは、Ⅰ－2期に限定した記述を行なう。

ロクロピット

この時期を土器製作に関連すると理解した最大の理由はSK133（以下、ロクロピット）の検出である。ただし、ロクロピットについては、SD12かSB07のどちらに帰属させるか問題となっている。ロクロピットからは出土遺物が得られず、遺物から年代を推定することができない。以下、遺構の残存状況、位置関係などから帰属時期を推定したい。

本遺跡のロクロピットは、検出面からの深さが19cmと浅すぎ、ロクロ軸を固定するには不安定となる。竪穴住居に帰属し、上面がSD12により削平されたと考えるのが自然であろう。ところで、ロクロピットの位置はSB07の周溝内側の上端から、ロクロピットの中心まで最短で30cmとなる。この距離でロクロ台が設置できるのかが問題となろう。

表７　出土遺物集計表

種類	器種	竪穴	SD9・10	SD12	他溝	SK01	SK93	SK97	SK259	SK260	SK276	SK292	SK412A	他土坑	SU01	SU02	SU03	SU04	SU05	SU06	SU07	SX	遺構外	合計	%
須恵器	有台杯	9	28	9	15	2	0	4	3	3	17	3	9	55	18	16	1	9	21	40	102	0	497	861	1.970%
須恵器	無台杯	29	40	4	11	2	4	19	20	9	19	0	16	41	44	26	2	12	52	98	140	0	1063	1651	3.778%
須恵器	杯類不明	93	145	14	44	4	22	16	10	13	97	10	42	114	167	127	1	21	188	183	634	0	3911	5856	13.400%
須恵器	蓋	77	99	5	58	4	15	33	11	15	62	17	51	158	160	97	3	18	132	195	425	1	2922	4558	10.430%
須恵器	無鈕蓋	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3	1	1	1	1	0	0	179	191	0.437%
須恵器	有台盤	33	35	10	15	1	1	21	5	3	19	0	17	27	53	28	3	15	44	39	57	0	884	1277	2.922%
須恵器	高盤	0	4	0	3	0	0	0	0	0	1	0	3	6	9	8	0	2	9	4	16	0	225	290	0.664%
須恵器	大盤	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	10	0.023%
須恵器	盤・蓋不明	16	34	0	19	0	8	0	8	5	15	4	0	27	28	33	0	4	31	43	154	0	1474	1903	4.355%
須恵器	盤・有台杯不明	1	17	0	3	0	0	0	0	0	0	2	0	9	16	7	0	1	4	0	22	0	209	290	0.664%
須恵器	椀	12	12	6	10	0	1	10	2	4	3	1	0	8	46	19	3	3	22	51	71	0	470	754	1.725%
須恵器	鉢	19	63	11	20	0	2	7	7	12	36	9	3	146	102	47	1	11	14	65	152	0	966	1693	3.874%
須恵器	仏鉢形土器	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	18	5	0.011%
須恵器	陶臼	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	1	1	0	4	1	0	41	53	0.121%
須恵器	横瓶	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0	5	0	14	28	0.064%
須恵器	甕	45	119	14	9	3	17	16	14	15	51	8	8	143	67	27	3	5	46	29	107	0	1554	2300	5.263%
須恵器	壺・甕不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.002%
須恵器	甑	0	6	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	7	2	4	1	0	3	5	4	0	30	64	0.146%
須恵器	ハソウ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0.005%
須恵器	双耳杯	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	2	0	7	15	0.034%
須恵器	風字硯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.002%
須恵器	円面硯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.002%
須恵器	器種不明	146	93	5	57	6	27	47	25	26	97	28	60	235	208	48	4	17	106	192	593	0	6707	8727	19.969%
灰釉陶器	椀	0	33	25	0	23	0	0	2	0	0	0	0	6	52	55	8	1	3	0	1	0	389	598	1.368%
灰釉陶器	平皿	0	24	6	0	13	0	0	0	0	0	0	0	2	28	22	0	1	1	0	0	0	315	412	0.943%
灰釉陶器	輪花	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.002%
灰釉陶器	稜皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	0.009%
灰釉陶器	広縁段皿	0	5	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8	5	1	0	0	0	0	0	70	95	0.217%
灰釉陶器	狭縁段皿	0	7	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	3	3	0	0	0	0	0	0	99	117	0.268%
灰釉陶器	耳皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	20	0.046%
灰釉陶器	三足盤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	0.011%
灰釉陶器	椀・皿不明	2	106	4	3	8	0	0	0	0	0	1	2	17	109	44	3	0	7	6	2	3	3149	3466	7.931%
灰釉陶器	大平鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0	0	0	23	30	0.069%
灰釉陶器	長頸瓶	5	12	2	5	3	0	2	4	1	1	0	4	25	26	9	0	4	3	14	44	1	527	692	1.583%
灰釉陶器	（手付）瓶	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	33	39	0.089%
灰釉陶器	平瓶	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	8	0	0	0	0	8	3	0	36	60	0.137%
灰釉陶器	水瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0.009%
灰釉陶器	双耳瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0.007%
灰釉陶器	（手付）小瓶	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	11	13	0.030%
灰釉陶器	環状手付瓶	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.007%
灰釉陶器	短頸壺	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	3	3	0	16	24	0.055%
灰釉陶器	短頸壺蓋	7	4	4	1	0	1	2	0	0	3	0	0	3	4	7	0	0	0	3	23	0	89	144	0.330%
灰釉陶器	瓶・壺不明	27	48	10	26	5	3	9	13	8	24	3	19	83	119	52	1	11	48	104	129	1	2521	3264	7.469%
ミニチュア	無台杯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	5	7	0.016%
ミニチュア	盤	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.002%
ミニチュア	鉢	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	2	0	22	30	0.069%
ミニチュア	長頸瓶	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	2	0	2	1	0	0	2	1	6	0	29	46	0.105%
ミニチュア	平瓶	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3	0.007%
ミニチュア	短頸壺	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0.005%
ミニチュア	蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	19	21	0.048%
ミニチュア	器種不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	3	0.007%
灰白軟陶	蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.002%
土師器	甕など	276	77	22	1	40	55	85	4	19	6	12	32	374	110	42	53	7	33	89	674	42	1863	3916	8.961%
破片転用	転用焼台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0.009%
破片転用	研磨具	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6	8	0.018%
窯道具	ツク	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2	1	0	22	30	0.069%
窯道具	サヤ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	2	0	0	0	12	17	0.039%
窯道具	棒状のトチン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	2	0	14	19	0.043%
窯道具	異形トチン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.002%
合計		808	1017	159	308	121	157	271	134	133	454	100	269	1510	1406	740	90	146	774	1182	3379	48	30496	43702	

青森県野木遺跡（中嶋他　2000）では、古代のロクロ下板が1点出土している（1648）。直径は24cmで、中央にロクロ軸を通したと考えられる穿孔があり、直径は6cmとなる。本遺跡のロクロピットでは、ロクロ軸を埋設した痕跡を確認しているが、これが逆台形となっている。ロクロの廃絶時のロクロ軸を抜き取る段階で、これが上下左右に動かされたためであろう。下部を計測することで本遺跡で使用されたロクロ軸の直径を推定すると、6～8cmとなり青木遺跡ロクロ下板とほぼ同サイズとなる。本遺跡の事例を青木遺跡と同様の構造に想定し、ロクロ上板の直径も下板と近いと仮定するのであれば、SB07にロクロ台を設置してこれを稼働させることが可能となる。

以上の理由から、ここではロクロピットをSB07に設置されたものと理解しておく。古代のロクロピットは土師器製作用も含めると各地で検出されているが、福島県折木遺跡（国井他　2001）などに例外はあるものの、基本的には竪穴住居内に設置されるもので、本遺跡の例もこれと同様に考えたい。しかし、ロクロピットの竪穴住居内での位置は、ほぼ中央となるのが通例（木村　1998他）で、本遺跡のように隅の壁際に位置する例は確認できなかった。現状ではこの差異が何を意味するのかが明らかにできないが、本遺跡では竪穴住居内のロクロピットが他遺跡とはやや異なった位置に存在することは注意しておきたい。

(3)　出土土器の特色

遺物の集計

ここでは出土資料の特色を明瞭にするため、I期に属する土器の破片数を集計してみた。結果は遺物集計表（表7）に示すが、ここで提示するデータは、接合後の破片数を集計したものである。器種分類については、破片資料もできるだけ区分したため、幾つかの問題点が存在している。まず、壺･瓶胴部片は器種の判明するものについては区分しているが、長頸瓶の体部や底部に含めたものには水瓶・浄瓶などが入っている可能性もある。また、ミニチュア品については、長頸瓶・鉢・短頸壺の分離が不十分となっている。鉢は平底のものをまとめたため一部に窯道具のツクが含まれている可能性がある。

土鈴の祭祀

次にやや特殊な祭祀に関連した資料に着眼する。これらは土器製作集落の個性である可能性とも考えることができる。まず、土鈴は焔を使用する工人集団に関連した祭祀に伴う遺物と評価されており、関東以北の太平洋岸で生産遺跡に散見するものである（下山　1966）。土鈴には金属製を忠実に再現した精製品から本遺跡例のような粗製品まで様々となっている。ここでは一例として本遺跡資料に類似する土鈴として福島県鳥打沢A遺跡1号製鉄炉の廃滓場・作業場、これに関連すると推定されている7号住居址の資料を転載する（吉田他　1990、1642～1645）。

古代に属する土鈴は、猿投窯関係では本遺跡を除き報告されてはいない。一方、東濃窯では多治見市で事例が点在する。明和27号窯（桃井　1990、1639）、白土原14号窯（山内　1994、1640）の事例は大振りで長い柄部が付くが、住吉1号窯（楢崎　1976）の資料は柄部が短い。明和40号窯資料（桃井他　1997、1641）は柄部を欠く。美濃須衛窯でも土木工事の残土から、須恵質の精製品が単独で採集されているという（渡辺博人氏の御教示による）。ただし、これらはいずれも陶質で精製となり、本遺跡例とは異なるが、東海地域の窯跡でも土鈴の出土が確認できることは興味深い。なお、近隣で窯跡以外の事

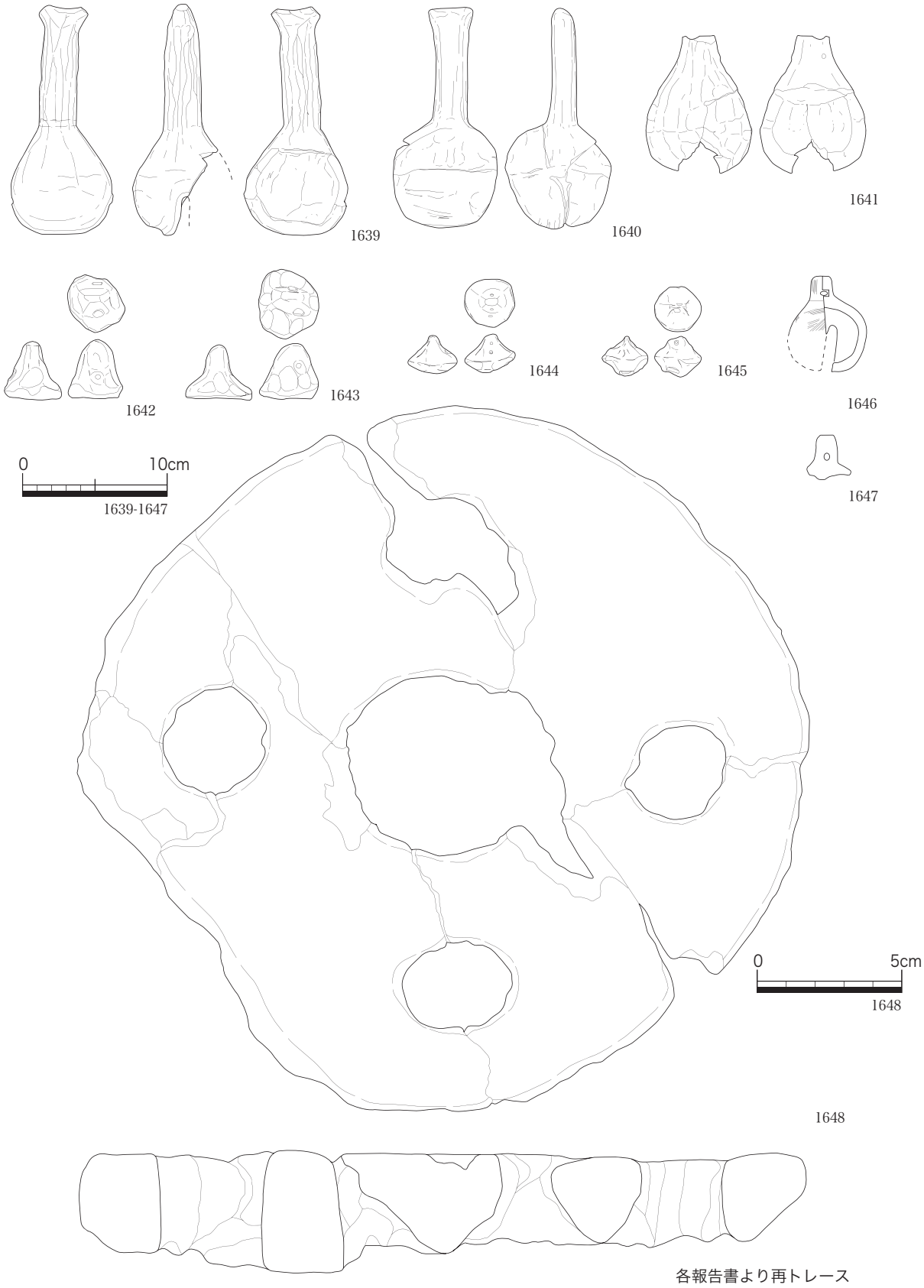

1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
0
10cm
1639-1647
0
5cm
1648
1648
各報告書より再トレース

図 76　関連資料実測図

例としては湖西市大知波峠廃寺の事例がある。ここでは、これを寺院での公事と関連する資料と推定している（後藤　1997、1646、1647）。

次に『卄』の刻書土器であるが、本遺跡では、『卄』の全形をとどめるものが3点、一部を欠くがその可能性が極めて強いものが5点出土している。平川　南氏により指摘されているように（平川　1991）、『卄』は漢字ではなく記号で、密教系、あるいは道教系の祭祀に登場する九字の略記であろう。なお、本遺跡資料では器面に使用痕も確認でき、これらが集落内で使用されることを前提として製作されたものであった可能性が強い。

窯　道　具

最後に窯道具であるが、本遺跡ではツクが30点、サヤが17点、トチが20点、破片を転用した焼台が4点出土している。窯道具の存在は、本遺跡を土器製作関連遺跡として理解する根拠の一つに利用しているが、製品として出荷されないこれらが遺跡から一定量含まれることも、不可解な状況である。窯道具は製品の焼成不良を防ぎ、歩留まりを高める役割を担ったものである。想像とはなるが、これらに特別な意味が込められていても不思議ではない。

ミニチュア品

また、ミニチュア品にも注目しておきたい。ミニチュア品は一般には井ヶ谷78号窯式が生産の中心に考えられている。しかし、本遺跡ではほとんどの資料が折戸10号窯式の段階となっており、ミニチュア品もむしろこの時期に考えることが妥当であろう。これらは二次選別に排除された資料ではなく、集落内の祭祀に関連するものではなかろうか。

(4)　工人集落の背景

本書第Ⅱ・Ⅲ章に報告されているように、本遺跡では土器集積遺構や廃棄土坑に完形品を多く含むまとまった量の土器が出土している。一方、生産関連の遺構としてはロクロピットが1基確認されたにとどまる。調査範囲が限定されてはいるが、集落内の生産規模は土器集積遺構に相応したものではなかろう。こうした土器集積遺構の存在は、生産者主体の窯出時の選別とは別の意志による選別がなされていたことを想像させる。別の意志とは、土器生産者を掌握する存在である。そして、生産に関連する遺構に比較して土器集積遺構

集　荷　場

が目立つのは、本遺跡が複数の窯（または集落）から製品を集める集荷場の役割も持ち、ここでの検品の存在が予測できる。土器の集荷場は大規模生産地に特徴的に出現する（山田　1991）とされ、各地で報告されているが、近隣には湖西窯の湖西運動公園内遺跡群（嶋　1979）や吉美中村遺跡（高橋　1990）を事例としてあげることができる。

本遺跡資料の大半が、集荷場で実施された二次選別に関わるならば、集落遺跡出土のそれと比較して、何らかの差が存在せねばならない。これについては、本遺跡の資料は、焼き割れや気泡、焼き歪みなどの焼成ムラが観察できる他、器面に黒色斑をもつ須恵器も目立つ。一応これらを特色として理解しておく。なお、それぞれの観察結果は、本書に添付したCD-ROM中の遺物計測一覧に記載されている。

刻　書　土　器

ところで、本遺跡で確認できた刻書土器に『卄』がある。前述したように九字の略称と考えられる。県内では、墨書土器も含めた『卄』の出土例は確認されてはおらず、本遺跡の特徴となっている。九字は最先端の教養であるはずで、これらの刻書土器が本遺跡内で使用することを前提としたものであったとしたら、律令官人との関わりも考えねばならないであろう。集落内の生産に加えた、外部からの集荷場セクションの併設はこの想定と

よく一致している。また、本遺跡では、転用硯と推定できるものが７点含まれているが、これらも律令官人との関わりを想像できる資料である。

本遺跡は出土遺物の器種構成から、猿投窯で最高級の製品ではなく、量産品の生産に関わった集落と考えられる。このため特殊な器種も少ない。恐らく同様の性格を有する集落が各所に存在しており、これらの掌握には律令官人も関わったと考えられる。

（池本正明）

転　用　硯

器面には目印として直径 8mm のタックシールを貼付

図 77　黒斑のある須恵器

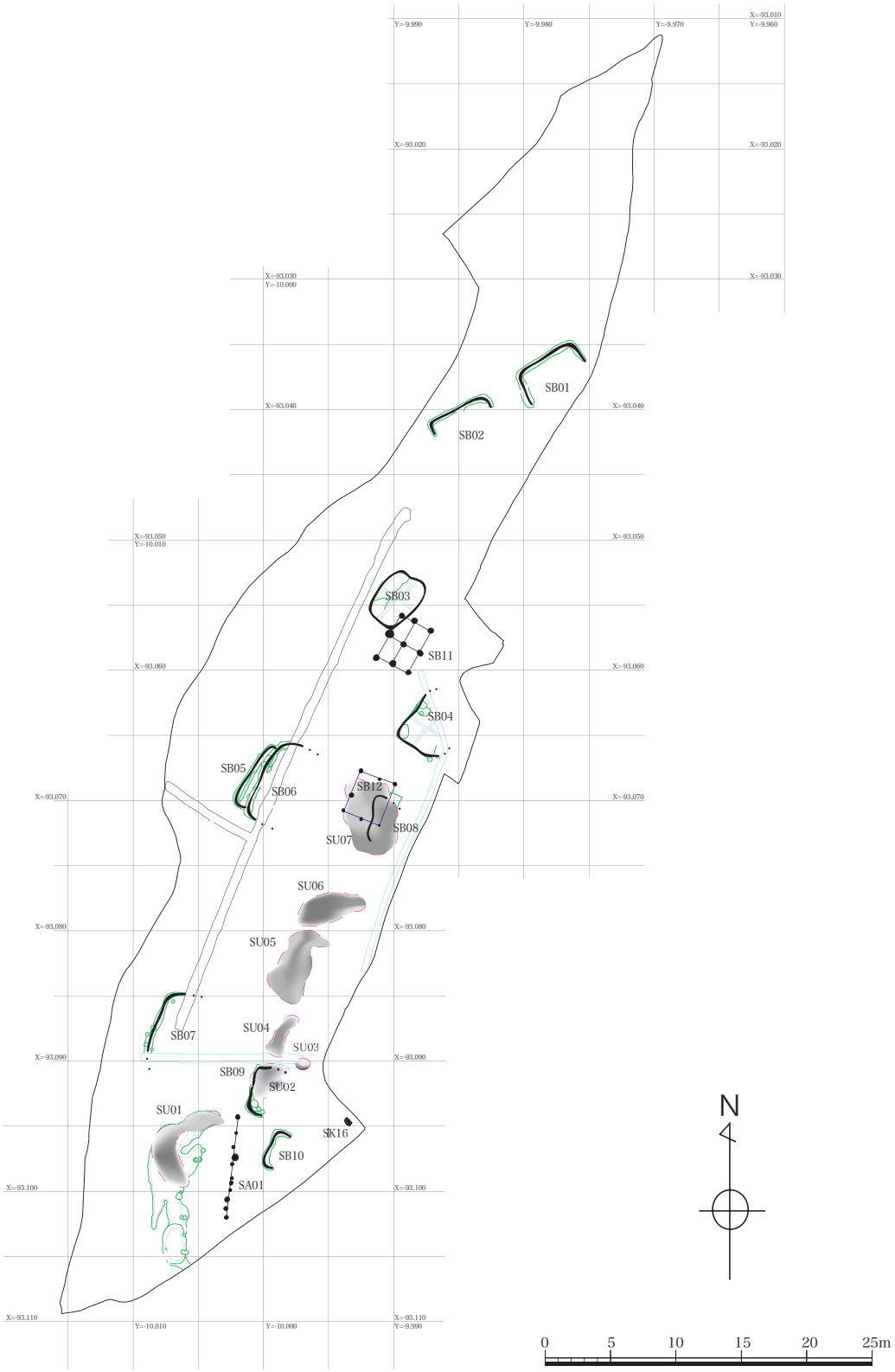

SB01
SB02
SB03
SB11
SB04
SB05
SB06
SB12
SB08
SU07
SU06
SU05
SU04
SU03
SB07
SB09
SU02
SU01
SK16
SB10
SA01
N
0
5
10
15
20
25m

図 78　遺構概念図

第VI章　まとめ

ここでは、今回の調査で得られた成果をまとめる。

旧石器

まず、旧石器時代後期に属するナイフ形石器が1点出土し、続く縄文・弥生時代でもごくわずかの遺物が確認できている。特に旧石器は名古屋東部の丘陵地帯では乏しく、今後はこのエリアでも旧石器時代を射程に入れた検討が必要となってくるであろう。

Ⅰ期の遺構

次にⅠ期とした時期は、今回の調査で検出遺構・出土遺物のほとんどとなる。本書第Ⅱ章に記すように、ロクロピットが付設された竪穴住居を検出し、本遺跡が土器製作と関わりを持つ集落であることが判明した。また、土器集積遺構が規模の大小はあるが7か所で確認できた。出土遺物は多量で、焼成ムラなどが確認できる資料が高頻度となっている。これは、ここで製品の二次選別が実施されていたことを示し、本遺跡が製品の集荷場としての性格も併せ持っていたことが確認できた。

Ⅰ期以後Ⅱ期までの遺構・遺物は、非常に限定されている。遺構としては13世紀に属する灰釉系陶器椀が出土した小型の土坑が1例だけ確認できた。遺物としては、若干の灰釉系陶器や施釉陶器が出土している。このため、断片的ではあろうが調査区外に当該期の遺構が展開する可能性もある。また、灰釉系陶器には、釉着した資料も含まれており、近隣に未知の灰釉系陶器窯が存在する可能性も考えられる。

Ⅱ期の遺構

Ⅱ期とした時期は、溝とわずかな土坑が検出できたのみである。出土遺物も乏しいが、18世紀後半にまとまりを確認することができる。本書第Ⅰ章に記すように、現在の日進市北新町は、17世紀より開墾が実施された記録が残っている。今回検出できた遺構・遺物は、時期的にはこれよりやや下がるが、こうした開墾と関連するものであろう。

胎土分析

化学分析については、まず土器胎土分析を実施し、土器に使用する胎土が器種の差にまで及ぶとする結果が得られている。また、遺構から出土した炭化物から採取した試料を用いて、AMS法による放射性炭素年代測定も実施している。本書第Ⅳ章に記されているように、求められた較正年代は従来考えられている年代を大幅に遡るものとなっている。ただし、折戸10号窯式にほぼ集中する今回の資料群を、求められた較正年代まで遡らせて考えるのは不可能だろう。試料の選択に問題があったのかもしれない。今回はAMS法による放射性炭素年代測定の事例として、是非を問わず得られた結果をそのまま提示し、今後の基礎資料としておくにとどめる。

（池本正明）

参　考・引　用　文　献

池本正明他　2001　「岩崎６号窯遺跡」『年報』　平成 12 年度　愛知県埋蔵文化財センター

伊藤　稔　1981　『白山１号墳調査報告』日進町教育委員会

内山信治編　1994　『白土原 14 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会

内山信治編　1991　「明和 27 号窯」『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会

宇佐見　守　2002　「岩崎６号窯（金萩）遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』17　平成 12 年度　愛知県教育委員会

尾野善裕　2000　「猿投窯出土須恵器の主要器種分類」『須恵器生産の出現から消滅』第１分冊　東海土器研究会

国井秀紀他　2001　「折木遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告』22　福島県教育委員会

後藤健一　1997　「大知波廃寺跡の構造と変質」『大知波廃寺跡』湖西市教育委員会

齊藤孝正編　1978　『折戸 80 号窯発掘調査報告書』日進町教育委員会

齊藤孝正編　1984　『株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会

齊藤基生　2002　「金萩遺跡」『愛知県史』資料編１旧石器・縄文　愛知県史編さん委員会

嶋　竹秋編　1979　「湖西運動公園内遺跡群」『湖西市埋蔵文化財調査概報』昭和 53 年度　湖西市教育委員会

高島英之　1999　「墨書土器村落祭祀論序説」『日本考古学』　第９号

高橋一敏編　1989　『吉美中村遺跡』　湖西市教育委員会

高柳俊之　1996　『岩崎（Ｉ）－ 15 号窯発掘調査報告書』日進市教育委員会

中嶋友文編　2000　『野木遺跡』Ⅲ　青森県埋蔵文化財調査センター

贄　元洋　2000　「猿投窯・湖西窯出土須恵器の主要器種分類」『須恵器生産の出現から消滅』第１分冊　東海土器研究会

北村和宏　1999　「石製品」『大脇城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

北村和宏　2001　「古代「三河型甕」考」『研究紀要』第２号　愛知県埋蔵文化財センター

木村　高編　1998　『隠川（４）遺跡・隠川（12）遺跡Ｉ』　青森県埋蔵文化財調査センター

木村秦彦・池田裕英　1994　「平城・長岡・平安各宮出土の猿投産須恵器について」『古代の土器研究』律令式土器様式の西東３　古代の土器研究会

下山信昭　1996　「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第１号　青森県埋蔵文化財調査センター

永井宏幸　1996　「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム

仲田茂司　1994　「東北地方におけるロクロ土師器受容とその背景」『考古学雑誌』第 79 巻第３号

楢崎彰一　1996　『美濃の古陶』美濃古陶研究会

中村　浩　1988　「陶邑窯跡群における工人集団と遺跡」『古文化談叢』20（上）九州古文化研究会

平川　南　1991　「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 集

桃井　勝編　1997　『明和 40・41 号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会

山田邦和　1991　「窯業製品」『古墳時代の研究』第５巻　雄山閣出版

吉田　巧他　1990　「鳥打沢Ａ遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告』Ｉ　福島県教育委員会・㈶福島県文化センター

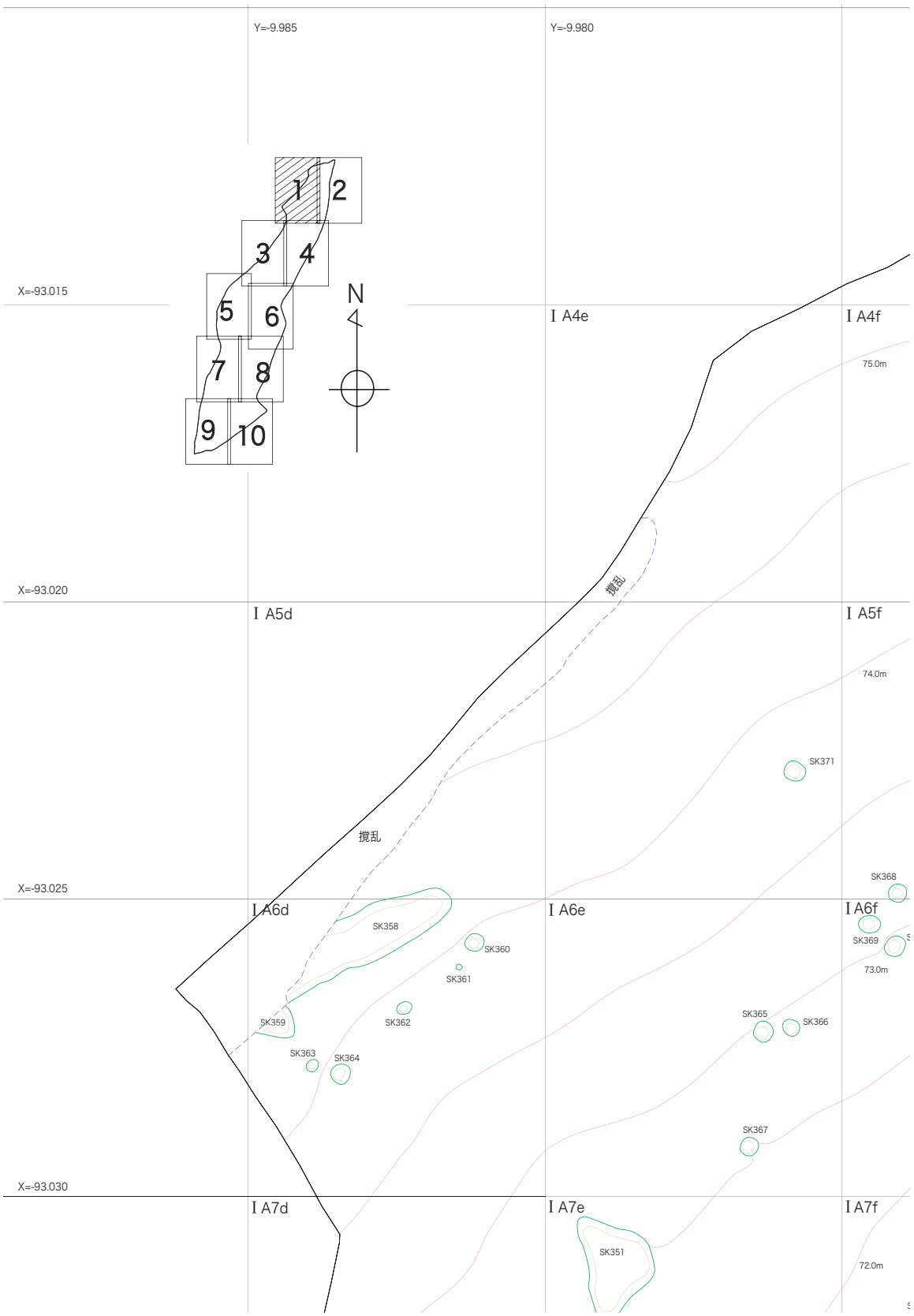
渡辺　一編　1992　『鳩山窯跡群』Ⅳ　工人集落編（２）　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

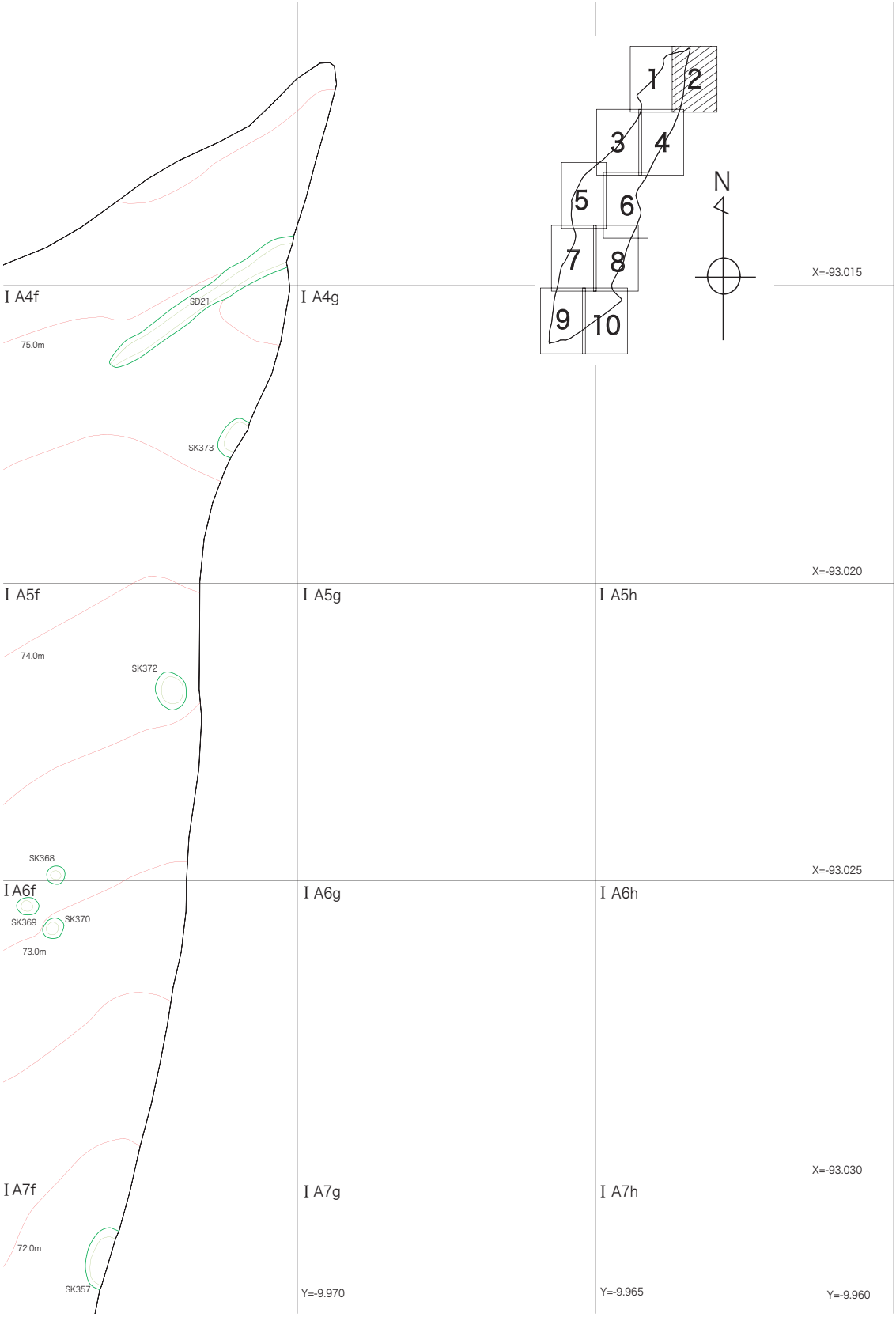
渡辺　一編　1991　『鳩山窯跡群』Ⅲ　工人集落編（１）　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

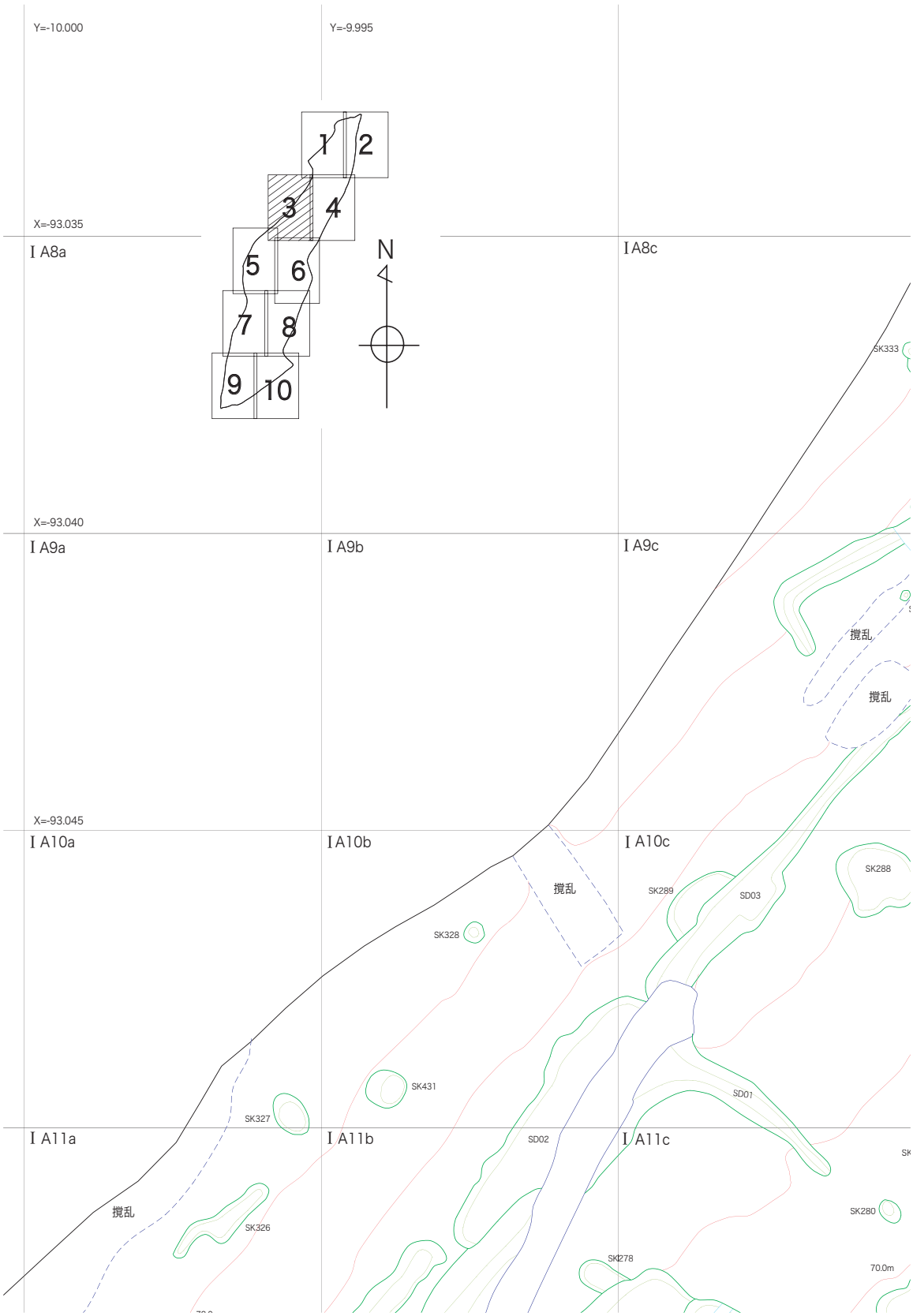
渡辺博人　1998　『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財センター

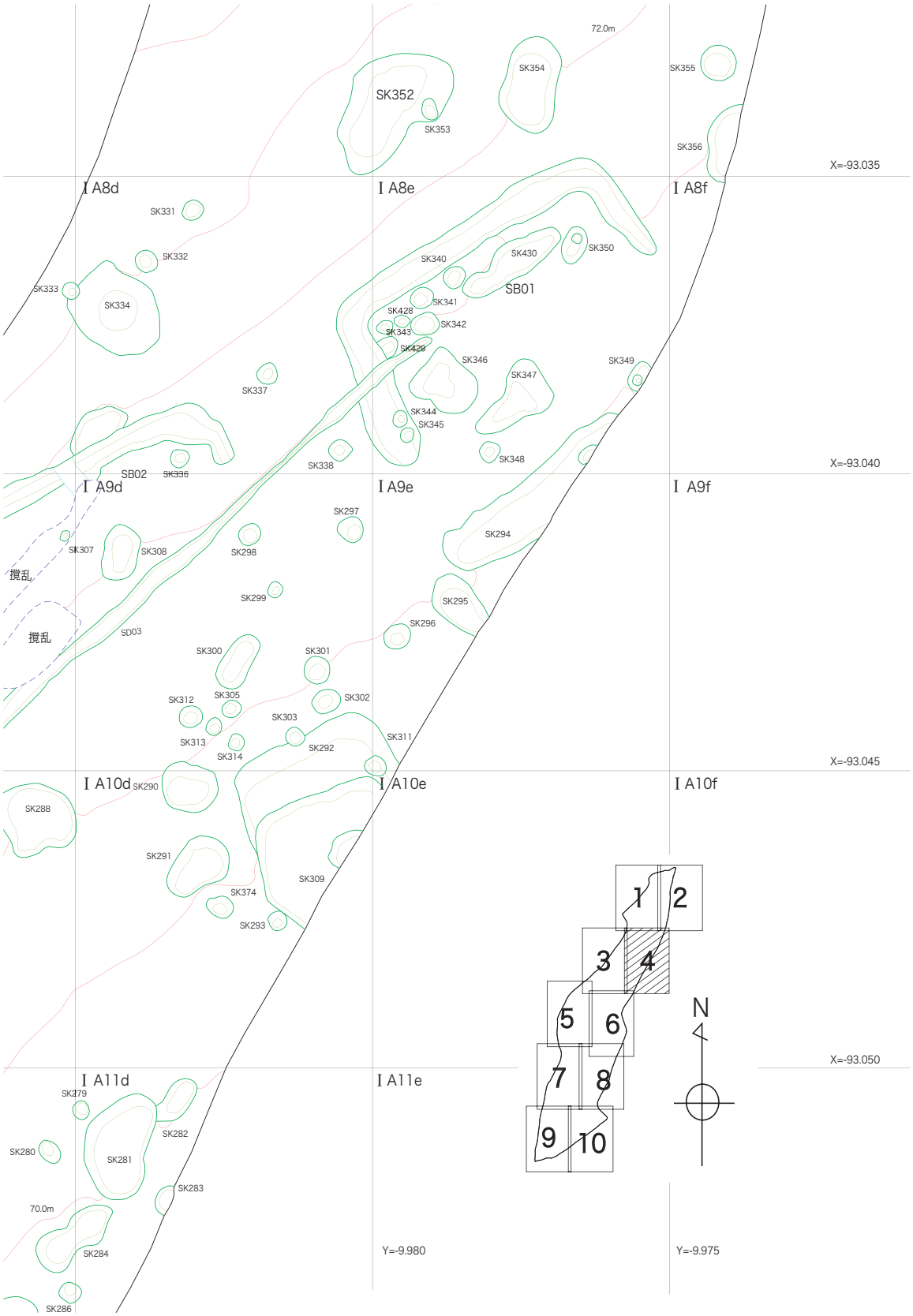
渡辺　誠編　2001　『陶邑窯跡群・泉北若竹保育園移転新築用地豊田地区・ＳＴＫ９９』小谷城郷土資料館発掘調査団・㈶小谷城郷土館

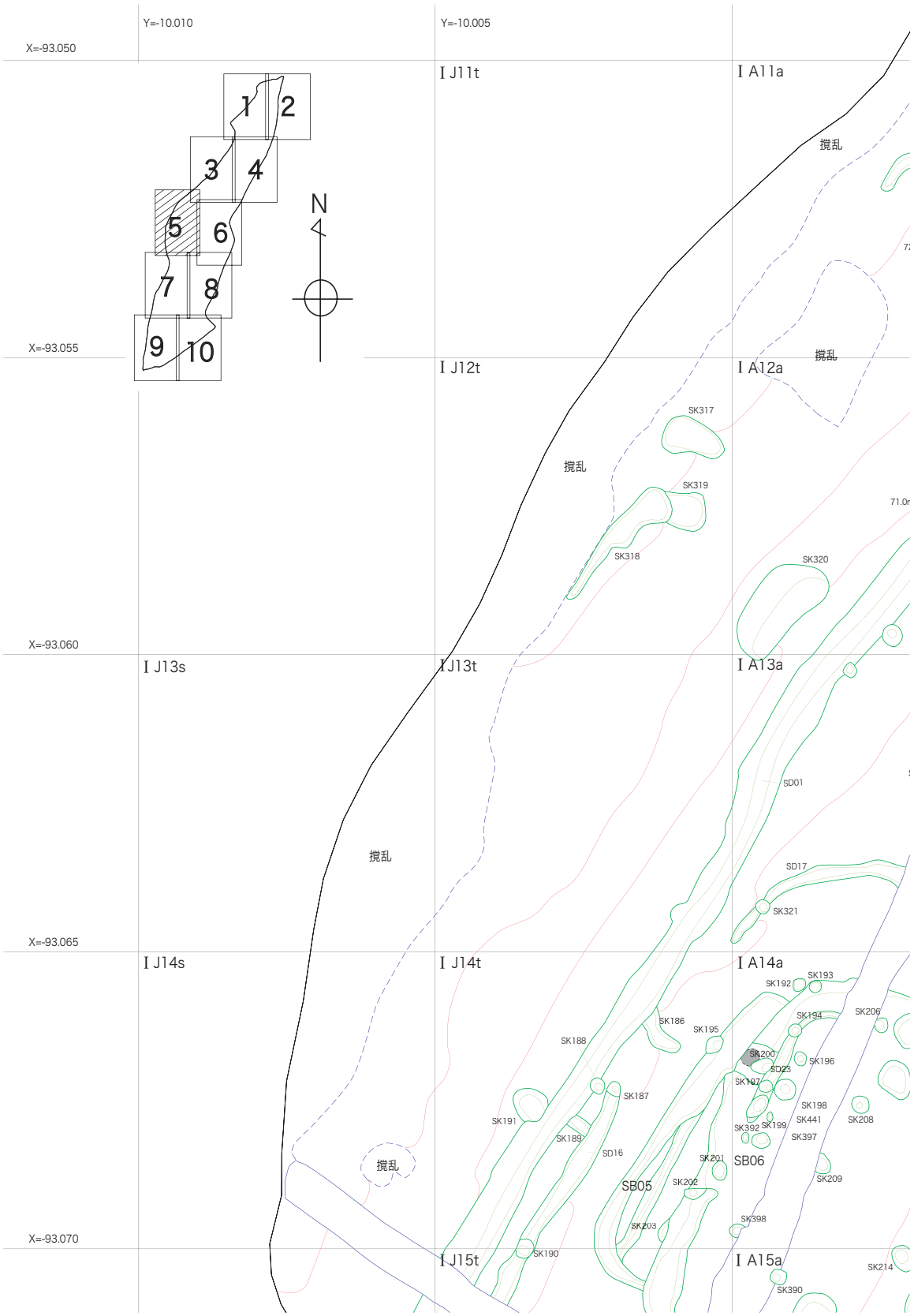
図　版

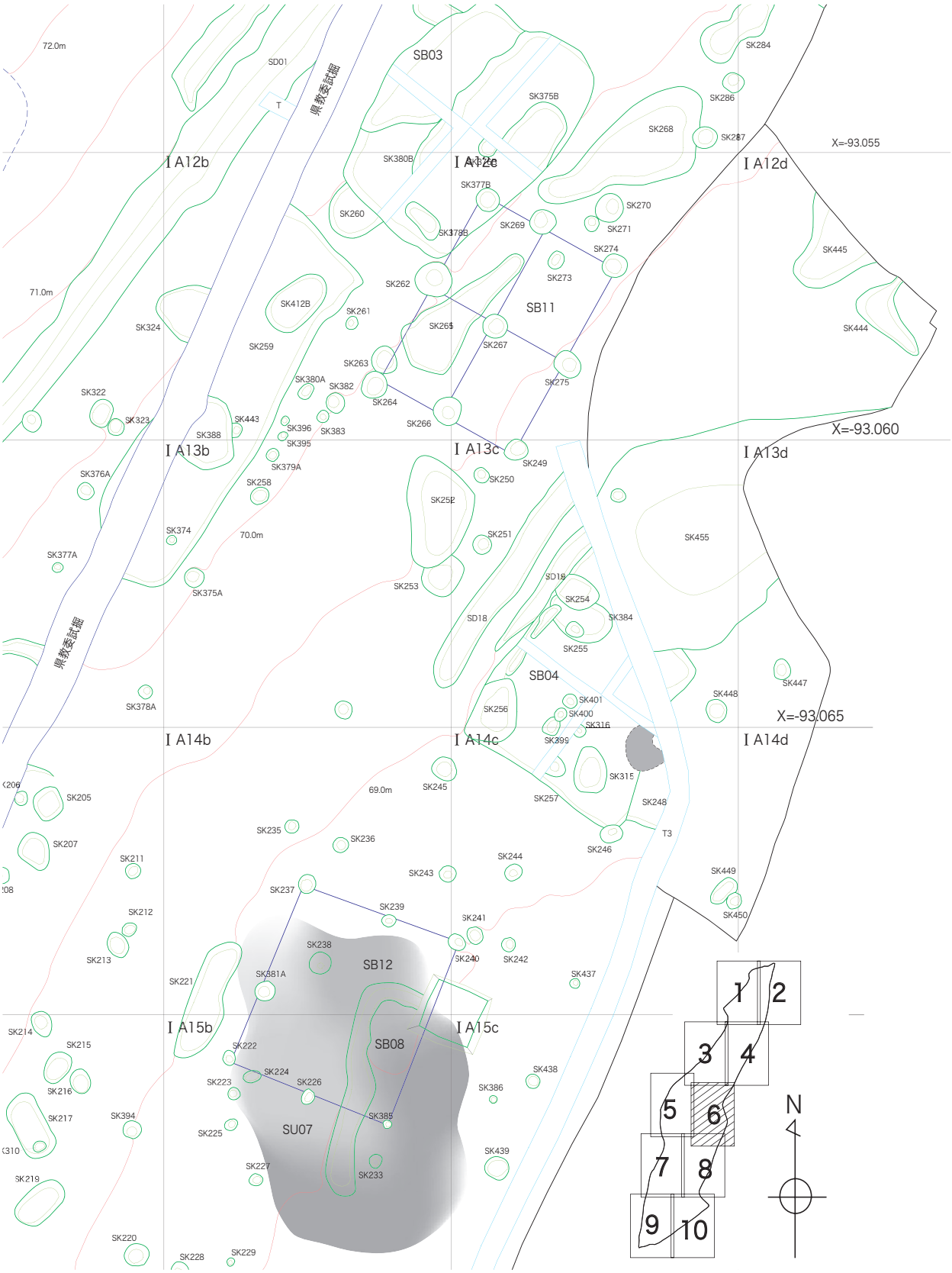

Y=-9.985
Y=-9.980
X=-93.015
X=-93.020
X=-93.025
X=-93.030
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
I A4e
I A4f
I A5d
I A5f
I A6d
I A6e
I A6f
I A7d
I A7e
I A7f
75.0m
74.0m
73.0m
72.0m
撹乱
撹乱
SK371
SK368
SK369
SK358
SK360
SK361
SK362
SK359
SK363
SK364
SK365
SK366
SK367
SK351

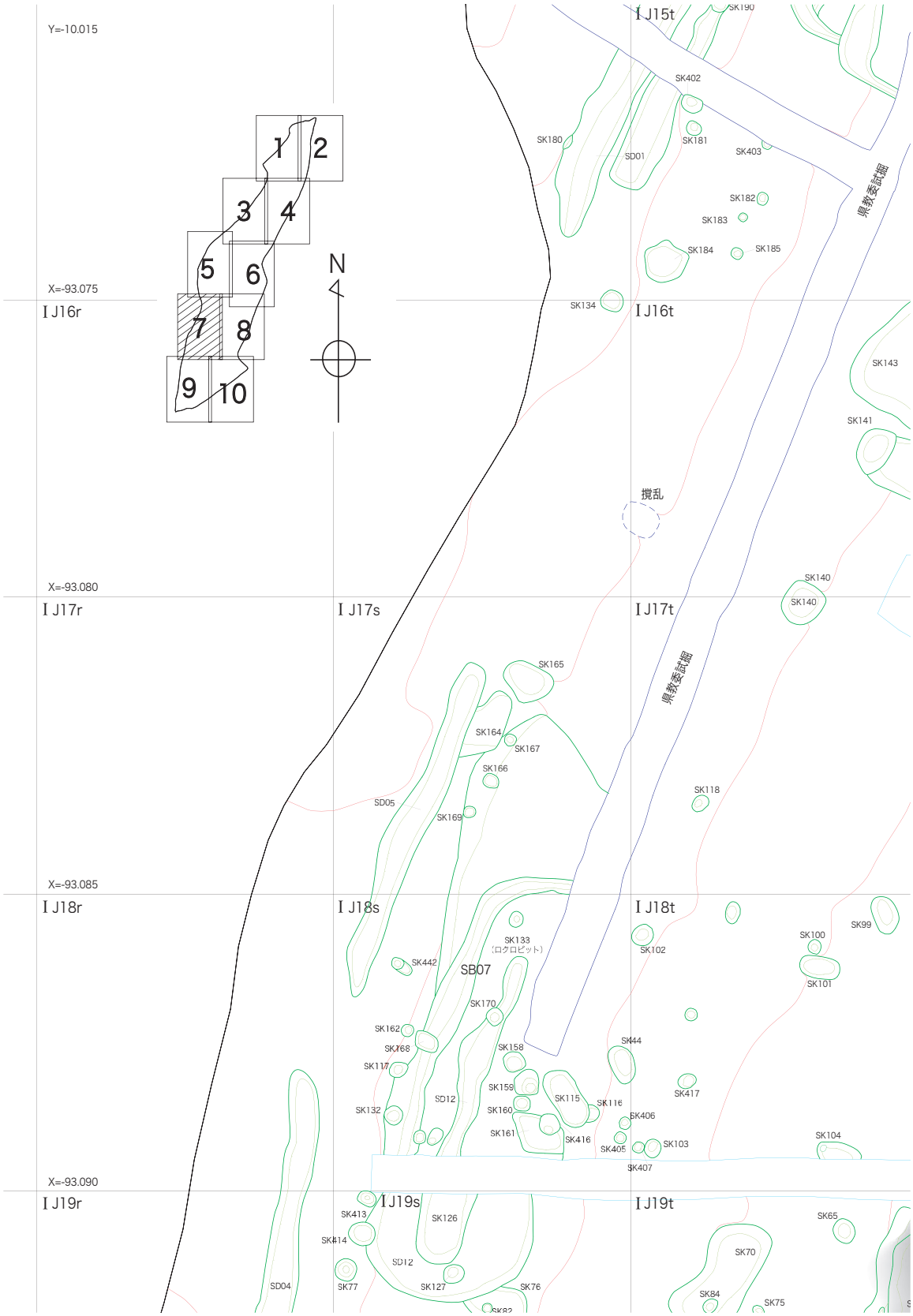

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
X=-93.015
I A4f
SD21
75.0m
SK373
I A4g
X=-93.020
I A5f
74.0m
SK372
I A5g
I A5h
SK368
X=-93.025
I A6f
SK369
SK370
73.0m
I A6g
I A6h
X=-93.030
I A7f
72.0m
SK357
I A7g
Y=-9.970
I A7h
Y=-9.965
Y=-9.960

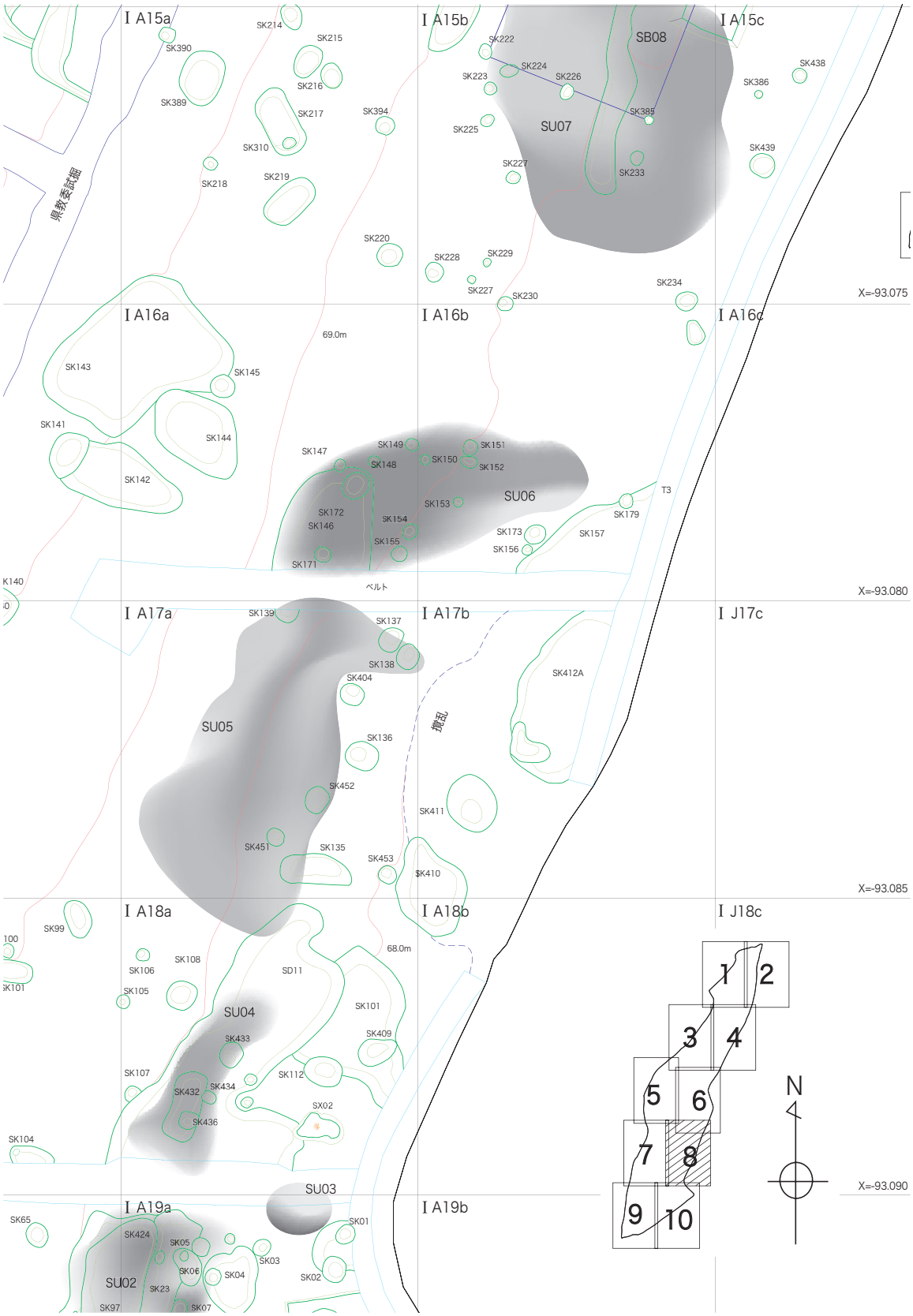

Y=-10.000
Y=-9.995
X=-93.035
X=-93.040
X=-93.045
I A8a
I A8c
I A9a
I A9b
I A9c
I A10a
I A10b
I A10c
I A11a
I A11b
I A11c
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
SK333
撹乱
撹乱
撹乱
SK288
SK289
SD03
SK328
SK431
SD01
SK327
SD02
撹乱
SK326
SK280
SK278
70.0m

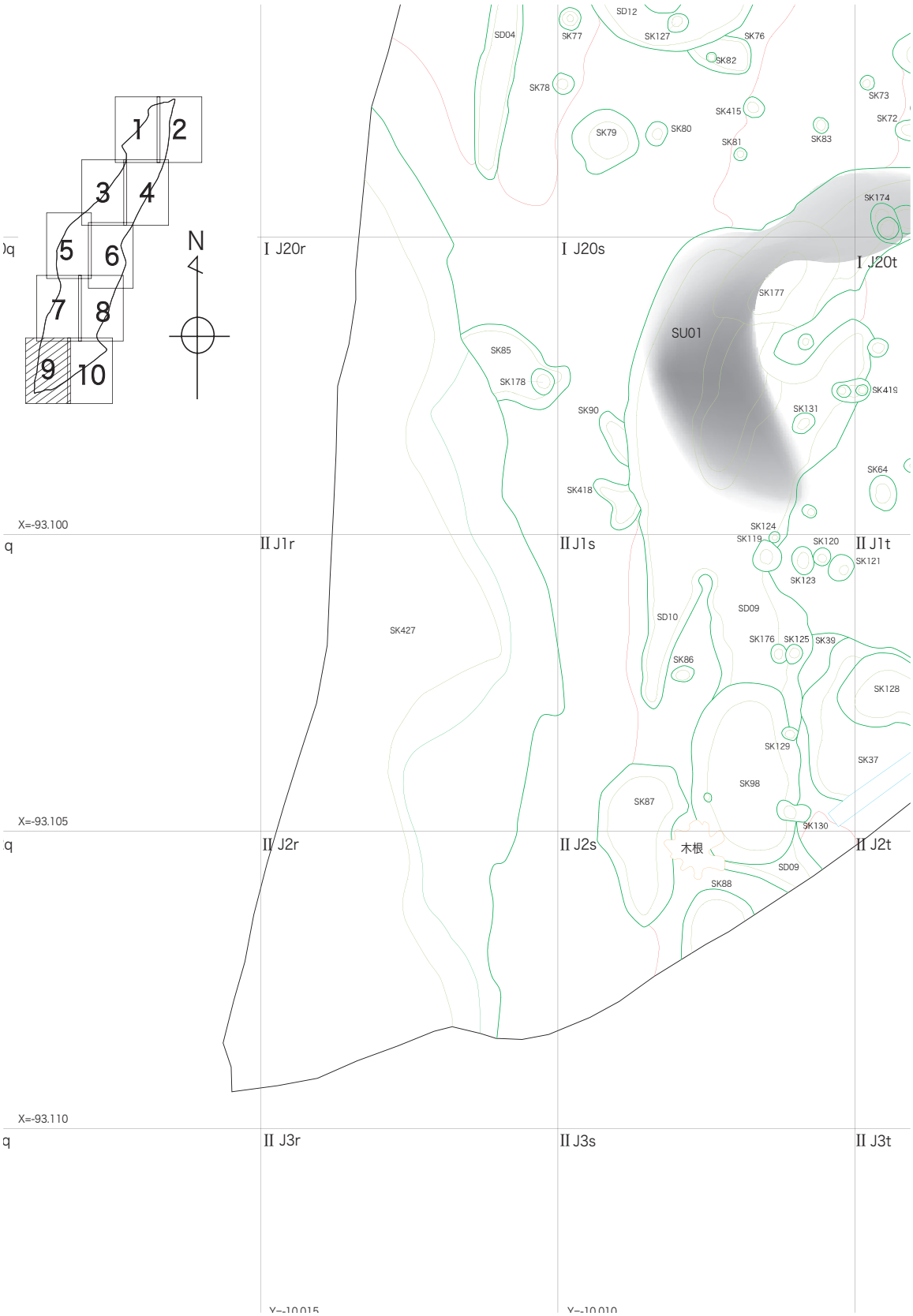

72.0m
SK352
SK353
SK354
SK355
SK356
X=-93.035
I A8d
I A8e
I A8f
SK331
SK332
SK333
SK334
SK340
SK430
SK350
SB01
SK341
SK428
SK342
SK343
SK429
SK346
SK347
SK349
SK337
SK344
SK345
SK348
SK338
SB02
SK336
X=-93.040
I A9d
I A9e
I A9f
SK297
SK294
SK307
SK308
SK298
撹乱
SK299
SK295
SK296
撹乱
SD03
SK300
SK301
SK312
SK305
SK302
SK303
SK313
SK314
SK292
SK311
X=-93.045
I A10d
SK290
I A10e
I A10f
SK288
SK291
SK309
SK374
SK293
X=-93.050
I A11d
I A11e
SK279
SK282
SK280
SK281
SK283
70.0m
SK284
SK286
Y=-9.980
Y=-9.975
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N

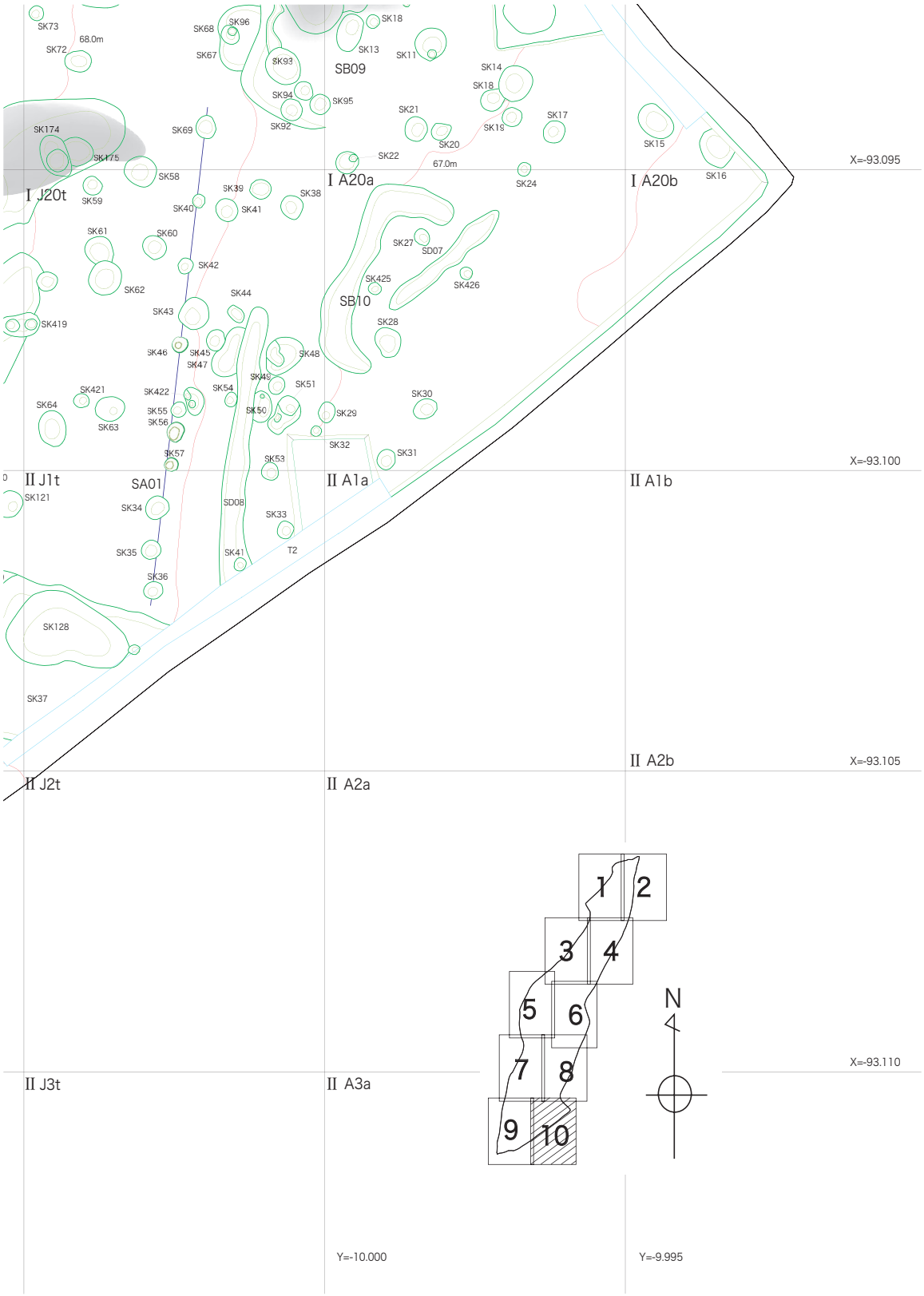

Y=-10.010
Y=-10.005
X=-93.050
X=-93.055
X=-93.060
X=-93.065
X=-93.070
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
I J11t
I A11a
I J12t
I A12a
I J13s
I J13t
I A13a
I J14s
I J14t
I A14a
I J15t
I A15a
撹乱
SK317
SK319
SK318
SK320
SD01
SD17
SK321
SK192
SK193
SK194
SK206
SK186
SK195
SK188
SK200
SK196
SD23
SK197
SK187
SK198
SK441
SK208
SK191
SK392
SK199
SK397
SK189
SD16
SK201
SB06
SK209
SB05
SK202
SK203
SK398
SK190
SK214
SK390


72.0m
71.0m
70.0m
69.0m
SD01
県教委試掘
SB03
SB11
SB04
SB12
SB08
SU07
X=-93.055
X=-93.060
X=-93.065
I A12b
I A12c
I A12d
I A13b
I A13c
I A13d
I A14b
I A14c
I A14d
I A15b
I A15c
SK284
SK286
SK287
SK268
SK375B
SK380B
SK377B
SK378B
SK260
SK269
SK270
SK271
SK274
SK273
SK445
SK444
SK262
SK412B
SK261
SK265
SK267
SK259
SK324
SK263
SK380A
SK382
SK264
SK266
SK275
SK322
SK323
SK443
SK388
SK396
SK395
SK383
SK379A
SK376A
SK258
SK249
SK250
SK252
SK251
SK455
SK374
SK377A
SK375A
SK253
SD18
SK254
SK384
SK255
SK378A
SK401
SK400
SK316
SK399
SK256
SK448
SK447
SK315
SK257
SK248
SK246
T3
SK245
SK205
SK207
SK211
SK235
SK236
SK243
SK244
SK449
SK450
SK237
SK239
SK241
SK240
SK242
SK212
SK213
SK238
SK381A
SK437
SK221
SK214
SK215
SK222
SK224
SK226
SK223
SK216
SK217
SK394
SK225
SK385
SK386
SK438
SK439
SK227
SK233
SK219
SK220
SK228
SK229
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N


Y=-10.015
X=-93.075
X=-93.080
X=-93.085
X=-93.090
I J15t
I J16r
I J16t
I J17r
I J17s
I J17t
I J18r
I J18s
I J18t
I J19r
I J19s
I J19t
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
SK190
SK402
SK180
SD01
SK181
SK403
SK182
SK183
SK184
SK185
県教委試掘
SK134
SK143
SK141
撹乱
SK140
SK140
SK165
SK164
SK167
SK166
SD05
SK169
SK118
SK133
(ロクロピット)
SK442
SB07
SK170
SK162
SK168
SK117
SK158
SK159
SD12
SK132
SK160
SK161
SK115
SK116
SK416
SK405
SK406
SK407
SK44
SK417
SK103
SK102
SK100
SK101
SK99
SK104
SK413
SK414
SK126
SD12
SK127
SK76
SK77
SD04
SK65
SK70
SK84
SK75


I A15a
I A15b
I A15c
I A16a
I A16b
I A16c
I A17a
I A17b
I J17c
I A18a
I A18b
I J18c
I A19a
I A19b
X=-93.075
X=-93.080
X=-93.085
X=-93.090
SB08
SU07
SU06
SU05
SU04
SU03
SU02
SK214
SK215
SK390
SK216
SK389
SK217
SK394
SK310
SK218
SK219
SK220
SK222
SK224
SK223
SK226
SK385
SK225
SK227
SK233
SK228
SK229
SK230
SK234
SK438
SK386
SK439
県教委試掘
69.0m
SK143
SK145
SK141
SK144
SK142
SK147
SK149
SK148
SK150
SK151
SK152
SK153
SK172
SK146
SK154
SK155
SK171
SK173
SK156
SK179
SK157
T3
ベルト
SK139
SK137
SK138
SK404
SK412A
瓦礫
SK136
SK452
SK411
SK451
SK135
SK453
SK410
SK99
SK108
SK106
SK105
SD11
68.0m
SK101
SK409
SK433
SK107
SK112
SK432
SK434
SK436
SX02
SK104
SK65
SK424
SK05
SK06
SK04
SK03
SK01
SK02
SK23
SK97
SK07
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
I J20r
I J20s
I J20t
II J1r
II J1s
II J1t
II J2r
II J2s
II J2t
II J3r
II J3s
II J3t
X=-93.100
X=-93.105
X=-93.110
SD12
SD04
SK77
SK127
SK76
SK82
SK78
SK73
SK415
SK72
SK79
SK80
SK81
SK83
SK174
SK177
SU01
SK85
SK178
SK419
SK90
SK131
SK64
SK418
SK124
SK119
SK120
SK121
SK123
SD09
SD10
SK427
SK176
SK125
SK39
SK86
SK128
SK129
SK37
SK98
SK87
SK130
木根
SD09
SK88


SK73
68.0m
SK72
SK68
SK96
SK67
SK93
SB09
SK18
SK13
SK11
SK14
SK18
SK94
SK95
SK21
SK17
SK19
SK174
SK69
SK92
SK20
SK15
SK175
SK22
67.0m
SK24
SK16
X=-93.095
I J20t
SK59
SK58
SK39
SK38
I A20a
I A20b
SK40
SK41
SK61
SK60
SK27
SD07
SK42
SK425
SK426
SK62
SK44
SB10
SK43
SK419
SK28
SK46
SK45
SK47
SK48
SK49
SK51
SK421
SK422
SK54
SK30
SK64
SK55
SK56
SK50
SK29
SK63
SK32
SK31
SK57
SK53
X=-93.100
II J1t
SA01
II A1a
II A1b
SK121
SK34
SD08
SK33
SK35
SK41
T2
SK36
SK128
SK37
II A2b
X=-93.105
II J2t
II A2a
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
N
X=-93.110
II J3t
II A3a
Y=-10.000
Y=-9.995


全景


調査区南部


調査区中央部


調査区北部


SB01


SB03


SB04


SB09


SB12


SB14・15

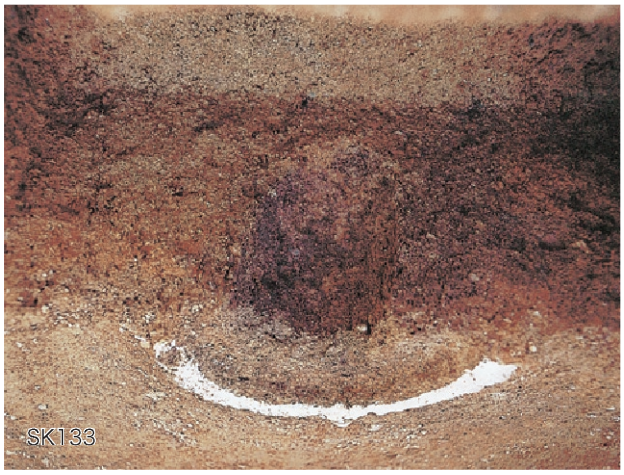

SK259


SX02


SB07


SB07


SK133


SK133


SK16


SK01


SU01


SU02


SU03


SU04


SU05


SU06


SU07


69


72


121


70


124


125


127


128


130


131


140


135


141


147


149


152


161


210


218


220


230


232


239


244


249


258


285


396


340


399


405


426


491


516


531


539


546


551


550


552


553


604


636


677


679


690


689


722


723


724


726


729


746


747


750


752


754


758


782


787


788


789


790


793


794


800


802


811


813


814


818


820


822


824


825


830


840


842


843


846


850


854


871


881


887


891


893


896


899


903


909


913


926


927


954


974


975


978


981


982


983


985


986


1000


1002


1003


1004


1012


1019


1020


1026


1035


1027


1032


1041


1057


1050


1058


1068


1079


1084


1086


1104


1107


1117


1119


1123


1127


1130


1139


1144


1145


1157


1164


1168


1171


1173


1176


1177


1207


1212


1220


1230


1226


1227


1246


1344

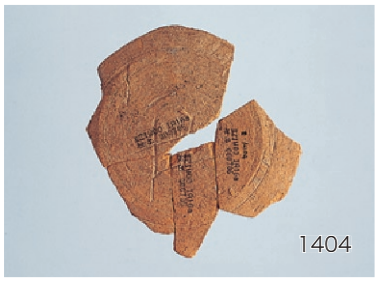

1296


1305


1397


1329


1337


1404


1405


1407


1438


1407


1443


1441


1442


1471


1445


1457


1471


1500


1494


1494


1514


1495


1496


1515


1515


1516


1516


1517


1517


1519


1519

報 告 書 抄 録

ふりがな	かねはぎいせき
書名	金萩遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 119 集
編著者名	池本正明・蔭山誠一・神谷巳佳・井上　巖・山形秀樹・畠山晃陽・高橋尚人
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒 498–0017 愛知県海部郡弥富町大字前ケ須新田字野方 802-2　TEL 0567 (67) 4163
発行年月日	西暦 2004 年 8 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かねはぎいせき 金萩遺跡	にっしんし 日進市 きたしんちょうかねはぎ 北新町金萩	23230	14006	35度 9分 39秒	137度 3分 25秒	1999.6-9	2500 ㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金萩遺跡	集落	旧石器・縄文時代		ナイフ形石器・石鏃	
		奈良・平安時代	竪穴住居 工房(ロクロピット) 土器集積遺構 粘土ピット	須恵器・灰釉陶器 土師器	土器製作に関連する集落

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第119集

金　萩　遺　跡

2004年8月31日

編集発行　財団法人　愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　株式会社クイックス